

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第5集

角庵Ⅰ遺跡・角庵Ⅱ遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市-3

角庵Ⅰ遺跡（第二東名 No.102 地点）

角庵Ⅱ遺跡（第二東名 No.103 地点）

2012

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第5集

角庵Ⅰ遺跡・角庵Ⅱ遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

掛川市-3

角庵Ⅰ遺跡（第二東名 No.102 地点）

角庵Ⅱ遺跡（第二東名 No.103 地点）

2012

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は、掛川市寺島地区の原野谷川北岸の丘陵上に位置しています。

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は縄文時代から近世に至る複合遺跡ですが、縄文時代から連続と人々の生活があったわけではないようです。主に弥生時代後期～古墳時代のはじめごろ、飛鳥時代、奈良、平安、中世、江戸時代と断続的に集落を営んだり、墓地を造営したりしていたことが分かりました。

角庵Ⅱ遺跡の西側の尾根には弥生時代後期を中心とする大集落が確認された上ノ平遺跡がありますが、角庵Ⅱ遺跡ではほぼ同時期の遺構が確認されたため、強い関連性をもっていたことが想定できます。

また、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡ともに飛鳥時代（古墳時代の終わりごろ）に突如集落が形成され、50年ほどで廃絶した可能性が高いことから、気候の寒冷化に伴う耕地の開墾あるいは本格的な国家建設を目指した畿内王権の主導による集落の再編・拡散などの影響による一時的な集落の拡散により、それまで人為が及んでいなかった原野谷川中流域に集落が形成されたと考えられます。

さらに、角庵Ⅱ遺跡では江戸時代（18世紀後半頃）の礫石経塚が出土したことが注目できます。納められた経石の経文をひも解くと『妙法蓮華経』、「大悲心陀羅尼」などの経文が写経されたことが分かり、中には「閻魔王」に代表される冥界の「十三仏」である『阿閼如来』『虚空蔵菩薩』（真言）などもみられることから、先祖の来世での安寧を願った追善供養を目的として経塚が造られた可能性が高いことが分かりました。また、経塚を造営したのは近在の曹洞宗の寺院とその檀家であった可能性が高いことも分かりました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様にも広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田 順也

例 言

- 1 本書は静岡県掛川市寺島宇西ノ谷に所在する角庵Ⅰ遺跡、角庵Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
角庵Ⅰ遺跡 静岡県掛川市寺島宇西ノ谷1128-1・2、1129-1・2、1130-1、1130-3
角庵Ⅱ遺跡 静岡県掛川市寺島宇西ノ谷1066-1、1067~1069、1074-2、1074-4、1713-2
- 2 調査は第二東名高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、日本道路公団静岡建設局（当時）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課（調査当時）の指導のもと財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが業務を引き継いで資料整理を実施した。
- 3 角庵Ⅰ遺跡（第二東名No.102地点）、角庵Ⅱ遺跡（同No.103地点）の確認調査・本調査及び資料整理（報告書印刷製本・収納作業を含む）の期間は以下のとおりである。
角庵Ⅰ遺跡
確認調査 平成11年12月 調査対象面積1,887㎡ 実掘面積372㎡
本調査 平成12年2月28日～5月31日 実掘面積600㎡
角庵Ⅱ遺跡
確認調査 平成12年1月 調査対象面積7,580㎡ 実掘面積300㎡
本調査 I期（1～3区）平成12年5月24日～平成12年8月30日
II期（4区）平成13年11月13日～30日
III期（5区）平成13年8月1日～11月21日
実掘面積3,060㎡
資料整理 平成16年4月1日～平成18年3月31日
平成22年4月1日～平成24年3月31日
- 4 調査体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（平成11～13年度、16・17・22年度）

平成11年度

所長 齋藤 忠	副所長 山下 晃	総務部長兼常務理事 伊藤友雄
総務課長 杉木敏雄	経理専門員 稲葉保幸	総務係長 田中雅代
会計係長 大橋 薫	調査研究部長 佐藤達雄	調査研究部次長 佐野五十三
調査研究一課長 及川 司	主任調査研究員（掛川工区）	篠原修二
調査研究員 竹原一人・深田雅一・柴田 睦		

平成12年度

所長 齋藤 忠	副所長 山下 晃	総務部長兼常務理事 伊藤友雄
総務課長 杉木敏雄	経理専門員 稲葉保幸	総務係長 田中雅代
会計係長 大橋 薫	調査研究部長 佐藤達雄	
調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司		調査研究二課長 篠原修二
資料課長 大石 泉	主任調査研究員（掛川工区） 加藤理文	調査研究員 竹原一人・柴田 睦

平成13年度

所長兼副理事長 齋藤 忠	副所長兼理事 山下 晃	総務部長兼常務理事 桑田徳幸
総務課長 木村昭一	経理専門員 稲葉保幸	総務係長 山本広子
会計係長 大橋 薫	調査研究部長 佐藤達雄	

調査研究部次長兼資料課長 栗野克己 調査研究部次長兼調査研究一課長 及川 司
保存処理室長 西尾太加二 調査研究員 柴田 睦・岡部貴之・桶田光俊

平成16年度

所長兼副理事長 斎藤 忠 副所長兼理事 飯田英夫 総務部長兼常務理事 平松公夫
総務部次長兼総務課長 鎌田英己 経理専門員 稲葉保幸
総務係長 佐藤美奈子 会計係長 野島尚紀
調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長兼資料課長 栗野克己
調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫 保存処理室長 西尾太加二
調査研究員 田村隆太郎

平成17年度

所長兼副理事長 斎藤 忠 総務部長兼常務理事 平松公夫
総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎 主幹兼経理専門員 稲葉保幸
総務係長 佐藤美奈子 事業係長 野島尚紀
調査研究部長 石川素久 調査研究部次長兼資料課長 栗野克己
調査研究部次長兼調査研究一課長 中嶋郁夫 調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三
保存処理室長 西尾太加二 調査研究員 田村隆太郎

平成22年度

所長兼常務理事 石田 彰 次長兼総務課長 松村 享 専門監兼事業係長 稲葉保幸
総務係長 瀧みやこ 調査課長 中鉢賢治 調査第四係長 富樫孝志
調査研究員 大谷宏治

静岡県埋蔵文化財センター（平成23年度）

平成23年度（資料整理）

所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利真 調査課長 中鉢賢治
主幹兼事業係長 村松弘文 総務係長 瀧みやこ
主幹兼調査第1係長 富樫孝志 第1係主査 大谷宏治（資料整理担当）
調査第2係長 溝口彰啓 第2係主査 大森信宏（保存処理担当）

- 5 本書の執筆は足立順司、大谷宏治、柴田亮平が行った。執筆分担は下記のとおりである。
足立順司 第6章第4節
柴田亮平 第4・5章第2節 石器
大谷宏治 上記以外
- 6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 外部委託については下記のとおり実施した。
測量業務委託 株式会社フジヤマ・大鐘測量株式会社
礫石経実測委託 東京航業株式会社 石器実測委託 株式会社アルカ
整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ
- 8 発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる（五十音順・敬称略）。
掛川市教育委員会 掛川市寺島地区自治会 中日本高速道路株式会社東京支社
池谷信之 井村広巳 大熊茂弘 加藤理文 河合 修 木佐森道弘 小崎 晋 柴田 稔
柴田 睦 白澤 崇 鈴木一有 竹内直文 竹原一人 田村隆太郎 戸塚和美 原田雄紀
藤澤良祐 前田庄一 松井一明 松本一男 向坂綱二 山本智子
- 9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1 現地測量においては、日本測地系（旧測地系）を使用した。測量図・実測図もこれに準拠する。特に記載のない場合は日本測地系による位置である。

一方、国土地理院ホームページにおいて世界測地系における緯度経度を確認し、記載している部分がある。この場合は、世界測地系であることを明記した。

2 資料整理にあたり、角庵Ⅱ遺跡のグリッド番号を、角庵Ⅰ遺跡のグリッド番号に合わせて変更した。そのグリッド番号新旧対応表については第2章で記した。

また、報告書作成にあたって現地調査段階とは遺構番号を変更している。その新旧対応表についても第2章で記した。

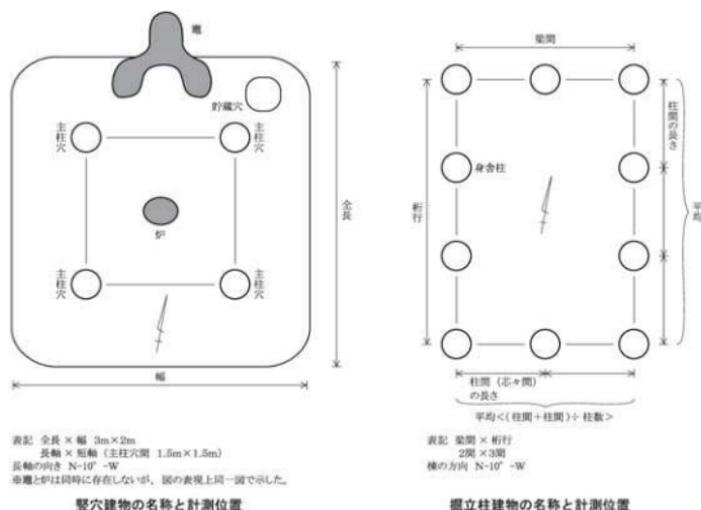
3 本書で使用した遺構の表記は以下のとおりである。

SA 柵列 SB 掘立柱建物 SD 溝状遺構 SH 竪穴建物 SK 土坑
 SR 自然流路 SX 用途不明遺構 SL 炉・竈 SP 小穴
 P 竪穴建物及び掘立柱建物、柵列の柱穴

4 本書で用いる竪穴建物と掘立柱建物の部分名称と計測位置については別図1のとおりとする。

5 土色は、小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1998「新版標準土色帖」に基づき区分した。

なお、各図中の注記に「貼床」、「柱穴埋土」のみが記載されているものについては、調査時の土色の記録がないことから、本書では想定で土色を記入せず、各層位の想定される機能についてのみ記録するに留めた。



別図1 竪穴建物・掘立柱建物の各部位の名称と計測位置

目 次

序	
例言	ii
凡例	iv
目次	vi
挿図目次・挿表目次・写真目次・図版目次	viii
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査の方法と経過	3
第1節 調査の方法	3
1 確認調査の方法	3
2 本調査の方法	3
3 資料整理および報告書作成の方法	3
4 グリッドの表記方法について	4
5 遺構番号について	5
第2節 確認調査および本調査の経過	7
1 確認調査の経過	7
2 本調査の経過	7
第3節 資料整理および報告書作成、保存処理の経過	10
1 資料整理および報告書作成、保存処理の経過	10
第3章 地理的環境・歴史的環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	13
1 旧石器・縄文時代	13
2 弥生時代	13
3 古墳時代	13
4 奈良・平安時代	15
5 中世	15
6 近世	15
第4章 角庵I遺跡	16
第1節 遺跡の概要	16
1 立地と環境	16
2 調査歴	16
3 確認調査の結果	16
4 主な遺構と遺物	17
5 基本土層	17
第2節 縄文時代の調査成果	19
1 縄文時代の概要	19
2 遺構	19
3 出土遺物	21
第3節 古墳時代の調査成果	28
1 概要	28
2 竪穴建物	28
3 小結	44
第4節 奈良時代以降の調査成果	45
1 概要	45
2 柵列	45
3 土坑	47
4 溝状遺構	50
5 性格不明遺構	52
6 遺構に伴わない遺物	52
7 角庵I遺跡の中世土器・陶磁器について	53
第5節 遺構・遺物観察表	54
1 遺構観察表	54
2 遺物観察表	55

第5章 角庵Ⅱ遺跡	58
第1節 遺跡の概要	58
1 立地と環境	58
2 調査歴	58
3 確認調査の結果	58
4 主な遺構と遺物	58
5 基本土層	63
第2節 縄文時代の調査成果	64
1 概要	64
2 遺構	64
3 出土遺物	66
第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の調査成果	70
1 概要	70
2 竪穴建物	70
3 掘立柱建物	74
4 性格不明遺構	82
5 土坑	82
6 遺構に直接伴わない遺物	88
7 小結	88
第4節 古墳時代終末期の調査成果	89
1 概要	89
2 竪穴建物	89
3 掘立柱建物	96
4 土坑	98
5 遺構に伴わない遺物	98
第5節 平安時代～近世の調査成果	102
1 概要	102
2 掘立柱建物	102
3 柵列	105
4 土坑	106
5 溝状遺構	110
6 性格不明遺構	110
7 遺構に伴わない遺物	114
8 小結—角庵Ⅱ遺跡の中世土器・陶磁器について—	116
第6節 遺構・遺物観察表	117
1 遺構観察表	117
2 遺物観察表	119
第7節 礫石経塚（角庵経塚）の調査成果	122
1 概要	122
2 位置と構造	122
3 出土遺物	127
4 小結—写経された経典から想定される角庵経塚の造営の意味—	150
第6章 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の評価	151
第1節 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の変遷	151
1 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の変遷との特徴	151
第2節 弥生後期～古墳前期の動向からみた角庵Ⅱ遺跡	156
1 角庵Ⅱ遺跡の弥生時代後期から古墳前期の変遷	156
2 台付甕からみた角庵Ⅱ遺跡	156
3 上ノ平遺跡の動向からみた角庵Ⅱ遺跡	157
4 原野谷川流域の様相からみた角庵Ⅱ遺跡	158
第3節 古墳時代終末期における角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の集落について	160
1 古墳時代終末期の角庵Ⅰ・Ⅱ集落	160
2 周辺の遺跡からみた角庵Ⅰ・Ⅱ集落	161
第4節 静岡県の礫石経～角庵Ⅱ遺跡礫石経塚をめぐる～	164
1 はじめに	164
2 礫石経と遺跡地名表	164
3 角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経	166
4 各地の礫石経	169
5 まとめ	171
第7章 結語	174
第1節 角庵Ⅰ遺跡のまとめ	174
第2節 角庵Ⅱ遺跡のまとめ	175
参考文献	176
図版	
抄録・奥付	

挿 図 目 次

【第1～3章 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡】

第1図	第二東名高速道路の工事範囲と 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の関係	2
第2図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置と調査区	4
第3図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置①	11
第4図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置②	11
第5図	掛川市北西部の地形と地名	12
第6図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の遺跡分布図	14

【第4章 角庵Ⅰ遺跡（第二東名No.102地点）】

第7図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡確認調査試掘溝配置図	16
第8図	角庵Ⅰ遺跡基本土層	17
第9図	角庵Ⅰ遺跡 全体図	18
第10図	角庵Ⅰ遺跡 SK06実測図	19
第11図	角庵Ⅰ遺跡 主な縄文土器および石器の 出土位置	20
第12図	角庵Ⅰ遺跡 縄文土器・石器の グリッド別出土数	21
第13図	角庵Ⅰ遺跡出土縄文土器実測図	22
第14図	角庵Ⅰ遺跡出土石器・石製品実測図①	24
第15図	角庵Ⅰ遺跡出土石器・石製品実測図②	25
第16図	角庵Ⅰ遺跡出土石器・石製品実測図③	27
第17図	角庵Ⅰ遺跡 SH01実測図	29
第18図	角庵Ⅰ遺跡 SH02実測図 および遺物出土状況図	30
第19図	角庵Ⅰ遺跡 SH02遺物出土状況図	31
第20図	角庵Ⅰ遺跡 SH02出土土器実測図	32
第21図	角庵Ⅰ遺跡 SH03実測図	33
第22図	角庵Ⅰ遺跡 SH04実測図 および遺物出土状況図	34
第23図	角庵Ⅰ遺跡 SH01・04～06出土遺物実測図	35
第24図	角庵Ⅰ遺跡 SH05実測図	36
第25図	角庵Ⅰ遺跡 SH06実測図 および遺物出土状況図	37
第26図	角庵Ⅰ遺跡 SH07・08出土遺物実測図	38
第27図	角庵Ⅰ遺跡 SH07実測図	39
第28図	角庵Ⅰ遺跡 SH07遺物出土状況図	40
第29図	角庵Ⅰ遺跡 SH08・SH10実測図	41
第30図	角庵Ⅰ遺跡 SH08遺物出土状況図	42
第31図	角庵Ⅰ遺跡 SH09実測図	43
第32図	角庵Ⅰ遺跡 欄列実測図	46
第33図	角庵Ⅰ遺跡 土坑実測図①	48
第34図	角庵Ⅰ遺跡 土坑実測図②	49
第35図	角庵Ⅰ遺跡 土坑・性格不明遺構出土遺物 実測図	50
第36図	角庵Ⅰ遺跡 溝状遺構実測図	51
第37図	角庵Ⅰ遺跡 性格不明遺構実測図	51

【第5章 角庵Ⅱ遺跡（第二東名No.103地点）】

第38図	角庵Ⅱ遺跡 全体図	59
第39図	角庵Ⅱ遺跡 1・3区実測図	60
第40図	角庵Ⅱ遺跡 2区実測図	61
第41図	角庵Ⅱ遺跡 4・5区実測図	62
第42図	角庵Ⅱ遺跡 基本土層	63
第43図	角庵Ⅱ遺跡 SK05実測図	64
第44図	角庵Ⅱ遺跡 主な縄文土器および石器の 出土位置	65
第45図	角庵Ⅱ遺跡出土縄文土器実測図	66
第46図	角庵Ⅱ遺跡出土石器・石製品実測図	68
第47図	角庵Ⅱ遺跡 SH01実測図	71
第48図	角庵Ⅱ遺跡出土弥生土器・土師器 (弥生時代後期～古墳時代前期)	72
第49図	角庵Ⅱ遺跡 SH02実測図	73
第50図	角庵Ⅱ遺跡 SH07実測図	73
第51図	角庵Ⅱ遺跡 SB01実測図	74
第52図	角庵Ⅱ遺跡 SB02実測図	75
第53図	角庵Ⅱ遺跡 SB04・05実測図	76
第54図	角庵Ⅱ遺跡 SB06実測図	77
第55図	角庵Ⅱ遺跡 SB07実測図	78
第56図	角庵Ⅱ遺跡 SB08実測図	79
第57図	角庵Ⅱ遺跡 SB11実測図	80
第58図	角庵Ⅱ遺跡 SB12実測図	81
第59図	角庵Ⅱ遺跡 SB13実測図	82
第60図	角庵Ⅱ遺跡 SX03実測図	83
第61図	角庵Ⅱ遺跡 SK11～14実測図	84
第62図	角庵Ⅱ遺跡 SK11～14とSD02・05の関係 (方形周溝か)	85
第63図	角庵Ⅱ遺跡 SK02・04・08実測図	86
第64図	角庵Ⅱ遺跡 SK24実測図	87
第65図	角庵Ⅱ遺跡 SH03実測図	90
第66図	角庵Ⅱ遺跡 SH03遺物出土状況図	91
第67図	角庵Ⅱ遺跡 SH03～05出土遺物実測図	92
第68図	角庵Ⅱ遺跡 SH04・05実測図	93
第69図	角庵Ⅱ遺跡 SH06・08実測図	95
第70図	角庵Ⅱ遺跡 SH09・10実測図	96
第71図	角庵Ⅱ遺跡 SB09・17実測図	97
第72図	角庵Ⅱ遺跡 SB18実測図	98
第73図	角庵Ⅱ遺跡 SK23実測図	98
第74図	角庵Ⅱ遺跡出土須恵器実測図	99
第75図	角庵Ⅱ遺跡出土土師器実測図	100
第76図	角庵Ⅱ遺跡 SB03実測図	102
第77図	角庵Ⅱ遺跡 SB10・SB16実測図	103
第78図	角庵Ⅱ遺跡 SB14・SB15実測図	104
第79図	角庵Ⅱ遺跡 SB19実測図	105
第80図	角庵Ⅱ遺跡 SA01・02実測図	106
第81図	角庵Ⅱ遺跡 SK01実測図	107

第82図	角庵Ⅱ遺跡	SK01・SX01出土遺物実測図…	107
第83図	角庵Ⅱ遺跡	土坑実測図① (SK03・06ほか) ……	108
第84図	角庵Ⅱ遺跡	土坑実測図② (SK17・19ほか) ……	109
第85図	角庵Ⅱ遺跡	溝状遺構実測図① ……	110
第86図	角庵Ⅱ遺跡	溝状遺構実測図② ……	111
第87図	角庵Ⅱ遺跡	性格不明遺構実測図① ……	112
第88図	角庵Ⅱ遺跡	性格不明遺構実測図② ……	113
第89図	角庵Ⅱ遺跡	遺構に伴わない遺物実測図…	114
第90図	角庵Ⅱ遺跡	金属製品実測図…	115
第91図	角庵Ⅱ遺跡	礫石経塚 (SK07) 実測図…	122
第92図	角庵Ⅱ遺跡	礫石経塚 (SK07) 礫石経出土状況① ……	123
第93図	角庵Ⅱ遺跡	礫石経塚 (SK07) 礫石経出土状況② ……	124
第94図	角庵Ⅱ遺跡	礫石経塚 (SK07) 礫石経出土状況③ ……	125
第95図	角庵Ⅱ遺跡	礫石経塚 (SK07) 礫石経出土状況④ ……	126
第96図	礫石経塚出土経石の法量分布図① (長辺×短辺) ……	127	
第97図	礫石経塚出土経石の法量分布図② (長辺×厚さ) ……	127	
第98図	礫石経塚出土経石の重量別出土数 ……	127	
第99図	礫石経塚出土経石実測図① ……	128	
第100図	礫石経塚出土経石実測図② ……	129	
第101図	礫石経塚出土経石実測図③ ……	130	
第102図	礫石経塚出土経石実測図④ ……	131	
第103図	礫石経塚出土経石実測図⑤ ……	132	
第104図	礫石経塚出土経石実測図⑥ ……	133	
第105図	礫石経塚出土経石実測図⑦ ……	134	
第106図	礫石経塚出土経石実測図⑧ ……	135	
第107図	礫石経塚出土経石実測図⑨ ……	136	

第108図	礫石経塚出土経石の文字数別出土数 ……	141
第109図	礫石経塚出土経石の各面の文字数別出土数…	141
第110図	礫石経塚出土経石に書かれた文字比較図①…	144
第111図	礫石経塚出土経石に書かれた文字比較図②…	145
第112図	礫石経塚出土経石に書かれた文字比較図③…	146
第113図	礫石経塚出土経石に書かれた文字比較図④…	147
第114図	礫石経塚出土経石に書かれた文字比較図⑤…	148

【第6・7章 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡 評価と結語】

第115図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡における遺構の 時期別変遷図① ……	152
第116図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡における遺構の 時期別変遷図② ……	153
第117図	角庵Ⅱ遺跡の弥生時代後期～古墳時代の遺構の 編年的位置 ……	156
第118図	原野谷川・逆川流域の粘土帯を付加する 台付甕 ……	156
第119図	角庵Ⅱ遺跡周辺の主な弥生時代の集落 ……	157
第120図	角庵Ⅱ遺跡周辺の主な弥生時代の集落 の消長 ……	158
第121図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の建物の配置と変遷 ……	160
第122図	角庵Ⅱ遺跡出土の大型台付甕 ……	161
第123図	角庵Ⅱ遺跡周辺の主な古墳時代中期～ 終末期の集落 ……	162
第124図	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の古墳時代終末期の 集落の消長 ……	163
第125図	角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経塚 ……	167

【別図】

- 別図1 竪穴建物・掘立柱建物の各部位の名称と計測位置
別図2 本書で資料する主な土器と陶磁器の名称

【附図】

- 附図1 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土遺物集合写真の遺物番号

挿 表 目 次

【第2・3章】

第1表	角庵Ⅱ遺跡	グリッド番号新旧対応表	5
第2表	角庵Ⅰ遺跡	遺構番号新旧対応表	5
第3表	角庵Ⅱ遺跡	遺構番号新旧対応表	6
第4表	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の遺跡名		14

【第4章 角庵Ⅰ遺跡 (No.102地点)】

第5表	角庵Ⅰ遺跡の主な遺構と遺物	17
第6表	角庵Ⅰ遺跡 竪穴建物の概要	54
第7表	角庵Ⅰ遺跡 柵列の概要	54
第8表	角庵Ⅰ遺跡 土坑の概要	54
第9表	角庵Ⅰ遺跡 溝状遺構の概要	55
第10表	角庵Ⅰ遺跡 性格不明遺構の概要	55
第11表	角庵Ⅰ遺跡出土土器・陶器観察表	55
第12表	角庵Ⅰ遺跡出土鉄製品観察表	56
第13表	角庵Ⅰ遺跡出土土石器・石製品観察表	57

【第5章 角庵Ⅱ遺跡 (No.103地点)】

第14表	角庵Ⅱ遺跡の主な遺構と遺物	58
第15表	角庵Ⅱ遺跡出土中世土器・陶磁器の構成	116
第16表	角庵Ⅱ遺跡出土中世瀬戸美濃系 施軸陶器の構成	116
第17表	角庵Ⅱ遺跡 竪穴建物の概要	117
第18表	角庵Ⅱ遺跡 掘立柱建物の概要	117

第19表	角庵Ⅱ遺跡 柵列の概要	117
第20表	角庵Ⅱ遺跡 土坑の概要	118
第21表	角庵Ⅱ遺跡 溝状遺構の概要	118
第22表	角庵Ⅱ遺跡 性格不明遺構の概要	118
第23表	角庵Ⅱ遺跡出土土器・石製品・ 陶磁器観察表	119
第24表	角庵Ⅱ遺跡出土土石器・石製品観察表	121
第25表	角庵Ⅱ遺跡出土金属製品観察表	121
第26表	角庵Ⅱ遺跡出土玉類観察表	121
第27表	角庵Ⅱ遺跡出土銭貨観察表	121
第28表	角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚出土経石一覧	137
第29表	角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚出土経石に書かれた 文字一覧	142
第30表	角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚の経文と法華三部經の 対応関係	149
第31表	角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚の経文と法華三部經以外の 対応関係	149
第32表	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の縄文土器の 編年的位置	151
第33表	角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の平安時代～近世の 遺構と遺物	155
第34表	静岡県産の礫石経塚出土地名表	165
第35表	静岡県における寺院の宗派	171

写 真 目 次

【第2章 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡 (No.102・103地点)】

写真1	No.102地点確認調査の作業状況	7
写真2	No.103地点確認調査の作業状況	7
写真3	角庵Ⅰ遺跡 重機による表土除去の状況	8
写真4	角庵Ⅰ遺跡 遺構検出作業の状況	8
写真5	角庵Ⅰ遺跡 遺構掘削作業の状況	8
写真6	角庵Ⅰ遺跡 遺構実測作業の状況	8
写真7	角庵Ⅱ遺跡 重機による表土除去の状況	9
写真8	角庵Ⅱ遺跡 遺構検出作業の状況	9
写真9	角庵Ⅱ遺跡 遺構掘削の状況	9
写真10	角庵Ⅱ遺跡 遺構実測作業の状況	9
写真11	角庵Ⅱ遺跡 空中写真撮影の状況	9
写真12	土器の接合	10
写真13	出土品実測	10

写真14	記録類トレース	10
写真15	出土品写真撮影	10
写真16	出土品トレース	10

【第4章 角庵Ⅰ遺跡 (No.102地点)】

写真17	角庵Ⅰ遺跡 SH08出土土器 (98)	42
写真18	角庵Ⅰ遺跡 竪穴建物ほか出土金属製品	44
写真19	角庵Ⅰ遺跡 竪穴建物ほか出土金属製品 X線写真	44
写真20	角庵Ⅰ遺跡 SH07出土金属製品	44
写真21	角庵Ⅰ遺跡 土坑他出土遺物	47
写真22	角庵Ⅰ遺跡出土陶器	52
写真23	角庵Ⅰ遺跡出土灰軸陶器	52

図版目次

【巻頭図版】

- 巻頭図版1 1. 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡 遠景(南東から)
2. 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡 遠景(東から)
- 巻頭図版2 1. 角庵Ⅰ遺跡 完掘状況全景(西から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH02完掘状況(北から)
- 巻頭図版3 角庵Ⅰ遺跡 SH02出土遺物
- 巻頭図版4 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH04出土遺物
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH07出土遺物
- 巻頭図版5 1. 角庵Ⅱ遺跡 2区完掘状況全景(南西から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 5区完掘状況全景(南上空から)
- 巻頭図版6 1. 角庵Ⅱ遺跡 SH01完掘状況(南東から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 SH03完掘状況(東から)
- 巻頭図版7 1. 角庵Ⅱ遺跡 主な弥生土器
2. 角庵Ⅱ遺跡 主な須恵器・土師器
(古墳時代終末期)
- 巻頭図版8 1. 角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚(SK07)出土状況
(南から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚(SK07)出土礫石経

【図版】

【角庵Ⅰ遺跡(第二東名No.102地点)】

- 図版1 1. 角庵Ⅰ遺跡 遠景①(南東から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 遠景②(北から)
- 図版2 1. 角庵Ⅰ遺跡 全景①(北から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 全景②(西から)
- 図版3 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH06~SH10(北東から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH01完掘状況(西から)
- 図版4 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH02完掘状況および
遺物出土状況(北から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH04完掘状況(南から)
- 図版5 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH02電検出土状況(南東から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH02遺物出土状況①
(北東隅角部、南東から)
3. 角庵Ⅰ遺跡 SH02遺物出土状況②
(東側、南東から)
- 図版6 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH02遺物出土状況③
(紡錘車、南東から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH04遺物出土状況
(竈の東側、南から)
3. 角庵Ⅰ遺跡 SH05遺物出土状況(東から)
- 図版7 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH03完掘状況(東から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH05完掘状況(南から)
- 図版8 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH06完掘状況(東から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH07遺物出土状況(北から)
- 図版9 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH08・09完掘状況(北西から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SH08完掘状況(北西から)
- 図版10 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH10電検出土状況(北東から)

2. 角庵Ⅰ遺跡 SH08遺物出土状況①
(北側隅角部、南から)
3. 角庵Ⅰ遺跡 SH08-SK12遺物出土状況(南東から)
- 図版11 1. 角庵Ⅰ遺跡 SH09電検出土状況(北から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SK10電検出土状況(北西から)
3. 角庵Ⅰ遺跡 SK10完掘状況(南東から)
- 図版12 1. 角庵Ⅰ遺跡 SK11完掘状況(西から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SK11遺物出土状況(西から)
3. 角庵Ⅰ遺跡 SK06完掘状況(南西から)
- 図版13 1. 角庵Ⅰ遺跡 SK13完掘状況(南から)
2. 角庵Ⅰ遺跡 SK08完掘状況(南東から)
3. 角庵Ⅰ遺跡 SK01完掘状況(南東から)
- 図版14 縄文土器
- 図版15 1. 石鏃・スクレイパーほか
2. SH02 出土紡錘車
3. 磨石
4. 石錘
- 図版16 SH02 出土土器
- 図版17 SH04・05 出土土器
- 図版18 SH06・07 出土土器
- 図版19 SH08・土坑ほか 出土土器

【角庵Ⅱ遺跡(第二東名No.103地点)】

- 図版20 1. 角庵Ⅱ遺跡 遠景(南東から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 遠景(西から)
- 図版21 1. 角庵Ⅱ遺跡 1区全景(南から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 3区全景(南から)
- 図版22 1. 角庵Ⅱ遺跡 2区全景(南から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 2区全景(北から)
- 図版23 1. 角庵Ⅱ遺跡 2区北部~中央部完掘状況(南西から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 2区中央部~南部完掘状況(西から)
- 図版24 1. 角庵Ⅱ遺跡 4区全景(南から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 5区全景(上空から)
- 図版25 1. 角庵Ⅱ遺跡 SH01完掘状況(南東から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 SH01-SL01出土状況(南西から)
3. 角庵Ⅱ遺跡 SK05完掘状況(西から)
4. 角庵Ⅱ遺跡 SK02完掘状況(南東から)
5. 角庵Ⅱ遺跡 SK08完掘状況(南から)
- 図版26 1. 角庵Ⅱ遺跡 SH02完掘状況(東から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 SK03完掘状況(西から)
- 図版27 1. 角庵Ⅱ遺跡 SK04遺物出土状況(南から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 SK04遺物出土状況細部(西から)
3. 角庵Ⅱ遺跡 SK24遺物出土状況(南から)
- 図版28 1. 角庵Ⅱ遺跡 SK11完掘状況(西から)
2. 角庵Ⅱ遺跡 SK13・14完掘状況(北から)
3. 角庵Ⅱ遺跡 SK12遺物出土状況(南から)
4. 角庵Ⅱ遺跡 SK12完掘状況(西から)
5. 角庵Ⅱ遺跡 SH03-SK22遺物出土状況(北から)

6. 角庵Ⅱ遺跡 SH03-SK22完掘状況(北東から)
 7. 角庵Ⅱ遺跡 SH03龜完掘状況(南東から)
 8. 角庵Ⅱ遺跡 SK23完掘状況(北西から)
 図版29 1. 角庵Ⅱ遺跡 SH03完掘状況(東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SH04完掘状況(南東から)
 図版30 1. 角庵Ⅱ遺跡 SX01完掘状況(北から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SK01掘出土状況(南から)
 3. 角庵Ⅱ遺跡 SK19完掘状況(北から)
 4. 角庵Ⅱ遺跡 SK21完掘状況(北から)
 5. 角庵Ⅱ遺跡 SK20完掘状況(東から)
 図版31 1. 角庵Ⅱ遺跡 SH08完掘状況(東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SH03・SX03・SB15完掘状況(東から)
 図版32 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB01・02, SH06・07完掘状況(南東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB01・02, SH07ほか完掘状況(南東から)
 図版33 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB04完掘状況(南東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB05完掘状況(北東から)
 図版34 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB10周辺掘立柱建物・堅穴建物完掘状況(西から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB12周辺掘立柱建物完掘状況(北東から)
 図版35 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB09周辺掘立柱建物完掘状況(東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB08・11完掘状況(北東から)
 図版36 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB12完掘状況(北東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB13・14完掘状況(東から)
 図版37 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB16完掘状況(南東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB19完掘状況(西から)
 図版38 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB16・17ほか完掘状況(南西から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB16・17ほか完掘状況(北東から)
 図版39 1. 角庵Ⅱ遺跡 SR01下部(1区)遺物出土状況(北西から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SR01上部(2区)遺物出土状況(南東から)
 図版40 1. 角庵Ⅱ遺跡 SB08-P2掘出土状況(北東から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 SB06-P2遺物出土状況(北西から)
 3. 角庵Ⅱ遺跡 SP14遺物出土状況(東から)
 4. 角庵Ⅱ遺跡 SP048遺物出土状況(北東から)
 5. 角庵Ⅱ遺跡 石製品(34)出土状況(東から)
 6. 角庵Ⅱ遺跡 鎌(167)出土状況(北東から)
 図版41 1. 縄文土器①
 2. 縄文土器②
 3. 土鏃・耳飾
 図版42 1. 石器
 2. ガラス小玉および弥生土器①
 図版43 弥生土器②
 図版44 1. SH03 出土遺物
 2. SK22 出土遺物
 3. 主な出土須恵器①
 図版45 主な出土須恵器②・主な出土土師器①
 図版46 1. 主な出土土師器②
 2. 主な出土灰釉陶器

3. 主な出土かわかけ
 4. 主な出土陶器①
 図版47 1. SK01 出土遺物
 2. 主な出土陶器②
 図版48 1. SX01 出土金属製品
 2. 鎌
 3. 銅銭
 4. 不明鉄製品
 図版49 1. 角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況(上面, 南から)
 2. 角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況(下面, 南から)
 図版50 1. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部①(南から)
 2. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部②(南から)
 3. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部③(東から)
 4. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部④(南から)
 5. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部⑤(西から)
 6. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部⑥(南東から)
 7. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部⑦(南から)
 8. 礫石経塚(SK07) 礫石経出土状況細部⑧(下面, 南から)
 図版51 礫石経①
 図版52 礫石経②
 図版53 礫石経③
 図版54 礫石経④
 図版55 礫石経⑤
 図版56 礫石経⑥
 図版57 礫石経⑦
 図版58 礫石経⑧
 図版59 礫石経⑨

【角庵Ⅱ遺跡(礫石経塚)関連資料】

- 図版60 1. 市居平経塚の地上標識石
 2. 市居平の礫石経
 3. 万松寺の経碑
 4. 大洞院の経碑
 5. 龍巢院 礫石経の石仏
 6. 龍巢院の礫石経
 7. 平松経塚の礫石経
 図版61 1. 佐久米経塚の礫石経①
 2. 佐久米経塚の礫石経②
 3. 佐久米経塚の石幢
 4. 四方浄経塚の宝篋印塔
 5. 智生寺経塚
 6. 妙昌寺経塚の無縫塔
 図版62 1. 海老江経塚
 2. 保全院経塚の石仏
 3. 万雲院の経碑
 4. 長原寺の納経塔
 5. 経塚山の経碑
 6. 飯沼経塚の石仏
 7. 東光寺の経碑

第1章 調査に至る経緯

東名高速道路は昭和44年の開通以来、日本の大動脈として大きな役割を果たしている。しかし、経済発展に伴って交通量が激増し混雑が激しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予想されるようになった。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路が計画された。このうち静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170kmの路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在の有無についての回答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめた。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に県内130箇所以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、財団法人を除いて記す）へ委託することが確認された。平成8年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が開始された。

なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社東京支社に引き継がれている。また、平成22年度末の静岡県埋蔵文化財調査研究所の解散後は、静岡県埋蔵文化財センターが研究所の業務を引き継いでいる。

上記したように掛川市域においても調査が開始された。掛川市域には、本線とインターチェンジが計画されており、総数12地点に対し確認調査を実施した。調査の結果、12地点で8遺跡の存在が認められた。この結果にもとづいて、各遺跡の発掘調査を順次実施することとなった。確認調査と現地調査、整理作業、報告書刊行作業は、静岡県教育委員会の指導のもと静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成22年度まで行い、平成23年度は静岡県教育委員会が直接実施した。なお、上記の経緯の詳細や確認調査の内容については、既に報告している（静岡埋文研2004・2005、註1）。

掛川市域で周知の埋蔵文化財包蔵地と第二東名路線の計画範囲を対比すると、宮ノ沢遺跡、大和田遺跡、平島Ⅰ遺跡、平島Ⅱ遺跡、平島Ⅲ遺跡、上ノ平遺跡、角庵Ⅰ遺跡、角庵Ⅱ遺跡（註2）で遺構が確認され、本調査を実施した。このうち本書で報告する角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡以外の遺跡については既に報告済（静岡埋文研2005・2008）であり、本書は掛川市地区の3冊目で、掛川市地区の最終報告書でもある。

註

1 参考文献については、第7章末に記入している。

2 以下、角庵Ⅰ遺跡、角庵Ⅱ遺跡を併記する場合は、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡と表記する。第2章以降も同様に表記する。

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 確認調査の方法

踏査 発掘調査前に第二東名高速道路建設工事対象地内を踏査し、遺跡の所在が確認できている場所及び遺跡の存在が想定される箇所については確認調査を実施することとした。踏査により遺跡の可能性が極めて少ない場所については確認調査の対象から除外した。

今回の確認調査対象地点は102・103地点となり、静岡県教育委員会文化課（当時）と掛川市教育委員会の協議により、102地点については「角庵Ⅰ遺跡」（仮称）、103地点については「角庵Ⅱ遺跡」（仮称）として調査することとし、遺跡の存在が確認された場合には、それぞれ仮称をとった名称とすることが合意された。

確認調査 確認調査では、対象地点内に試掘溝を設定し、重機により表土等除去（以下、表土除去）を行った後、人力にて精査し、遺構の有無の確認を行った。各試掘溝については、遺構の有無にかかわらず平面図・土層図の作成を行い、遺構が確認された試掘溝については遺構配置の簡略図を作成し、写真撮影を行った。調査終了後、埋め戻し作業を行った。

2 本調査の方法

表土除去 表土除去は、重機（バックホウ）を用いて、確認調査で記録した土層の深度を基準に遺構上面あるいは包含層上面まで掘削した。

遺構調査 包含層については人力にて、必要に応じて位置と標高を記録しながら遺物の取り上げを行い掘削した。遺構検出は人力にて行った。遺構掘削は、堅穴建物など大型の遺構は十字に土層帯を残し、土層を観察しながら掘削する方法を採用し、竈や炉については必要に応じて「キ」字形に土層帯を設けて遺物に留意しながら慎重に掘削した。

遺構実測 遺構実測のうち、3・4級基準点・水準点、座標杭（以下、グリッド杭）の設置は、委託作業として実施し、国土座標（日本測地系）に準拠して設置した。

地形測量は、測量業者に委託してラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。遺構実測については調査担当者の指示のもと調査補助員等が作成するとともに、一部測量業者に委託して図面作成を行った。

写真撮影 遺構の写真撮影は、中型カメラ（6×7判、白黒フィルム）を主体に撮影し、補助的に小型カメラ（35mmポジフィルム、カラーネガフィルム）を用いて撮影した。また、一部の遺構については中判カメラ（6×7判、ポジフィルム）を用いた。

空中写真撮影については、測量業者に委託し、中型カメラ（6×4.5判、ポジフィルム、白黒フィルム）を用いてラジコンヘリコプターにて実施した。

3 資料整理および報告書作成の方法

基礎整理～報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会通知「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき実施した。

基礎整理 土器・石器・玉類については取上げ後、台帳を作成し、遺物を傷つけないように慎重に洗

浄・注記し、整理作業に備えた。金属製品については、現地にて劣化遅延処置を実施後、取り上げを行い、台帳作成し、保存処理に備えた。

記録類は現地で実測した図面の整合性を合わせるとともに、台帳を作成した。

整理作業・報告書刊行作業 出土品は分類、仕分け、接合、復原を行うとともに、それが終了した遺物から順次実測を行い、版組を行った後でトレースした。また、実測が終了したものから写真撮影を行った。金属製品は、保存処理（クリーニング）を行った後で実測、版組、トレースを行うとともに、写真撮影を実施した。写真撮影は基本的に6×7ポジ・白黒フィルムで撮影し、集合写真の一部については4×5ポジ・白黒フィルムを用いて撮影した。

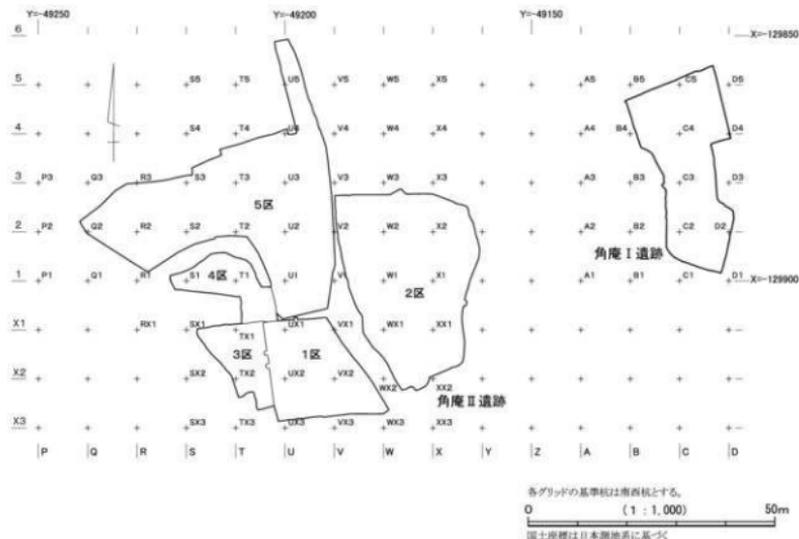
記録類は図面編集を行い、遺構ごとに版組し、デジタルトレースを行った。

これらが終了した段階で、遺構及び遺物の観察表作成、報告原稿の執筆、編集、校正を行い、本書を刊行した。

保存処理 出土した金属製品について、現地調査終了後応急保存処理を実施し、本格的な作業は平成22年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所保存処理室においてクリーニングを進め、平成23年度に静岡県埋蔵文化財センターにおいて脱塩処理などの保存処理を実施した。

4 グリッドの表記方法について（第2図，第1表）

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は、近接しながらも遺跡ごとに国土座標に基づきグリッド杭を設置し、別々の基準に基づきグリッド番号を付加していたが、報告書作成にあたり同一報告書で両遺跡の報告を行うこととなり、報告書内で同一のグリッド番号が出現するのを防ぐため、角庵Ⅰ遺跡のグリッド番号を基準に、角庵Ⅱ遺跡をそれに合わせて統一したグリッド番号に変更した。第1表に、角庵Ⅱ遺跡のグリッド番号の新旧対応表を記す。



第2図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡グリッド配置と調査区

第1表 角庵II遺跡 グリッド番号新旧対応表

旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
B1	Q5	C1	Q4	D1	Q3	E1	Q2	F1	Q1	G1	QX1	H1	QX2	I1	QX3
B2	R5	C2	R4	D2	R3	E2	R2	F2	R1	G2	RX1	H2	RX2	12	RX3
B3	S5	C3	S4	D3	S3	E3	S2	F3	S1	G3	SX1	H3	SX2	13	SX3
B4	T5	C4	T4	D4	T3	E4	T2	F4	T1	G4	TX1	H4	TX2	14	TX3
B5	U5	C5	U4	D5	U3	E5	U2	F5	U1	G5	UX1	H5	UX2	15	UX3
B6	V5	C6	V4	D6	V3	E6	V2	F6	V1	G6	VX1	H6	VX2	16	VX3
B7	W5	C7	W4	D7	W3	E7	W2	F7	W1	G7	WX1	H7	WX2	17	WX3
B8	X5	C8	X4	D8	X3	E8	X2	F8	X1	G8	XX1	H8	XX2	18	XX3

なお、各グリッド名は方形グリッド（10×10m）の南西杭を基準として命名している。

5 遺構番号について（第2・3表）

遺構番号については、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡でそれぞれ1番から遺構の種類に関係なく確認した遺構から順次番号を付加したが、資料整理の段階で攪乱であることが判明し欠番となるものがあること、また小穴も通番で付加しているため番号が大きくなり、50番目に確認した遺構をSB50などと表記した場合、掘立柱建物が50基存在するかのよう誤解を招くのを防ぐため、資料整理にあたり遺構番号を振り直している。以下に遺跡ごとに遺構番号の新旧対応表を記す。

第2表 角庵Ⅰ遺跡 遺構番号新旧対応表

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
SB01	SH04	SF30	SK12	SP27	SA05-P4	SX15・16	SX01
SB02	SH05	SF31	SK01	SP28	SA04-P4	SX33	SX03
SB03	SH03	SF32	SK07	SP29	SP111	なし	SA01
SB04	SH02	SF34	SK05	SP37	SP17	なし	SA02
SB05	SH01	SF35	SK06	SP39	SP35	なし	SA03
SB06	SH06	SF36	包含層	SP40	SP19	なし	SA04
SB13	SH09	SF38	SK03	SP41	SP44	なし	SA05
SB14	SH08	SF07	SP58	SP42	SH05-P1	なし	SD01
SD21	攪乱	SP11	SP101	SP43	SH01-P4	なし	SD07
SD21南の溝	攪乱	SP18	SP21	SP44	SP37	なし	SD08
SF08	SK11	SP19	SP20	SP45	SP38	なし	SD09
SF10	SH07	SP22	SP67	SP46	SP32	なし	SD10
SF12	SK08	SP24	SP79	SP47	SP47	なし	SD11
SF17	SK04	SP25	SP83	SP48	SP40	なし	SX02
SF20	SK02	SP26	SH05-P2	SP49	SP28	なし	SX04
SF23	SK09		SK13	SX09	SK10		

第3表 角庵川遺跡 遺構番号新旧対応表

調査区	旧遺構名	新遺構名	調査区	旧遺構名	新遺構名	調査区	旧遺構名	新遺構名
1区	SF01	SK24	2区	SP65	2区 SP65	5区	SX051	SX04
	P01	SB19-P4		SP66	SB11-P2		SP052	5区 SP052
	なし	SK25		谷部	2区 谷部		SP053	5区 SP053
	なし	SK26		孤立柱建物	SB12		SP054	5区 SP054
	中央部孤立柱 建物の一部	SB19		なし	SK09		SP055	SB17-P2
	孤立柱建物H8	-		なし	SK10		SP056	5区 SP056
	谷部	1区 谷部		なし	SK15		SP057	5区 SP057
	東側谷部	-		なし	SK16		SH058	SB16
	SP00	-		なし	SK17		SP059	5区 SP059
	SP01	-		なし	SD03		SP060	5区 SP060
SP02	覆瓦	なし	SD07	SP061	5区 SP061			
SP03	SK07	なし	SD09	SP062	5区 SP062			
SB04	SH01	なし	SD10	SP063	5区 SP063			
SP05	覆瓦	なし	SX02	SP064	5区 SP064			
SP・SF06	SB04-P1	なし	SD16	SP065	5区 SP065			
SP07	2区 SP07	なし	SX1	SP066	5区 SP066			
SP08	SB04-P5	なし	SP1	4区 SP1	SP067	5区 SP067		
SF・SP09	覆瓦	なし	SP2	4区 SP2	SP068	SB17-P1		
SP10	SB03-P2	なし	SP3	4区 SP3	SP069	5区 SP069		
SP11	2区 SP11	なし	SP4	4区 SP4	SP070	5区 SP070		
SP12	SB04-P3	なし	SP5	4区 SP5	SP071	5区 SP071		
SP13	SK05	なし	SP6	4区 SP6	SP072	5区 SP072		
SP14	2区 SP14	なし	SB001	SH03	SP073	5区 SP073		
SP15	2区 SP15	なし	SB001 P1	SH03-P1	SP074	5区 SP074		
SF16	覆瓦	なし	SB001 P2	SH03-P2	SP075	5区 SP075		
SF17	覆瓦	なし	SB002	SH02	SP076	5区 SP076		
SF18	SK03	なし	SX003	SX03	SP077	5区 SP077		
SF19	SK04	なし	SD004	SD14	SP078	SB17-P3		
SP20	SB01-P6	なし	SD005	SD15	SP079	5区 SP079		
SP21	2区 SP21	なし	SD006	SD11	SP080	SB17-P4		
SP22	SB02-P2	なし	SD007	SD12	SP081	5区 SP081		
SP23	SB05-P4	なし	SP008	5区 SP008	SP082	5区 SP082		
SX24	SX01	なし	SP009	5区 SP009	SP083	SB18-P3		
SP25	SK01	なし	SP010	5区 SP010	SP084	5区 SP084		
SF26	覆瓦	なし	SP011	5区 SP011	SP085	5区 SP085		
SF27	SK02	なし	SP012	5区 SP012	SP086	SB18-P1		
SP・SF28	SH07-P1	なし	SP013	5区 SP013	SP087	SB18-P2		
SF29	SK08	なし	SP014	5区 SP014	SP088	SB18-P4		
SP30	覆瓦	なし	SP015	5区 SP015	SP089	5区 SP089		
SF31	SK06	なし	SX016	SX05	SP090	5区 SP090		
SF32	覆瓦	なし	SP017	5区 SP017	SP091	5区 SP091		
SD33	SD02	なし	SF018	SK21	SP092	5区 SP092		
SD34	SD04	なし	SF019	SK22	SP093	5区 SP093		
SF35	SK11	なし	SP020	SH02-P1	SP094	5区 SP094		
SD36	SD01	なし	SP021	5区 SP021	SD095	SD13		
SD37	覆瓦	なし	SP022	5区 SP022	SP096	5区 SP096		
SD38	SD05	なし	SP023	5区 SP023	SP097	5区 SP097		
SP39	2区 SP39	なし	SP024	5区 SP024	SP098	5区 SP098		
SP40	SB07-P2	なし	SP025	5区 SP025	SP099	5区 SP099		
SP41	SB08-P1	なし	SP026	5区 SP026	SP100	SB15-P3		
SF42	SK12	なし	SP027	SH02-P2	SP101	SB15-P1		
SF43	SK14	なし	SP028	5区 SP028	SH102	SH04		
SF44	覆瓦	なし	SP029	5区 SP029	SB103	SH05		
SP45	SB12-P3	なし	SP030	5区 SP030	SP104	5区 SP104		
SF46	SK13	なし	SP031	5区 SP031	SP105	5区 SP105		
SF47	SK19	なし	SP032	5区 SP032	SP106	5区 SP106		
SP48	SB12-P6	なし	SP033	5区 SP033	SP107	5区 SP107		
SP49	SB09-P4	なし	SP034	5区 SP034	SP108	5区 SP108		
SP50	SB11-P3	なし	SP035	5区 SP035	SP109	5区 SP109		
SP51	SB13-P5	なし	SP036	5区 SP036	SP110	5区 SP110		
SP52	2区 SP52	なし	SP037	SB15-P2	SP111	5区 SP111		
SP53	2区 SP53	なし	SP038	5区 SP038	SP112	5区 SP112		
SP54	2区 SP54	なし	SP039	5区 SP039	SP113	5区 SP113		
SP55	SB13-P1	なし	SP040	SB15-P4	SP114	5区 SP114		
SD・SP56	SD08	なし	SP041	5区 SP041	SP115	5区 SP115		
SF・SP57	SK18	なし	SP042	5区 SP042	SP116	5区 SP116		
SF58	SK20	なし	SP043	5区 SP043	SP117	5区 SP117		
SP59	2区 SP59	なし	SP044	5区 SP044	SP118	5区 SP118		
SP60	2区 SP60	なし	SP045	5区 SP045	SP119	5区 SP119		
SP61	SB08-P2	なし	SP046	5区 SP046				
SD62	SD06	なし	SF047	SK23				
SP63	SB06-P2	なし	SP048	5区 SP048				
SP64	SB12-P2	なし	SP049	5区 SP049				
			SP050	5区 SP050				

第2節 確認調査および本調査の経過

1 確認調査の経過

(1) No.102地点

No.102地点（仮称「角庵Ⅰ遺跡」）の確認調査は、平成11年度に実施した。平成11年12月20日に試掘溝9箇所の設定を行い、重機による表土除去を行った。表土除去が終了した試掘溝から人力による精査を行い、遺構・遺物の有無の確認を行った。確認調査は22日まで実施し、記録を作成し、22日に重機で埋め戻した。

確認調査の結果、9箇所の試掘溝のうちAトレンチを除く、8箇所で遺構が確認されたため遺跡であることが確定し、出土した遺物からは縄文時代、古墳時代、中世～近世に亘る複合遺跡であることが想定された。以後、102地点は「角庵Ⅰ遺跡」として周知された。

(2) No.103地点

No.103地点（仮称「角庵Ⅱ遺跡」）の確認調査は、平成11年度に実施した。平成12年1月11日に試掘溝を13箇所設置し、重機で表土除去を行った後で、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。確認調査は28日まで実施し、記録を作成後、重機で埋め戻した。

確認調査の結果、北側の試掘溝8箇所では遺構が確認され、南側の試掘溝では遺構は確認されなかったことから、遺構が確認された北側を本調査（現地調査）対象範囲とした。出土した遺物からは縄文時代から近世に亘る複合遺跡であることが想定された。以後、103地点は「角庵Ⅱ遺跡」として周知された。



写真1 No.102地点確認調査の作業状況



写真2 No.103地点確認調査の作業状況

2 本調査の経過

(1) 角庵Ⅰ遺跡

角庵Ⅰ遺跡の本調査（現地調査）は、平成11・12年度に実施した。

平成11年度は、平成12年2月28日から重機による表土除去を行い、表土除去が終了した3月7日から遺構検出を行い、検出した遺構から順次土層や遺物に留意しながら慎重に掘削を進めた。平成12年度の調査は3月21日で終了した。平成12年度は、平成4月11日から遺構掘削を再開し、遺構の図面作成、写真撮影を行った。遺構掘削が終了した5月25日に株式会社フジヤマに委託し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影・測量を行った。5月26～30日まで補足調査を実施し、5月31日に撤収を行うとともに、日本道路公団（当時）に現地を引き渡し、角庵Ⅰ遺跡の現地調査を終了した。



写真3 角庵Ⅰ遺跡 重機による表土除去の状況



写真4 角庵Ⅰ遺跡 遺構検出作業の状況



写真5 角庵Ⅰ遺跡 遺構掘削作業の状況



写真6 角庵Ⅰ遺跡 遺構実測作業の状況

(2) 角庵Ⅱ遺跡

本調査は、平成12年度（1～3区）、13年度（4・5区）に実施した。

1～3区 No.103地点Ⅰ期として、角庵Ⅰ遺跡の発掘調査がほぼ終了に近づいた平成12年5月24日にまず重機が調査対象地まで侵入できるように進入路の設置を行った。5月24～30日に重機による表土除去を実施した。6月1日から人力による包含層除去作業を開始し、併せて遺構検出を行った。検出した遺構は6月5日から掘削を開始し、土砂の堆積状況や遺物に留意しながら慎重に掘り進めた。6月7日に株式会社フジヤマに委託してグリッド杭の設置を行った。掘削した遺構はこのグリッド杭を基準に平面図・土層図などの図面の作成、写真撮影を行った。遺構図の一部については株式会社フジヤマに委託して作成した。1区は遺構掘削が終了した6月21日に、2・3区は8月8日に株式会社フジヤマに委託してラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

2・3区の空中写真撮影終了後、8月18日まで柱穴・小穴などの補足調査を行い、8月29～30日に資機材の撤収、現地の日本道路公団（当時）への引き渡しを行い、現地調査を終了した。

5区 角庵Ⅱ遺跡Ⅲ期として、平成13年8月1日から調査準備を開始し、8月24～29日に重機による表土除去を実施し、30日より人力による包含層掘削作業を開始した。9月17～28日に遺構検出を実施し、遺構の掘削を行った。10月2日に遺構の掘削を開始し、土砂の堆積状況や遺物に留意しながら掘削した。検出した遺構は順次図面の作成、写真撮影を実施した。グリッド杭の設置は10月5日に設置した。遺構の実測はこのグリッド杭に基づき実施するとともに、一部の図面作成については、大鐘測量株式会社に委託して実施した。5区の景観写真撮影については、大鐘測量株式会社に委託してラジコンヘリコプターを用いて10月23日と11月2日に実施した。



写真7 角庵Ⅱ遺跡 重機による表土除去の状況



写真8 角庵Ⅱ遺跡 遺構検出作業の状況



写真9 角庵Ⅱ遺跡 遺構掘削の状況



写真10 角庵Ⅱ遺跡 遺構実測作業の状況

全景写真撮影が終了した11月2～16日補足調査を実施し、11月20・21日で撤去作業を行い、現地を日本道路公団（当時）に引き渡して調査を終了した。

4区 角庵Ⅱ遺跡Ⅱ期として、5区の調査がほぼ終了した平成13年11月13日より重機による表土除去を開始した。11月14日に遺構検出を行い、遺構検出が終了したものから順次遺構掘削を行った。11月21日に空中写真撮影を実施し、11月22・24日に測量を実施し、11月30日撤収、日本道路公団（当時）への現地の引き渡しを行い、角庵Ⅱ遺跡のすべての現地調査を終了した。



写真11 角庵Ⅱ遺跡 空中写真撮影の状況

第3節 資料整理および報告書作成、保存処理の経過

1 資料整理および報告書作成、保存処理の経過

基礎整理 基礎整理作業は平成11～13年度に本調査と並行して、出土遺物の洗浄・注記、劣化遅延措置を行った上で、遺物台帳の作成を行った。また、記録類の台帳作成も併せて実施した。

資料整理 資料整理は、静岡県教育委員会通知「静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準」に基づき平成16・17・22・23年度に実施した。

掛川工区の資料整理は16・17年度に出土品の分類・仕分け、接合・復原を実施した。その後、一旦中断し、平成22・23年度に出土品の実測、拓本の採取、写真撮影、版組(図・写真)、トレース、観察表の作成、記録類の版組、トレース、観察表作成を行った。それらが終了した平成23年度に原稿執筆・編集・校正を行い、報告書を刊行した。また、報告書の刊行と併せて取納作業を行い、今後の保管・活用に備えた。保存処理は、平成22・23年度に実施した。

また、石器の一部の実測については株式会社アルカに委託し、平成16年度に実施した。また、礫石経の実測については東京航業株式会社に委託して平成17年度に実施した。



写真12 土器の接合



写真13 出土品実測

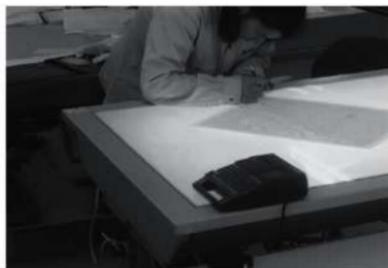


写真14 記録類トレース



写真15 出土品写真撮影

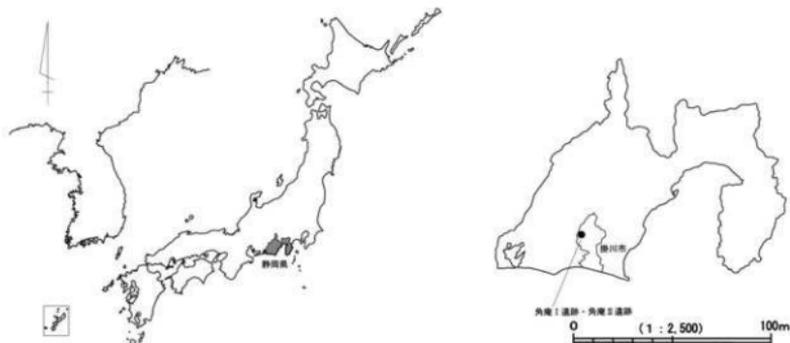


写真16 出土品トレース

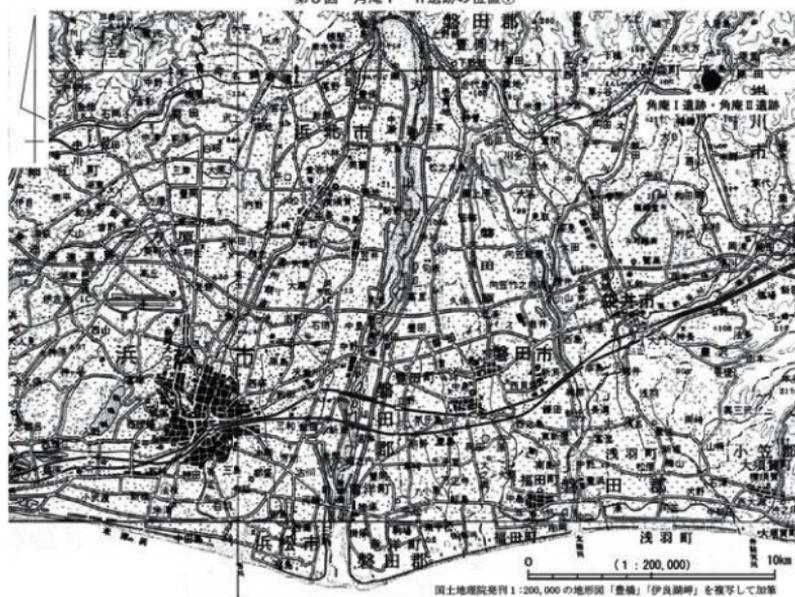
第3章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は、掛川市北西部の寺島地区に位置する（第3～5図）。掛川市は、北は森町・島田



第3図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置①



第4図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置②



第5図 掛川市北西部の地形と地名

市、東は島田市、南東は菊川市・御前崎市、西は袋井市と接し、総面積は265.63k㎡（市町村合併後）である。

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡が所在する、掛川市北部には中部山岳地帯から続く山地が広がり、その山間部を原野谷川、倉真川、逆川等の河川が流れる。このうち原野谷川は、八高山地を始源とし、山間部を蛇行しながら南西へと向かい（上流域）、原里辺りで一旦南へ流れを変え、西ノ谷川と合流し、さらに南西へと向かって流れを進める（中流域）。そして、平地部の最も狭まる原谷地区、幡鎌地区で、肥沃な平野部分へと流れ込み（下流域）、袋井市国本、掛川市各和と和岡丘陵の先端に沿って西側に流れを変え、袋井市広岡・愛野あたりで東側から流れてきた逆川と合流し、さらに南

西へと流れを進める。

掛川市北部はこうした中部山岳地帯から続く山地と河川、そしてその河川が切り開いた狭い平野部分からなり、自然豊かな地域である。

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は、原野谷川中流域の平野部に向かって熊手状に延びる小丘陵の先端部分に位置しており、平野部分からの比高差は10m前後である。両遺跡からは、原野谷川が開析した平野部分と、原野谷川対岸の丘陵地帯を眺望することができる。

第2節 歴史的環境

1 旧石器・縄文時代

原野谷川上・中流域では、明確な旧石器時代の遺跡は確認されていない。最も遡ると考えられるのは、上ノ段遺跡(14)出土の有舌尖頭器で、縄文時代草創期に位置づけられる可能性が高い(掛川市教委1984)。

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡(1・2)近在の萩ノ段遺跡(20)では竪穴建物・屋外炉などが確認され、縄文時代早期～中期の土器・石器・耳飾が出土した。上ノ段遺跡(14)では、上述した有舌尖頭器のほか縄文時代中期～晩期の土器・石器ほか、石剣・石棒・大珠・土偶片が採集されている。角庵Ⅱ遺跡西側の第二東名建設に伴い発掘調査が行われた、上ノ平遺跡(24)では縄文時代中期の竪穴建物1軒、階穴18基とともに土器・石器が出土している。

2 弥生時代

原野谷川上流域では、弥生時代の遺跡は少ないものの、弥生土器が採集されている遺跡もあり、人為が及んでいることが明らかである。原野谷川中流域では、第二東名建設事業に伴って調査された上ノ平遺跡(24)で、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物140軒、周溝をもつ建物44棟、掘立柱建物177棟、方形周溝墓2基などが確認され、この時期に大規模な集落が営まれていたことが明らかとなった。特に周溝をもつ建物の発見は、遠江の弥生時代集落の位置づけを考える上で非常に重要な発見であった。調査の結果、居住域から墓域へと変化した可能性が高いことが判明している。

このほか発掘調査された遺跡が少ないため遺物が採集されているだけの遺跡が多いが、発掘調査が行われた萩ノ段遺跡(20)では弥生時代中～後期の竪穴建物と方形周溝墓が、堂山遺跡(10)では弥生時代中～後期の竪穴建物確認されている。

さらにここで報告する角庵Ⅱ遺跡(2)で竪穴建物3軒以上、掘立柱建物、土壇墓数基が確認された。

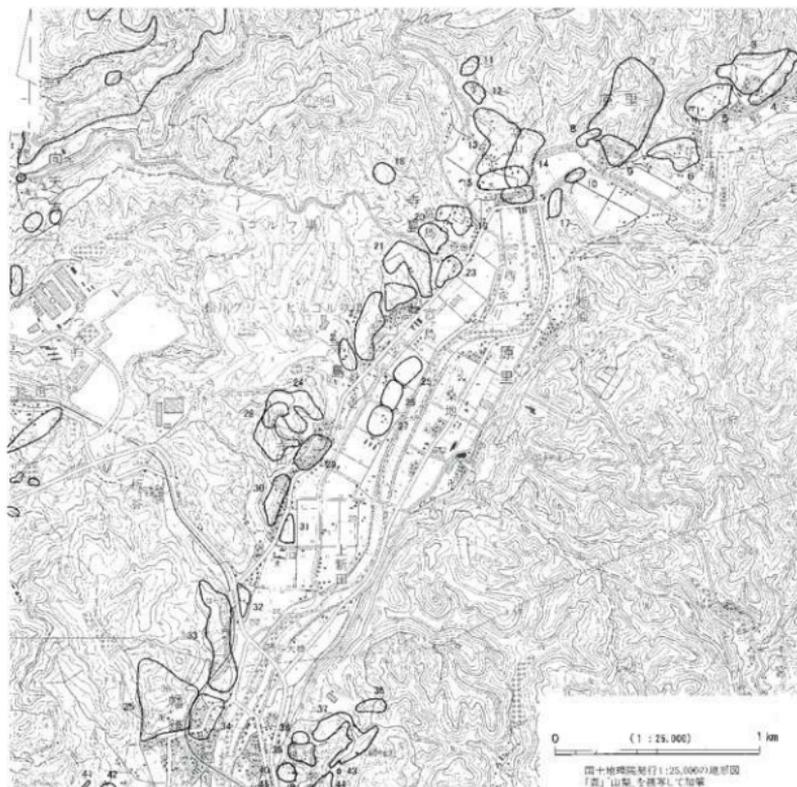
原野谷川中流域では弥生時代中期後半頃に開発が行われ、上ノ平遺跡のように後期に集落の拡大があり、古墳時代前期まで居住域と墓域を変えながら、継続した可能性が高いが、古墳時代中期までは継続しない。

3 古墳時代

原野谷川上・中流域の集落は確認されていなかったが、ここで報告する角庵Ⅱ遺跡(2)で古墳時代前期の竪穴建物3軒が確認された。堂山遺跡(10)では古墳時代前期の方形周溝墓が確認された。それ以外では様相が不明確であり、古墳時代前期・中期については具体的な遺跡名を挙げるできない。

古墳時代後期の集落も確認できないが、本書で報告する角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡(1・2)で古墳時代後期末～終末期(飛鳥時代)の竪穴建物、掘立柱建物が、上ノ平遺跡で古墳時代終末期～奈良時代の掘立柱建物が確認されたことから、後述する古墳の出現と関連して、古墳時代前期以来明確ではなかった、人為の痕跡が明らかとなる。

また、古墳時代後期～終末期には中小規模の円墳で構成される可能性が高い古墳・古墳群がいくつか確認されている。前方後円墳は存在せず、また大規模古墳も確認できないが、注目できる古墳も所在する。原野谷川の中・下流域の境目部分にあたる、東岸の丘陵上部で長福寺1号墳(39)である。長福寺1号墳は発掘調査が行われてはいないものの、以前に金銅装馬具、裝飾付大刀が出土しており、この地域を納めた小首長が6世紀後半に築いた古墳と考えられる。



第6図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の遺跡分布図

第4表 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の遺跡名

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	角庵Ⅰ遺跡	縄文・古墳～近世	17	中瀬遺跡	縄文～弥生	33	幡鎌峯山遺跡	弥生～古墳
2	角庵Ⅱ遺跡	縄文～近世	18	萩ノ段Ⅱ遺跡	縄文	34	幡鎌城	中世
3	西開戸遺跡	縄文	19	萩遺跡	旧石器～弥生	35	裏門遺跡	縄文～弥生
4	知見寺遺跡	縄文	20	萩ノ段遺跡	縄文・弥生・古墳	36	八海山遺跡	弥生
5	鳥飼遺跡	縄文	21	平Ⅰ遺跡	縄文～弥生	37	又太郎遺跡	弥生・奈良・平安
6	寺ノ段遺跡	縄文	22	平Ⅱ遺跡	縄文～古墳	38	安里山遺跡	縄文～古墳
7	楊原城	中世	23	平Ⅲ遺跡	縄文	39	長福寺1号墳	古墳
8	花ノ木沢遺跡	弥生	24	上ノ平遺跡	縄文～古墳	40	長福寺経塚	近世
9	大門遺跡	縄文	25	次鎌遺跡	古墳	41	長福寺西遺跡	縄文～平安
10	堂山遺跡	縄文～弥生	26	雨垂遺跡	弥生～奈良	42	久保山横穴群	古墳
11	小谷沢遺跡	縄文・古墳	27	上川原遺跡	古墳	43	久保遺跡	弥生
12	和田遺跡	縄文～弥生	28	明神山古墳群	古墳	44	前原城古墳	古墳
13	大縄遺跡	縄文～古墳	29	寺田館	中世	45	古城遺跡	弥生～古墳
14	上ノ段遺跡	縄文～古墳	30	原遺跡	縄文		長福寺門前古墳	古墳
15	高山城	中世	31	丁ノ坪遺跡	古墳			
16	松下遺跡	縄文～弥生	32	黒比志遺跡	弥生			

※No.は第6図に対応。

これ以外の古墳の様相は不明確であるが、おそらく古墳時代終末期（7世紀）を中心とする、横穴式石室を埋葬施設とする小円墳である可能性が高い。

4 奈良・平安時代

平安時代中期に編まれた「和妙類聚抄」によると、旧佐野郡域には「山口郷」・「小松郷」・「幡羅郷」など6郷が記され、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡（1・2）が所在する掛川市北西部はこのうち「幡羅郷」に比定されていることから、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡が所在する寺島地区も「幡羅郷」含まれていた可能性が高い。また、この地域では、奈良～平安時代の集落の様相は不明確であり、今回の角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査で古墳時代終末期（7世紀）の集落が確認されたことは、律令期直前の集落として注目すべき事例となる。

なお、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡では、平安時代中頃の灰陶陶器が出土しており、そのころにも人為が及んでいたことが明らかとなる。

5 中世

鎌倉時代以降、原野谷川上・中流域は原氏とその一族の孕石氏、原田荘との関係が深い地域である（大庭2005）。「原田荘」が最初に現れる史料は弘長3（1263）年の「原田荘細谷村検取帳案」であり、少なくとも13世紀には成立していたことがわかる。角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡（1・2）から出土した灰陶陶器からみると9世紀後半以降、徐々にこの地域に人為が及び、土着の勢力（原氏か）が成長した可能性がある。

第二東名建設に伴って調査された原野谷川上流域の宮ノ沢遺跡では鎌倉時代～江戸時代に及ぶ掘立柱建物で構成される居住域が確認され、平島Ⅰ～Ⅲ遺跡でも、室町時代から江戸時代に及ぶ掘立柱建物で確認されており、中世後期には掘立柱建物で構成される集落が営まれていた可能性が高い。

この他、集落や墓が確認されている遺跡は少ないが、枋原城（7）、高山城（15）、寺田館（29）、原砦、幡羅城（34）、殿谷城、孕石城などの原氏、孕石氏の城郭が確認されている。

原氏、孕石氏ともに本流は戦国時代で途切れており、集落の形成や変化に影響を与えていた可能性が高い。

6 近世

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡（1・2）近隣の、掛川市市居平には市居平経塚（第7章第3項参照）、原野谷川が和田岡丘陵と粟ヶ岳から続く丘陵の先端で最も平野部が狭くなり、原野谷川平地部に出る部分にあたる東側の丘陵先端部には長福寺1号墳の墳丘を利用した長福寺経塚（39、礫石経塚、松井・大谷2001）などが存在しており、原野谷川上・中流域は礫石経塚が複数確認される地域として注目できる。これらは曹洞宗系の寺院（僧）と庶民の共同による造営と想定できる（本書第6章第4節足立論文参照）。

寺島地区の江戸時代寺院としては曹洞宗の長源庵があり、地藏菩薩を本尊とする。周囲の幡羅地区には同じく曹洞宗の最福寺、原谷地区には曹洞宗長福寺、原里地区には曹洞宗旭増寺など、多くの曹洞宗大洞院（如仲天開開創、現森町所在）系の寺院が確認できる。

なお、掛川市北部にある大尾（悲）山にある寺院は真言宗系の「大悲山顕光寺」で、古くは「観音堂」と呼ばれていた。寺院自体は戦国期に焼失しているが、民間の観音信仰に大きな影響を与えていたと考えられている。また、掛川市内には観音信仰の遠江三十三観音霊場（札所）の17ヶ寺が所在しており、掛川市北部にも顕光寺と角庵Ⅱ遺跡近隣の長源庵がある。この地域は観音信仰が盛んであったことが窺える。角庵Ⅱ遺跡礫石経塚（角庵礫石経塚）にみられる「南無大悲」、「（観）世音願」などはこうした民間の観音信仰に伴い、残された礫石経の可能性が高い。

第4章 角庵 I 遺跡

第1節 遺跡の概要

1 立地と環境 (第1・6・9図, 巻頭図版1・2, 図版1・2)

角庵 I 遺跡は、掛川市寺島地区に位置し、原野谷川北岸の、原野谷川に向かって熊手状に張り出した丘陵上およびその緩斜面、標高約62~65mに立地する。原野谷川が形成した平地との比高差は約10mである。

遺跡の周囲には道路を挟んで西隣の丘陵上に角庵 II 遺跡 (本書第5章参照)、そのさらに西側の尾根上にも平遺跡 (静岡埋文研2008) が所在する。

2 調査歴

角庵 I 遺跡では調査は全く行われておらず、今回の第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査による確認調査によって新たに発見・周知された遺跡であり、今回が第1次調査となる。

なお、遺跡の立地状況からみると、調査区北側に遺構が広がっている可能性が高い。

3 確認調査の結果 (第7図)

角庵 I 遺跡 (第二東名No.102地点) の確認調査は、第二東名路線対象地の丘陵上平坦面や緩斜面に8本の試掘溝 (以下、Trとす) を設定し、遺構の確認を行った (第7図)。調査の結果、丘陵の谷部に設定したTr. AやTr. Fでは遺構遺物は確認できず、またTr. D・E部分は茶畑などの耕作により旧地形が改変



第7図 角庵 I・II 遺跡確認調査試掘溝配置図

されていることが判明した。尾根上に設定したTr. B1・B2・C1・C2では遺構・遺物ともに確認された。これにより、遺構遺物が確認された試掘溝部分を調査対象地として本調査を実施することとした。

4 主な遺構と遺物 (第9図, 第5表)

角庵1遺跡は、縄文時代から近世に亘る複合遺跡であり、第5表のような古墳時代終末期の竪穴建物を中心に、縄文時代、古墳時代、中世～近世の遺構・遺物が出土した。

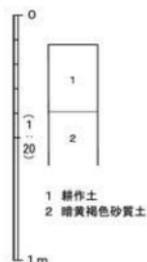
第5表 角庵1遺跡の主な遺構と遺物

時代	遺構	遺物	備考	報告
縄文	土坑1・性格不明遺構1	縄文土器・石器(石匙・石鏃・スクレイパー・磨製石斧・石錘・磨石)		本章第2節
古墳終末期	竪穴建物10	須恵器・土師器・鉄製品(刀子・用途不明品)・石製品(紡錘車未製品・石錘)		本章第3節
古代～近世	柵列5・土坑11・溝状遺構6・性格不明遺構3	須恵器・灰釉陶器・初山・かわらけ・硯・鉄製品(釘・用途不明品)	時期不明遺構も含む	本章第4節

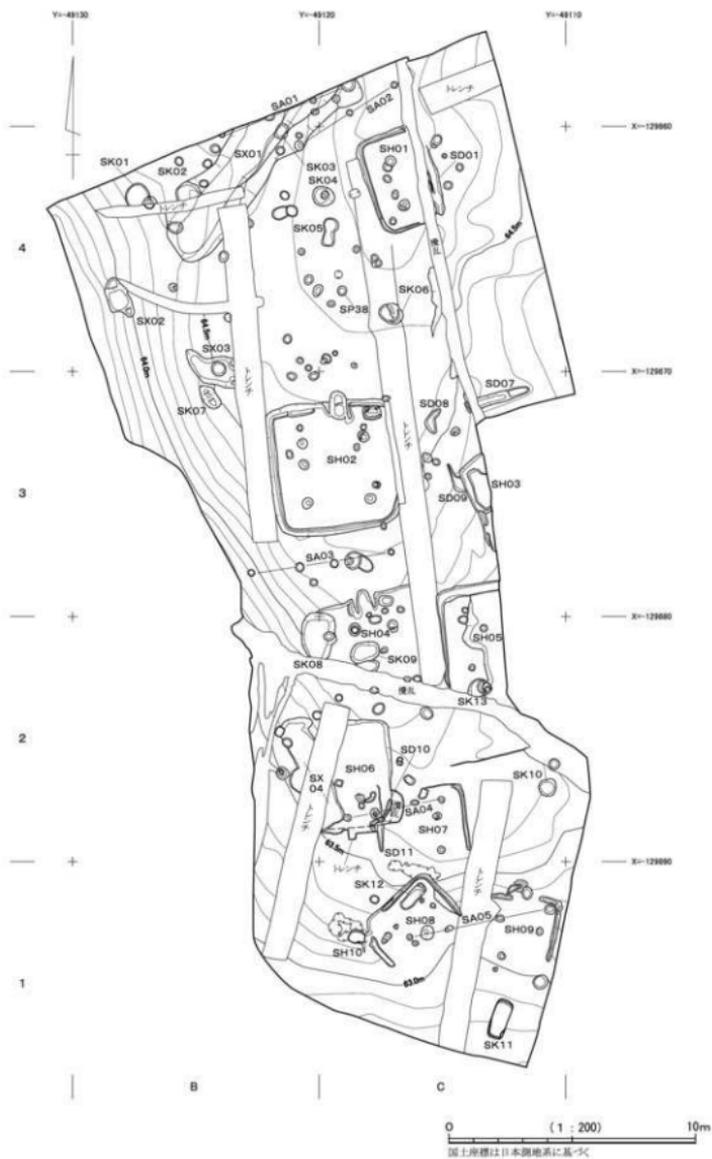
5 基本土層 (第8図)

角庵1遺跡の基本土層を第8図に示した。

角庵1遺跡の基本土層は2層で構成される。第1層は耕作土であり、第2層は暗黄褐色砂質土(地山)であり、第2層上面が遺構検出面である。



第8図 角庵1遺跡基本土層



第9図 角庵I遺跡 全体図

第2節 縄文時代の調査成果

1 縄文時代の概要 (第5表)

縄文時代の遺構は、調査区北部で確認した性格不明遺構(SX01)のみである。遺物はSX01周辺を中心に縄文時代早期～中期の縄文土器、石器(石鏃、スクレイパー、石匙、石錘、磨石、磨敵石)が出土した。

2 遺構

縄文時代の明確な遺構は確認できないが、調査区北部で、自然流路の可能性のある用途不明遺構(SX01)が確認され、遺物が出土している。また、調査区北部で縄文土器片が出土した土坑1基(SK06)がある。

(1) SX01 (第9・11・13図, 第10・11表, 図版13~15)

SX01は調査区北側で確認された、最大幅3.0m、長さ9.5m以上、深さ0.13mの自然流路の可能性のある遺構で、主にこの周辺から縄文土器、石器が出土した。出土した縄文土器は小片であり、流れ込みの可能性が高い。

(2) SK06 (第9~11・13図, 第8・11表, 図版12・14)

SK06は調査区北側C4グリッドに位置し、不整形な円形の土坑で、底面が2段になっていることから、礫と土器を含む土坑とそれを含まない2つの土坑が切り合っている可能性がある。大きさは、南北約0.8m、東西約1.0m、深さ0.25mである。

SK06は東側の土層はレンズ状堆積で、2層に区分できるが、上層(1層)に5~25cmの大きさの角礫が含まれている。この石材の下部に焼土と炭化物が多く含まれる土砂が確認できることから、何らかの火を使った行為が行われた可能性が高い。時期については、縄文土器が出土しているが、縄文時代に帰属するか不明確である。

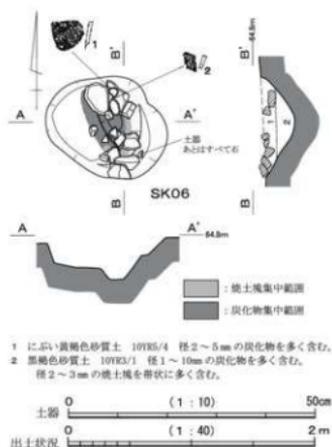
なお、出土した縄文土器は早期の押型文2点(1・2)である。遺物の詳細については後述する。

(3) 縄文土器・石器の出土傾向(第11・12図)

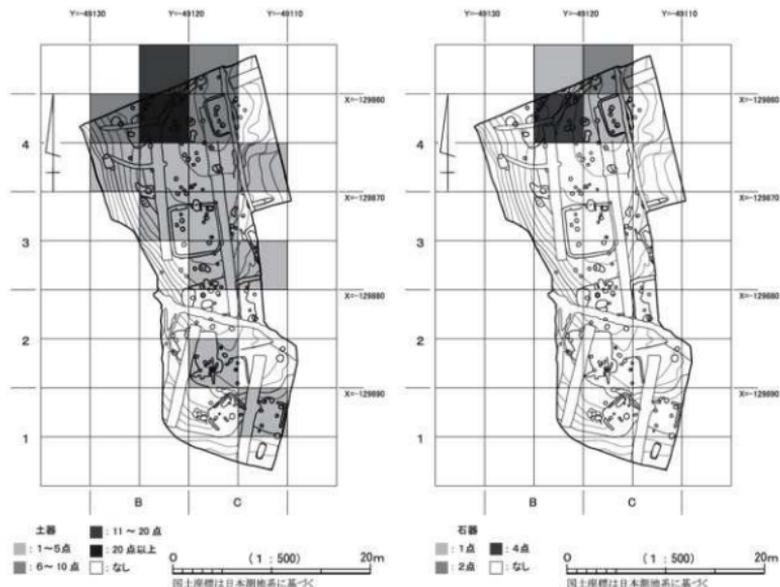
第11図に主な縄文土器、石器の出土位置を示し、第12図にグリッドごとの出土破片数を示した。

縄文土器片および石器はSX01周辺で多く確認され、特にB4グリッド北東区画～B3グリッド南東区画にかけて集中している。ただし、大型の破片はなく、全形を復原できるような土器は出土していない。

これ以外は小片が数点出土するのみで、南側に行くにしたがって減少する傾向にある。SX01周辺の遺物量が多く、SX01の遺構外の斜面の上部から出土していることから考えると遺構外から流れ込んだ遺物の可能性が高い。北側あるいは北東側調査区外に堅穴建物等の遺構が存在している可能性が高い。



第10図 角堀1遺跡 SK06実測図



第12図 角庵Ⅰ遺跡 縄文土器・石器のグリッド別出土数

3 出土遺物

角庵Ⅰ遺跡出土の縄文時代に帰属する遺物は土器と石器である。

(1) 縄文土器 (第13図, 第11表, 図版14)

縄文土器は調査区全域から出土したが、小片が多く全体的な形状が判明するものはない。ここでは部位が特定できる破片や文様のある破片を抽出して図示した。以下に、時期別、型式別(註1, 註は53頁に記載)に報告する。Ⅰ群 縄文時代早期の押型文土器、Ⅱ群 縄文時代早期の土器群、Ⅲ群 縄文時代前期末～中期初頭の土器群、Ⅳ群 縄文時代中期後半～末葉の土器群、Ⅴ群 Ⅰ～Ⅳ群に該当しないもの、として区分して報告する。

ア Ⅰ群 縄文時代早期の押型文土器 (1～9)

1～3は格子目の押型文土器である。6・7は小指の爪程の楕円文施したものである。8は口縁部に直交する縦方向の山形押型文土器である。9は口縁部平行する横方向の山形押型文土器で、口縁部の破片である。口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は平縁で丸く収められる。口縁端部はナデ調整が行われており、その直下から山形押型文が施されている。

イ Ⅱ群 縄文時代早期の土器群 (10～18)

早期末の上ノ山式土器、入海式土器が出土した。

Ⅱ-1群 早期末の上ノ山式土器 (10～15・17・18) 10はほぼ直立する口縁部で口縁部直下に突帯文



第13図 角庵1遺跡出土縄文土器実測図

を貼り付ける口縁端部を口縁部に刻みをいれ、細かい波状を造り出している。11～14もほぼ直立する口縁部で、口縁端部下に12・13は糸痕調整が行われている。15はほぼ直立する口縁部片で、口縁端部は外形する面を造り出し、口縁端部の断面は外面がやや突出する三角形である。口縁部には棒状工具による刻みを施すが、口唇部と口唇部直下の突出部分を交互に刻み目を入れている。

17・18は早期の尖底に近い不安定な小型平底片で、上ノ山式土器か後述する入海式土器の底部の可能性が高い。

II-2群 早期末の入海式土器 (16) 上ノ山式土器の系譜に連なる土器は1点 (16) 出土している。口縁部はほぼ直立し、口縁端部やや下でやや外反する、口縁端部下に突帯を貼り付けるが、上述した上ノ山式と比較すると細く低い。突帯には刻み目を施す。

ウ III群 縄文時代前期末～中期前半の土器群（19～29）

前期末の大蔵山式土器、中期初頭の鷹島式土器、五領ヶ台式土器併行期の土器、山田平式土器の可能性のある土器が出土している。

III-1群 前期末の大蔵山式土器（19～23）19は薄手のキャリパー形深鉢の胴部片である。胴部には縄文地文を施し、その上に波形と楕円文を組み合わせた突帯を貼り付け、それに大蔵山式に特徴的な臼状爪形を施すものである（泉1996）。21・22は19と同様の部位の破片であり、波形と楕円文を組み合わせた突帯部分の破片である。突帯には臼状爪形を施す。20・23は頸部の屈曲からキャリパー形の口縁部へ向かって外上方へ向かって立ち上がる部分の破片で、大蔵山式土器19～22は角庵Ⅰ遺跡で出土した他の縄文土器とやや胎土や色調の特徴が異なっているため、遠江以外から搬入された土器の可能性が高い（註2）。また、23は十三善台式土器の可能性も残る。

III-2群 中期初頭の鷹島式土器（あるいは船元Ⅰ式土器、24～27）24・25は器面に原体の太い縄文地文を施すもので鷹島式土器（あるいは船元Ⅰ式土器）の可能性が高い。26は縄文地文に横方向の沈線文を2条施す。27は突起であり、突起の下位には羽状文（綾杉文か）を施している。

III-3群 中期初頭の五領ヶ台式土器併行期の土器（29）29は深鉢の胴部片であり、集合沈線（条線）が施され、それを切るように半竹管状工具による連続弧文（波文）と想定する文様が描かれている。

III-4群 中期初頭の山田平式土器の可能性のあるもの（28）28は、縦方向の集合沈線（条線）を2条に横方向の沈線で区画するものである。山田平式土器の可能性が高い。

エ IV群 縄文時代中期後半～末の土器群（30・31）

縄文時代中期後半～末の加曾利E式土器併行期あるいは曾利式土器の可能性が高い土器である。

31は中期後半の加曾利E3式土器併行期の東海地方の土器の可能性のある深鉢である。縄文地文の上に半裁竹管状工具の腹を用いて凹線文を描く。

30は中期末の曾利Ⅰ～Ⅱ式土器の可能性のある破片で、口縁部付近の破片の可能性がある。外面には条線による器面調整が行われている。

オ V群 その他の土器（32・33）

I～IV群に区分できない縄文土器2点（32・33）について報告する。

32は縄文時代中期の土器片の可能性が高い。器面には縄文地文を施す。33は中期の深鉢の底部で平底である。

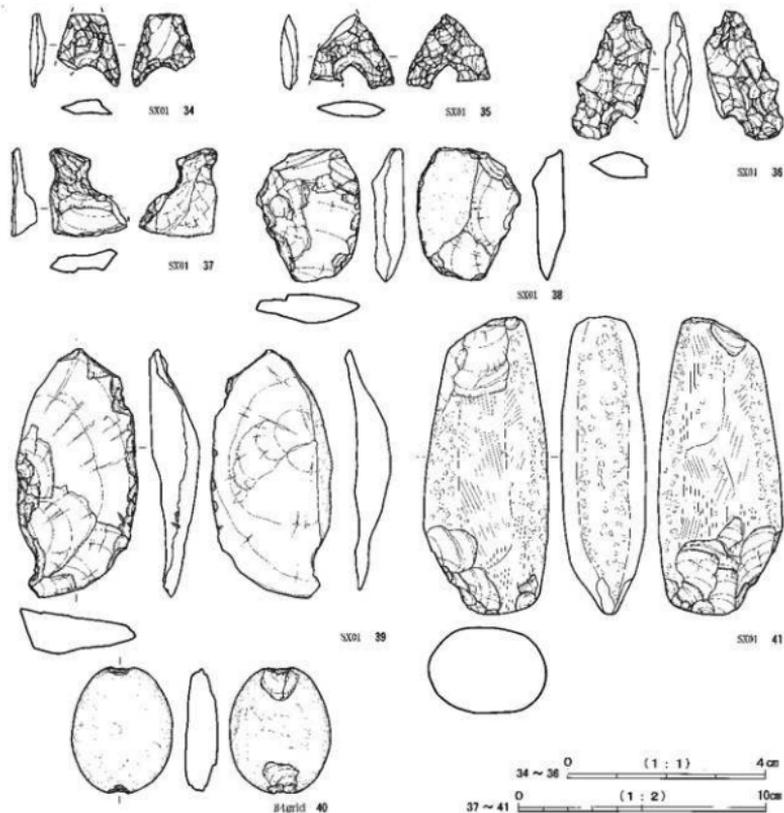
（2）石器（第14～16図、第13表、図版15）

石器・石製品については、第14～16図に帰属する時期を関係なく一括して掲載した。これらは縄文時代に帰属するものが多いが、SH02から出土した紡錘車と石錘など一部は縄文時代の遺物とは考え難い。報告にあたっては、縄文時代に帰属する遺物はここで遺構ごとに報告するが、縄文時代以降に帰属する可能性が高い遺物に関しては、それぞれが帰属する時期の報告で記述する。（大谷）

ア SX01出土遺物

石匙は1点（37）図示した。小型の横型石匙である。裏面を中心に左部分が剥落して失われているため、全体の形状は不明である。つまみ部は表裏両面からの加工が確認できる。石材はシルト岩である。

石鏝は3点（34～36）図示した。全て脚部を有している。36は脚部が、34・35は脚部と先端部がそれぞれ折損している。34は脚部の先端が尖頭状になっている。また、裏面に未加工な面を残している。35



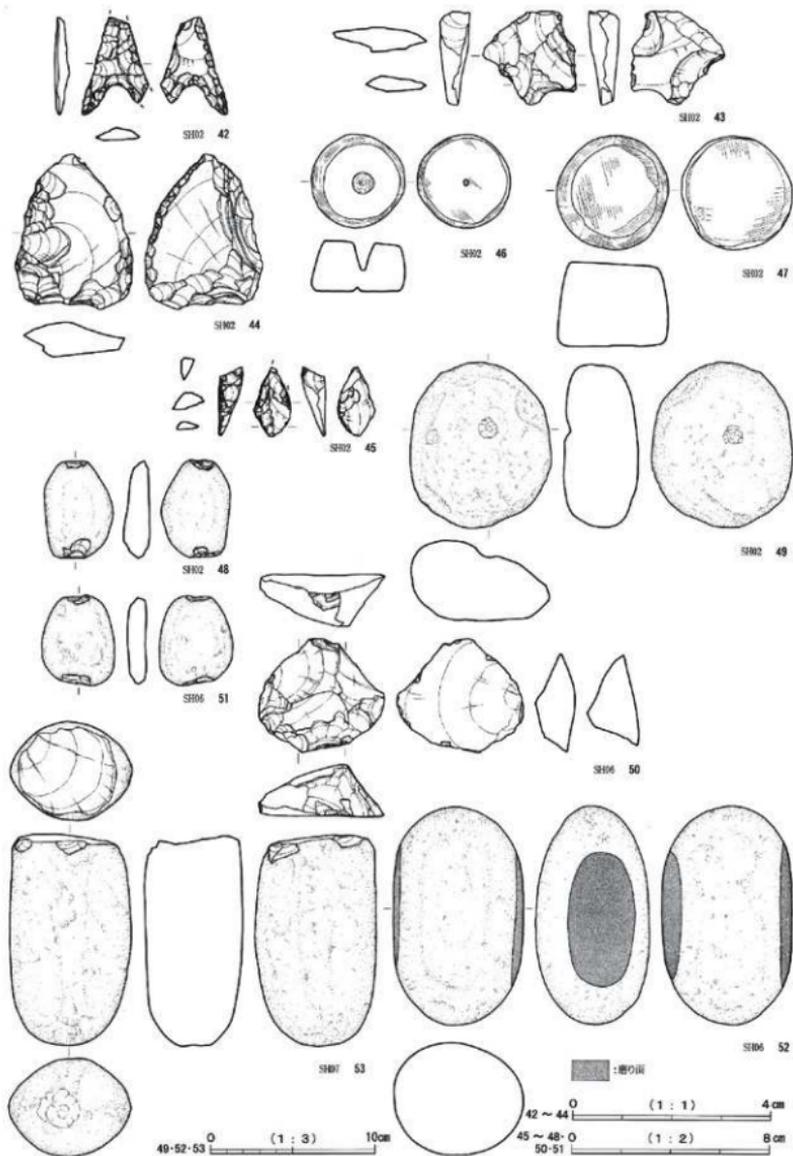
第14図 角庵I遺跡出土石器・石製品実測図①

は脚部が長く、間がU字状を呈している。36は脚部が短く、先端部が丸みを帯びている。石材は35・36がチャート（灰色）、34が珪質頁岩（灰色）である。

スクレイパーは2点（38・39）図示した。38は縦長剥片を素材としたサイド・スクレイパーである。加工は素材剥片の背面側から施されている。また、加工が施された右側縁の背面にも微細な剥離痕が確認できる。左半部は折損している。石材は頁岩である。

39は横長剥片を横位に用いたサイド・スクレイパーである。素材剥片の末端部に腹面側から連続した加工を施している。石材は珪質頁岩（灰色）である。

磨製石斧は1点（41）図示した。使用時による衝撃のためか、刃部は表裏両面とも大半が剥落している。全面を磨いており、表裏両面の平坦な面には光沢が確認できる。また、僅かではあるが、縦方向を中心に線状痕が確認できる。石材は蛇紋岩である。



第15図 角庵I遺跡出土石器・石製品実測図②

イ SH02出土遺物

石鏃2点、石鏃未製品1点、石匙1点、石錘1点、磨敵石1点、紡錘車（未製品）2点が出土した。上述したようにこのうち紡錘車2点は古墳時代の堅穴建物に直接伴うものであるため、そこで報告する。一方、石錘（48）については縄文時代の可能性があるため、ここで報告する。（大谷）

石鏃（42）は脚部を有した石鏃である。脚部は長く、間はやや幅広いU字状を呈する。加工は表面を中心に施され、裏面は縁辺のみとなっている。先端部と脚部の一部が折損している。石材はシルト岩である。石鏃（44）は脚を持たない平基の石鏃である。加工は縁辺にのみ施されており、内側には及んでいない。未加工部分が多く、素材剥片の形状を残しているが、平面形状が整っているため完成品と判断した。他の資料と比較して大型品である。石材はシルト岩である。

石鏃未製品（43）は小型の幅広い剥片を素材とした石鏃未製品である。左右から両極剥離を施して整形しているが、素材剥片の打面部が残存し未加工部分も多い。石材は珪質頁岩（暗灰色）である。

石匙（45）は小型の縦型石匙である。刃部が薄いものに対して、つまみ部は厚みを持っている。正面左側縁には加工が刃部まで続いており、裏面左側縁には微細な剥離痕が確認できる。つまみ部の一部を折損している。石材は珪質頁岩（灰色）である。

石錘（48）は小型の石錘である。平坦な楕円礫の両端部に数回の剥離を加えている。剥離された端部の縁辺には潰れが確認できる。また平坦な礫面は、わずかではあるが磨り面のように摩耗している。石材は細粒砂岩である。

磨敵石（49）はやや扁平な円礫を素材としている。周縁には敲打痕が顕著に確認できる。扁平な面は表裏両面とも若干の摩耗が確認できる。また、扁平な面の中央には凹みが表裏両面とも確認出来る。石材は中粒砂岩である。

ウ SH06出土遺物

スクレイパー1点、石錘1点、磨石1点が出土した。

スクレイパー（50）は厚みを有した剥片を素材としたエンド・スクレイパーである。幅広い剥片を横位に用いて、上部と下部に高さのある刃部を作出している。全体が赤黒く変色しており、熱を受けた可能性も考えられる。石材はシルト岩である。

石錘（51）は小型の石錘である。平坦な楕円礫の両端部に数回の剥離を加えている。剥離された端部の縁辺には潰れが確認できる。また平坦な礫面は、磨面のように摩耗している。石材は斑レイ岩である。

磨石（52）は棒状の円礫を素材とした磨石である。礫の左右両面に平滑な磨り面を有する。石材は安山岩である。

エ SH07出土遺物

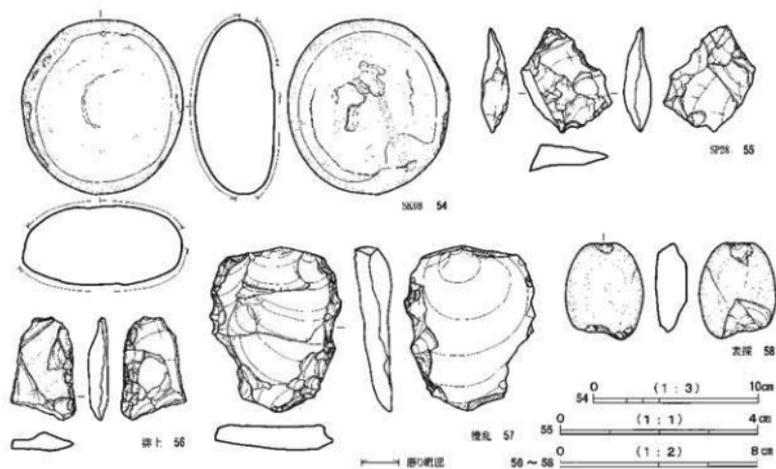
敲石（53）は、棒状の円礫を素材とした敲石である。礫の下端部に明確な敲打痕が確認できる。また、上端部は礫の軸に対して垂直に剥離をおこなったのち、そこを利用して敲打をおこなっている。そのため縁辺は潰れ、衝撃痕も確認できる。石材は細粒砂岩である。

オ SK08出土遺物

原礫（54）はシルト岩の原礫である。おそらくは石器の素材とするために持ち込まれたと考えられる。

カ SP28出土遺物

石鏃未製品が1点出土した。石鏃未製品（55）は小型の横長剥片を素材とした石鏃未製品である。上



第16図 角鹿I遺跡出土石器・石製品実測図③

下方方向に両極剥離を施して整形しているが、素材剥片の打面部が残存しており未加工部分も多い。石材は硬質頁岩である。

キ 遺構外出土遺物

石鏃未製品(56)は加工と折断によって形状を整えた石鏃未製品である。打点部に近い縁辺は、特に入念に加工が施されている。折断部分が未加工で残されているため、加工の途中で意図しない折断が起こり、破棄された失敗品である可能性も考えられる。遺構出土の資料と比較して大型品である。石材はシルト岩である。スクレイパー(57)は縦長剥片の両側縁に加工を施したサイド・スクレイパーである。加工は腹面側から両側縁、下面に全周するように施されている。右側縁のみは背面側からの剥離も確認できる。石材は珉質頁岩(暗灰色)であるが、粒子の細かい石材でありシルト岩に近い。石鏃は2点(40・58)図示した。2点とも小型の石鏃である。共に平坦な楕円礫の両端部に数回の剥離を加えている。剥離された端部の縁辺には潰れが確認できる。また平坦な礫面は、わずかではあるが磨面のように摩耗している。石材は40が細粒砂岩、58が中粒砂岩である。

ク 角鹿I遺跡出土石器のまとめ

本遺跡から出土した石器、石製品は僅少であり限定されていたため、時期が特定できるような資料は確認できなかった。各出土遺物に大幅な時期差がある可能性も考えられる。石鏃(48・51・58)は小型であること、平坦面が摩耗していることから、漁、猟ではなく、紡錘車に伴う資料の可能性も考えられる。

(柴田)

第3節 古墳時代の調査成果

1 概要 (第5表)

古墳時代の遺物が出土し、古墳時代と特定できる遺構についてここで報告する。

古墳時代終末期(飛鳥時代, 7世紀)の竪穴建物10軒が出土した。竪穴建物は、調査区南側で重複関係が確認できることから、丘陵先端近くに建物を築く意思が働いていたものと想定できる。

出土した遺物は、須恵器、土師器、石製品(紡錘車)、鉄製品(刀子など)が出土している。

以下に、遺構ごとに報告する。

2 竪穴建物

(1) 1号竪穴建物 (SH01, 第9・17・23図, 第6・12表, 図版3, 写真18・19)

位置 SH01は調査区北東側のC4・5グリッドに位置する。他の竪穴建物との重複関係はない。

特徴 隅丸方形の竪穴建物であり、東側半分が破壊されている。主柱穴(P1~P4)が確認できるため規模はおおよそ想定できる。建物の主軸はほぼ北を向く(N-18°-W)。床面には貼床(第17図5層)が構築されている。壁際に沿って壁溝が巡らされ、幅は0.15~0.25mである。

建物の規模は、南北×東西(以下、同じ)で4.05×3.55m以上(4.6m程度か)、主柱穴はP1-P2間(芯芯間)が2.15m、P4-P3間が2.0m、P2-P3間が1.9m、P1-P4間が1.85mであり、一定していないが、1.9~2.0mを基準としていた可能性が高い。

炉・竈は残存範囲内では確認できない。当遺跡の時期が判明する竪穴建物はすべて古墳時代終末期であることから、SH01はこの時期の竈付きの建物であった可能性が高い。竈は北東隅から東側に配置された可能性があるが、他の建物からすると、北側の可能性が高く、攪乱で破壊されていた箇所が存在していた可能性が高い。

遺物の出土状況 覆土から鉄製品(87)が出土した。

出土遺物 SH01からは、鉄製品1点(87)が出土した(写真18・19)。

87は用途不明の板状小鉄製品で、どの側面も現状を保持していない。厚さ5mmである。

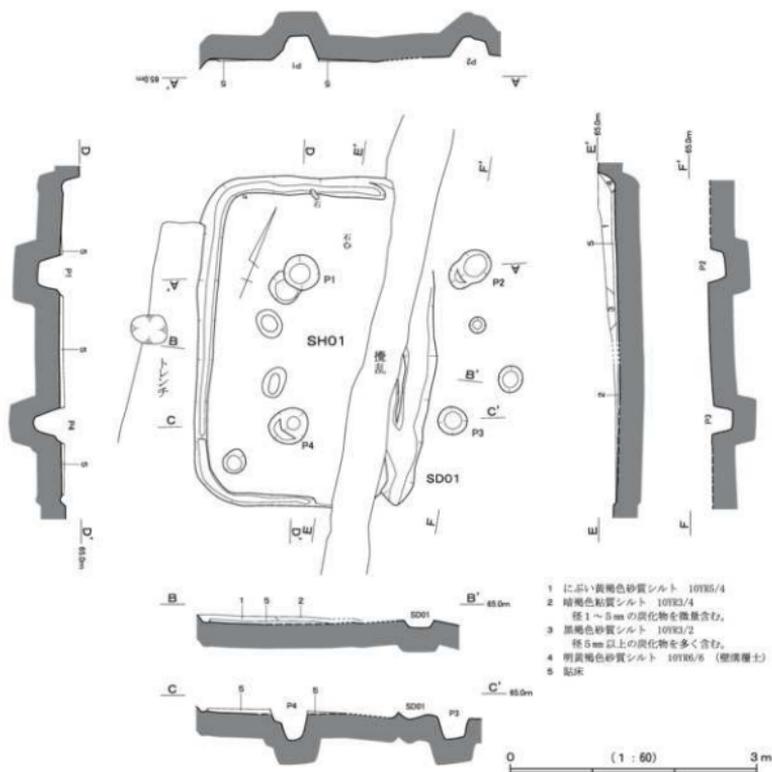
時期 主柱穴(P1・P2)は柱穴が重複しており、建物が建て替えられた可能性がある。時期を明確にすることができる遺物がないため不明確であるが、炉が確認できないこと、弥生土器や古式土師器は遺跡内から出土していないこと、後述する当遺跡の他の竪穴建物の時期が古墳時代終末期であることを考慮すると、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い。

(2) 2号竪穴建物 (SH02, 第9・15・18~20図, 第6・11・13表, 図版4~6・15・16)

位置 SH02は調査区ほぼ中央のB3・C3グリッドに位置する。SH01の南西約7m、SH04の北側約2.5mのところと位置し、他の竪穴建物との重複関係はない。

特徴 SH02は方形に近い隅丸方形の、竈のある竪穴建物である。竈は建物北辺のほぼ中央に造り付けられている。建物の主軸はほぼ北を向く(N-7°-W)。壁溝が巡らされており、北東隅角部に貯蔵穴と想定する土坑が確認できる。主柱穴は4本(P1~P4)が確認できる。床面には貼床が行われている。貼床内部には縄文時代の土器や石器が含まれていることから遺跡内の土砂を利用して貼床を構築した可能性が高い。

建物の規模は、約5.5m(竈除く)×5.0m以上(5.3m程度)である。主柱穴間の距離は4辺ともに2.5mであり、一定している。柱穴の深さは堀方床面から25~35cmでやや高低差があるが、大きさは直径



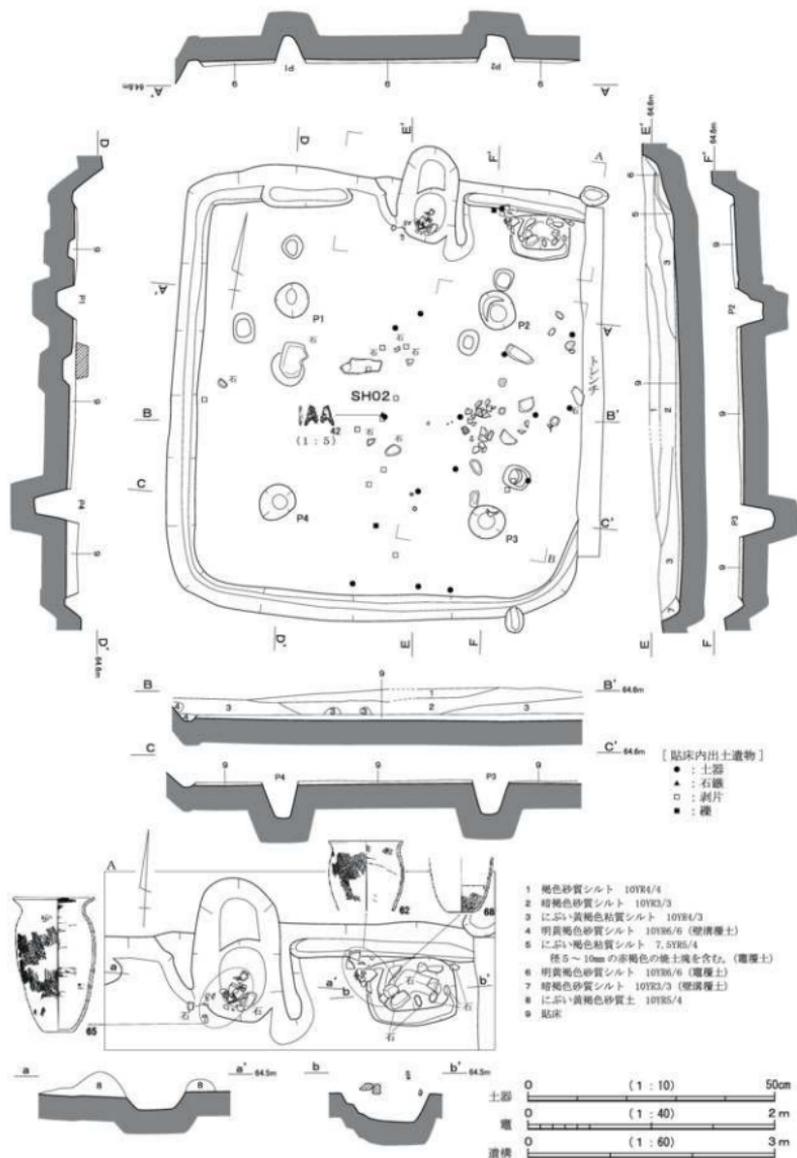
第17図 角鹿I遺跡 SH01実測図

約0.45~0.5mとほぼ同規模である。

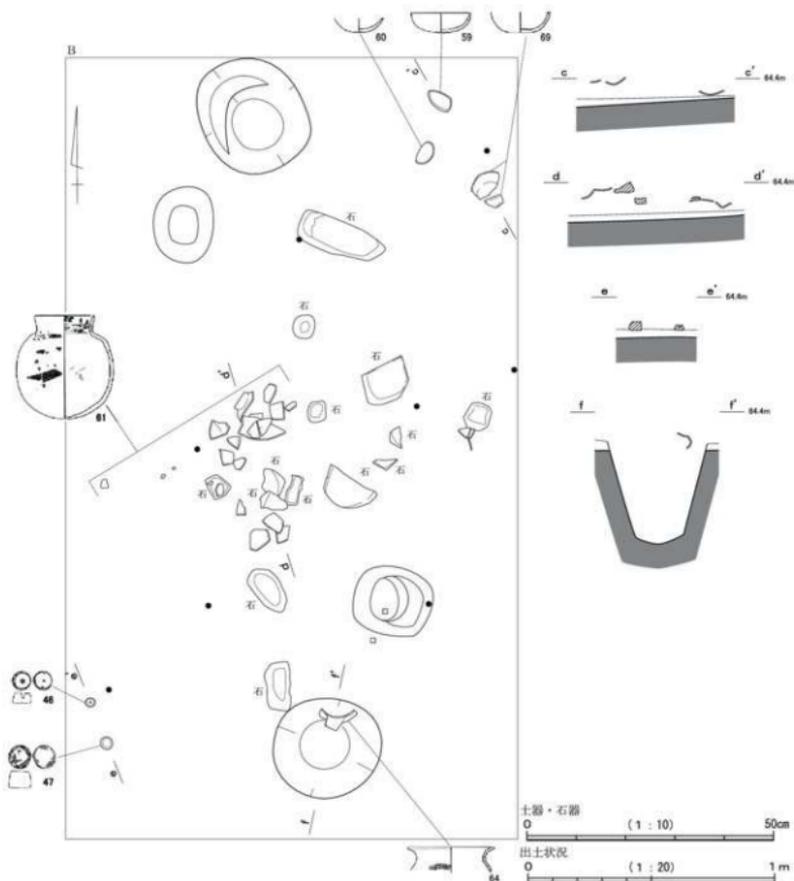
竈は屋外に煙突を伸ばすもので、建物北辺から約0.25mまで残存する。竈の袖は堅穴建物の掘方を掘削した後で別の土砂（第18図8層）で構築したものである。竈には石材や土器などの構築材は確認できない。焚口は床面よりも若干掘り窪められている。竈の規模は袖～煙突先端までで長さ約1.35m、幅1.15m、焚口幅約0.8mである。

貯蔵穴は、建物の北東隅角に造られている。東西0.7m、南北0.55m、深さ0.25mである。上部に15cm以下の川原石が数個確認できる。

遺物の出土状況 SH02からは多くの遺物が出土し、原位置を保持するものが多い。まず、竈内に落ち込むように土師器甕（65）が潰れたような状態で出土し、その近くから支脚の可能性のある石材が出土した。65は煮炊きに使用されたことがわかる。また、竈の東側、貯蔵穴との間で土師器甕（62・68）が出土した。貯蔵用に使われた可能性がある。さらに、建物の東側（第18図）でP2近くから土師器杯2点（59・60）、甕あるいは杯の可能性のある1点（69）が出土した。さらにその南から土師器壺1点（61）や石製紡錘車未製品2点（46・47）が床面直上から出土した。また、P3覆土上部から土師器甕（64）が



第18図 角塚I遺跡 SH02実測図および遺物出土状況図



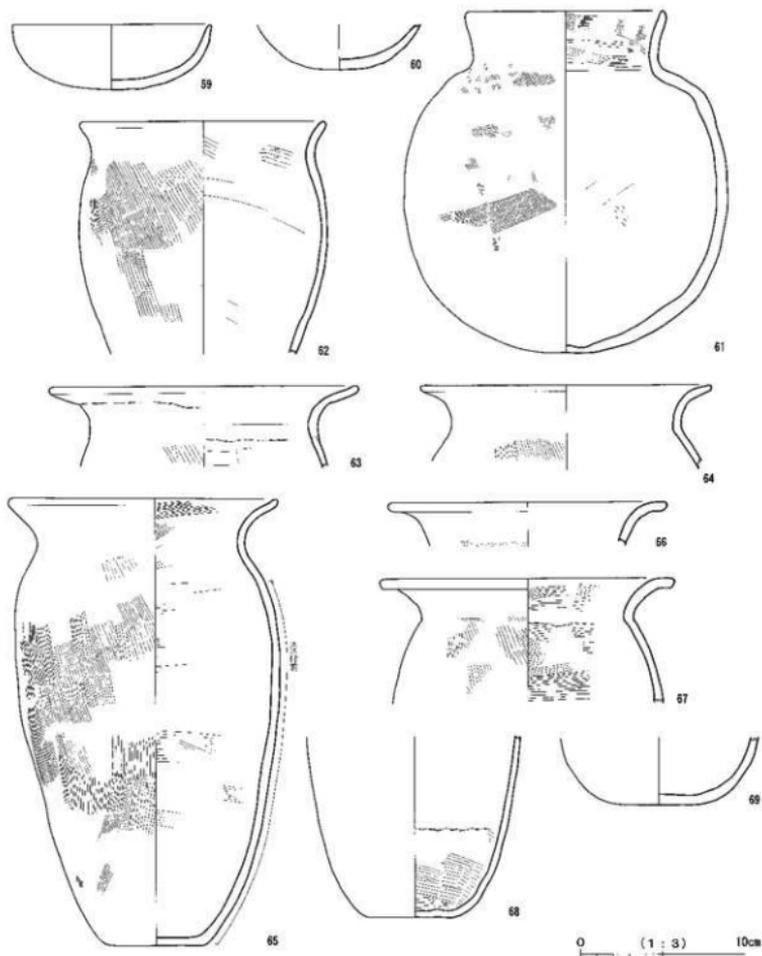
第19図 角庵1遺跡 SH02遺物出土状況図

出土した。

出土遺物 土師器、紡錘車、石錘（縄文時代の可能性がある）が出土している（第15・20図）。

土師器は、杯、壺、甕がある。

土師器杯（59）は、半球形（碗形）で、口縁端部は丸く仕上げられる。表面は磨滅が著しい。口径約12.0cmである。60も59と同様の特徴をもつと想定する。土師器壺（61）はやや外反する単純口縁で、口縁端部は丸く取られる。胴部は球胴で、中央部に最大径をもつ。胴部外面、口縁部内外面ともにハケ目調整が行われ、胴部内面にもハケ目調整が行われた可能性がある。62～68は遠江型くの字口縁長胴甕であり、口縁部の形態から2種類に区分できる。62は頸部の屈曲が弱く、口縁部は斜上外方に八字形に



第20図 角庵1遺跡 SH02出土土器実測図

短く開くものである。胴部最大径は胴部上半（肩部）にあり、口縁部とほぼ同規模である。内外面ともにハケ目調整を行っている。63～67は頸部の屈曲が強いもので、63～65の口縁部は頸部から外上方に延び、口縁端部は内側につまみだす。完形に復原できる65は平底長胴甕で胴上部（肩部）に最大径がある。65の胴部外面には、竈内から出土したことから、煤が付着している。

66・67は頸部から急激に外上方へ向かって伸びた後、口縁端部を水平に引き出す形状である。いずれも外面にはハケ目調整が施される。

69は甕底部あるいは杯の可能性があるので、内外面ともに磨滅のため調整は確認できない。平底に

近い底部から直立しており、土師器(59)とは大きな違いがある。

紡錘車(第15図46・47)は、砂石製紡錘車の未製品である。両者とも円錐の先端部を切断した形の截頭円錐形である。46には上下の平坦面から穿孔が行われているが、貫通していない。47については完全な未製品なのか、穿孔は一切行われていない。両者ともに上下、側面ともに丁寧な研磨が行われている。46は上面径約3.0cm、下面径3.7~3.8cm、高さ約2.1cmである。上面の穿孔は直径0.9cmで深さ1.2cmまで行われ、下面の穿孔は直径2~3mmで、深さ2mmまで行われている。47は上面径3.5~3.7cm、下面径4.4~4.6cm、高さ3.4cmである。

石錘1点については本章第2節3(2)で記述している。紡錘車が未製品であることから、製作が完了した段階で錘となる予定だったのかどうか不明確である。

なお、SH02からは第35図117に示した弥生土器と想定する土器片が出土している。壺の受口状口縁の可能性があり、端部は丸く仕上げられている。口縁部には櫛描波状文が確認できる。これが弥生土器であるとすれば、角庵1遺跡は弥生時代の遺構が存在する可能性がある。

時期 土師器甕、壺、杯から詳細な時期判断をすることは難しいが、古墳時代終末期前半に位置づけることができる可能性が高い。

(3) 3号竪穴建物(SH03, 第9・21図, 第6表, 図版7)

位置 SH03は調査区中央東側のC3グリッドに位置する。SD09などと重複関係にある。

特徴 SH03は調査区中央部東端で竪穴建物の北西隅角部分が確認されただけで、かつ攪乱も著しいため、詳細は不明である。大部分が調査区外に続いていた可能性が高いが、SH03の東側部分は耕作により削平され既に失われている。残存する北西隅角からみると、建物の平面形は方形で、壁際に壁溝を巡らしていた可能性が高い。竈・炉ともに確認できず、支柱穴も確認できない。貼床が確認できる。建物の軸は北北西(N-26°-W)に向いていた可能性が高い(西側外壁で計測)。建物の規模は4.3m以上×1.3m以上である。

遺物の出土状況 原位置を保持して出土した遺物はない。

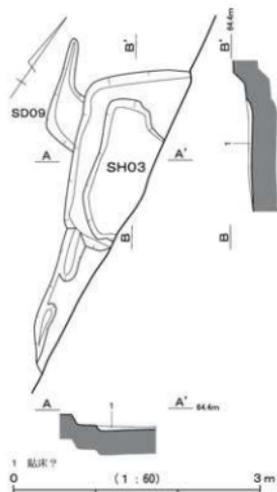
出土遺物 図示できる遺物は出土していない。

時期 他の竪穴建物が古墳時代終末期に位置づけられることから、SH03も古墳時代終末期に帰属する可能性が高い。

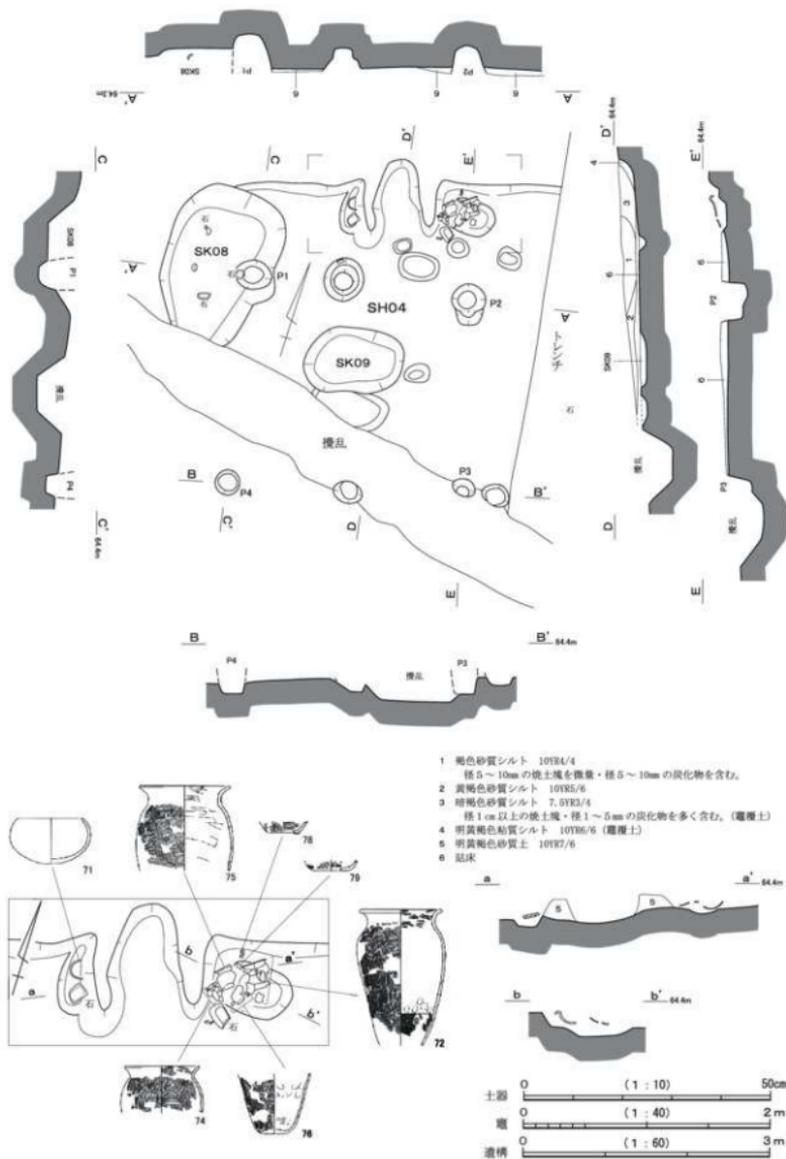
(4) 4号竪穴建物(SH04, 第9・22・23図, 第6・11表, 図版4・6・17)

位置 SH04は調査区中央や南側、B2・3、C2・3グリッドに位置する。SH02から南に約2.5mの位置にあり、周囲にはSH05・06が位置しており、重複関係にあった可能性が高いが、切り合いを確認できず、先後関係は不明である。

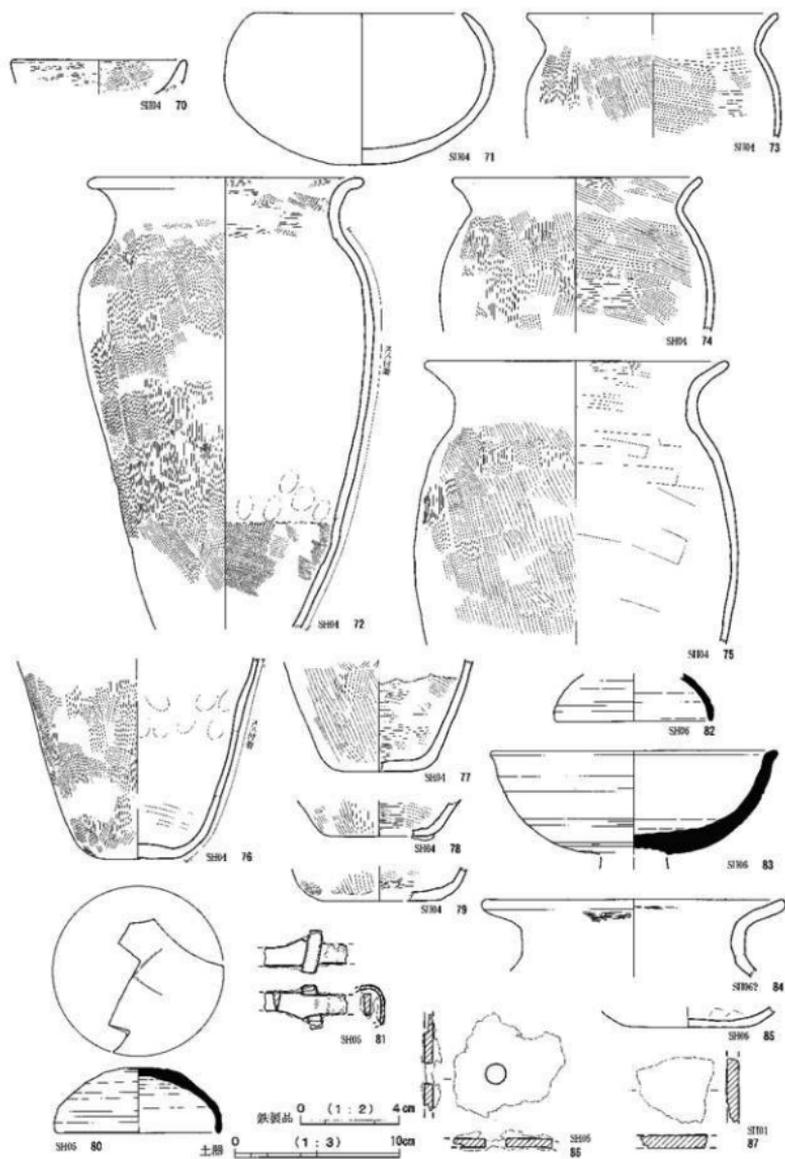
特徴 SH04は竈をもつ竪穴建物であり、北東から南東側、北西隅角が削平や攪乱により失われている。支柱穴(P1-P4)が確認できる。貼床が構築されている。建物の軸はほぼ北(N-18°-W)を向き、SH02と同方向を向いている。建物の規模は、南北4.0m以上×東西4.5m以上である。支柱穴間はP1-P2間で2.7m、P4-P3間では2.9m、P2-P3間約2.4m、P1-P4間は約2.6mで、一定していない。



第21図 角庵1遺跡 SH03実測図



第22図 角庵1遺跡 SH04実測図および遺物出土状況図



第23図 角庵I遺跡 SH01・04~06出土遺物実測図

竈は建物の北辺中央に造り付けられており、煙突は屋外へと伸びている。竈の袖は堅穴建物の掘方を掘削した後で、別の土砂を用いて構築されている。袖には礫や土器などの構築材は用いられていない。全長約1.1m、幅約1.1mであり、焚口と煙道の高低差はなく、煙道は直立するような状況を示していた可能性がある。

遺物の出土状況 堅穴建物の残存状況はよくないが、遺物は原位置を保持して出土したものが多く、竈内からは遺物は出土していないが、竈東側袖の東側から土師器甕(72・74~76・78・79)が潰れたような状況で出土した。西側袖の西側から土師器鉢(71)が出土した。

出土遺物 土師器鉢、甕が出土した。

70は壺の口縁部と推測する。口縁部は外上方に向かって開き、口縁端部は細く仕上げられている。

土師器鉢(71)は、鉄鉢形鉢でやや扁平な半球形で、口縁部は胴部中央から急激に内湾し、端部は丸く収められている。残念ながら磨滅が著しくミガキ調整が行われていたのかは、確認できない。

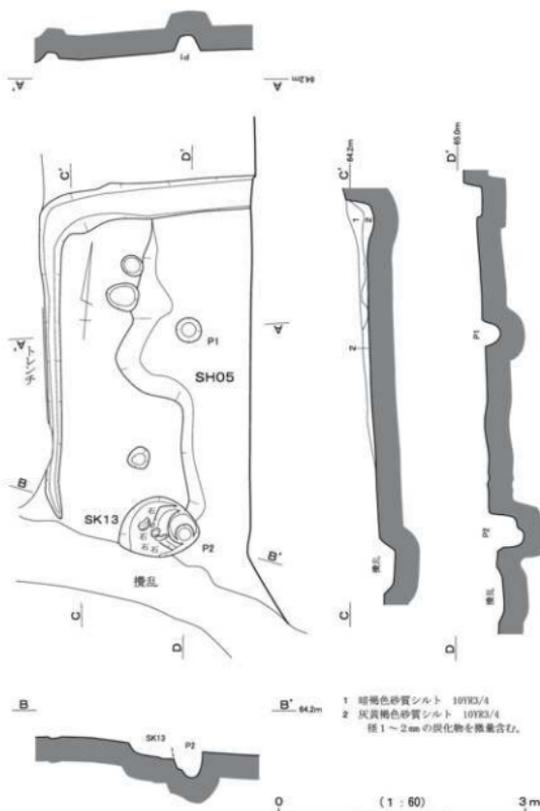
土師器甕は遠江型く字形口縁甕である。頸部からく字形に折れる単純口縁の甕(73・74)、頸部がコ字形に近いもの(72・75)、の2種類がある。4個体ともに胴部外面にハケメ調整、胴部内面は、72~74はハケメ調整、75は板ケズリ調整を行っている。73・74は球胴に近い形態で、肩部は丸みを帯びている。72は底部に向かって急激に窄まる。いずれの個体も最大径は肩部にある。

底部はすべて平底で、底部径は5.3~7.6cmである。

時期 土師器により時期を特定することは難しいが、古墳時代終末期(前半)に位置づけられる。

(5) 5号堅穴建物(SH05、第9・23・24図、第6・11・12表、図版7・17、写真18・19)

位置 SH05は調査区中央C2・3グリッドに位置する。SH04と重複関係にあった可能性が高いが、切り合いが確認できず、先後関係は不明である。



第24図 角庵I遺跡 SH05実測図

特徴 SH05は方形の竪穴建物で、北西隅角部分のみが出土した。東側は削平されており既に失われている。壁際に壁溝が巡らされ、床面については壁溝まで及ぶ土砂（2層）が確認でき、貼床である可能性が高い。内部には主柱穴（P1・P2）が確認できる。建物の主軸はほぼ北（ $N-8^{\circ}-W$ ）を向いていた可能性が高い（外壁で計測）。規模は、南北5.5m以上×東西2.5m以上で、主柱穴P1-P2間は2.5mである。

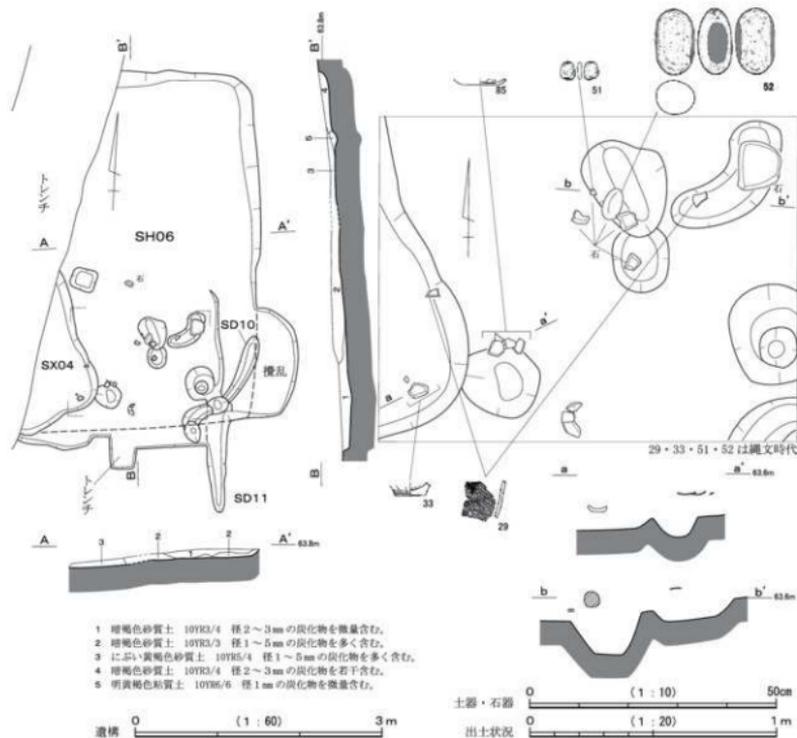
竈は確認できないが、後述するように須恵器杯蓋が出土していることから、本来は竈が伴う建物であった可能性が高い。竈はSH02・04を参考にすると調査区外に存在した可能性が高い。

遺物の出土状況 SH05からは、覆土から須恵器杯蓋（80）、鉄製刀子（81）が出土した。

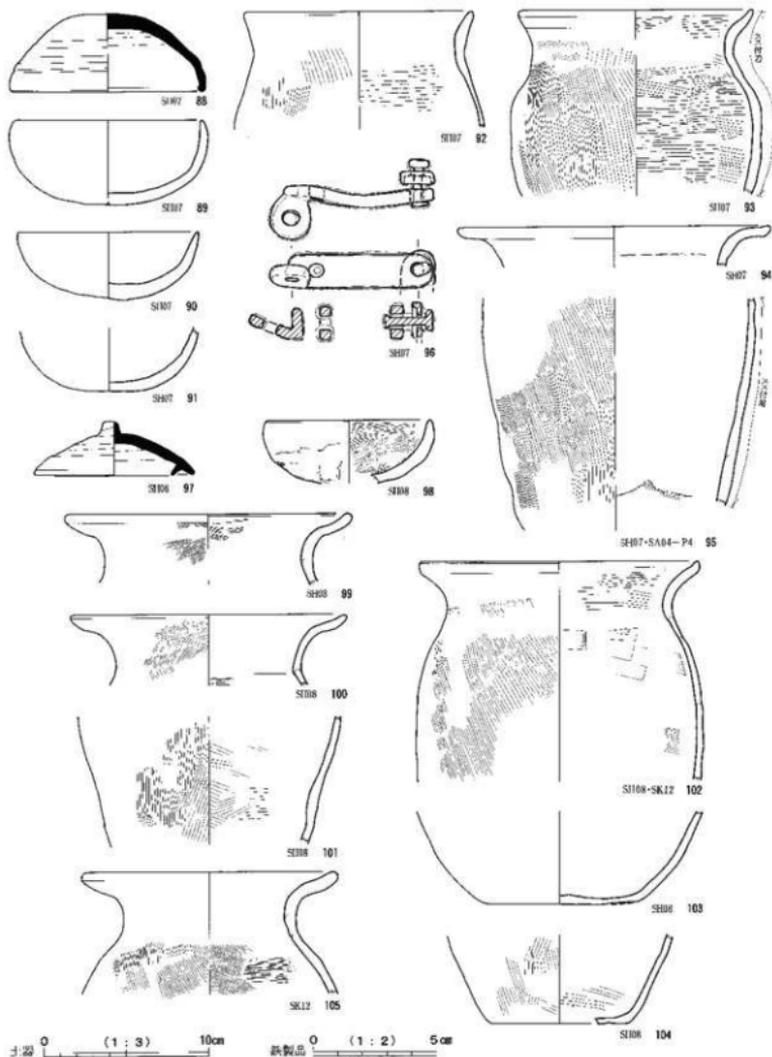
出土遺物 須恵器杯蓋1点（80）、鉄製刀子1点（81）が出土した。

須恵器杯蓋（80）は半球形で、口縁部と体部との間に凹線を巡らせる。天井はヘラ削りが行われている。天井にはヘラ記号が確認できる。一部破損しているため確定的ではないが、「×」であった可能性が高い。湖西市にある湖西窯産須恵器であろう。口径10.2cmである。

鉄製刀子（81）は、鉄製柄縁装具（鏝）を伴うもので、刃部は刃が内湾しており、研ぎ減りの可能性が高い。関は両関で、刃部側が撫関、棟側が直角関である。茎は直線的に茎尻に向かって伸びる。柄縁



第25図 角庵1遺跡 SH06実測図および遺物出土状況



第26図 角鹿1遺跡 SH07・08出土遺物実測図

装具は幅6mmの細いものである。

時期 出土した須恵器杯蓋は口径が約10cmであり、遠江IV期前半（飛鳥II期，鈴木2001，以下同じ）に位置づけられることからSH05は古墳時代終末期前半（7世紀前半～中葉）に位置づけられる。

(6) 6号竪穴建物 (SH06, 第9・23・25図, 第6・11～13表, 図版3・8・18, 写真18・19)

位置 SH06は調査区南側B2・C2グリッドに位置する。南東側にあるSH07と重複関係にあるが先後関係は不明である。

特徴 SH06は平面方形の竪穴建物で、西側は削平され、東側半分程度が確認された。壁溝は確認できないが、SD10がその一部の可能性がある。また、支柱穴、竈ともに確認できない。建物の主軸はほぼ北(N-4°-W)を向く。建物の規模は、図中に破線で示した部分を南壁として南北4.4m前後×東西2.9m以上である。

堀方床面直上で炭化物粒が多く確認されていることから、1～5層は流入土である可能性が高く、SH06は貼床を造らず、堀方を直接床面とした直床式であった可能性が高い。

遺物の出土状況 建物内からは磨石(52)や石錘(51)、縄文土器(29・33)などが出土しているが、いずれも縄文時代に位置づけられる可能性が高い。また、床面からやや浮いた状態で土師器甕(85)が出土した。また、覆土中から須恵器杯蓋(82)、高杯(83)、鉄製品(86)が出土した。

出土遺物 磨石、縄文土器などについては第2節で報告している。ここでは須恵器杯蓋(82)、高杯(83)、土師器甕(84・85)、鉄製品(86)について報告する。

須恵器杯蓋(82)は天井が失われているが、半球形の杯蓋で口縁部と天井部の境界に一条の沈線を巡らせる。口径9.6cmに復原できる。須恵器高杯(83)は半球形高杯で脚部が失われている。口縁部は底部から碗形に立ちあがった後、口縁端部を外上方に引き出すものである。口径17.4cmである。

土師器甕(84・85)は甕の口縁と底部である。84は頸部が直立した後外上方に向かって屈曲するコ字形に近い形状で、口縁端部は丸く取められる。85は平底である。

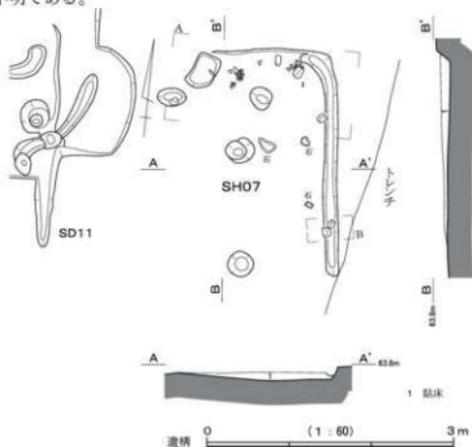
鉄製品(86)は板状の鉄製品で、各辺はすべて破断しており、製作当時の原状は留めていない。図のほぼ中央に円孔が穿たれている。用途は不明である。

時期 出土した須恵器杯身・高杯はいずれも遠江IV期前半（飛鳥II期）に位置づけられることから、古墳時代終末期前半（7世紀前半～中葉）に位置づけられる可能性が高い。

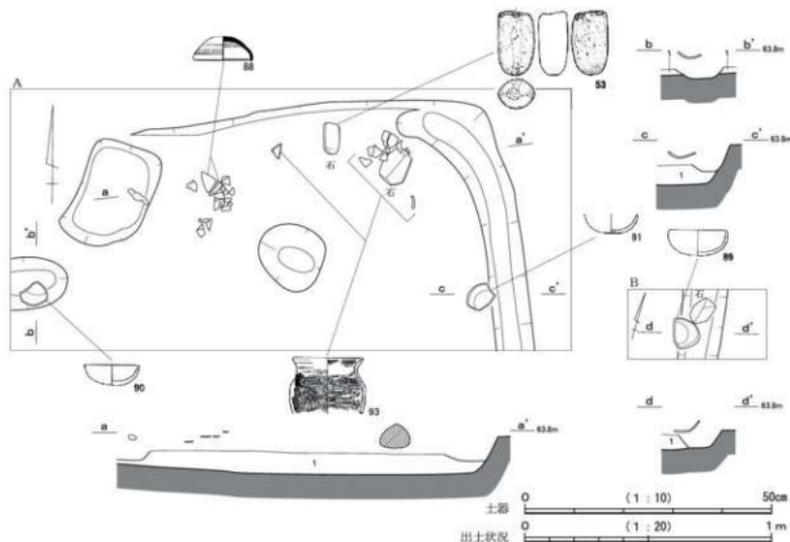
(7) 7号竪穴建物 (SH07, 第9・26～28図, 第6・11～13表, 図版3・8・18, 写真20)

位置 SH07は調査区南側、C1・2グリッドに位置する。北西側でSH06、南側でSH08と重複関係にあるが、切り合い関係が不明確であり、先後関係は不明である。

特徴 SH07は平面方形の竪穴建物であり、その北東隅角部のみが確認され



第27図 角庵I遺跡 SH07実測図



第28図 角庵1遺跡 SH07遺物出土状況図

た。壁際に沿って壁溝が確認される。支柱穴、竈ともに確認できない。床面には貼床が行われている。建物の主軸はほぼ北（ $N-7^{\circ}-W$ ）を向く。建物の規模は南北約2.8m以上×東西1.6m以上である。

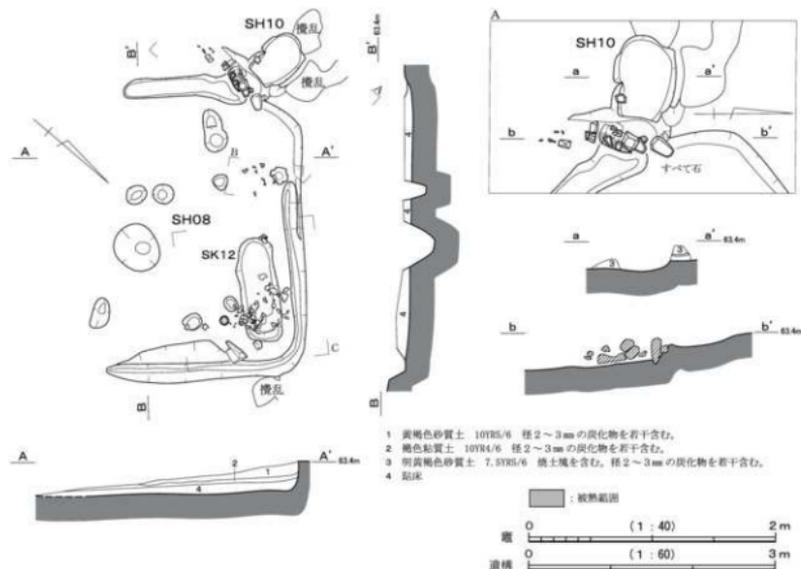
遺物の出土状況 遺物は北東隅角部から土師器甕（93）、敲石（53）、その西側から須恵器杯蓋（88）が出土した。また、東壁側中央で壁溝上から土師器杯（89）が出土した。さらに、覆土中から土師器杯（90・91）、鉄製品（96）などが出土した。

出土遺物 須恵器杯蓋1点、土師器杯3点、甕4点、鉄製品1点が出土した。ただし、鉄製品は竪穴建物に直接伴うものではない。

須恵器杯蓋（88）は、半球形の杯蓋で、天井と口縁の境界に沈線を巡らせる。口径は11.9cmに復元できる。土師器杯は鉢形に近い89、半球形の90、口縁を欠損するが90に近いと思われる91である。89は底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや力を入れてナデ調整を行い細く仕上げている。90は底部からわずかに外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は細く仕上げられている。口径は89が11.4cm、90が11.0cmに復元できる。土師器甕は、口縁部の形状により、頸部が字形で単純口縁のもの（92）と、頸部がコ字形に近く、口縁部は外上方に向かって立ち上がるもの（93）、頸部がコ字形で、口縁端部が水平に引き出されるもの（94）、の3種がある。92は肩の張りが弱い。93は胴上部がやや丸みを帯びるものである。両者ともに外面は縦方向のハケメ調整、内面は横方向のハケメ調整が行われている。95は甕の胴下部片である。

鉄製品（96）は、竪穴建物の攪乱に伴うものである可能性が高い。複雑な構造をしていることから近世以降の部品である可能性が高く、いくつかの部品が鉄棒で結合されたものである。

時期 須恵器杯蓋の口径が11.9cmに復元できるため、遠江III期末葉（飛鳥I期）まで遡る可能性があることから、SH07は古墳時代終末期前半（遠江III期末葉～IV期前半）に位置づけおきたい。SH06と切り合い関係にあった可能性が高いが、SH07→SH06の順で建築された可能性が高い。



第29図 角庵I遺跡 SH08・SH10実測図

(8) 8・10号竪穴建物 (SH08・10, 第9・26・29・30図, 第6・11表, 図版9・10・19, 写真17)

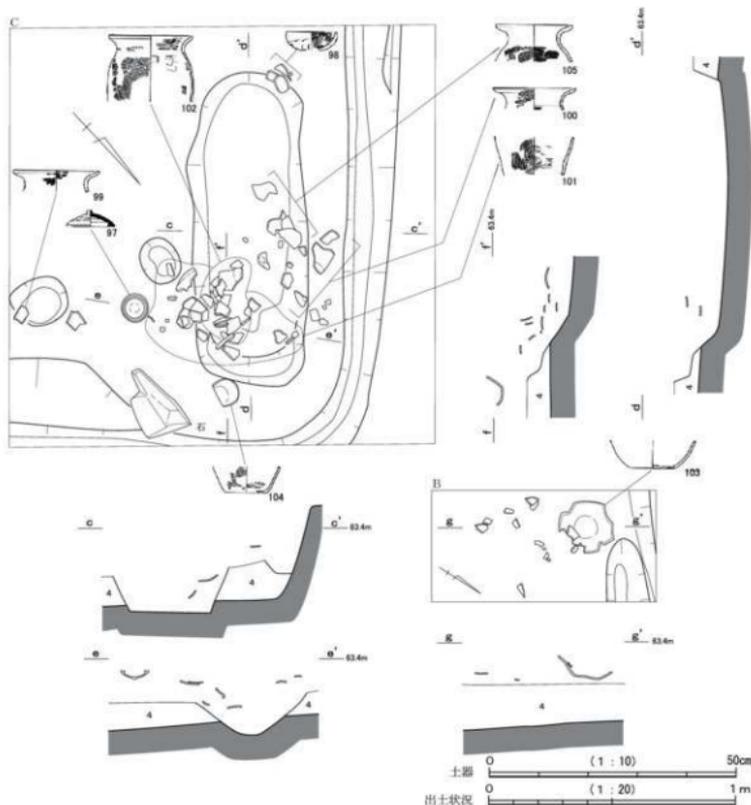
位置 SH08は調査区南側ほぼ中央、C1グリッドに位置する。北東側でSH07、東側でSH09と重複関係にあった可能性が高いが、切り合い関係が不明確であるため、先後関係は不明である。

特徴 SH08は平面方形の竪穴建物で、南東側半分程度が失われている可能性が高い。竈が西側隅角部で確認できるが、建物の外側で袖部が確認できることから、後述するようにこの竈はSH08に伴わない可能性が高い。建物の主軸は、角庵I遺跡で確認された他の建物と軸が約50度(N-49°-E)ずれており、特異である。壁際に沿って壁溝を巡らせる。主柱穴は確認できない。床面には貼床が構築されたかどうか明確ではない。建物の規模は、南北約3.7m×2.4m以上である。

SK12は、建物の北西辺に沿っているが、長さ約1.3m、幅約0.5mと、貯蔵穴にしては大きいこと、床面を破壊するように掘削されていることから、SH08の貯蔵穴の可能性は完全には排除できないが、貯蔵穴ではない可能性が高い。上層から出土した遺物はSK12に落ち込むようにレンズ状に堆積していることから、SK12に直接伴うものではない可能性が高い。

竈は西側隅角部に位置する可能性があるが、この竈の位置からするともう1軒の竪穴建物(SH10と仮定する)が所在した可能性が高い。もう1軒の建物(SH10)の竈だけが検出されたと考えたい。竈は(SH10)の東辺に造り付けられていたと想定する。a-a'断面を観察すると、地山の上に別の土砂で袖を構築しており、この部分が焚口であった可能性が高い。この場合、建物の主軸はおおよそ東向き(N-90°-E)であった可能性がある。

遺物の出土状況 遺物はSK12上層部から土師器甕(100~102・104・105)が出土し、SK12の南側から須恵器杯蓋1点(97)が出土した。いずれも掘方床面からは10cm以上高い位置から出土しており、直接この建物の廃絶時期を示すかどうか明確ではない。他の遺構に伴う遺物が廃棄された、流れ込んだ可



第30図 角塚1遺跡 SH08遺物出土状況

能性がある。

出土遺物 床面の10cm以上上から須恵器杯蓋(97)、土師器杯(98)、土師器甕(99~105)が出土した。須恵器杯蓋(97)は返りを伴う杯蓋(返蓋)で、乳頭状の摘みがある。返りは口縁部とほぼ同じ高さであり、外からは見えない。湖西産の可能性が高い。



写真17 角塚1遺跡SH08出土土器(98)

土師器杯(98)は半球形の杯であり、口縁部は丸く収められる。器壁が厚く、重量感がある。内面底部にはミガキ調整、口縁部には横方向のハケ調整(板ケズリか?)が行われている。ハケ調整の後ミガキ調整を行っている。外面はミガキの痕跡は不明確であるが、器壁は滑らかであるため丁寧なナデ調整かミガキ調整が行われた可能性が高い。底部外面にはヘラが当たった痕跡が2箇所確認できる。

土師器甕口縁部4点(99・100・102・105)はほぼ同形態

であり、頸部はコ字形に近く、口縁部は外上方へ向かって立ち上がるものである。100と同一個体の可能性が高い101は胴下半の破片で外面には縦方向のハケメ調整、内面には横方向のハケ調整が行われている。103・104は甕の底部片でいずれも平底である。103は底部から外上方に丸みをもって立ち上がるもので、104は底部から外上方へ直線的に立ち上がるものである。

時期 SH08は出土した須恵器杯蓋や土師器甕から、遠江IV期後半（飛鳥III期）に位置づけられる可能性が高く、古墳時代終末期後半に建てられた可能性がある。

SH10は、SH08との切り合い関係はあるものの先後関係が不明確であり、また出土遺物もなく不明確であるが、古墳時代終末期に築造された可能性が高い。

(9) 9号竪穴建物 (SH09, 第9・31図, 第6表, 図版3・9・11)

位置 SH09は調査区南東側、C1グリッドに位置する。西側に位置するSH08と重複関係にあるが、遺構の切り合いによる直接的な先後関係は不明である。

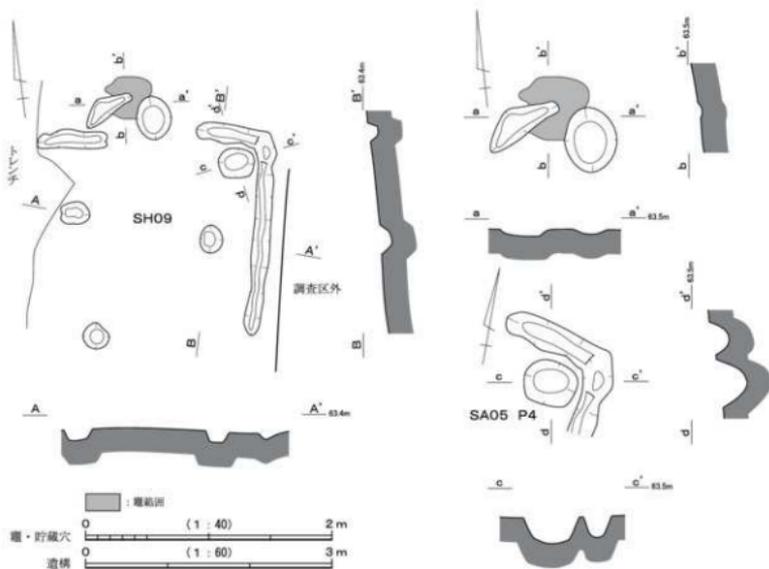
特徴 SH09は平面方形の竪穴建物で、壁溝と竈が出土した。北西隅角に位置する土坑は、この建物に伴う貯蔵穴の可能性が高い。主柱穴は確認できない。建物の主軸はほぼ北を向ける（N-12°-E）である。建物の規模は、南北2.6m以上×東西2.9m以上である。壁溝は約0.2mである。

竈は建物の北辺に造り付けられており、煙道が建物外へ伸びていた可能性が高く、建物外から焼けた部分が確認できる。全長1.0m以上であった可能性が高い。

遺物の出土状況 特に大型の破片は出土していない。

出土遺物 図示できるような遺物はない。

時期 時期を特定できるような遺物が出土していないため断言できないが、古墳時代終末期に築造さ



第31図 角庵I遺跡 SH09実測図

れた可能性が高い。

3 小結

(1) 角庵1遺跡における集落の出現と廃絶

角庵1遺跡の竪穴建物は、古墳時代終末期、それも前半（7世紀前半～中頃）に築造された可能性が高く、終末期後半には継続せずに廃絶した可能性が高い。竪穴建物に重複関係が認められることから少なくとも1回の建て替えが行われた可能性が高いが、おおよそ50年の間に建て替えが行われたことになる。

(2) 立地の特徴

竪穴建物は緩斜面を利用して築造されており、竈は基本的に斜面上位にあたる壁際に造り付けられている。竈が残存するものは基本的に北辺に竈が取り付けられるがSH08やSH10は東辺に造り付けられていた可能性が高い。



写真18 角庵1遺跡 竪穴建物ほか出土金属製品

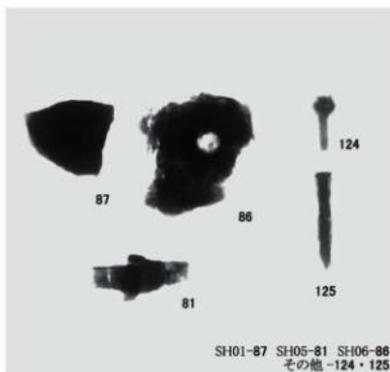


写真19 角庵1遺跡 竪穴建物ほか出土金属製品X線写真



写真20 角庵1遺跡 SH07出土金属製品
（竪穴建物に直接伴わない）

第4節 奈良時代以降の調査成果

1 概要 (第5表)

角庵I遺跡では奈良時代から近世にわたる遺物が若干出土しているが、奈良時代～平安時代は遺物のみ、中・近世では土墳墓と想定する遺構の他はこの時期に帰属する遺構は明確ではない。この他、時期及び性格は不明確な遺構が多いことからここにまとめて報告する。

なお、角庵I遺跡では、柵列や土坑が確認されているが、時期を特定することができないものがあるため、ここで中近世の報告とともに、記述する。

2 柵列

ここでは、柵列の可能性が高い、小穴が一直線に並ぶものについて柵列と認定し、報告したい。

(1) 1号柵列 (SA01, 第9・32図, 第7表)

調査区北側隅で確認した。調査区外に平行する柱穴列が存在し、掘立柱建物になる可能性がある。SA01は3間分確認できる。長さ5.6m、柱の間隔は、(柱穴の芯芯間)西側から約2.1m、1.9m、1.6mであり、一定していない。SH01から約2.5mの位置にあたり、何らかの有機的な関係があった可能性があるが、出土遺物はなく、時期は不明である。後述するSA04などは堅穴建物を破壊しているようであり、築造時期については中世以降の可能性が高い。

(2) 2号柵列 (SA02, 第9・32図, 第7表)

調査区北側、SA01の南側で確認された。調査区外に平行する柱穴列が存在し、掘立柱建物になる可能性がある。2間分確認でき、全長約4.6m、柱間は西側から約2.4m、2.2mである。SH01から約1.5mの位置にあたり、何らかの有機的な関係があった可能性があるが、後述するSA05が堅穴建物を破壊していることから、この柵列が同時期とすれば、中世以降に位置づけられる可能性が高い。

出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) 3号柵列 (SA03, 第9・32図, 第7表)

調査区中央やや北、SH02から南に1mの位置にあり、SH02の南辺と平行する。SH02とSH04を区画するような位置にあたるため、有機的な関係にある可能性があるが、上述したSA01・02と同様、SH02やSH04と同時期とすることはできない。3間分確認でき、全長5.8m、柱間は西側から1.95m、2.05m、1.8mであり、一定していないが、1.9mを基準としていた可能性がある。

出土遺物はないことから構築時期は不明である。

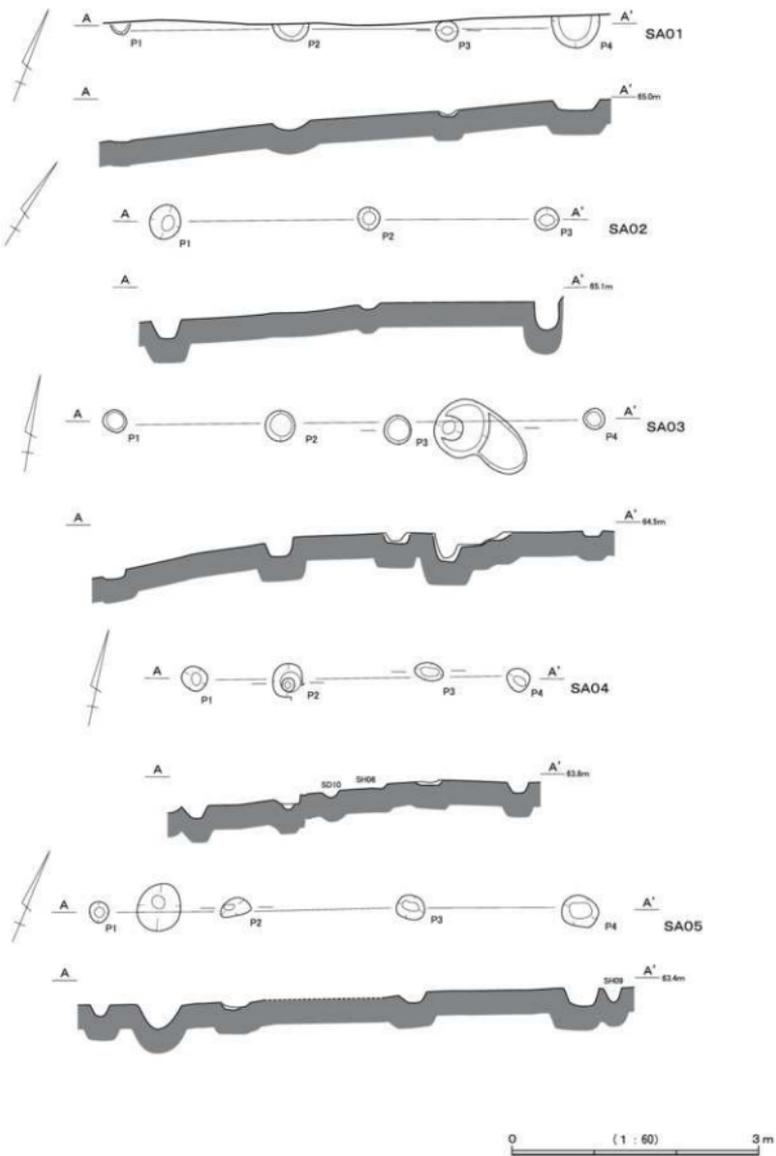
(4) 4号柵列 (SA04, 第9・32図, 第7表)

調査区南側、C2グリッドに位置し、SH06・07を破壊しており、SH06よりも新しいことがわかる。3間確認でき、全長4.0mである。柱間は西側から1.1m、1.75m、1.2mであり、一致していない。

出土遺物はなく時期は特定できない。

(5) 5号柵列 (SA05, 第9・32図, 第7表)

調査区の南側、C1グリッドに位置し、SH08・09と重複し、SH08・09よりも新しい可能性が高い。4



第32図 角庵1遺跡 横列実測図

間分確認でき、全長約5.8mである。柱間は西側から約1.6m、2.2m、2.0mであり、一定していない。

出土遺物はなく、時期は特定できない。

3 土坑 (第9・33~35図, 第8・11表, 図版11~13・19, 写真21)

中・近世に位置づけられる土坑は少なく、時期が不明確な遺構が多い。

なお、縄文時代の可能性のあるSK06と、SH08に伴う可能性のあるSK12については第2・3節で上述している。

SK01 SK01はB4グリッドにある不整形な円形の土坑である。断面皿状である。南北0.9m以上、東西1.0m、深さ0.1mである。出土遺物はなく、時期は特定できない。

SK02 SK02はB4グリッドにある不整形な隅丸方形の土坑であり、断面皿状である。南北0.7m以上、東西0.95m以上、深さ0.1mである。出土遺物はなく、帰属時期は特定できない。

SK03 SK03はB4グリッドにある不整形な楕円形の土坑で、断面皿状である。南北0.65m、幅0.5m、深さ0.05mである。出土遺物はなく、帰属時期は特定できない。

SK04 SK04はC4グリッドにある円形の掘方の中央に一段深く柱穴に掘り窪められており、円形の土坑の中央に逆茂木を据える陥穴の可能性ある。上段直径0.8~0.9m、深さ0.15m、下段直径0.3m、深さ0.3mである。遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。調査区内には同様の遺構はなく、陥穴の場合は単独で掘削された可能性がある。

SK05 SK05はC4グリッドに位置する弧形の土坑であり、断面は皿状である。南北約1.15m、東西約0.6m、深さ約0.1mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

SK07 B3グリッドに位置する不整形な楕円形の土坑で、中央がやや深く掘り下げられている。南北約1.1m、東西0.6m、深さ0.3mである。出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

SK08 SK08はSH04と切り合い関係にある土坑で、SH04を破壊している可能性が高い。不整形な長台形で、南北約1.85m以上、東西約1.35m、深さ0.3mである。シルト岩の原礫(54)、須恵器杯蓋(106)が出土した。この他土師器杯か碗片(108)、須恵器杯蓋片1点(107)が出土した。須恵器は、竪穴建物に伴う可能性がある。

須恵器杯蓋(106)は、半球形の杯蓋で天井と口縁の境に沈線や稜線は確認できない。口径9.5cmに復原できる。須恵器杯蓋(107)は、半球形の杯蓋で、天井と口縁部の境に不明瞭であるが変換点を確認できる。口径約11.3cmに復原できる。106は断面セピアであり、湖西窯産ではない可能性が高い。森町森山窯産の可能性ある。107は湖西産の可能性が高い。この2点の須恵器は遠江IV期前半(飛鳥II)に位置づけられるが、106については、口径が小さいことから遠江IV期後半に近い時期である。

土師器杯か碗(108)は底部片で、平底であり、底部から丸みをもってやや湾曲しながら立ち上がるもので、鉄鉢形に近い形態を呈していた可能性がある。

SK08については、古墳時代終末期の可能性があるが、重複するSH04に伴う遺物である可能性もあることから、帰属時期は明確ではない。

SK09 SK09はC2グリッドに位置する不整形な楕円形で、断面は皿状である。南北約0.8m×東西1.2m、深さ0.15mである。出土遺物はなく、時期は特定できない。

SK10 SK10はC2グリッドに位置する、やや不整形

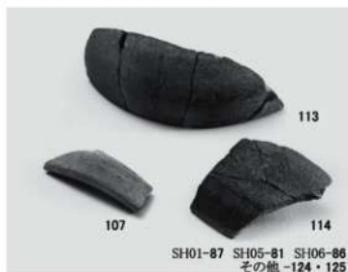
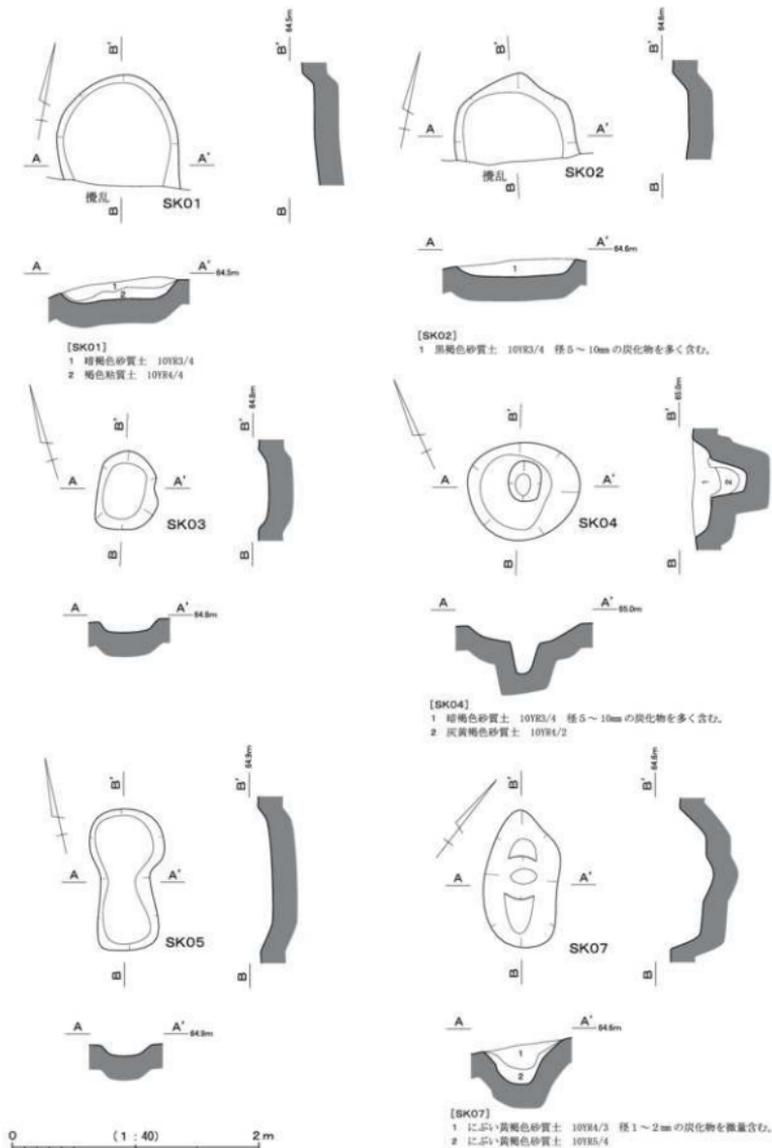
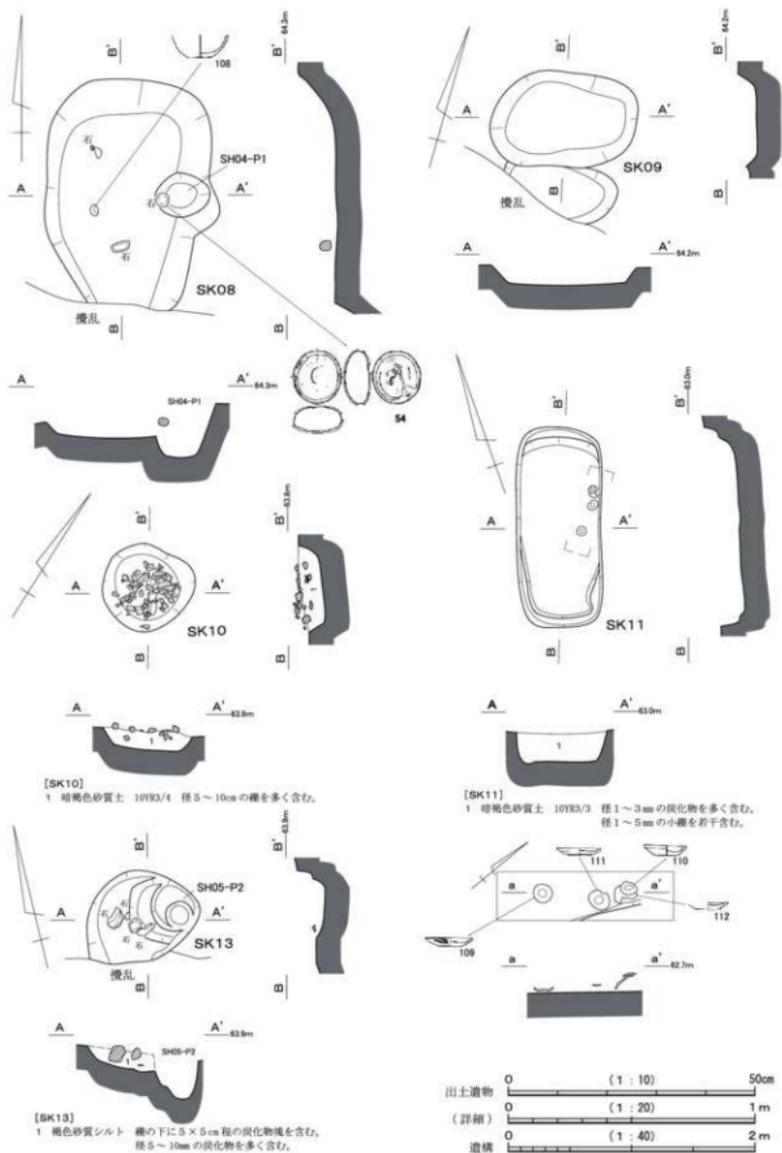


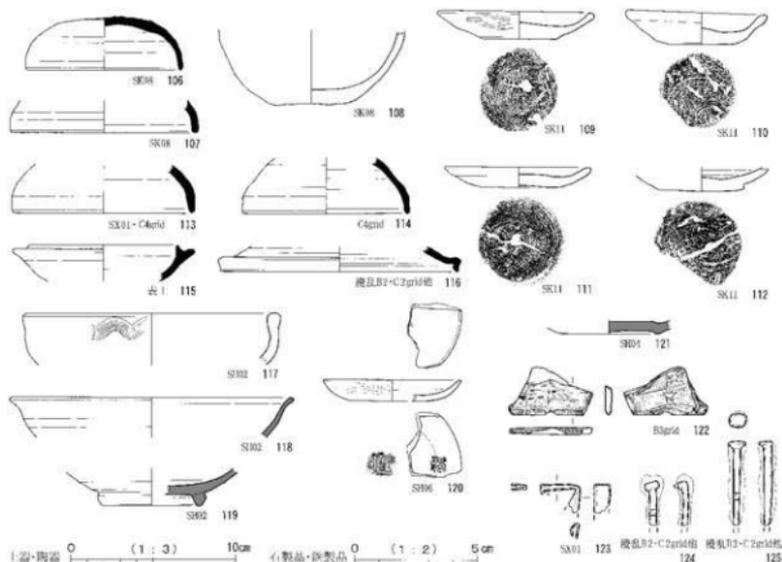
写真21 角鹿I遺跡 土坑他出土遺物



第33図 角堀1遺跡 土坑実測図①



第34図 角庵I遺跡 土坑実測図②



第35図 角庵1遺跡 土坑・性格不明遺構出土遺物実測図

な円形の土坑で上面に5~10cmの河原石がほぼ水平に集積された土坑である。この集石の下位には特別な遺構は確認できず、性格は不明である。根拠は極めて薄いが集石墓であろうか。直径約0.75m、深さ約0.2mである。出土遺物はなく、帰属時期は中世以降である可能性が高い。

SK11 SK11は隅丸長方形の土坑である。南北は2段に掘り込まれている。六道銭を伴わないため確定的ではないが、中世末の土壌墓の可能性が高い。南北約1.65m、東西約0.7m、深さ約0.2mであり、底面は水平である。

遺物は東壁に沿って、並べられたような状態で出土した。110と112が重ねられた状態で、109は口縁部を上に向けた状態で出土した。

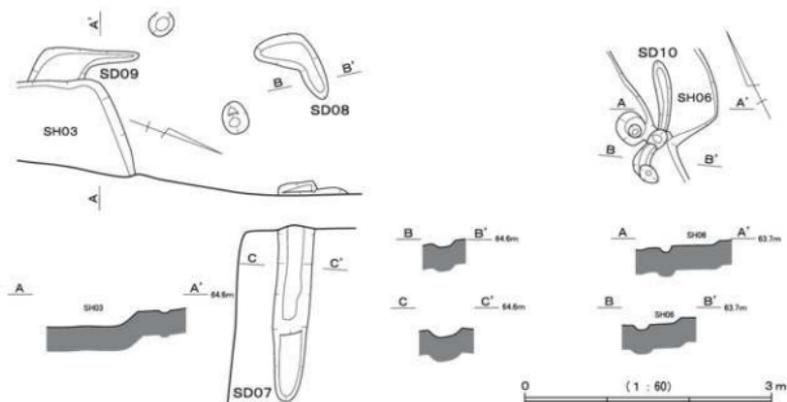
かわらけ(109~111)は、小型の皿状かわらけで、ロクロ成形である。底部から外上方に向かって短く直線的に延びる口縁部である。口径8.5~9.5cm、底径4.4~5.3cm、器高1.2~2.1cmである。色調は黄褐色系である。

SK13 SK13はSH05と重複関係にあるが、先後関係は明らかにすることができなかった。SK13は不整形な円形で、直径0.9m前後、深さは約0.15mである。遺構内には石材が確認でき、礫の下には5×5cm程度の炭化物塊や炭化物粒が多く含まれる。円形に近く礫が確認できることからSK10と同様の遺構である可能性がある。

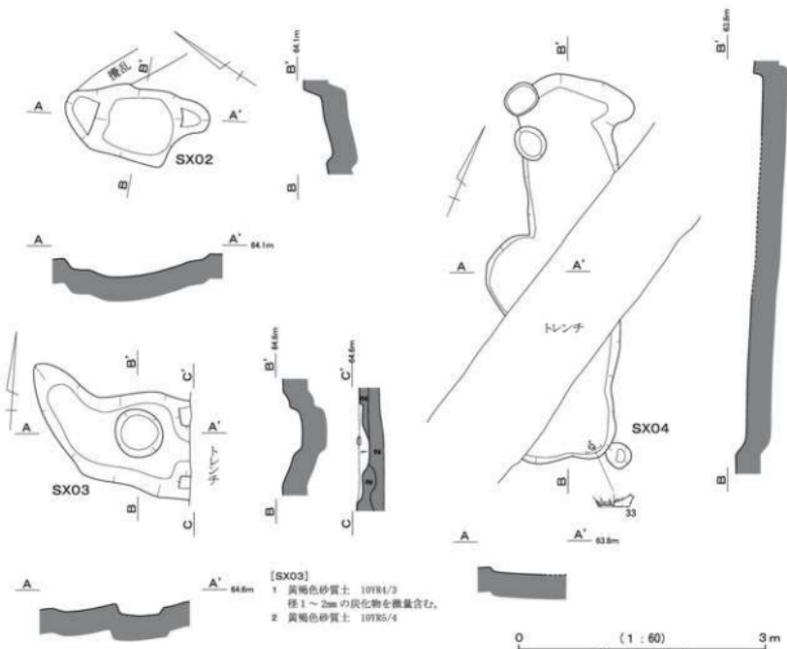
4 溝状遺構(第9・36図, 第9・11表)

溝状遺構は6条(SD01・SD07~SD11)を確認した。

SD01 SD01はSH01と重複関係にあるが、先後関係は不明である。南北長約3.0m、幅0.3mで、南側でもう一条の溝状遺構と重複していた可能性がある。



第36図 角庵Ⅰ遺跡 溝状遺構実測図



第37図 角庵Ⅰ遺跡 性格不明遺構実測図

SD07 SD07は細長い溝で、東西長約2.6m、幅0.4mである。

SD08・09 SD08・SD09はL字形の溝であり、対向する位置にあることから、堅穴建物の壁溝の北西

と南西の隅角の可能性がある。この場合に想定される建物の規模は南北4.5m前後である。ただし、竪穴建物と確定できない。

SD11 SD11はSH07の東側の壁溝と平行関係にあり、SH07の西側の壁溝の可能性もある。その仮定が正しい場合は、SH07は東西約3.7mとなる。

溝状遺構から時期を特定できる遺物は出土していないため、帰属時期は確定できない。

5 性格不明遺構 (第9・35・37図, 第10・11表)

性格不明遺構は、4基出土した。SX01については第2節を参照願いたい。

SX02 SX02はB4グリッドの尾根斜面に位置する。平面形は不整形な楕円形で、南北約1.7m、東西約0.9m、深さ約0.25mである。出土遺物はなく時期は不明である。

SX03 SX03はB3・4グリッドに位置する。平面は不整形な「く」字形で、東西に長い。東西1.8m以上、南北約1.3mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

SX04 SX04はB2・C2グリッドに位置し、SH06と重複するが、先後関係は不明である。平面形態は中央が膨らむ、やや不整形な細長い長方形で、規模は南北4.2m、最大幅1.6m、深さ0.1mである。縄文土器片(33)が南東隅角部で出土しているが、この遺構に直接伴うものか不明確である。帰属時期は不明である。

6 遺構に伴わない遺物 (第35図, 第11~13表, 図版19, 写真18~23)

角庵1遺跡では、遺構に伴わず出土した遺物には、須恵器、灰釉陶器、陶器(初山焼)、かわらけ、硯がある。

須恵器 杯蓋2点(113・114)はSX01やC4グリッドから出土した。半球形の杯蓋で、天井と口縁部の境目は明瞭ではないがわずかな屈曲が確認できる。口径は10.5、10.0cm前後に復原できることから、

遠江IV期前半(飛鳥II期)、7世紀前半~中頃に位置づけられる可能性が高い。113は森山窯産の可能性が高い。114は湖西産の可能性が高い。

杯身1点(115)はたちあがりのある杯身で、たちあがりは低く短く、受部よりもわずかに高い程度である。口径9.6cmであり、遠江IV期前半でも新しい時期に位置づけられる。断面セピアを呈することから、湖西窯産ではなく、森町森山窯産の可能性が高い。

摘蓋(116)は唯一奈良時代と特定できる遺物である。遺構に伴っていないことから性格は不明であるが、集落がやや場所を移して奈良時代まで継続したのか、今後検討の余地がある。

灰釉陶器 灰釉陶器は2点(118・119)を図示した。118は碗の口縁部片で、口縁部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。119は底部片で、三日月高台で、底面はナズ調整が行われている。いずれも掛川市の清ヶ谷窯産の可能性が高く、松井一明氏による清ヶ谷編年IV期(10世紀後半~11世紀前半頃)に位置づけられる(松井1989)。



写真22 角庵1遺跡出土陶器



写真23 角庵1遺跡出土灰釉陶器

初山焼 121は浜松市北区細江町にある初山焼の内禿皿である。瀬戸美濃編年大窯3期併行期、16世紀後半に位置づけられる。

かわらけ かわらけ(120)は小型皿状のかわらけで、ロクロ成形である。黄白色系の色調を呈する。内面見込みには花文?が刻印され、外面底部には、「秋葉神社」のスタンプ印が確認できる。口径8.4cmに復原でき、器高は1.3cmと低い。

帰属時期は江戸時代末(幕末)、19世紀中頃の可能性が高い。近世における秋葉山信仰を探る上で貴重な遺物である。

硯 粘板岩製硯破片が1点(122)出土した。表面には細かい研磨(削条痕)が残る。

鉄製品 SX01の上部から用途不明鉄製品(123)、攪乱から鉄釘(124・125)が出土した。SX01出土品(123)は幅6mm、厚さ1mm程の鉄板がL字形に折れ曲がったものである。用途不明である。鉄釘(124・125)、頭部がL字形に折り曲げられるものである。断面は方形であり、攪乱からの出土ではあるが、円形頭ではなくL字形に折り曲げる特徴などから江戸時代に位置づけられようか。

7 角庵 I 遺跡の中世土器・陶磁器について

角庵 I 遺跡で出土した中世の土器・陶磁器について、まとめておきたい。

初山内禿皿1点(121)とかわらけ3点(109~111)のみが出土した。いずれも中世末期に位置づけられる。かわらけ3点が出土したSK11は土壇墓の可能性が高く、中世末は墓域であった可能性が高い。

一方、灰釉陶器は数片出土しているが、一般的に出土する山茶碗は一切確認できない。したがって、10世紀後半~11世紀前半以降、16世紀後半まで、空白期間が確認できる。中世後期末の時期も、出土量は非常に少なく、恒常的に居住していたとは考え難い。

註(第4章)

- 1 縄文土器の型式分類について、向坂綱二氏、渋谷昌彦氏、池谷信之氏、小崎晋氏、原田雄紀氏に御教示頂いた。
- 2 向坂綱二氏の御教示による。

参考文献

参考文献は第7章末に記載しているので、そちらを参照されたい。

第5節 遺構・遺物観察表

1 遺構観察表

(1) 竪穴建物の概要

第6表 角庵I遺跡 竪穴建物の概要

遺構番号	Fig	PL	グリッド	主軸方位	規模 (南北×東西)	深さ	竈	床面	出土遺物	時期	備考
SH01	17	3	C4・C5	N-18°-W	4.05×3.55+	0.2	—	貼床式	用途不明鉄製品	古墳 終末 期	
SH02	18・19	4~6	B3・C3	N-7°-W	5.5×5.0	0.35	有	貼床式	土師器杯・甕・甕、石製 紡錘車未製品、石錘		
SH03	21	7	C3	N-26°-W	4.3+×1.3+	0.2	—	貼床式	なし		
SH04	22	4・6	B2・B3・C2・C3	N-18°-W	4.0+×4.5	0.2	有	貼床式	土師器鉢・甕		
SH05	24	7	C2・C3	N-8°-W	5.5+×2.5+	0.25	—	貼床式?	須恵器杯蓋・刀子		
SH06	25	3・8	B2・C2	N-4°-W	4.4±×2.9±	0.2	—	直床式	須恵器杯蓋・高杯、土師 器甕、用途不明鉄製品		
SH07	27・28		C1・C2	N-7°-W	2.8+×1.6+	0.15	—	貼床式	須恵器杯蓋、土師器杯、 甕、用途不明鉄製品		
SH08	29・30	3・9・10	C1	N-49°-E	3.7×2.4	0.25	—	不明	須恵器杯蓋、 土師器杯・甕		
SH09	31	3・9・11		N-12°-E	2.6+×2.9	—	有	直床式	なし		
SH10	29	9・10		N-90°-E	—	—	有	—	なし		SH08と重複か

※床面については、床積層土が確認できたものを「貼床式」、できないものを「直床式」とする。

単位 (m)

※建物の主軸については、竈があるものについては竈がある方向を主軸として、竈がないものについては基本的に南北を主軸方向と想定している。

※表記 ± 前後 + 以上

(2) 槽列の概要

第7表 角庵I遺跡 槽列の概要

遺構番号	Fig	PL	グリッド	主軸方位	規模	出土遺物	時期	備考
SA01	32	—	B4・B5・C5	N-69°-E	5.6	なし	不明	
SA02			B4・C4・C5	N-58°-E	4.6	なし	不明	
SA03			B3・C3	N-80°-E	5.8	なし	不明	
SA04			C2	N-77°-E	4.0	なし	不明	
SA05			C1	N-69°-E	5.8	なし	不明	

単位 (m)

(3) 土坑の概要

第8表 角庵I遺跡 土坑の概要

遺構番号	Fig	PL	グリッド	規模 (南北×東西)	深さ	出土遺物	時期	備考
SK01	33	—	B4	0.9+×1.0	0.1	なし	不明	
SK02				0.7+×0.95	0.1	なし	不明	
SK03				0.65×0.5	0.05	なし	不明	
SK04			C4	0.8~0.9	0.15	なし	不明	
SK05				1.15×0.6	0.1	なし	不明	
SK06	10	12		0.8×1.0	0.25	縄文土器	縄文	
SK07	33	—	B3	1.1×0.6	0.3	なし	不明	
SK08	34	13	B2・B3・C2・C3	1.85+×1.35	0.3	須恵器・土師器・雑	古墳終末期?	
SK09		—		0.8×1.2	0.15	なし	不明	
SK10		11	C2		0.75	0.2	なし	中世以降?
SK11	29	12	C1	1.65×0.7	0.2	かわらけ	中世	中世墓?
SK12		10		1.3×0.5	0.2	土師器甕	古墳終末期	SH08の貯蔵穴?
SK13	34	13	C2	0.9±	0.15	なし	中世以降?	集石墓?

※表記: + 以上 ± 前後

単位 (m)

(4) 溝状遺構の概要

第9表 角庵I遺跡 溝状遺構の概要

遺構番号	Fig	PL	グリッド	長さ	深さ	出土遺物	時期	備考
SD01	17	-	C4	3.0	0.3	なし	不明	
SD07	C3		2.6	0.4	なし	不明		
SD08	C8		1.1	0.1	なし	不明		
SD09			1.3	0.1	なし	不明		
SD10			1.5	0.1	なし	不明	SH06に伴う?	
SD11	27	C2	3.7	0.1	なし	古墳終末期?	SH07の壁溝?	

単位 (m)

(5) 性格不明遺構の概要

第10表 角庵I遺跡 性格不明遺構の概要

遺構番号	Fig	PL	グリッド	規模 (南北×東西)	深さ	出土遺物	時期	備考
SX01	11	13	B4・5, C4・5	9.5×3.0	0.15	縄文土器・石器・須恵器・土師器・鉄製品	縄文～近世	縄文時代～近世にわたる遺物が出土
SX02			B4	1.7×0.9	0.25	なし	不明	
SX03	37	-	B3・4	1.3×1.8	0.1	なし	不明	
SX04			B2・C2	4.2×1.6	0.1	土師器壺	不明	土師器は直接伴うか不明。

+～以上

単位 (m)

2 遺物観察表

(1) 土器・陶器

第11表 角庵I遺跡出土土器・陶器観察表

No	Fig	PL	アキフ	遺構名	種別	器種	部位	塊弁率	口径	器径	器高	色面(外面)	色面(内面)	備考	
1			C4	SK06	縄文	深鉢	胴部	-	-	-	-	橙(SYR66)	橙(7.5YR7/6)		
2			C4	SK06		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	
3			B4	SX01		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	橙(7.5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR5/4)	
4			B4	SX01		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	
5			C4	SX01		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR4/2)	押型文土器
6			B4	SX01		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
7			C4	SX01		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR5/2)	
8			-	表層		深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
9			B・C3	SH02		深鉢	口縁	-	-	-	-	-	暗灰(2.5Y5/2)	暗灰(2.5Y5/2)	
10			B5	SH02		深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	
11			B5	SH02		深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	
12			B4	SX01		深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	上ノ山式土器
13			B4	SX01		深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	
14			B4	SX01	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)		
15			B4	SX01	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)		
16			B4	SX01	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	人海式土器	
17	13	14	C4	SK06	深鉢	底部	60%	-	-	1.9	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR7/6)		
18			B4	SK06	深鉢	底部	70%	-	-	2.6	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	上ノ山式か人海式	
19			B・C3	SH02	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	黒灰(10YR2/1)	にぶい黄橙(10YR7/3)		
20			B・C3	SH02	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	灰黄褐(10YR6/2)	黒灰(10YR4/1)		
21			排土内	SH06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR6/2)	大塚式土器	
22			C4	SP58	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/2)	黒灰(10YR3/2)		
23			C2	SH06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(5YR5/4)	にぶい黄橙(5YR5/4)	十三君覆式土器?	
24			排土内	SH06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	灰黄褐(10YR6/2)		
25			C3	SH05	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)		
26			C2	SH06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	縄島式土器?	
27			B4	SK06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	灰黄褐(10YR4/2)	黒灰(10YR3/2)		
28			C3・3	SH04	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)	黒灰(10YR4/1)	山田平式土器?	
29			C2	SH06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(5YR4/3)	灰(7.5YR4/4)	五條・白土併用型	
30			C2	SH06	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄橙(7.5YR5/4)	にぶい黄橙(7.5YR5/4)	覆形式土器	
31			B・C3	SH02	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	明赤褐(5YR5/6)	にぶい赤褐(5YR5/3)	加賀川E式土器	
32			B4	SX01	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)		
33			C2	SH06	深鉢	底部	50%	-	-	6.4	-	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)		
39			C3	SK06	杯	全体	50%	(12.0)	(12.0)	-	4.0	橙(2.5YR6/8)	橙(5YR7/8)		
40			C3	SK06	杯	底部	40%	-	-	-	-	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)		
41			C3	SK06	杯	全体	50%	11.8	19.6	-	21.0	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		
62			B・C3	SH02	土師器	要	口縁～胴	25%	(14.9)	(15.0)	-	浅黄橙(10YR6/4)	灰(N4/7)		
63			B・C3	SH02	土師器	要	口縁～胴	30%	(18.8)	-	-	浅黄橙(7.5YR5/4)	浅黄橙(10YR5/4)		
64			C3	SH06	土師器	要	口縁～胴	25%	(17.7)	-	-	浅黄橙(10YR6/4)	浅黄橙(10YR6/4)		
65			C3	SH06	土師器	要	全体	85%	16.4	15.8	6.3	27.7	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	
66			B・C3	SH02	土師器	要	口縁～底部	30%	(16.9)	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)		

第4章 角庵I遺跡

No	Fig	PH	ゾリッド	遺構名	種別	階層	部位	残存率	口径	間径	直径	高さ	色割(外面)	色割(内面)	備考	
67			B2・C3				要	口縁~胴	15%	(19.8)	-	-	にふい黄焼(10YR7/4)	にふい黄焼(10YR7/3)		
68	20	16	C3	SH02	土師器		要	胴~底部	66%	-	5.9	-	浅黄焼(10YR8/4)	灰(10Y4/1)		
69			C3				要	底部	-	-	(5.9)	-	浅黄焼(10YR8/4)	焼(7.5YR7/6)	杯の可能性も残る。	
70			C2・3				杯	口縁	15%	(10.6)	(10.6)	-	灰黄(7.5YR5/2)	灰黄(7.5YR4/2)		
71			C3				杯	全体	70%	(13.0)	(16.3)	-	焼(5YR7/8)	焼(5YR7/8)		
72			C3				要	口縁~胴	60%	(15.7)	(17.8)	-	浅黄焼(10YR8/4)	浅黄焼(10YR8/4)		
73			C2・3				要	口縁~胴	30%	(15.2)	-	-	にふい黄焼(10YR7/3)	灰(5YR6/4)		
74			C3				要	口縁~胴	30%	(15.2)	(16.1)	-	焼(5YR7/6)	にふい黄焼(10YR6/4)		
75			C3				要	口縁~胴	40%	(18.4)	(19.6)	-	浅黄焼(10YR8/4)	浅黄焼(10YR8/4)		
76			C3				要	胴~底部	55%	-	5.3	-	浅黄焼(10YR8/4)	浅黄焼(10YR8/4)		
77	23		C2・3				要	胴~底部	25%	-	(6.0)	-	にふい黄焼(10YR7/3)	灰黄(2.5Y7/2)		
78			C3				要	底部	15%	-	(6.6)	-	浅黄焼(2.5Y7/3)	浅黄焼(2.5Y7/3)		
79			C3				要	底部	25%	-	(7.6)	-	浅黄焼(2.5Y7/3)	浅黄焼(2.5Y7/3)		
80			C2・3	SH05	須恵器		杯蓋	全体	40%	(10.2)	(10.2)	-	4.0 オリーブ灰(2.5GY5/1)	オリーブ灰(2.5GY5/1)		
82			C2	SH06	須恵器		杯蓋	口縁~天井	5%	(9.6)	(9.6)	-	灰(7.5Y6/1)	灰白(7.5Y7/1)	瀬西産	
83			-	SH06	須恵器		杯蓋	杯部	50%	(17.4)	(17.4)	-	灰白(5Y7/2)	灰(5Y6/1)	瀬西産	
84			C2	SH06	土師器		要	口縁~胴部	20%	(18.5)	-	-	浅黄焼(2.5Y7/4)	浅黄焼(2.5Y7/4)	SH06の可能性が高い	
85			C2				要	底部	20%	-	(7.6)	-	にふい黄焼(10YR7/3)	浅黄焼(2.5Y7/2)		
88			北東		須恵器		杯蓋	全体	35%	(11.9)	(11.9)	-	4.8 オリーブ灰(5GY6/1)	オリーブ灰(5GY6/1)	瀬西産	
89							杯	全体	60%	(11.4)	(12.0)	-	(5.2)	にふい黄焼(10YR7/3)	浅黄焼(10YR8/3)	
90							杯	全体	45%	(11.0)	(11.0)	-	4.1 浅黄焼(7.5YR6/6)	にふい黄焼(10YR7/4)		
91			C2	SH07	土師器		杯	底部	40%	-	-	-	焼(7.5YR7/6)	焼(7.5YR7/6)		
92							要	口縁~胴部	25%	(14.0)	-	-	焼(7.5YR7/6)	焼(7.5YR7/6)		
93							要	口縁~胴部	40%	14.2	(15.1)	-	にふい黄焼(7.5YR7/4)	にふい黄焼(7.5YR7/4)		
94							要	口縁	60%	(19.0)	(16.4)	-	にふい黄焼(10YR7/3)	にふい黄焼(10YR7/3)		
95							要	胴部	55%	-	-	-	にふい黄焼(10YR7/3)	にふい黄焼(10YR7/3)		
97	25	19			須恵器		杯蓋	全体	90%	9.7	-	3.3	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)	近畿、瀬西産	
98							杯	口縁~底部	25%	(10.1)	(10.4)	-	にふい黄焼(5YR5/4)	にふい黄焼(5YR5/4)		
99							要	口縁~底部	12%	(17.4)	-	-	浅黄焼(10YR8/4)	浅黄焼(2.5Y8/4)		
100							要	口縁~胴部	8%	(16.8)	-	-	浅黄焼(2.5Y7/2)	浅黄焼(2.5Y8/2)		
101							要	胴部	20%	-	-	-	浅黄焼(2.5Y7/3)	灰黄(2.5Y6/2)		
102							要	口縁~胴部	20%	(17.0)	(17.5)	-	浅黄焼(2.5Y7/4)	にふい黄焼(10YR7/4)		
103							要	底部	60%	-	(9.6)	-	焼(7.5YR7/6)	にふい黄焼(10YR7/4)		
104							要	底部	25%	-	(8.7)	-	にふい黄焼(10YR7/4)	灰黄(2.5Y7/2)		
105							要	口縁~胴部	25%	(15.6)	-	-	浅黄焼(10YR8/4)	にふい黄焼(10YR7/4)		
106					須恵器		杯蓋	全体	40%	(9.5)	(9.5)	-	3.4 青青灰(5B4/1)	青青灰(5B4/1)	瀬西産	
107							杯蓋	口縁	12%	(11.3)	(11.4)	-	緑灰(10GY5/1)	灰(7.5Y6/1)	瀬西産	
108					土師器		杯小機	底部	50%	-	-	-	焼(5YR7/8)	焼(5YR7/8)		
109							ロクロ	全体	90%	9.5	9.5	4.9	1.7	浅黄焼(10YR8/4)	浅黄焼(2.5Y7/4)	
110							ロクロ	全体	86%	8.6	8.6	4.4	3.1	浅黄焼(7.5YR8/6)	浅黄焼(7.5YR8/6)	
111							ロクロ	全体	80%	8.9	8.9	5.1	1.2	にふい黄焼(10YR7/4)	灰黄(2.5Y6/2)	
112							ロクロ	底部	66%	-	5.3	-	浅黄焼(10YR8/4)	浅黄焼(10YR8/4)		
113							杯蓋	口縁~天井	25%	(10.5)	(11.1)	-	灰黄(5YR5/2)	灰黄(5YR5/2)	瀬西産	
114					須恵器		杯蓋	口縁~天井	10%	(10.0)	(10.1)	-	灰(5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	瀬西産	
115							杯蓋	口縁~底部	10%	(9.6)	(11.0)	-	暗青灰(5B4/1)	暗青灰(5B4/1)	瀬西産	
116			B4・C4	覆瓦			杯蓋	口縁	7%	(14.6)	(14.6)	-	緑灰(5GY6/1)	灰白(7.5Y7/1)	瀬西産	
117			B・C3		須生?		壺	口縁	8%	(15.6)	-	-	にふい黄焼(2.5Y6/3)	にふい黄焼(2.5Y6/3)	瀬西産	
118			B・C2	SH02	須生?		壺	口縁	5%	(17.1)	(17.2)	-	浅黄焼(2.5Y7/3)	浅黄焼(2.5Y7/3)		
119			B・C3		須生?		壺	底部	40%	-	(6.5)	-	青灰(5D6/1)	灰白(7.5Y7/2)		
120			19	C2	SH06	かわらけ	ロクロ	口縁~底部	20%	(8.4)	(8.4)	(1.3)	灰黄(2.5Y8/3)	灰黄(2.5Y8/3)	外:「秋葉神社」境内:跡田	
121							ロクロ	底部	17%	-	(6.0)	-	灰黄(2.5YR4/2)	灰黄(2.5YR4/2)	16C後半	

※表記 北東=調査区北東

単位(cm) 括弧内は復原値

(2) 鉄製品

第12表 角庵I遺跡出土鉄製品観察表

No	Fig	PH	ゾリッド	遺構名	材質	器種	全長	幅	厚さ	重量	備考
81			C2・3	SH05		刀子	(3.3)	0.8	0.3	3.68	柄録金具付
86	23	18・19	C2	SH06			(4.3)	(4.5)	0.3	13.65	
87			C4	SH01			(2.6)	(3.1)	0.5	9.14	
96	26	20	C2	SH07	鉄	不明鉄製品	5.7	1.4	0.4	20.74	
123			B4・5・C5	SX01			(1.6)	1.6	0.2	0.71	
124	35	18・19	C2	覆瓦		釘	(1.8)	0.3	0.2	1.07	
125						釘	(2.5)	0.3	0.3	2.08	

PH=写真番号

単位:全長・幅・厚さ(cm) 重量(g) 括弧内は残存値

(3) 石器・石製品

第13表 角庵Ⅰ遺跡出土石器・石製品観察表

No	Fig	Pl.	グリッド	遺構名	器種	使用石材	全長	幅	厚さ	重量	備考			
34	14	B4	SX01		石鏃	珪質頁岩(灰色)	15.0	12.7	3.2	0.5				
35					石鏃	チャート(灰色)	15.2	17.0	3.5	0.7				
36					石鏃	チャート(灰色)	25.9	16.2	5.6	1.8				
37					石鏃	シルト岩	35.9	31.3	10.6	5.7				
38					スタレイバー	頁岩	54.0	42.0	13.0	27.89				
39					スタレイバー	珪質頁岩(灰色)	101.0	49.0	18.0	70.35				
40		—	石鏃	—	—	—	51.5	40.6	13.2	38.9				
41		C5	SX01	—	—	—	120.8	50.6	34.5	292.1				
42		—	—	—	—	—	20.1	13.6	3.1	0.4				
43		—	—	—	—	—	20.0	19.0	6.0	1.82				
44		—	—	—	—	—	31.7	23.9	9.1	5.1				
45		15	B3~C3	SH02		石鏃	珪質頁岩(暗灰色)	28.0	15.0	9.0	2.52			
46	紡錘車未製品					細粒砂岩	38.5	38.1	21.1	43.6				
47	紡錘車未製品					細粒砂岩	46.4	45.3	34.9	101.9				
48	石鏃					—	40.0	27.8	10.1	15.3				
49	磨盤石					中粒砂岩	101.0	85.5	49.8	532.4				
50	スタレイバー					シルト岩	47.0	51.0	21.0	44.64				
51	—					—	—	—	—	37.0	29.9	8.0	14.3	
52	—					—	—	—	—	133.6	78.3	68.8	1038.8	
53	—					—	—	—	—	128.7	73.8	59.9	802.0	
54	B2					SK08	—	—	—	106.9	97.2	48.6	662.8	
55	B4					SP28	—	—	—	21.0	19.0	6.0	1.41	
56	—					—	—	—	—	42.0	26.0	8.0	7.40	
57	C4	—	—	—	—	67.3	53.0	15.3	52.0					
58	—	—	—	—	—	39.3	31.2	12.9	22.1					
122	35	—	B3	—	—	—	19.0	34.0	3.0	2.37				

単位：全長・幅・厚さ(mm) 重量(g)

第5章 角庵Ⅱ遺跡

第1節 遺跡の概要

1 立地と環境 (第1・6・38~41図, 巻頭図版1・5, 図版20~24)

角庵Ⅱ遺跡は、掛川市寺島地区に位置し、原野谷川北岸の、原野谷川に向かって熊手状に張り出した丘陵上およびその緩斜面、標高約62~65mに立地する。原野谷川が形成した平地との比高差は約10mである。

遺跡の周囲には道路を挟んで東隣の丘陵上に角庵Ⅰ遺跡(本書第4章参照)、西側の尾根上に上ノ平遺跡(静岡埋文研2008)が所在する。

2 調査歴

角庵Ⅱ遺跡ではこれまで調査は全く行われておらず、今回の第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査による確認調査によって新たに発見・周知された遺跡であり、今回は第1次調査となる。

なお、遺跡の立地状況からみると、調査区北側に遺構が広がる可能性が高い。

3 確認調査の結果 (第7図)

角庵Ⅱ遺跡(第二東名No.103地点)の確認調査は、第二東名路線対象地の丘陵上平坦面や緩斜面に13本の試掘溝(以下、Trとする)を設定し、遺構の確認を行った(第7図)。調査の結果、丘陵の谷部に設定したTr. B2・3では遺構遺物は確認できず、またTr. H・I部分は茶畑などの耕作により旧地形が改変されていることが判明した。尾根上に設定したTr. B1・C・Fなどでは遺構・遺物ともに確認された。

これにより、遺構・遺物が確認された試掘溝部分を調査対象地として本調査を実施することとした。

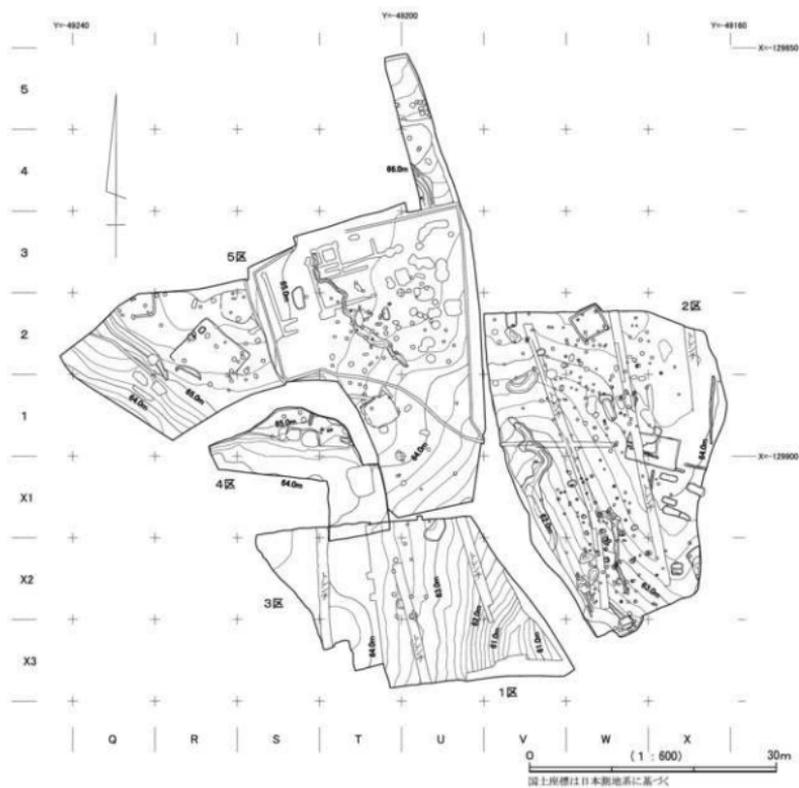
4 主な遺構と遺物 (第38~41図, 第14表)

角庵Ⅱ遺跡は、縄文時代から近世に亘る複合遺跡であり、第14表のような弥生時代後期~古墳時代前期の竪穴建物、古墳時代終末期の竪穴建物を中心に、縄文時代、弥生時代~古墳時代、古代、中世~近世の遺構・遺物が出土した。

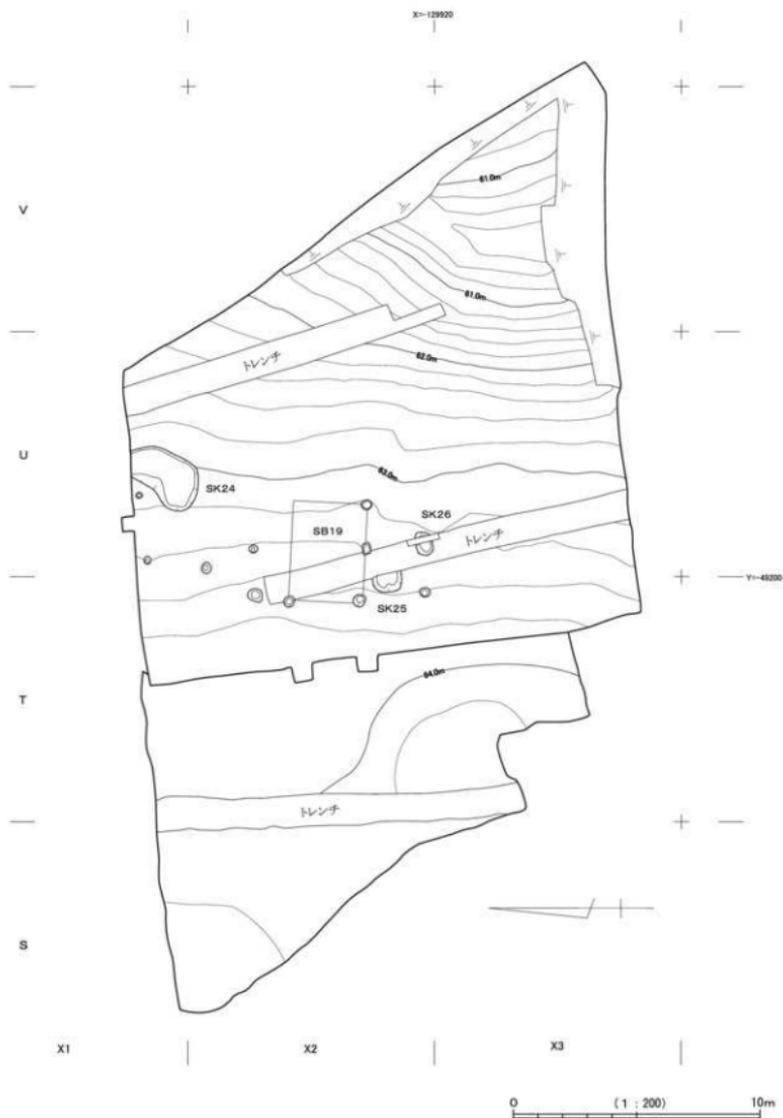
第14表 角庵Ⅱ遺跡の主な遺構と遺物

時代	遺構	遺物	備考	報告
縄文	土坑1・自然流路1	縄文土器・石器(石鏃・石鏃未製品・スクレイパー・磨礫石・石製品)・土鏃・耳飾		本章第2節
弥生後期~古墳前期	竪穴建物3・掘立柱建物10・土坑9(土壇墓4か)・溝状遺構2・性格不明遺構1	弥生土器・ガラス小玉	土壇墓の可能性のある4基は周溝墓か?	本章第3節
古墳終末期	竪穴建物7・掘立柱建物3・土坑2	須恵器・土師器		本章第4節
古代~近世	掘立柱建物6・櫓列2・土坑14・溝状遺構16・性格不明遺構5・礫石経塚1	灰釉陶器・瀬戸美濃・古志戸呂・志戸呂・肥前・かわらけ・鉄製品(釘・鏝・用途不明品・鉄銭「寛永通寶」か)・銅銭	溝状遺構2基は弥生時代の方形周溝墓の溝の可能性はある。	本章第5節

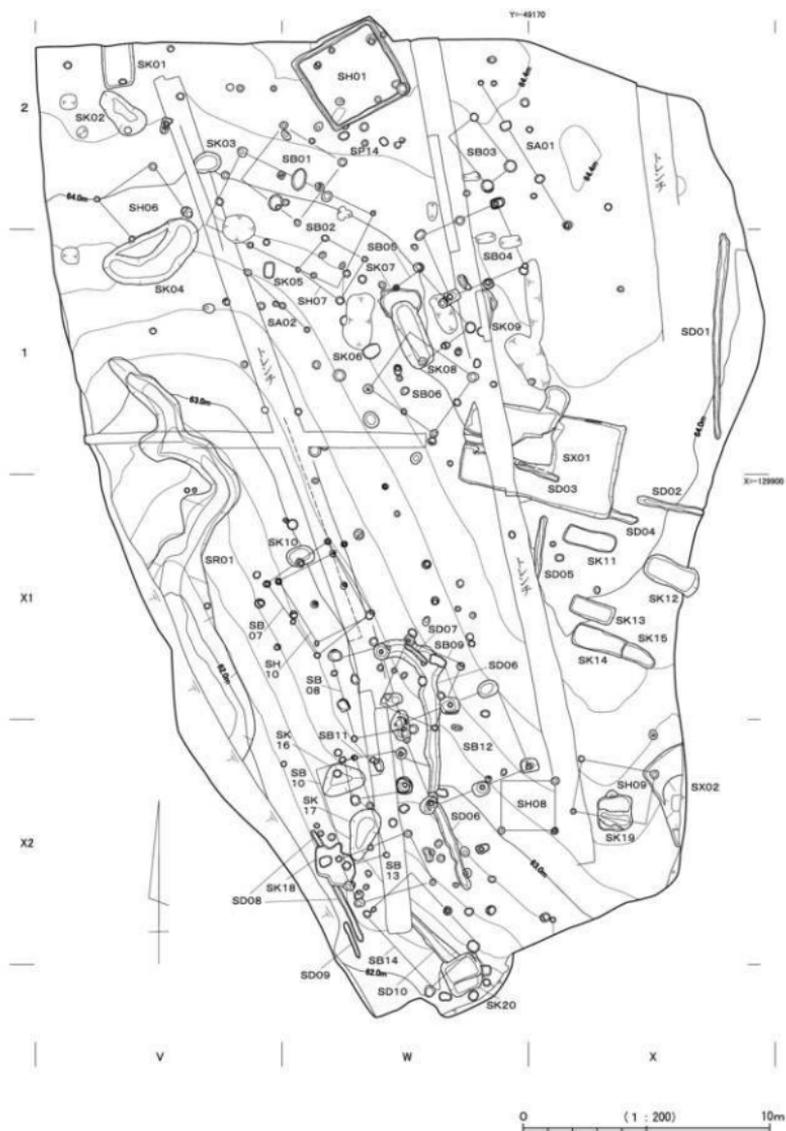
※古代~近世には、時期不明遺構を含む。



第38図 角庵Ⅱ遺跡 全体図



第39図 角庵II遺跡 1・3区実測図



第40図 角庵II遺跡 2区実測図

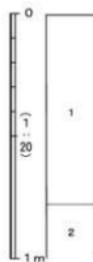


第41図 角庵II遺跡 4・5区実測図

5 基本土層 (第42図)

角鹿Ⅱ遺跡の基本土層を第42図に示した。

角鹿Ⅱ遺跡の基本土層は2層で構成される。第1層は耕作土であり、第2層は黄褐色砂質土(地山)であり、第2層上面が遺構検出面である。



- 1 耕作土
- 2 黄褐色砂質土

第42図 角鹿Ⅱ遺跡
基本土層

第2節 縄文時代の調査成果

1 概要

縄文時代の遺構は、2区北西部で確認した土坑（SK05）のみである。遺物は2区と1区の間にあるSR01周辺を中心に、縄文時代中期～晩期の縄文土器、土製品（耳飾・土錘）、石器（石鏃、スクレイパー、石匙、石錘、磨石、磨穀石）が出土した。

2 遺構

縄文時代の明確な遺構は確認できないが、2区北西部で土坑1基（SK05）、自然流路（SR01）が確認され、遺物が出土している。また、調査区北部で縄文土器片が出土した土坑1基（SK06）がある。

(1) SK05（第40・43・45図，第20・23表，図版25・41）

SK05は2区北西側、V1グリッドで確認された、平面長方形、断面逆台形の土坑である。最大幅約0.65m、長さ約0.45m、深さ約0.25mである。縄文時代の耳飾（耳栓，27）が1点出土した。出土遺物から、縄文時代晩期前半に帰属する可能性が高い。

(2) SR01（第40図，図版39）

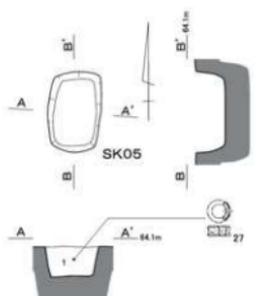
SR01は1区東側、2区西側に位置する。1・2区間の浅い谷を流れる自然流路である。SR01からは縄文時代～近世に亘る遺物が出土している。おおそ深い位置から縄文土器が、浅い位置から中近世の遺物が出土していることから、一挙に埋没したわけではなく、長期にわたって徐々に埋没したことが判明する。

(3) 縄文土器・石器の出土傾向（第44図，図版39）

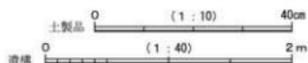
第44図に主な縄文土器、石器の出土位置を示した。

縄文土器片および石器はSR01とそれに向かう緩い斜面の堆積土から出土しており、尾根上の平坦面から流れ込んできたような状況を呈している。出土した縄文土器は全形を復原できるような破片は出土していない。

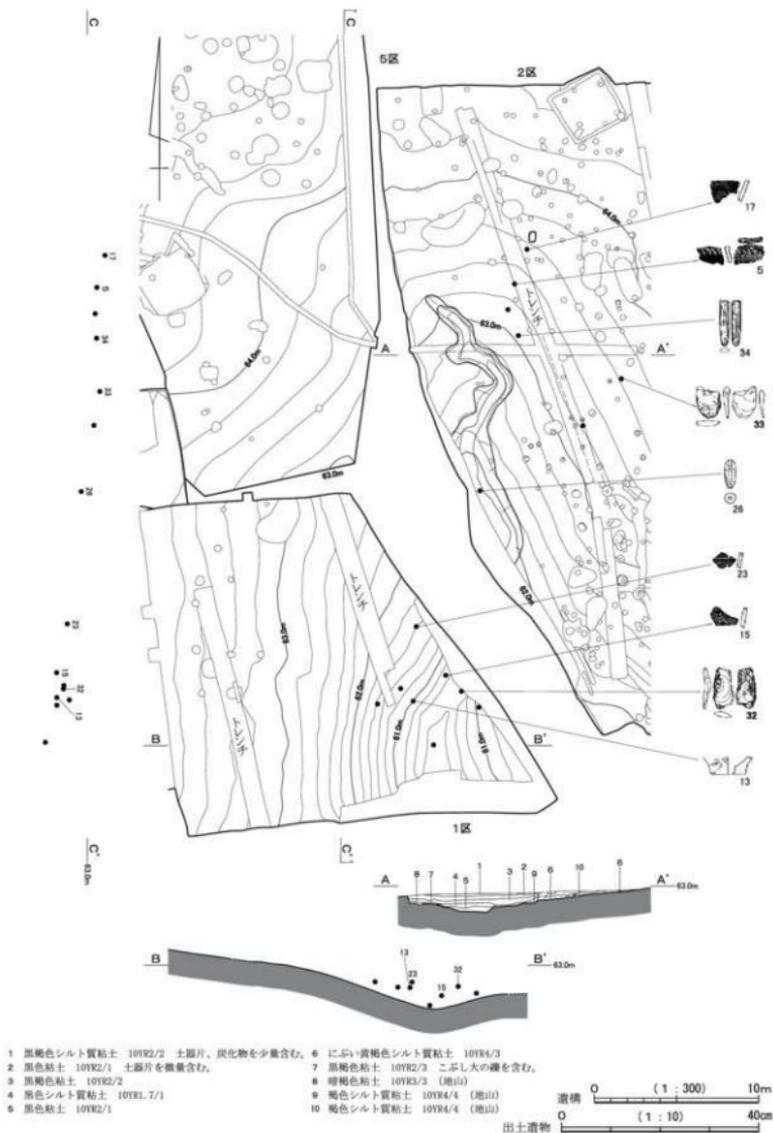
これ以外の調査区内からは小片が数点出土するのみである。



1 黄褐色シルト質粘土 10YR3/2 径5mmの黄褐色土を多く含む。



第43図 角庵II遺跡 SK05実測図



第44図 角庵Ⅱ遺跡 主な縄文土器および石器の出土位置

3 出土遺物

角庵Ⅱ遺跡出土の縄文時代に帰属する遺物は土器、土製品と石器である。

(1) 縄文土器 (第45図, 第23表, 図版41)

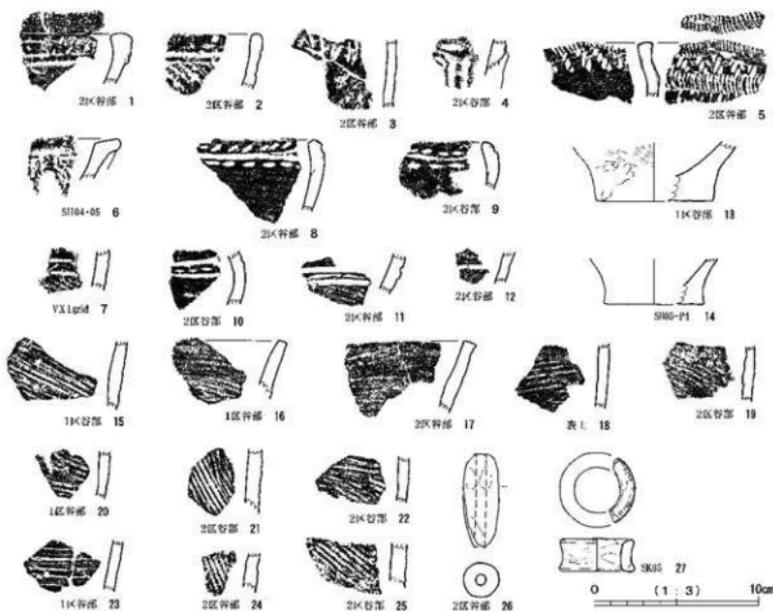
縄文土器はSR01周辺を中心に、調査区全域から出土したが、小片が多く全体的な形状が判明するものはない。ここでは部位が特定できる破片や文様のある破片を抽出して図示した。以下に、時期別、型式別(註1, 第5章註は116頁)に報告する。

I群 縄文時代前期末～中期前半の土器群、II群 後期初頭の堀之内式土器(の可能性のあるもの)、III群 縄文時代晩期の土器群、として報告する。

ア I群 縄文時代中期の土器群(1～6)

中期初頭～前半の五領ヶ台式併行期の土器、前期末～中期初頭の鷹島式(船元I式)土器、中期前半の山田平式土器の可能性のある土器がある。

I-1群 五領ヶ台式土器 五領ヶ台式併行期の土器は1・2・4・6である。1は口縁部片で、口縁端部を肥厚させ、口唇部は平坦面をもつ。口唇部外側には一条の沈線が巡らされている。口縁部内側は強いナデ調整が行われ、口唇部内側はやや突起する。外面には薄い板状の粘土を横方向に貼り付け、その上に二条の沈線を横方向に刻んだ後、下の沈線のところに連続刺突を施す。2は口縁部の破片で、ほぼ直立する。口縁端部は丸く取められ、外面には半截竹管状具を利用した横方向の二条の沈線文を施



第45図 角庵Ⅱ遺跡出土縄文土器実測図

し、その下位左斜め上方に向かう集合沈線（条線）文を刻んでいる。4は深鉢の胴部片で、現状でT字形の貼り付け文様を施している。6は口縁部の破片で、口縁部はL字形に近く外側に屈曲し内傾する平坦面をもつ。口縁部の外面には縦位の貼り付け文が施されている。

1-2群 鷹島式（船元1式）土器 鷹島式土器（5）は深鉢の波状口縁部破片で、口縁部はやや内湾する。口縁端部は外側に折り返している可能性がある。口唇部は内外面から細かい刻み目を刻み、外面には粗い縄文地文の上に、鷹島式の特徴である「Σ」状の連続爪形文を施す。口縁部内側には縄目の大きな粗い縄文を施す。地元の胎土とは異なるため、東海西部以西からの搬入品の可能性が高い。

1-3群 山田平式土器 山田平式土器の可能性のある3は、薄手の胴部片である。図右上半分に半截竹管状工具を利用した二条の沈線で弧文を描いている。

イ Ⅱ群 縄文時代後期の堀之内式土器の可能性のある土器（7）

縄文時代後期初頭の堀之内2式土器の可能性のある深鉢土器片（7）は胴部片で、縄文地文を施した後半截竹管状工具を利用した横方向の凹線文を施している。

ウ Ⅲ群 縄文時代晩期の土器群（8～25）

晩期初頭の規塚B式土器、晩期前半に位置づけられる可能性が高いが型式不明の土器群がある。

Ⅲ-1群 晩期初頭の規塚B式土器（8～12） 8・9は口縁部の破片であり、ともに口縁部は内湾する。外面には一条の沈線を巡らせ、その上下に連続刺突を施す。10・11も口縁部破片であり、二条の沈線を巡らせ、その間にややスパンの長い刺突を行っている。8・11の文様下位には二枚具による条痕調整が残る。12も口縁部破片と想定でき、横方向の一条の沈線が施されるが、残存する部位には刺突は確認できない。

Ⅲ-2群 晩期前半の土器群（15～25） 二枚具による条痕調整（15～23）や縄文地文（24・25）が残存するものが確認できるが、いずれも型式を特定できるような特徴がないため、型式名は不明である。

Ⅲ-3群 晩期の土器（13・14） 13・14は深鉢の底部片で、ともに平底で、底面には木葉痕は確認できない。外面には二枚具による条痕調整を行っている。

（2）土製品（第45図、第23表、図版41）

耳飾（27）、土鍾（26）が1点ずつ出土した。縄文時代晩期初頭～前半に位置づけられる可能性が高い。

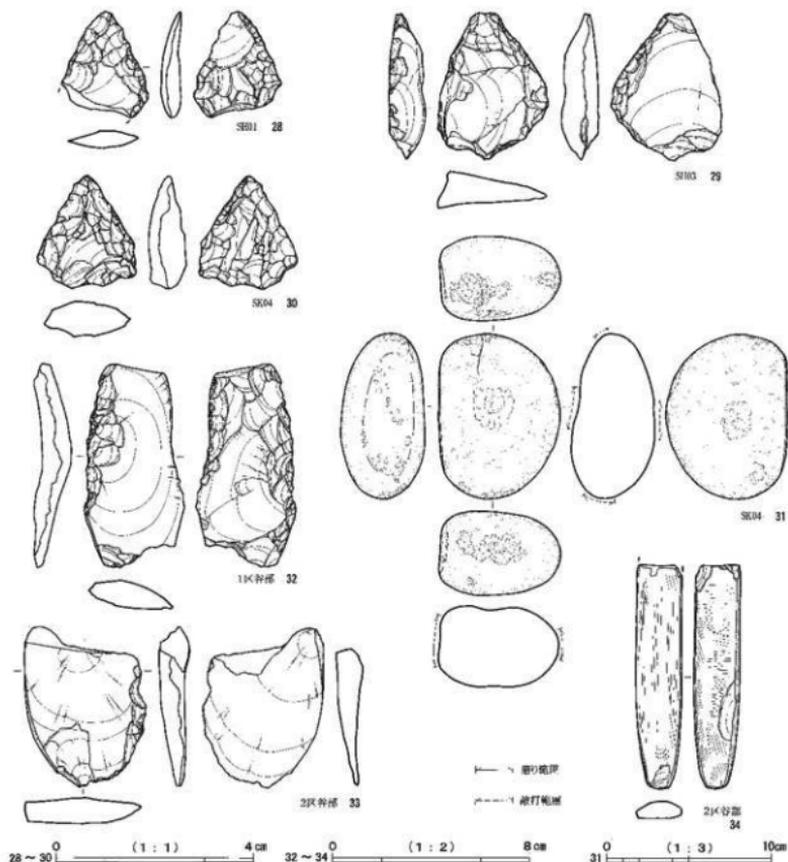
耳飾（耳栓、27）は、円筒形で、断面は上縁と下縁が被厚する鉤〔〕形である。上縁端部には細かい刻み調整が行われている。手づくねで製作され、外面にはミガキ調整が行われている。上縁外径4.5cm、上縁内径3.0cm、下縁外径4.6cm、下縁内径3.0cm、凹部外径4.1cm、高さ2.0cmに復原できる。

土鍾は壺形で、中央に紐孔が開けられている。棒に粘土を巻き付けて製作した可能性が高い。SK05出土の耳飾の色調と胎土と類似する。一方で、規塚B式土器や晩期前半の土器が白色砂を含むのに対し、それを耳飾と土鍾はそれを含まないため、これらの土器とは製作場所が異なる可能性がある。耳飾とともに搬入品の可能性が高い。

（3）石器（第46図、第24表、図版42）

石器・石製品については、第46図に一括して掲載した。これらは基本的に縄文時代に帰属するものが多いが、2区谷部（SR01）から出土した石製品は弥生時代の可能性もある。また遺構から出土しているものがあるが、それぞれの遺構に直接伴うものとは考えにくいことからここでは石器について一括して報告する。

（大谷）



第46図 角庵日遺跡出土石器・石製品実測図

ア 石鏃

2点出土した(28・30)。28は脚部を持たない平基の石鏃である。表裏両面ともに未加工な面を残している。器体は薄く、平面形状は二等辺三角形に近い。また、素材剥片の影響が器体に若干の反りが見られる。基部の一部が折損している。石材は珪質頁岩(暗灰色)である。

30は脚部を持たない平基の石鏃である。加工が全体的に粗い印象を受ける。表裏両面ともに未加工な面を残している。器体は厚く、平面形状は正三角形に近い。基部の一部が折損している。石材は珪質頁岩(灰色)である。

イ 石鏃未製品

1点(29)出土した。小型の幅広い剥片を素材とした石鏃未製品である。折断によって打面部を除去しているが、折断部分がほぼ未加工で残るため厚みがある。折断面に微細な剥離痕が確認できるため、厚みを残したまま整形を行おうとした可能性も考えられる。右側縁は表裏に加工が確認できるが、縁辺のみであり、器体の内側には及んでいない。また、脚部は作出していない。石材は珪質頁岩（灰色）である。

ウ スクレイパー

2点(32・33)図示した。共に横長剥片を横位に用いたサイド・スクレイパーである。32は器体の両側縁に加工を施している。加工は腹面側から施されているが、左側縁は背面側からも施されている。33は器体の右側縁にのみ加工を施しており、左側縁には素材剥片の打面（礫面）が残存している。加工は腹面側から施されており、32に比べて若干高さを持っている。器体の上半部は折損している。石材は2点ともシルト岩である。

エ 磨敲石

1点(31)出土した。やや扁平な楕円礫を素材とした磨敲石である。礫の左面に平滑な磨面を有する。上下両面には弱いが敲打痕が確認できる。また、表裏両面の中央部分に凹みが確認できる。石材は中粒砂岩である。

オ 石製品

1点(34)図示した。扁平な棒状の石製品である。全面が磨かれており、線状痕が確認できる。線状痕は基本的に縦方向だが、裏面の一部（平坦な面）は横方向である。横断面の形状は、表面が弧状であるのに対して、裏面は平坦である。両側面にも平坦な面が、しっかりと作出されている。また、器体の厚さは上部に行くに従って薄くなる。上部は折損しているが、失われた部分に孔が開けられていた可能性も考えられる。石材は圧砕岩である。

カ 角鹿II遺跡出土石製品まとめ

本遺跡から出土した石器、石製品は僅少であり限定されていたため、時期が特定できるような資料は確認できなかった。各出土遺物に大幅な時期差がある可能性も考えられる。

また、石製品は丁寧な作られた資料である。遺構外から出土した理由は不明であるが、近接した遺構に関係する遺物の可能性もあり、今後の類例の蓄積が期待される。

(柴田)

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の調査成果

1 概要

弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土し、当該時期と特定できる遺構についてここで報告する。

弥生時代後期～古墳時代前期（2世紀～4世紀）の堅穴建物2軒が出土した。この他、弥生土器、古式土師器が出土し、それ以外の遺物が出土しない遺構については、当該期に帰属するものとして報告する。この時期の遺物のみが出土したのは、掘立柱建物、土坑がある。

以下に、遺構ごとに報告する。

2 堅穴建物

(1) 1号堅穴建物 (SH01, 第38・40・47・48図, 第17・23表, 巻頭図版6, 図版25・42)

位置 SH01は2区最北端のW2グリッドに位置する。他の堅穴建物との重複関係はない。

特徴 方形の堅穴建物である。確実な主柱穴は3本確認でき（P1～P3）があり、もう一本については確認できなかった。建物の主軸は北北西を向く（N-32°-W）。床面には貼床（第47図6層）が構築されている。壁際に沿って壁溝が巡らされる。幅は0.2～0.3mである。壁溝の覆土は粘土であり、壁材（板材）等を固定するために粘土を利用していった可能性が想定できる。

建物の規模は、南北×東西（以下、同じ）で約3.5×3.8m、主柱穴はP1～P2間（芯芯間）が2.35m、P1～P3間が1.75mであり、一定していない。

炉は焼土の範囲が該当する可能性が高い。焼土は主柱穴P2の南側約0.5mで確認でき、炉は建物の東側に偏在した可能性が高い。0.25m程の大きさである。貯蔵穴の可能性のある土坑（SK27）は南東隅角で確認できる。隅丸方形で一辺約0.5m、深さ0.4mである。

遺物の出土状況 建物の南東隅角部、SK27に接するように土師器碗形土器1点（35）が出土した。また、このほか覆土や貼床内から弥生土器片、石器（28）などが出土した。

出土遺物 土師器碗形土器1点を図示した。石鏃（28）については縄文時代と判断し、第2節で報告している。

土師器碗形土器（35）は、高台付である。高台は短くハ字形に垂下する。碗部は深い半球形であり、口縁部は見込みからやや湾曲しながら立ち上がるもので、口縁端部は強くなで薄く仕上げられる。内外面ともに丁寧なミガキ調整が行われている。復原で口径10.7cm、底部径4.3cm、器高6.2cmである。

時期 主柱穴（P1）は柱穴が重複しており、P2も重複する可能性があることから、建物が建て替えられた可能性がある。

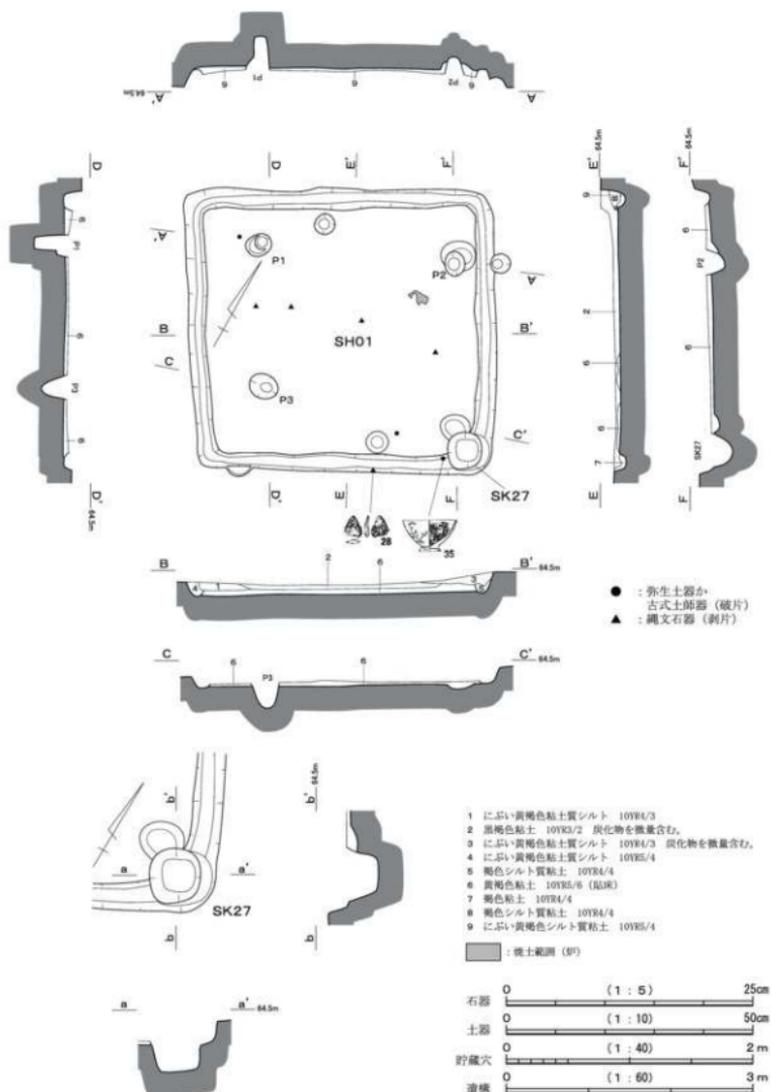
堅穴建物が平面方形であること、出土した土師器はミガキ調整を丁寧に行うもので、東遠江の菊川式土器にはない形態であることを考慮すると、古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。

(2) 2号堅穴建物 (SH02, 第38・41・48・49図, 第17・23表, 図版26・43)

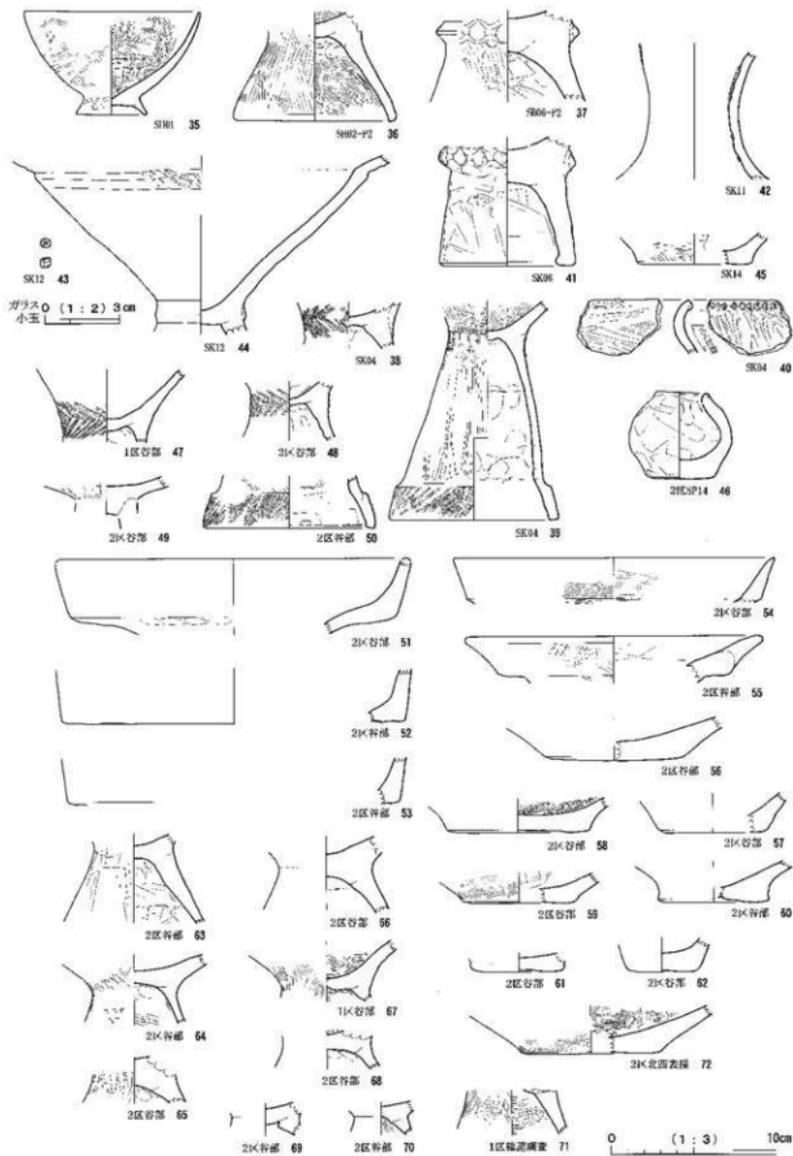
位置 SH02は5区北西部のQ2グリッドに位置する。他の堅穴建物との重複関係はない。

特徴 方形の堅穴建物である。主柱穴と壁溝、貼床のみ確認した。確実な主柱穴は2本確認でき（P1・P2）があり、残りの2本については調査区外にあたるため確認できない。ただし、P1とP2を結んだラインと壁溝は平行しないため、P1については主柱穴ではない可能性もある。

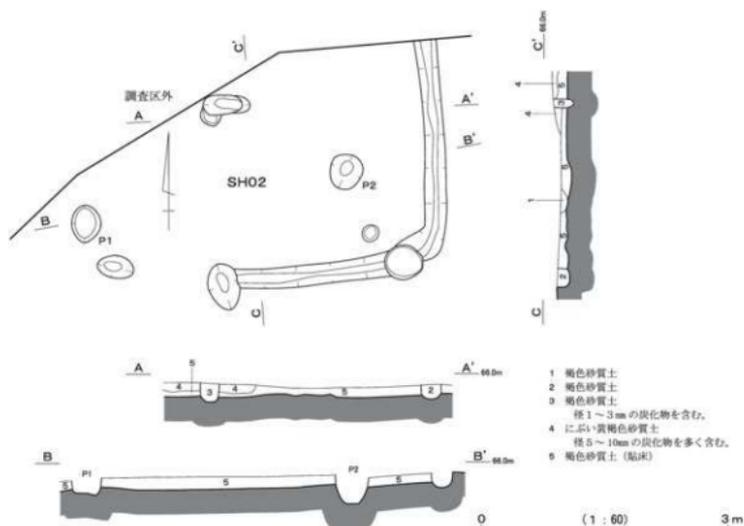
建物の主軸はほぼ真北を向く（N-1°-W）。残存規模は、2.9m以上×5m以上である。床面には貼床（第49図5層）が構築されている。壁際に沿って壁溝が巡らされる。幅は0.2～0.3mである。壁溝



第47図 角産II遺跡 SH01実測図



第48図 角庵日遺跡出土弥生土器・土師器(弥生時代後期~古墳時代前期)



第49図 角庵Ⅱ遺跡 SH02実測図

の覆土は粘土であり、壁材（板材）等を固定するために粘土を利用していた可能性が想定できる。

建物の規模は約 3.5×3.8 m、主柱穴はP1-P2間（芯芯間）が2.35m、P1-P3間が1.75mであり、一定していない。

炉・貯蔵穴などの施設は確認できない。

遺物の出土状況 P2から弥生土器台付甕1点（36）が出土した。

出土遺物 台付甕1点（36）が出土した。

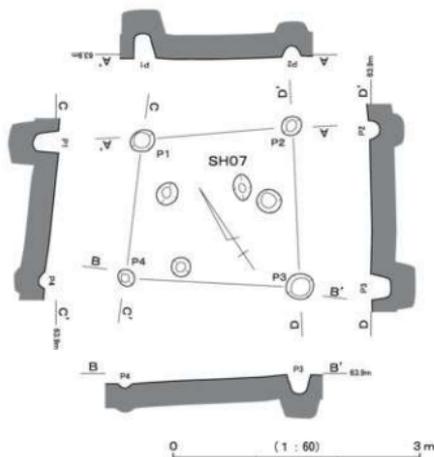
台付甕1点（36）は、台部片である。台部は八字形に垂下した後、底端部を内側に摘み出されている。内外面ともにハケ目調整が行われている。

時期 竪穴建物の平面形態が方形であることから、古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。

（3）7号竪穴建物（SH07，第38・40・50図，第17表，図版32）

位置 2区W1グリッドに位置する。SB02と重複関係にあるが、先後関係は不明である。

特徴 主柱穴のみ確認した。主柱穴を結



第50図 角庵Ⅱ遺跡 SH07実測図

んでも正方形にならないこと、主柱穴間の距離が一定ではないことから、竪穴建物ではない可能性もある。

建物の主軸はほぼ東北東（ $N-32^{\circ}-E$ ）を向ける。主柱穴間距離はP1-P2が約1.8m、P4-P3が約2.1m、P1-P4間が1.65m、P2-P3間が2.0mである。

炉・貯蔵穴、貼床などの施設は確認できない。

遺物の出土状況 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないため時期を特定できないが、弥生時代後期～古墳時代前期の一時に位置づけられる可能性が高い。

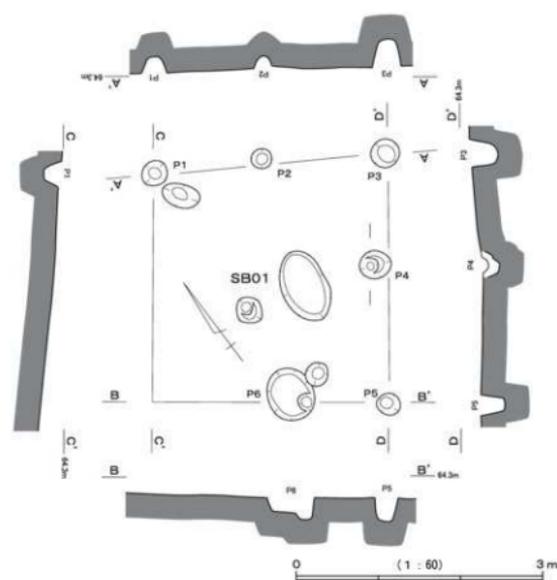
3 掘立柱建物

ここでは、掘立柱建物のうち、弥生土器、古式土師器以外の土器が出土していないものを報告する。したがって、遺物が出土していない掘立柱建物も多いことから、すべてが当該時期に帰属するか確定的ではないことを断っておく。

また、ここで報告するすべての掘立柱建物が当該期に帰属するものとした場合には、竪穴建物との比率では、掘立柱建物が竪穴建物の3倍以上となるため、掘立柱建物は柱の根入れが深く残存しているものが多いが、竪穴建物については削平されてしまったものと考えたい。

(1) 1号掘立柱建物（SB01，第38・40・51図，第18表，図版32）

位置 2区V2・W2グリッドに位置する。SB02と重複関係にあるが、先後関係は不明である。



第51図 角庵II遺跡 SB01実測図

特徴 SB01は梁間2間×桁行2間（以下、梁間×桁行とし、2×2間と記述する）の、約2.9×3.1mのほぼ正方形の掘立柱建物（P1～P6で構成）であり、棟をほぼ北東（ $N-36^{\circ}-E$ ）に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.1倍である。梁と桁は斜交する。梁・桁ともに柱筋が通らない。梁の柱間は北側で、西側から約1.3m、1.5m、南側で1.2m、桁の柱間は東側で北側から1.4m、1.7mであり、一定しない。

柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.3～0.6m、深

さ約0.1～0.3mである。P6が0.6mとやや大きいことから、抜き取られた可能性がある。

建物の構造からみると、SB01は規格性の低い建物である。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は弥生土器小片のみであり、図化できない。

時期 時期を特定できるような遺物がないため時期を特定できないが、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(2) 2号掘立柱建物 (SB02, 第38・40・52図, 第18表, 図版32)

位置 2区V1・2、W1・2グリッドに位置する。SB01、SH07と重複関係にあるが、切合関係がなく先後関係は不明である。

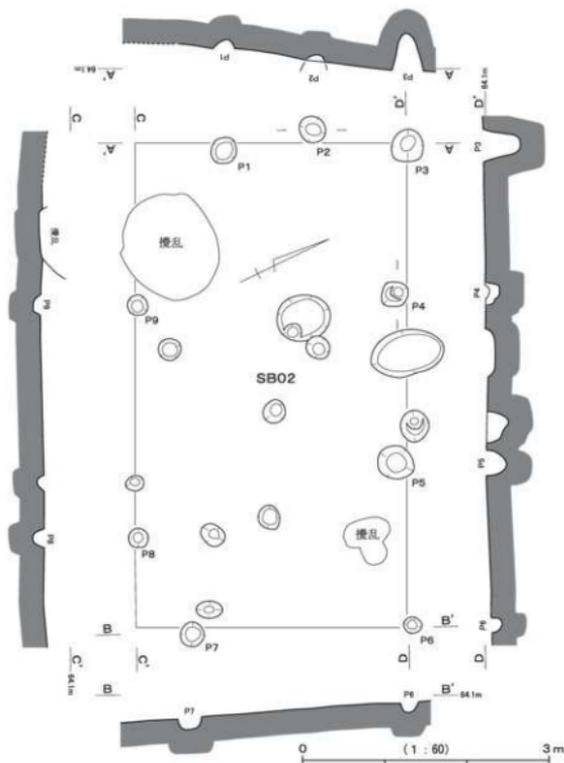
特徴 SB02は3間×

3間の可能性が高い、約3.3×5.9mの南北に長い建物の掘立柱建物 (P1～P9で構成) であり、棟は北西 (N-64°-W) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁は斜交する。梁・桁ともに柱筋が通らない。梁の柱間は北側で、西側から約1.1m、1.1m、1.1m、南側で0.7m、2.2m、桁の柱間は西側で北側から約2.0m (推定)、2.85m、1.1m (推定)、東側で北側から1.8m、2.2m、1.9mであり、一定しない。梁・桁ともに身舎柱は正対しない。

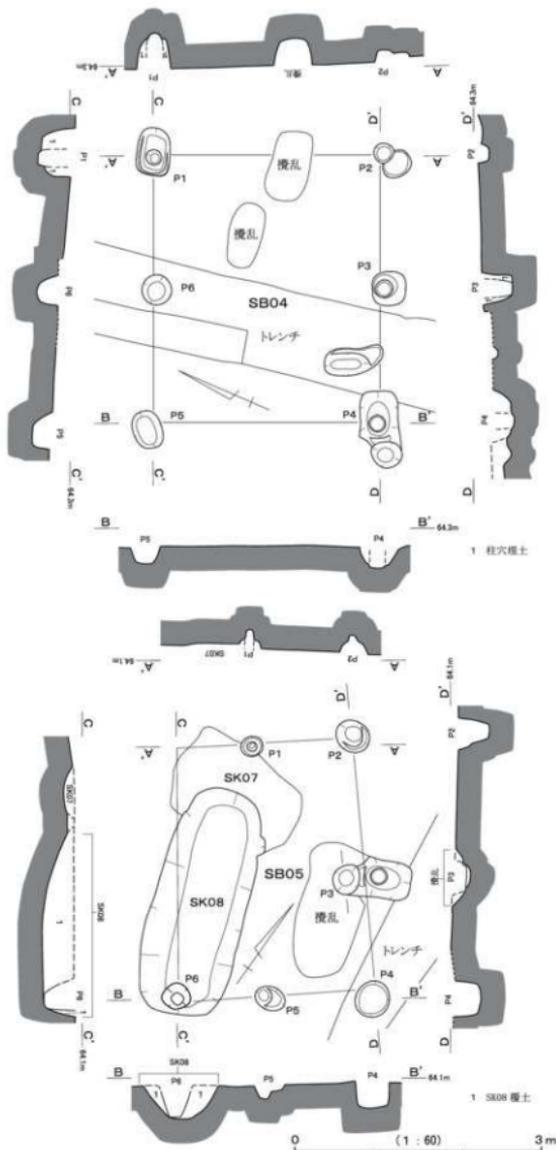
柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.25～0.45m、深さ約0.1～0.4mである。

建物の構造からみると、SB02は規格性の低い建物である。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は弥生土器小片のみであり、図化できない。



第52図 角庵II遺跡 SB02実測図



第53図 角亀II遺跡 SB04・05実測図

時期 時期を特定できるような遺物がないため時期を特定できない。弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる可能性が高いものの、より新しい時代のものである可能性も否定できない。

(3) 4号掘立柱建物 (SB04, 第38・40・53図, 第18表, 図版33)

位置 2区W1・2グリッドに位置する。SB05と重複関係にある可能性があるが、先後関係は不明である。

特徴 SB04は梁間1間×桁行2間の、約2.8×3.3mのほぼ正方形の掘立柱建物 (P1～P6で構成) であり、棟はほぼ東 (N-66°-E) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁はほぼ直交する。梁・桁ともにほぼ柱筋が一直線となる。桁の柱間は東側で北側から1.65m、1.65m、西側で1.65m、1.65mであり、一定である。身舎柱は正対する。

柱穴は、P1・P4・P5は隅丸長方形であり、P3が隅丸方形、P2・P6が円形である。P1・P3・P4はそのほぼ中央に柱痕が確認できる。柱穴

の大きさは最も小さいP2が直径約0.25m、最も大きいP4が長辺約0.6mである。深さ約0.15～0.3mである。柱穴の形状が異なることからSB04は建て替えられた可能性がある。

建物の構造からみると、SB04は規格性の高い建物である。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は弥生土器か土師器の小片のみであり、図化できない。

時期 時期を特定できるような遺物がないため時期を特定できないが、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる可能性が高い。

(4) 5号掘立柱建物 (SB05, 第38・40・53図, 第18表, 図版33)

位置 2区W1グリッドに位置する。SB06、SK07・08と重複関係にあり、SB04と重複関係にある可能性があるが、先後関係は不明である。SK07・08よりは古いと考えられる。

特徴 SB05は梁間2間×桁行2間の、約2.3×3.1mの南北にやや長い掘立柱建物(P1～P6で構成)であり、棟のほぼ北西(N-40°-W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁は柱筋がややずれるが、桁はほぼ一直線である。梁の柱間は北側で西側から約1.15m、1.15m、南側で西側から1.1m、1.2mである。桁の柱間は東側で北側から1.7m、1.4mであり、一定しない。身舎柱は正対しない。

柱穴は、円形であり、大きさは直径約0.3～0.45m、深さは約0.15～0.4mであり、一定していない。

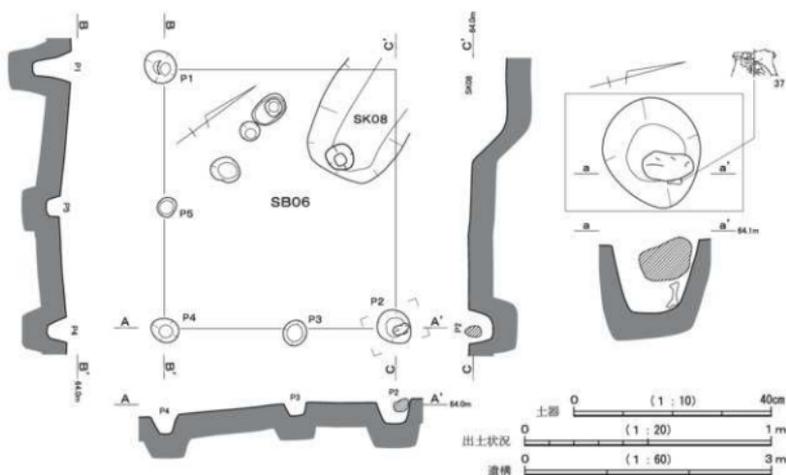
建物の構造からみると、SB05は規格性の低い建物である。

遺物 出土遺物は弥生土器小片のみであり、図化することは困難であった。

時期 SB05は帰属する時期が明確ではないものの、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる。

(5) 6号掘立柱建物 (SB06, 第38・40・48・54図, 第18・23表, 図版40・43)

位置 2区W1グリッドに位置する。SB05、SK08と重複関係にある。SB05との先後関係は不明、SK08



第54図 角鹿II遺跡 SB06実測図

よりは古い可能性が高い。

特徴 SB06は梁間2間×桁行2間、約2.8×3.2mの南北にやや長い掘立柱建物（P1～P5で構成）であり、棟はほぼ北西（N-40°-W）に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁は柱筋がややずれるが、桁はほぼ一直線である。梁の柱間は東側で北側から約1.6m、1.2m、桁の柱間は南側で西側から1.7m、1.5mであり、一定しない。

柱穴は、円形であり、大きさは直径約0.3～0.45m、深さは約0.15～0.4mであり、一定していない。建物の構造からみると、SB06は規格性の低い建物である。

遺物の出土状況 P2の底部に接するように横倒しの状態で弥生土器（あるいは土師器）台付甕の台基部片が出土した。その上位には20cm大の礫があることから、抜き取り後流入した土器の可能性が高い。

出土遺物 出土遺物は弥生土器（あるいは土師器）台付甕（37）である。

台付甕（37）は台部と甕の接合部分の破片である。台部の内側はケズリ調整、外側はミガキ調整が施されている。接合部には後述するSK08出土の台付甕同様、接合部に粘土紐を巻き付け突起させ、それに棒状工具で粗く刻み調整を行うものである。

時期 時期を特定できないが、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。

（6）7号掘立柱建物（SB07, 第38・40・55図, 第18表, 図版35）

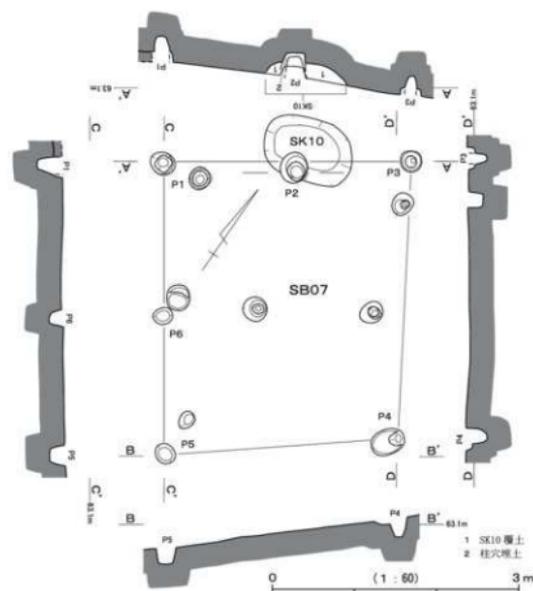
位置 2区VX1・WX1に位置する。SK10と重複関係にある。

特徴 SB07は2×2間の可能性の高い、南北に長い掘立柱建物（P1～P6で構成）であるが、後述するように想定する身舎柱の位置が正対せず、桁と梁も直角に交わらないことから、掘立柱建物ではない可能性もある。

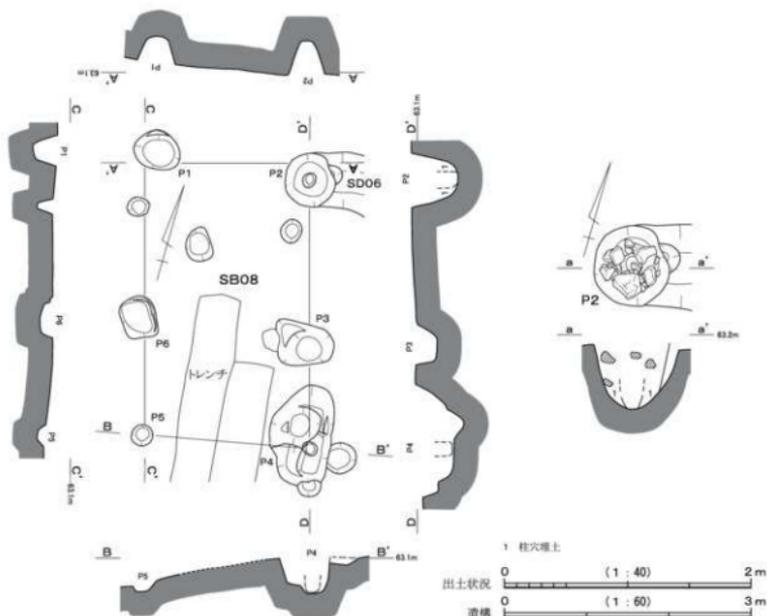
SB07は梁間2間×桁行2間の可能性が高い、約3.0×3.6mの南北にやや長い掘立柱建物（P1～P6で構成）であり、棟はほぼ北西（N-35°-W）に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋がややずれるが、桁はほぼ一直線である。桁の柱間は西側で北側から約1.9m、1.7m、梁の柱間は北側で西側から約1.6、1.4mであり、一定しない。

柱穴は、円形であり、大きさは直径約0.25～0.4m、深さは約0.15～0.3mであり、一定していない。

建物の構造からみると、SB07は規格性の低い建物である。



第55図 角鹿II遺跡 SB07実測図



第56図 角庵Ⅱ遺跡 SB08実測図

出土遺物 弥生土器・土師器の小片のみであり、図示できない。

時期 時期を特定できる遺物はないが、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる可能性がある。

(7) 8号掘立柱建物 (SB08, 第38・40・56図, 第18表, 図版34・35・40)

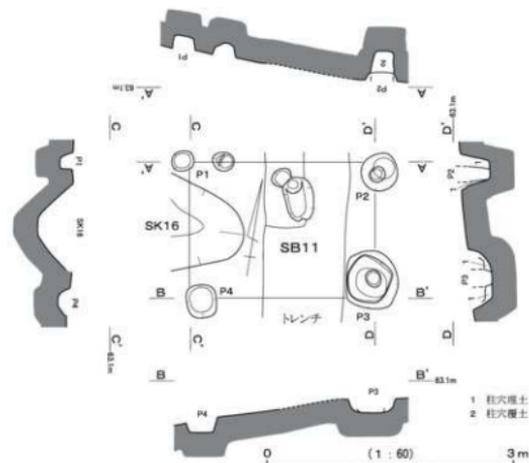
位置 2区WX1・2に位置する。SB09と重複関係にあり、SB09は古墳時代後期以降の建物であることから、SB09よりは古く位置づけられる。

特徴 SB08は梁間1間×桁行2間の、約2.0×3.5mの南北にやや長い掘立柱建物(P1～P6で構成)であり、棟はほぼ北側(N-15°-W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋がほぼ一直線で、東西で平行であるが、梁は南北で平行ではない。桁の柱間は東側で北側から約2.1m、1.4m、西側で約1.9m、1.4mであり、一定しない。身舎柱は正対しない

柱穴は、円形、隅丸方形であり、大きさは直径(一辺)約0.25～0.7m、深さは約0.1～0.5mであり、一定していない。また、柱穴P2は底面から0.3mほど上位で柱痕を取り囲むように石材が配置されており、柱を固定するための造作と想定できる。ただし、他の柱穴では確認できない造作であり、P2についてはSB08に伴うものは抜き取られ、別の建物に伴う柱穴が再度掘削されたものの可能性もある。

建物の構造からみると、SB08はやや規格性の高い建物であるが、P1～P6～P5と、P2～P3～P4の櫛列の可能性も排除できない。

出土遺物 遺物は弥生土器・土師器の小片のみであり、図化できない。



第57図 角塚II遺跡 SB11実測図

時期 時期を特定できるような遺物がないことから時期を確定できないが、古墳時代後期以降の遺物が出土していないことから、消極的ではあるが、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられようか。

(8) 11号掘立柱建物 (SB11, 第38・40・57図, 第18表, 図版34・35)

位置 SB11は2区WX2に位置する。SB10と遺構としては重複関係にあるが、SB10は古墳時代後期以降の建物であることから、SB11が弥生時代後期～古墳時代前期であると

すれば、SB11のほうが古いことになる。

特徴 SB11は梁間1間×桁行1間の、約1.7×2.3mのやや東西に長い掘立柱建物 (P1～P4で構成) であり、竪穴建物の主柱穴の可能性もある。棟はほぼ東北東 (N-75°-E) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁は斜交する。梁・桁ともに平行ではない。

柱穴は、円形、隅丸方形であり、大きさは直径 (一辺) 約0.25～0.7m、深さは約0.15～0.35mであり、一定していない。大型の柱穴であるP3は抜き取りが行われた後、新たに柱が据えられた可能性がある。P2・P3は柱痕が残存しており、直径約0.15～0.2m程の丸太が使用された可能性がある。

SB11は構造からみると、規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物は弥生土器・土師器の小片であり、図化できない。

時期 時期を特定できるような遺物がないことから時期を確定できないが、古墳時代後期以降の遺物が出土していないことから、消極的ではあるが弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる。

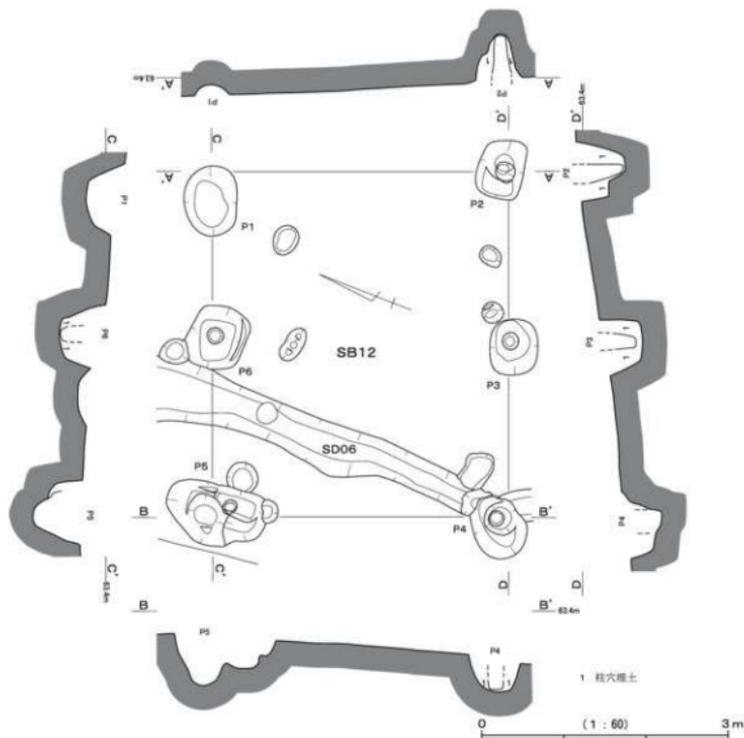
(9) 12号掘立柱建物 (SB12, 第58図, 第18表, 図版34・36)

位置 2区WX1・2, XX1グリッドに位置する。SB08・09と重複関係にあり、SB09よりは古く、SB08との先後関係は不明である。

特徴 SB12は梁間1間×桁行2間の、約3.6×4.2mの東西に長い掘立柱建物 (P1～P6で構成) であり、棟はほぼ東北東 (N-69°-E) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁はほぼ直交する。梁は北側の柱筋がややずれるが、桁はほぼ一直線である。桁の柱間は南側で東側から約2.1m、2.1m、北側で東側から約1.8～2.1m、2.1mであり、ほぼ一定する。桁の身舎柱は正対している。

柱穴は、隅丸長方形、楕円形であり、他の遺構と切合関係があり大きさが不明確なP5を除いて、長辺 (長軸) は約0.7～0.8m、深さは約0.4～0.5mであり、ほぼ一定している。柱穴内部には柱痕が残存しており、柱には約0.2mの丸太が用いられていた可能性が高い。柱穴には根固め石等は確認できない。

建物の構造からみると、SB12はやや規格性の高い建物である。



第58図 角庵Ⅱ遺跡 SB12実測図

出土遺物 出土遺物は弥生土器・土師器の小片であり、図化できない。

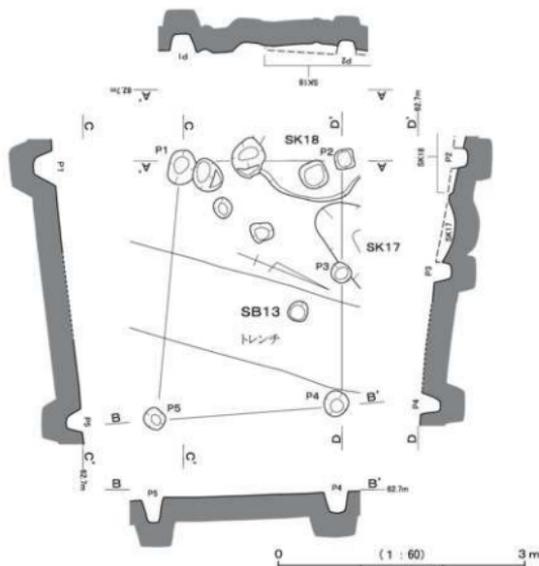
時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代後期以降の遺物が出土していないことから、消極的ではあるが弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられようか。その場合は、SB08と柱穴の形状が類似することからSB08と同時期に建設された可能性が高い。

(10) 13号掘立柱建物 (SB13, 第38・40・59図, 第18表, 図版34・36)

位置 SB13は2区WX2グリッドに位置する。SB10・SB14と遺構としては重複関係にあるが、SB10・14ともに古墳時代後期以降の建物であることから、それらよりは古い可能性が高い。

特徴 SB13は梁間1間×桁行2間の、約2.2×3.0mの東西に長い掘立柱建物 (P1～P5で構成) であり、棟はほぼ東北東 (N-67°-E) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁はP1-P2間とP2-P4間は直交するが、P1-P6間とP4-P5間は斜交する。桁について北側はほぼ一直線であるが、それに対し南側は平行しない。桁の柱間は北側で西側から約1.4m、1.6mであり、一定していない。桁の身舎柱については、失われているため正対していたかどうか不明である。

柱穴は、隅丸長方形、円形であり、他の遺構と切合関係があり大きさが不明確なP1を除いて、長辺



第59図 角庵II遺跡 SB13実測図

(直径)は約0.2～0.4 m、深さは約0.2～0.25 mであり、ほぼ一定している。柱穴には根固め石等は確認できない。

建物の構造からみると、SB13は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物は弥生土器・土師器小片で、図化できない。

時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代後期以降の遺物が出土していないことから、消極的ではあるが弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられようか。

4 性格不明遺構

(1) SX03 (第38・41・60図, 第22表, 図版26・31)

位置 5区R2・3、S2・3グリッドに位置する。

特徴 現状で平面五角形(ホームベース)のような形状を示す遺構である。床面には砂質土が確認でき、貼床の可能性があることから、堅穴建築物の一部分であることも否定できないが、柱穴や炉などは確認できないためそれとは特定できない。規模は南北長約4.1m、東西幅3.9m以上である。

出土遺物 弥生土器・土師器小片が出土したが、小片のため図化できない。

時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代後期以降の遺物が出土していないことから、消極的ではあるが弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられようか。その場合は、SB05と柱穴の形状が類似することからSB05と同時期に建設された可能性が高い。

5 土坑

ここでは弥生時代後期～古墳時代前期以前の遺物が出土した土坑を報告する。

(1) 土墳墓の可能性のある土坑 (第38・40・48・61・62図, 第20・23・26表, 巻頭図版7, 図版28・42・43)

ここで報告する2区XXIグリッドに位置するSK11～SK14の4基は近接しており、平面形が長方形で同形態であること、同一の主軸方位を取ることから、非常に強い関連性を有していた可能性が高い。また、SK12からはガラス小玉が1点出土していることを重視すれば土墳墓群であることを想定できる。こ

の想定が許され、後述する時期不明のSD02・05幅が0.3mと狭小である点は考慮すべき課題であるが、SD02はこれらの土坑と方位が一致すること、SD05はこれらの主軸方位と直交することから、SD02・SD05がこれらの遺構に伴うとすれば、溝に囲まれた方形周溝墓であった可能性も排除できない。この場合の方形周溝墓の大きさは東西6.5m以上、南北6.4m以上であった可能性が高い(第62図)。

SK11 SK11は東西に長い長方形平面で、断面箱形である。東西約2.1m、南北0.8m、深さ0.2mである。内部底面の10cm以上上位から弥生土器壺頸部(42)が出土した。

壺は頸部片で、頸部は直立した後緩やかに外反するもので、頸部直径は細く、長い印象を受ける。表面の磨減が著しいため時期を特定することは困難であるが、無文であること、肩部に段をもたないことなどから白岩式土器の影響が残る菊川式古段階、弥生時代後期前葉に位置づけられようか。

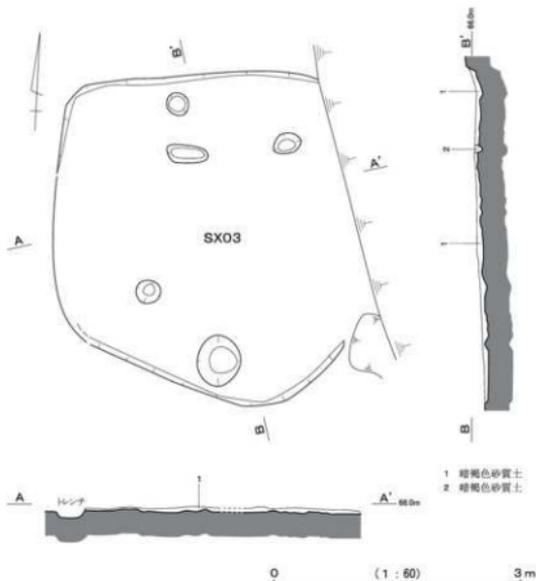
なお、土層の堆積状況を観察すると、底面にほぼ水平に3層が堆積し北側壁沿いに2層が堆積している。1層はレンズ状堆積である。想定通り、土壇墓であるとすれば、3層が底板、2層が側板の裏込め、1層が埋土および流入土と考えることができよう。

SK12 SK12は東西に長いやや不整形な長方形平面で、断面箱形である。大きさ、形状ともにSK11に類似する。東西約2.3m、南北約1.2m、深さ約0.3mである。底面から約25cm上位から弥生土器高杯(44)が出土した。また、出土位置は不明確であるが、ガラス小玉1点(43)が出土した。

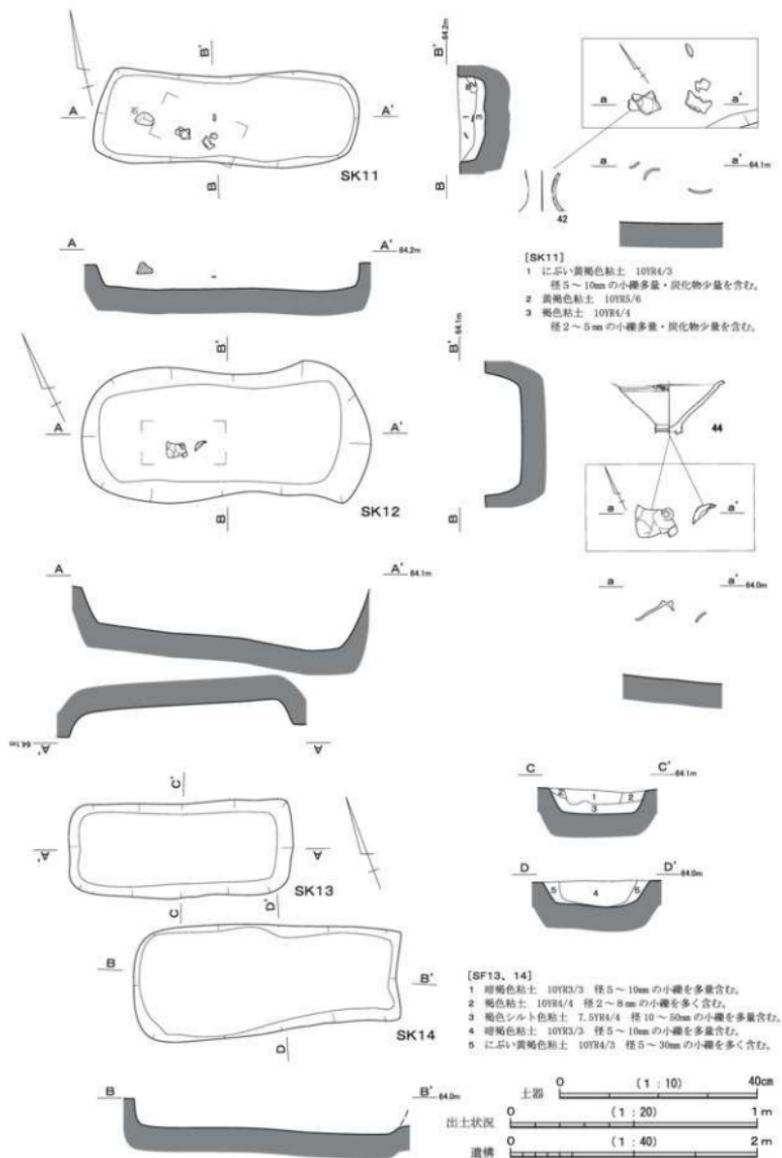
弥生土器高杯(44)は菊川式土器で、接合部から杯部の破片である。接合部は突起をもち、無文である。口縁端部は欠損するが、杯底部から逆八字形に直線的に開いた後、内側に明瞭な屈曲(稜線)をして口縁端部に至るものである。接合部に羽状刺突をもたないこと、内側に明瞭な突起を有することから菊川式古段階、弥生時代後期前葉に位置づけられる。

ガラス小玉(43)は、色調はスカイブルーである。製作技法は不明確である。直径4mm、高さ4mm、孔径1mmである。

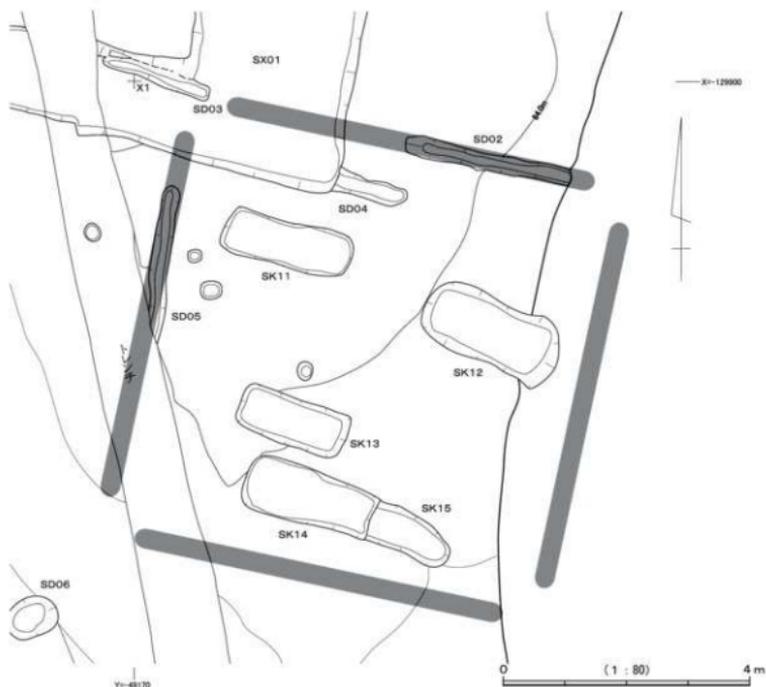
SK13 SK13は東西に長い平面長方形、断面箱形の土坑である。大きさ、形状ともにSK11に類似する。東西約1.8m、南北約0.75m、深さ約0.2mである。出土遺物はないことから、時期は確定できないが、



第60図 角庵II遺跡 SX03実測図



第61図 角塚II遺跡 SK11～14実測図



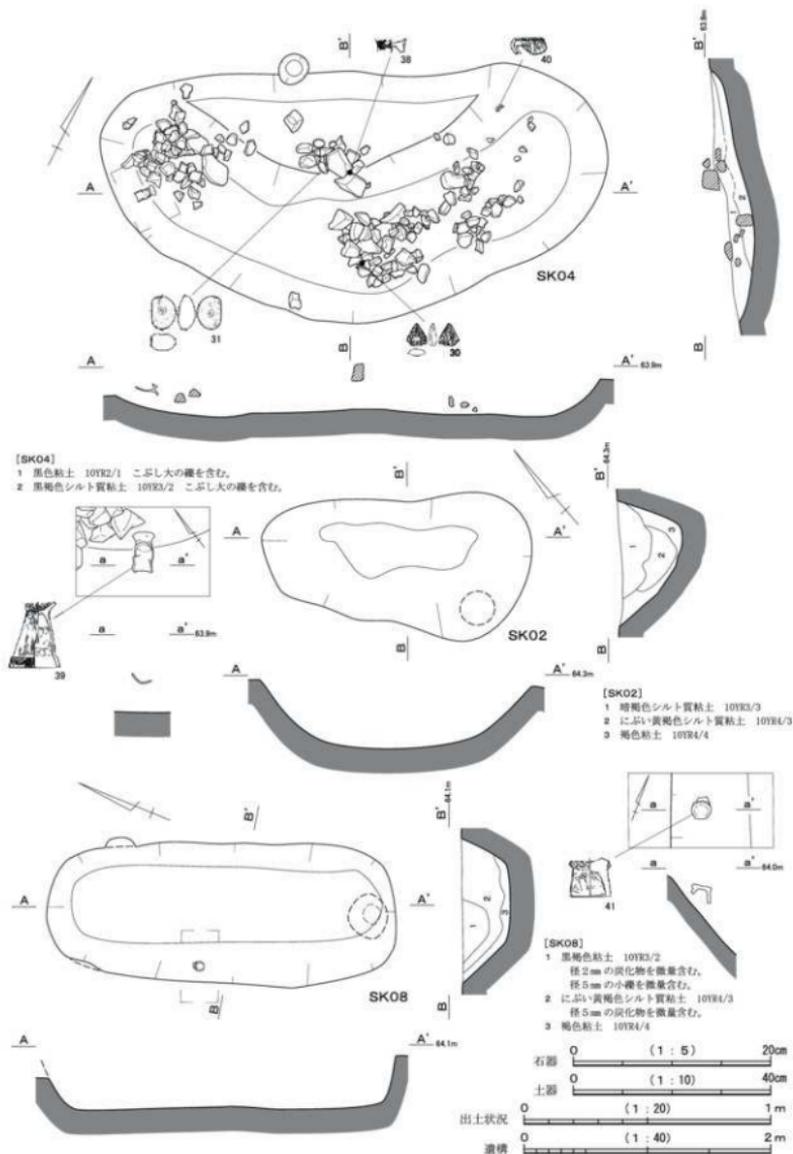
第62図 角庵Ⅱ遺跡 SK11～14とSD02・05の関係(方形周溝墓か)

SK11と類似することから、弥生時代後期前葉に帰属する可能性が高い。

なお、土層の堆積状況(C-C')を確認すると、底面に水平に3層が堆積し、その上位に南北の壁沿いに2層が、その中央に1層が堆積している。SK13が土壇墓であり、木棺が使用されたと仮定すれば、この土層を参考にすると、3層が底板、2層が側板の裏込め、1層が棺内の堆積土と考えられる。この想定が正しければ、底板の上に側板が載せられていた木棺が使用された可能性を想定できようか。

SK14 SK14は東西に長い平面長方形、断面逆台形の土坑である。SK13の南約0.2mに位置し、SK13と平行する。東西約2.1m、南北幅約0.95m、深さ約0.2mである。SK13と近接するうえ、平行して掘削されており、強い関連性が想定できる。弥生土器壺(45)が出土している。壺底部のため時期を特定することは難しいが、SK11・12同様、弥生時代後期前葉に位置づけられようか。

なお、堆積した土層を観察すると南北壁沿いに5層、その中央に4層が確認できる。4層の下には5層が一部入り込んでおり、SK14が土壇墓とした場合、5層が底板と側板の裏込めと考えられることから、SK11・13同様、底板の上に側板が載る木棺が使用された可能性が高い。



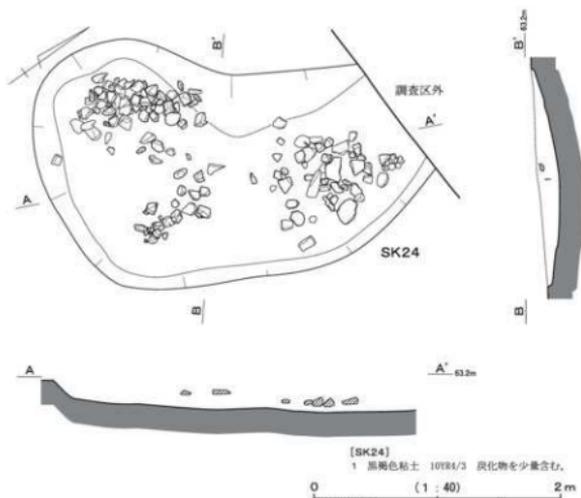
第63図 角庵II遺跡 SK02・04・08実測図

(2) 土坑 (第38・40・48・63・64図, 第20・23・24表, 図版25・27・42・43)

ここでは上述した土墳墓の可能性のある土坑以外のものについて報告する。

SK02 (図版25)

SK02は2区V2グリッドに位置する。平面は不整形な楕円形で、断面はU字形である。南北約2.2m、東西約1.25m、深さ約0.5mである。出土遺物は弥生土器あるいは土師器小片であり、図示できない。帰属時期は弥生時代後期～古墳時代前期の一時期である可能性が高い。



第64図 角庵II遺跡 SK24実測図

SK04 (図版27・42) SK04は2区V1・2グリッドに位置する。中央がやや不整形な半月形平面で断面皿状の土坑である。内部には5～30cm前後の石材が纏まった範囲が4箇所確認できる。南北約2.05m、東西約4.1m、深さ約0.2mである。内部からは第2節で報告した縄文時代の石鏃(30)・磨礫石(31)のほか、弥生土器高杯(38・39)・台付甕(40)などが出土した。

高杯(39)は、菊川式土器の接合部から脚部の破片である。脚部はハ字形に垂下した後、脚端部は明瞭な段を設けて底部に至るものである。脚端部には縄文が施文され、脚部はミガキ調整が行われている。高杯(38)は菊川式土器の脚部と杯部の接合部破片であり、接合部は接合後接合部に粘土を充填し、その上に羽状刺突を加えている。台付甕(40)は菊川式土器の口縁部破片で、口縁部は頸部から外上方に立ちあがった後、口縁部を肥厚させ、口唇部外面に細かいキザミ調整を行うものである。弥生土器は高杯の脚端部に明瞭な段をもつこと、接合部に羽状刺突を施すことなどの特徴から、菊川式土器中段階(中嶋1988ほか)、弥生時代後期中葉に位置づけられる。

SK08 (図版25) SK08は2区W1グリッドに位置する。平面が南北に長い隅丸長方形で、断面は逆台形を呈する。南北約2.85m、東西約1.15m、深さ約0.4mである。覆土中から弥生土器か土師器の台付甕台部片(41)が出土した。41はほぼ垂直に垂下する台部で、底端部は内側に向かって突起する。内外面ともに板ケズリ調整が行われている。胴部と台部の接合部には粘土紐が一条巻きつけられ突起している。その突起部分には、棒状工具による単位の大きな刻みが施されている。時期の特定が難しく、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられようか。

SK08は埋葬施設の可能性のあるSK11～14と形態的に類似しており、土墳墓の可能性は排除できない。

SK24 (図版27) SK24は1区UX1・2に位置する。平面不整形な南北に長く字形で、断面は皿状である。内部にはSK04同様3箇所5～20cmの礫の集中箇所が確認できる。規模は南北(長軸)約3.2m

以上、東西（短軸）約2.1m、深さ約0.2mである。出土遺物は弥生土器小片のみである。SK04と同様の性格が考えられる。帰属時期については、SK04と同時期で、弥生時代後期～古墳時代前期の一時期に位置づけられる可能性が高い。

6 遺構に直接伴わない遺物

遺構に直接伴わない、あるいは別の時期に帰属する遺構から出土した弥生時代の遺物について報告する。弥生土器・土師器のみである。器種には高杯、複合口縁壺、二重口縁壺、台付甕、ミニチュア壺形土器がある（第48図、第23表、図版40・42・43）。

遺構外出土の遺物は主に1区と2区間の浅谷から出土しており、46のみが小穴から出土した。

ミニチュア土器 2区北部、W2グリッド、SH01の南側で確認したSP14から出土した（図版40）。ミニチュア壺形土器（46）である。短頸壺であり、胴部の形態は、下膨れし、胴中央部やや下に屈曲部が確認できることから、菊川式土器を模倣した可能性がある。外面には板ナデ調整あるいは丁寧なナデ調整、内面はナデ調整を行っている。口径3.2cm、胴部最大径6.1cm、器高5.3cmである。文様がほどこされないことから時期は不明である。

高杯 1・2区谷部から出土している。47・48は杯部と脚部の接合部片で、脚部は接合した後粘土を充填し、その上に羽状刺突を1段施すものである。この2者は菊川式土器中段階、弥生時代後期中葉に位置づけられる可能性が高い。50は脚底部片で、脚部には明瞭な段を有し、脚底部外面には縄文を施している。これは、菊川式土器前段階～中段階、弥生時代後期前葉～中葉に位置づけられる可能性が高い。

49は古式土師器（元屋敷式土器）の高杯の可能性が高く、外面はミガキ調整が行われている。図上で破断面にしている部分は端面の可能性もあり、その場合には上に口縁部が貼り付けられる小型の高杯あるいは小さな皿状の杯部となる可能性が高い。いずれにしても菊川式土器ではないことから、古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。

壺 壺は受口状口縁壺（51～54）と、口縁部がハ字形に開く二重口縁壺（55）がある。隣接する上ノ平遺跡（静岡理文研2008）の事例からみると、受口状口縁壺には口縁部外面に棒状浮文が貼り付けられていた可能性がある。いずれも古式土師器に位置づけられる可能性が高い。

56～62・72は壺底部で、平底の56と、平底に近いがやや上げ底となる58～62・72がある。58や61の事例からはまず円形の粘土紐を作った後、その内部を充填するように底部を形成したとも考えられる。後者は古式土師器に位置づけられる可能性がある。

台付甕 いずれも台基部を図示したものである（63～71）。台基部径が小さい69・70は高杯の可能性を排除できない。63は外面ミガキ調整、64・65・67はハケメ調整である。

7 小結

土坑SK04やSK12から出土した遺物の方が堅穴建物SH01から出土したものよりも古く位置づけられる。SK12の性格は不明確であるが、ガラス小玉を伴うことから土壌墓などが存在した可能性が高く、角庵Ⅱ遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期は、弥生時代後期の墓域から古墳時代前期の集落へ変遷した可能性を想定できる。

第4節 古墳時代終末期の調査成果

1 概要

古墳時代終末期の遺物が出土し、古墳時代と特定できる遺構についてここで報告する。

古墳時代終末期（飛鳥時代，7世紀）の竪穴建物3軒、掘立柱建物3棟、土坑1基、竪穴建物の可能性のある遺構4棟が出土した。竪穴建物は、調査区南側で重複関係が確認できることから、丘陵先端近くに建物を築く意思が働いていたものと想定できる。

遺物は、須恵器、土師器が出土している。

以下に、遺構ごとに報告する。

2 竪穴建物

ここでは、この時期に該当する竪穴建物3軒と、この時期に該当し、竪穴建物の可能性が高い遺構4軒について報告する。

(1) 3号竪穴建物 (SH03, 第38・41・65～67図, 第17・23表, 巻頭図版6, 図版28・29・31・44)

位置 SH03は5区西側のR2・S2グリッドに位置する。他の竪穴建物との重複関係はない。SB15と重複関係にあるが、SB15は時期が不明であり、先後関係は不明である。

特徴 SH03は平面方形の竪穴建物であり、尾根斜面下位にあたる南側が失われている。主柱穴(P1～P4)と竈、貯蔵穴が確認できる。建物の主軸はほぼ北西を向く(N-44°-W)。床面には部分的に失われているが、貼床(第65図2層)が構築されている。壁溝は巡らされていない。

建物の規模は、(竈が造り付けられた北西辺)6.6m×(それに直交する東南辺)7.2mである。主柱穴はP1-P2間(芯芯間)が4.2m、P4-P3間が4.2m、P2-P3間が4.2m、P1-P4間が4.2mであり、一定しており、4.2mを基準としている。それぞれの柱穴には柱痕が確認でき、0.2m程度の丸太が利用された可能性が高い。主柱穴は円形・不整形な円形で直径約0.4～0.6mである。

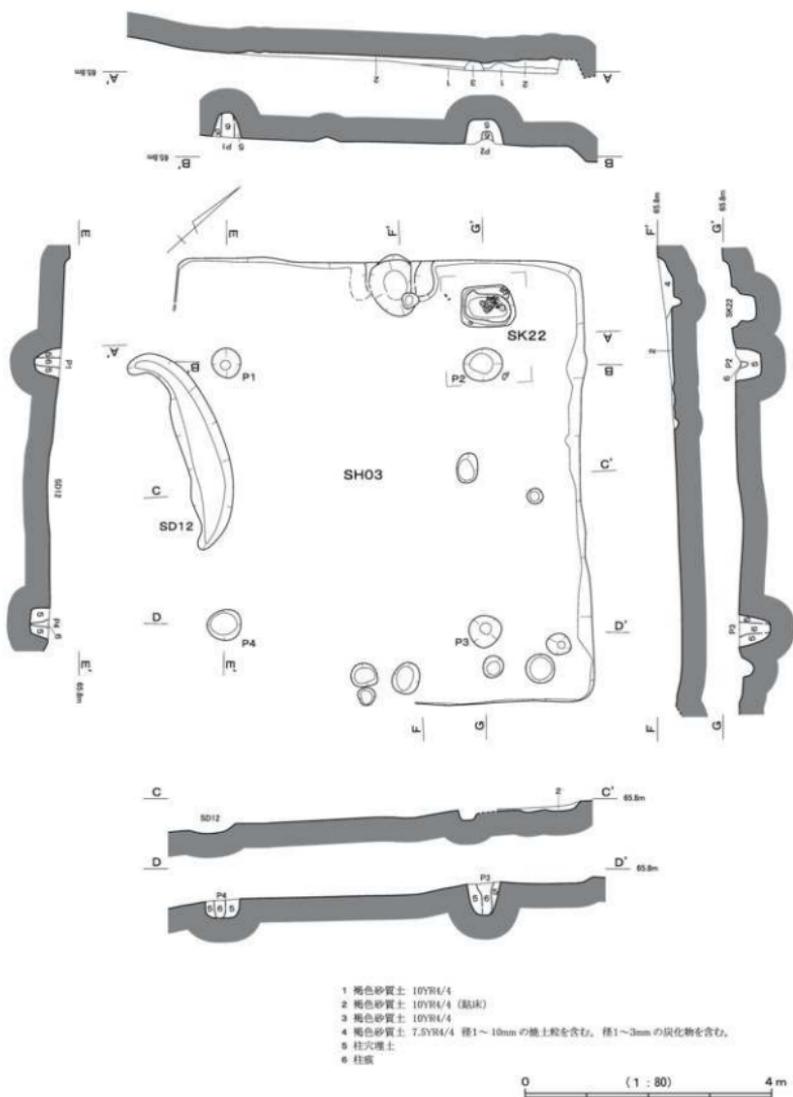
竈は北西辺のほぼ中央に造り付けられている。煙道は失われている。竈の袖部は竪穴建物の掘方を方形に掘削した後、粘土をU字形に盛り上げることで形成している。竈の範囲は幅約1.4m、袖の長さ約0.6mであり、焚口幅約0.6mである。袖部の間(燃燒部)はやや掘り窪められている。

貯蔵穴(SK22)は竈の北東側に約0.4mのところ位置しており、建物の北辺に平行する、平面が東西にやや長い隅丸長方形で、断面は二段状の掘り込みであり、底面はほぼ水平である。東西約0.85m、南北約0.7m、深さ0.3mである。

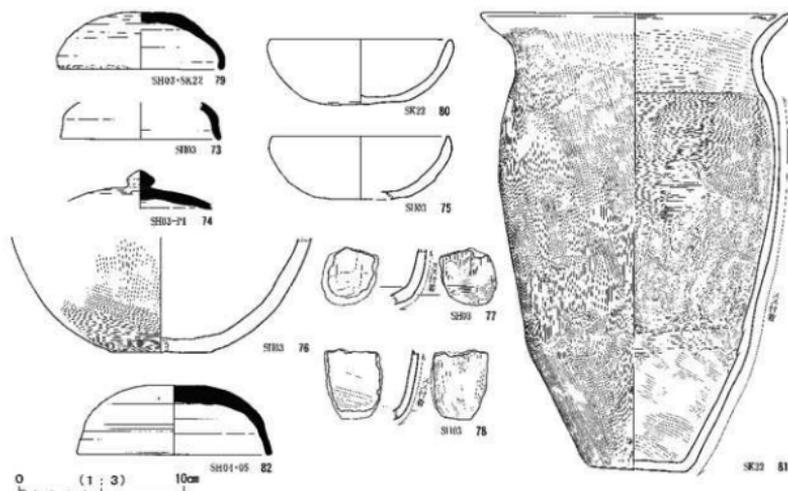
遺物の出土状況 貯蔵穴内部に落ち込んだような状態で土師器甕(81)、壺(76)、杯(80)、須恵器杯蓋(79)各1点が出土し、主柱穴P2の北東側で土師器杯1点(75)、貯蔵穴の南西側で土師器甕片1点(78)が出土した。貯蔵穴では、底面の15cm前後上位から出土している。土師器甕は横位の状態で出土していること、床面直上ではないことから、貯蔵穴の上に置かれていたものが落ち込んだ可能性が高い。その他覆土中から須恵器杯蓋1点(73)、土師器甕片1点(77)、主柱穴P1から須恵器杯蓋(返蓋)1点(74)が出土した。

なお、竈内からの出土遺物はない。

出土遺物 出土遺物には、須恵器杯蓋3点(73・74・79)、土師器杯2点(75・80)、甕3点(77・78・81)、壺(76)がある。



第65図 角塚II遺跡 SH03実測図



第67図 角亀II遺跡 SH03～05出土遺物実測図

須恵器杯蓋は、半球形の杯蓋(杯H蓋, 73・79)と摘みの付く返蓋(74)がある。前者は、天井と口縁部の間に変化点を確認できるもので、口径は9.6～9.9cmである。返蓋(74)は小さい擬宝珠形の摘みを付けるものである。かえりが口縁部よりも垂下するものと推測する。

土師器杯(75・80)はほぼ水平に近い底部からやや外上方に向かって丸みをもって立ち上がるもので口縁端部は摘み出されている。

土師器壺(76)は平底で、丸みを帯びて立ち上がるものである。胴部は球胴になると想定する。

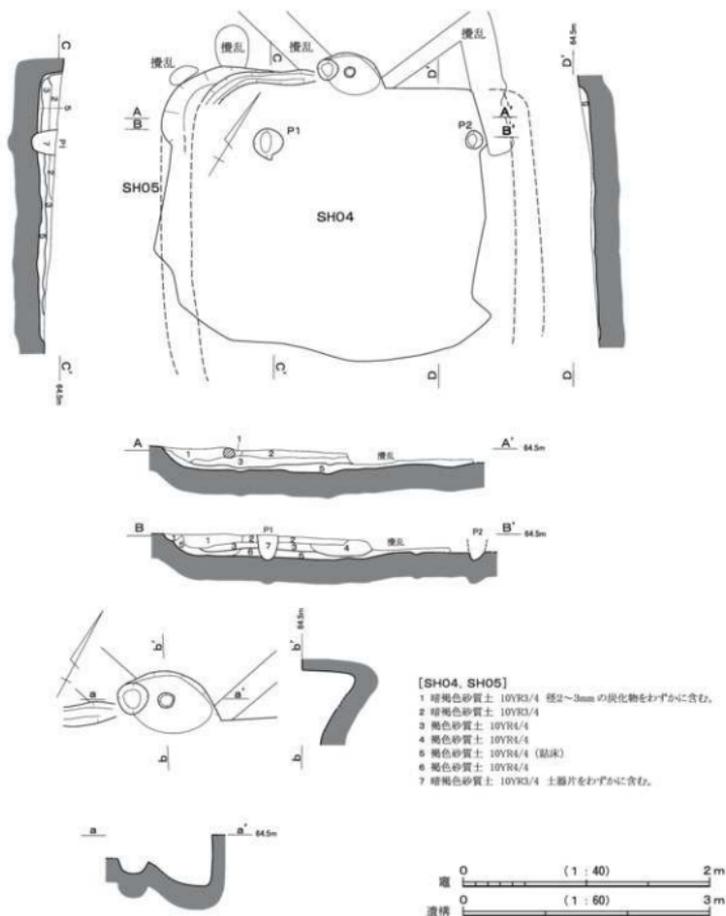
土師器甕(77・78・81)は、平底甕である。81は完形に復元できるもので、底部は平底で、胴部は底部から外上方に向かって逆八字形に直線的に立ち上がった後、一旦休止し、その上に粘土紐を積み上げて胴部を形成するもので、休止した部分は明瞭な屈曲となっている。肩部は緩やかな撫肩で、頸部は肩部から直立した後急激に外反するものであり、口縁端部は丸く仕上げられている。内外面ともに胴部から頸部までハケ目調整が行われており、口縁部は横ナデ調整が施されている。胴部外面には煤が付着しており、竈にかけて煮炊きに使用されていたことが判明する。同じように77・78にも煤が付着している。

時期 形態の特徴と量法から遠江IV期前半(飛鳥II期)でも新しい時期、7世紀中葉に位置づけられる可能性が高い。返蓋は口縁部が残存していないことから時期を特定することは難しいが、摘みが小さいことから、遠江IV期前半(飛鳥II期)、7世紀中葉に位置づけられる可能性が高い。

したがって、SH03は古墳時代終末期(飛鳥時代)前半～中葉、7世紀中葉に帰属する可能性が高い。なお、柱穴等の切合関係はなく、建替えは考え難い。

(2) 4号竪穴建物(SH04, 第38・41・67・68図, 第17・23表, 図版29・45)

位置 SH04は5区はほぼ中央のT1グリッドに位置する。SH03の南東約15mのところの位置し、SH05と重複する。土層の堆積状況を確認すると、第68図C-C'断面で、SH04に伴う壁溝堆積土(2層)がSH05の貼床と考える5層よりも上位に位置することから、先後関係はSH05→SH04の順であるとする。



第68図 角庵Ⅱ遺跡 SH04・05実測図

特徴 SH04は平面隅丸方形の竪穴建物であり、尾根斜面下位にあたる南側と東側など大部分が失われている。主柱穴（P1・P2）と竈が確認できる。建物の主軸はほぼ西北西を向く（N-30°-W）。床面には部分的に失われているが、貼床（第68図3層）が構築されている。壁溝は北西隅角部で確認できるがそれ以外の部位ではすでに失われている。

建物の規模は、竈が造り付けられた北西辺）3.4m以上×（それに直交する東南辺）3.5m以上である。主柱穴はP1-P2間（芯芯間）が2.5mである。主柱穴は円形・不整形な円形で直径約0.2~0.35mであるが、根入れが浅い。南側の主柱穴2本については北側同様根入れが浅かったため失われた可能性が高い。この場合、残存範囲には柱穴らしい掘り込みは確認できないことから、少なくとも主柱穴間距離は2.5m

以上あった可能性が高い。

竈は北西辺のほぼ中央に造り付けられている。燃烧部は北西辺を半円形に掘り込んで形成している。煙道は失われている。竈の袖は確認できない。竈の残存幅は約0.8m、長さ約0.5mである。

出土遺物 須恵器杯蓋1点(82)が出土している(第67図)。SH04に伴う可能性が高いが、SH05の遺物の可能性も排除できない。

須恵器杯蓋(82)は、半球形の杯蓋で天井と口縁部の境に浅い凹線を巡らせる。口径11.8cmである。

時期 出土した須恵器杯蓋は、口径から遠江IV期前半(飛鳥II期)、7世紀前半に位置づけられることから、SH04は古墳時代終末期前半、7世紀前半に位置づけられる可能性が高い。

(3) 5号竪穴建物(SH05, 第38・41・67・68図, 第17表)

位置 SH05は5区T1グリッドに位置する。上述したようにSH05と重複関係にあり、SH05→SH04の順に建設された可能性が高い。

特徴 SH05は平面隅丸方形の竪穴建物であり、尾根斜面下位にあたる南側と東側など大部分が失われている。SH04に破壊されているが、SH04の掘削はSH05の床面には及ばなかった可能性が高く、貼床(第68図5層)が残存部分のほぼ全体に確認できる。建物の主軸はSH04同様ほぼ西北西を向く(N-30°-W)。壁溝は確認できない。建物の規模は、南北約3.5m、東西約3.9m以上である。

竈・貯蔵穴は確認できない。主柱穴も確認できず、地面をほとんど掘り込まないような構造であった可能性が高い。

遺物の出土状況 原位置を保持して出土した遺物はない。

出土遺物 SH04で報告した須恵器杯身(82)がSH05に伴う可能性がある。

時期 SH04以前に建設されていることから、7世紀初頭～前半に属する可能性が高い。

(4) 6号竪穴建物(SH06, 第38・40・69図, 第17表, 図版32)

位置 SH06は2区VI・2グリッドに位置する。SK04と重複関係にあるが、時期差があるため、SK04(弥生後期～古墳前期)→SH06(古墳終末期)の順であることが判明する。

特徴 SH06は主柱穴のみの確認である。P4の位置が内側によっているため、本来はSK04の中に柱穴(P5?)があった可能性がある。建物の主軸はほぼ北西(N-55°-W)を向く。主柱穴間の距離はP1-P2間で約2.6m、P4-P3間で約2.5m、P2-P3間で約2.5m、P1-P4間で約2.1mである。

竈・貯蔵穴などは確認できない。

出土遺物 土師器小片が出土したのみで、図化できる遺物はない。

時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い。

(5) 8号竪穴建物(SH08, 第38・40・69図, 第17表, 図版31)

位置 SH08は2区WX2・XX2グリッドに位置する。SB12と平面上で重複関係にあるが、遺構の時期差があるため、SB12(弥生後期～古墳前期)→SH08(古墳終末期)の順であることが判明する。

特徴 SH08は主柱穴のみの確認である。建物の主軸は北(N-0°-W)を向く。主柱穴間の距離はP1-P2間で約2.0m、P2-P3間で約2.2mである。P2には柱痕が確認でき、直径約15cmの丸太が用いられた可能性が高い。

出土遺物 土師器小片が出土したのみで、図化できる遺物はない。

時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が

高い。

(6) 9号竪穴建物 (SH09, 第38・40・70図, 第17表)

位置 SH09は2区XX2グリッドに位置する。SK19と重複関係にあるが、時期差があるため、SH09(古墳終末期)→SK19(近世)の順であることが判明する。

特徴 SH09は主柱穴のみの確認である。建物の主軸はほぼ東(N-80°-W)を向く。主柱穴間の距離はP1-P2間で約3.0m、P1-P3間で約2.1mである。

出土遺物 土師器小片が出土したのみで、図化できる遺物はない。

時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い。

(7) 10号竪穴建物 (SH10, 第38・40・70図, 第17表)

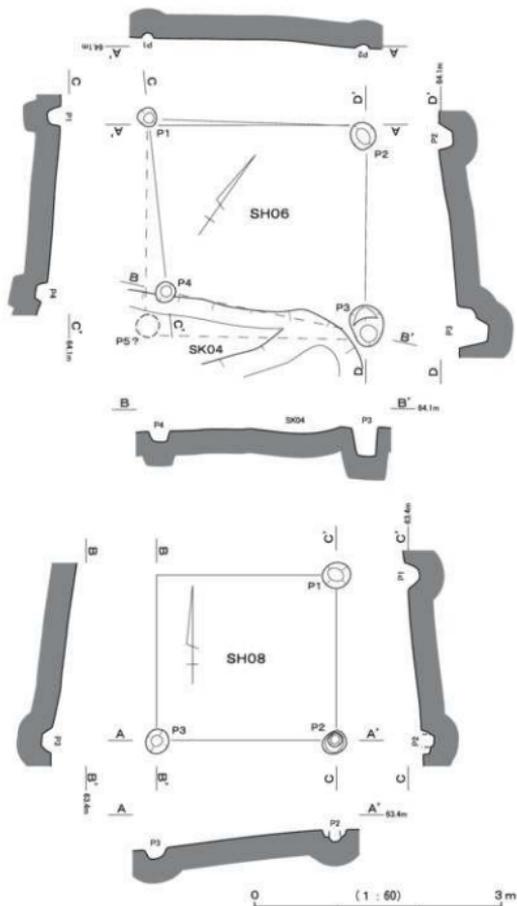
位置 SH10は2区VX1・WX1グリッドに位置する。SB07と重複関係にあるが、時期差があるため、SB07(弥生後期～古墳前期)→SH10(古墳終末期)の順に建設された可能性が高い。

特徴 SH10は主柱穴のみの確認である。建物の主軸(P2-P3軸)はほぼ北北西(N-30°-W)を向く。主柱穴間の距離はP1-P2間で約2.5m、P4-P3間で約2.4m、P2-P3間で約2.9m、P1-P4間で約3.0mであり、一定していない。

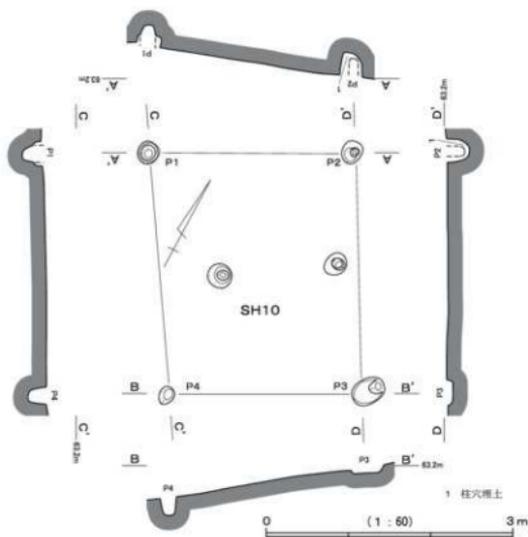
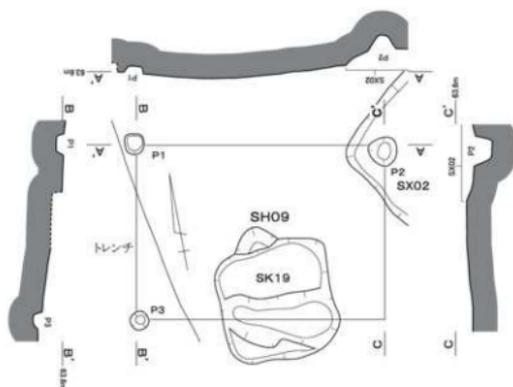
竈・貯蔵穴などの内部施設は確認できない。

出土遺物 出土遺物は土師器片が出土したが図化できない。

時期 時期を特定できる遺物がないため明確ではないが、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い。



第69図 角庵Ⅱ遺跡 SH06・08実測図



第70図 角庵II遺跡 SH09・10実測図

3 掘立柱建物

ここでは、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い、柱穴から当該期以降の遺物が出土しない掘立柱建物について報告する。

(1) 9号掘立柱建物 (SB09, 第38・40・71図, 第18表, 図版34・35)

位置 SB09は2区WX1・2グリッドに位置する。SB12と重複関係にあるが時期差があり、SB12(弥生時代後期～古墳時代前期)→SB09(古墳時代終末期)の順に建設された可能性が高い。

特徴 SB09は梁間1間×桁行2間、約2.4×2.8mの可能性の高いやや南北に長い長方形の掘立柱建物(P1～P5で構成)であり、棟はほぼ北東(N-24°-E)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁はほぼ直交する。梁・桁ともに柱筋が通らない。桁の柱間は東側で北側

から1.5m、1.3m、西側で1.3m、1.5m(想定)であり、一定しない。

柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.2～0.5m、深さ約0.1～0.3mである。P1・P2は柱痕が確認でき、約15cmの丸太が使用された可能性が高い。

建物の構造からみると、SB09は規格性の低い建物である。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は土師器小片のみであり、図示していない。

時期 時期を特定できるような遺物がないため確定的ではないが、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い。

(2) 17号掘立柱建物 (SB17, 第38・41・71図, 第18表, 図版38)

位置 5区T2グリッドに位置する。

特徴 SB17は梁間1間×桁行2間、約2.5×3.2mの可能性の高いやや南北に長い長方形の掘立柱建物(P1～P4で構成)であり、棟はほぼ北北西(N-15°-W)に向ける。確認できない柱穴も多いことから掘立柱建物ではない可能性も排除できない。梁間に対する桁行の比率は約1.3倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁は柱筋が通らない。桁の柱間は東側で北側から1.7m、1.5mであり、一定しない。

柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.2～0.5m、深さ約0.1～0.3mである。P1・P2は柱痕が確認でき、約15cmの丸太が使用された可能性が高いことが判明する。

建物の構造からみると、SB17は規格性の低い建物である。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は土師器小片のみであり、図化できない。

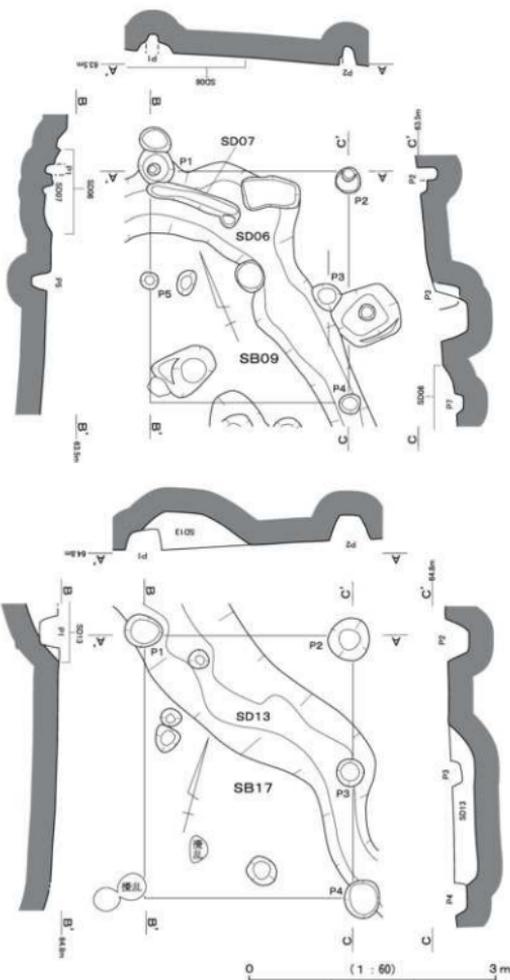
時期 時期を特定できるような遺物がないため時期を特定できないが、古墳時代終末期、7世紀代に位置づけられる可能性が高い。

(3) 18号掘立柱建物 (SB18, 第38・41・72図, 第18表)

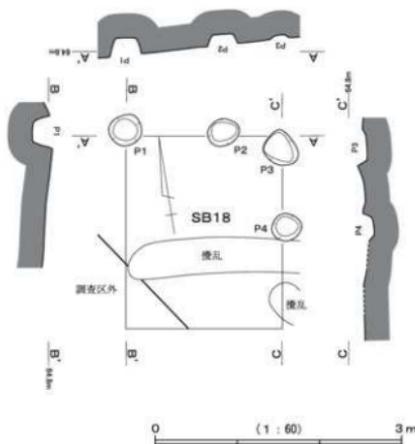
位置 5区T2・U2グリッドに位置する。

特徴 SB18は梁間1間×桁行1間以上、約1.9×1.1m以上のやや南北に長い長方形の掘立柱建物(P1～P4で構成)の可能性があり、柱間の間隔が一定ではなく、掘立柱建物ではない可能性がある。

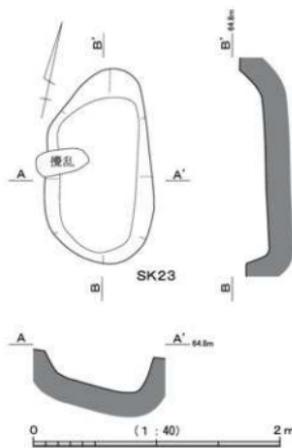
掘立柱建物とした場合は



第71図 角庵II遺跡 SB09・17実測図



第72図 角庵Ⅱ遺跡 SB18実測図



第73図 角庵Ⅱ遺跡 SK23実測図

天井と口縁部の境に凹線を巡らせるもの(83・87)と、稜や変化点があるもの(84・102・105)、変化点がないもの(85・86)がある。口径は9.6~11.4cmであり、(遠江Ⅲ期末葉~)遠江Ⅳ期前半に位置づけられる。

杯身はたちあがりをもつもの(杯H, 88~94・104・106)と高台が付く有台杯(杯B, 98・101)がある。前者はたちあがりがやや高いもの(88・89)から受部とほぼ同じ高さのもの(104・106)まであり、遠江Ⅳ期前半の古い時期から新しい時期(場合によっては遠江Ⅳ期後半に帰属する)に位置づけられる。なお、89は内面にヘラ記号が刻まれている。

棟をほぼ北(N-8°-E)に向ける。梁間に対する桁行の比率は不明である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通らない。梁の柱間は北側で西側から1.2m、0.7mであり、一定しない。

柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.35~0.45m、深さ約0.1~0.2mである。

掘立柱建物であった場合には、建物の構造からみると、SB18は規格性の低い建物である。

出土遺物 柱穴からの出土遺物は土師器小片のみであり、図化できない。

時期 時期を特定できるような遺物がないため時期を特定できないが、古墳時代終末期、7世紀代に位置づけられる可能性が高い。

4 土坑

(1) SK23 (SK23, 第38・41・73図, 第20表, 図版28)

SK23は平面不整形な楕円形で、断面はU字形である。南北に長く、南北約1.6m、東西約0.9m、深さ約0.45mである。土師器小片のみの出土であり、時期は特定できないが、古墳時代終末期に位置づけられる可能性が高い。

5 遺構に伴わない遺物

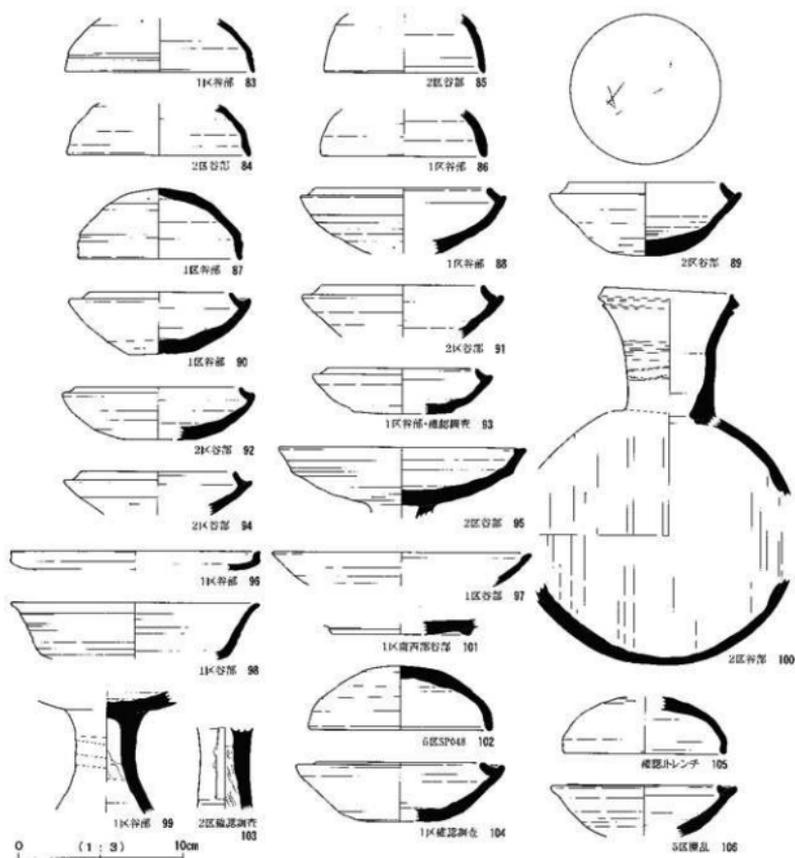
ここでは、遺構に伴わない小穴や谷部出土の古墳時代終末期に該当する遺物について報告する。

(1) 須恵器(第74図, 第23表, 図版44・45)

須恵器では杯蓋、杯身、高杯、フラスコ瓶、盤の可能性のあるものが出土している。

なお、102は5区SP048出土である(図版40)。

杯蓋は半球形の杯蓋(杯H蓋, 83~87・102・105)で、

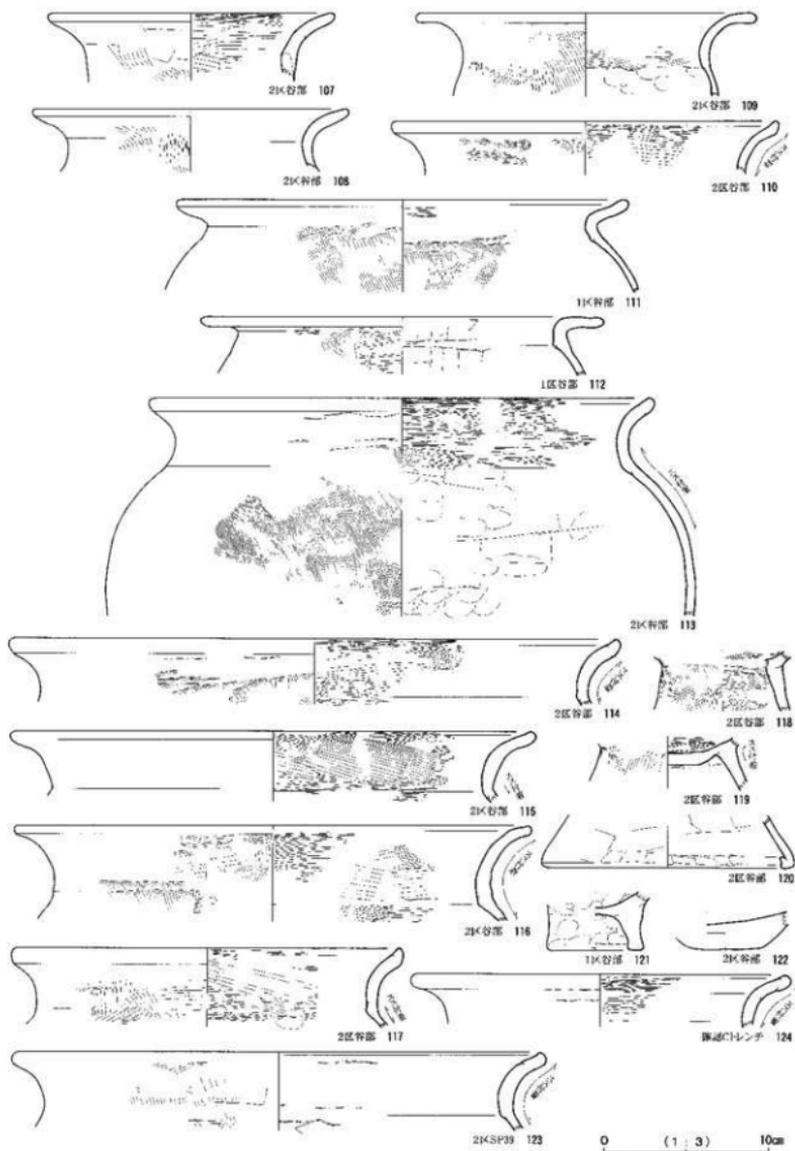


第74図 角庵Ⅱ遺跡出土須恵器実測図

有台杯は底部が高台よりも下に垂下するもの(101)である。98は高台のつかない無台杯の可能性もあるが、箱形のもので、口縁部は外反する。この2点は遠江Ⅳ期末～Ⅴ期前半に位置づけられようか。

高杯は4点(95・97・99・103)出土している。103は二段二方向透かしの可能性が高い脚部片である。透かしは長方形で、その下位には凹線を巡らせる。湖西産須恵器ではない可能性が高い。99は一段無透かしの脚部片で、杯部から垂直に垂下した後脚中央部で急激に外反して八字形に広がるものである。95は杯部片でやや浅い半球形の杯部で、口縁端部は外側に向かって擴み出される。97は同じく半球形の杯部の口縁部片で、口縁端部が肥厚させられている。103は遠江Ⅲ期末葉に位置づけられる可能性が高く、それ以外は遠江Ⅳ期前半に帰属する可能性が高い。

盤の可能性のある口縁部片(96)は、摘蓋の可能性も残る。ほぼ水平の底部から口縁部が短く垂直に立ち上がるもので、口縁部は上方に向かって擴み出されたような形状を呈する。盤の出現は早くても遠



第75図 角埴II遺跡出土土師器実測図

江V期前半（共通編年IV期中段階、丸杉2007）であることから、有台杯と同時期に位置づけられるか、それよりも若干遅れる時期に位置づけられようか。

フラスコ瓶(100)は、頸部以上と胴部の破片であり接合関係にはないが、近接箇所から出土していること、他に同一個体と考えられる個体が存在しないこと、胎土の特徴が一致することから同一個体と考える。頸部は接合部から垂直に立ち上がり、途中で外上方に向かってく字形に屈曲し、口縁部に至る。この屈曲箇所には沈線が2条巡らされている。口縁端部は外傾する面をもち、口縁部直下は突起がみられる。胴部はやや扁平な球胴である。湖西産の可能性が高い。口縁部の特徴から、遠江編年III期末～IV期前半（7世紀前半～中頃）に位置づけられよう（鈴木2001）。

遺構に伴わない須恵器には奈良時代前半～中葉までに位置づけられるもの（96・101）が存在することから、その時期に何らかの人為が及んでいたことが判明するが、集落に伴うものか明確ではない。

なお、86・90は森山窯産の可能性があり、それ以外は湖西産の可能性が高い。

（2）土師器（第75図、第23表、図版45・46）

土師器では、平底甕、大型台付甕、台付甕、壺が出土している。

平底甕・台付甕について口縁部の形状からは平底甕と台付甕の判断は困難であるが、113が大型台付甕で、111・114～116・123などが大型台付甕の可能性が高い。

大型台付甕（113）は球形あるいは鈍形の胴部で、頸部からく字形立ち上がる口縁部であり、口縁端部は丸く収められている。胴部外面には細かいハケ目調整、口縁部には横方向のハケ目調整、胴部内面は粘土紐を抑えた指頭圧痕跡が残り、それを消すようにケズリ調整が行われている。

甕の口縁部片（107～112、114～117、123・124）は、頸部がく字形で口縁部がやや肥厚するもの（111）、頸部がコ字形に近くく字形で口縁端部は丸く収められるもの（107・108）、コ字形に近くく字形で口縁端部を上方にややつまみ上げるもの（110・114～117、123・124）、頸部がく字形で、口縁部が水平にされるもの（112）、コ字形の頸部で口縁部が水平にされるもの（109）がある。いずれも外面ハケ目調整で、内面はケズリ調整、ハケ目調整のものが確認できる。

台付甕の台部片（118～121）は、大型台付甕（118～120）あるいは台付甕（121）の台部である。大型台付甕の台部は弥生時代後期～古墳時代前期のものと比較すると、薄手で台基部が太く、端部を内側に折り返す。時期を特定することは難しい。一方、この特徴をもたない121は、弥生土器の可能性も残るが、小型の台付甕になる可能性が高い。台部内外面ともにナデ調整が行われている。

122は壺の底部片と想定する。弥生土器の可能性も排除できないが、この時期の壺底部片と想定する。

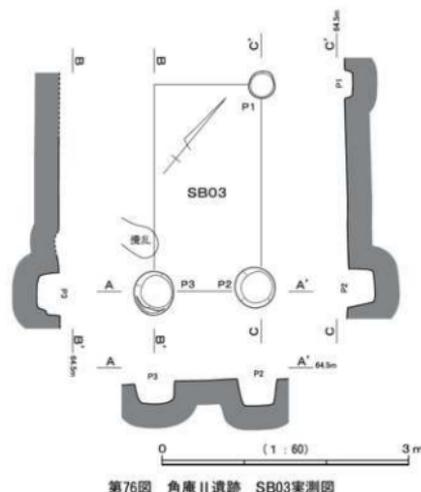
第5節 平安時代～近世の調査成果

1 概要

角庵Ⅱ遺跡では第3節で報告した時期の遺物を除くと、平安時代から近世にわたる遺物が若干出土しているが、平安時代・中世は遺物のみ、近世では倉庫の可能性のある土坑や掘立柱建物があるが、帰属時期が不明確な遺構が多い。ここでは近世の遺構とともに、帰属時期不明の遺構と、平安時代から近世までの遺物について報告する。

2 掘立柱建物

(1) 3号掘立柱建物 (SB03, 第38・40・76図, 第18表)



位置 SB03は2区W2グリッドに位置する。他の遺構との切り合い関係にはないが、SA01と隣接し、ほぼ平行することから、何らかの関連がある可能性が高い。

特徴 SB03は梁間1間×桁行1間、約1.4×2.5mのやや南北に長い長方形の掘立柱建物 (P1～P3で構成) の可能性があるが、柱間の間隔が一定ではなく、掘立柱建物ではない可能性は排除できない。

掘立柱建物とした場合は棟をほぼ北西 (N-40°-W) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.8倍である。梁と桁は斜交する。柱穴は、円形で、直径約0.3～0.5m、深さ約0.1～0.3mである。

掘立柱建物であった場合、建物の構造からみると、SB03は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

(2) 10号掘立柱建物 (SB10, 第38・40・77図, 第18表, 図版34・35)

位置 SB10は2区WX2グリッドに位置する。SB11・13と重複関係にあるが先後関係は不明である。

特徴 SB10は梁間1間×桁行2間、約1.7×4.2m以上のやや南北に長い長方形の掘立柱建物 (P1～P4で構成) の可能性があるが、柱間の間隔が一定ではなく、掘立柱建物ではない可能性は排除できない。掘立柱建物ではない場合は、P1～P3の櫛列の可能性もある。

掘立柱建物とした場合は棟はほぼ北北西 (N-18°-W) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約2.5倍である。梁と桁はほぼ直交する。桁は柱筋が一直線である。桁の柱間は東側で北側から2.0m、2.2mであり、一定しない。

柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.25～0.35m、深さ約0.15～0.2mである。

掘立柱建物であった場合には、建物の構造からみると、SB10は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

(3) 14号掘立柱建物 (SB14, 第38・40・78図, 第18表, 図版34・36)

位置 SB14は2区WX2・3グリッドに位置し、SB13と重複関係にあるが、先後関係は不明である。

特徴 SB14は梁間1間×桁行2間、約2.6×4.1mの南北に長い長方形の掘立柱建物 (P1～P4で構成) の可能性があるが、柱間の間隔が一定ではなく、掘立柱建物ではない可能性は排除できない。

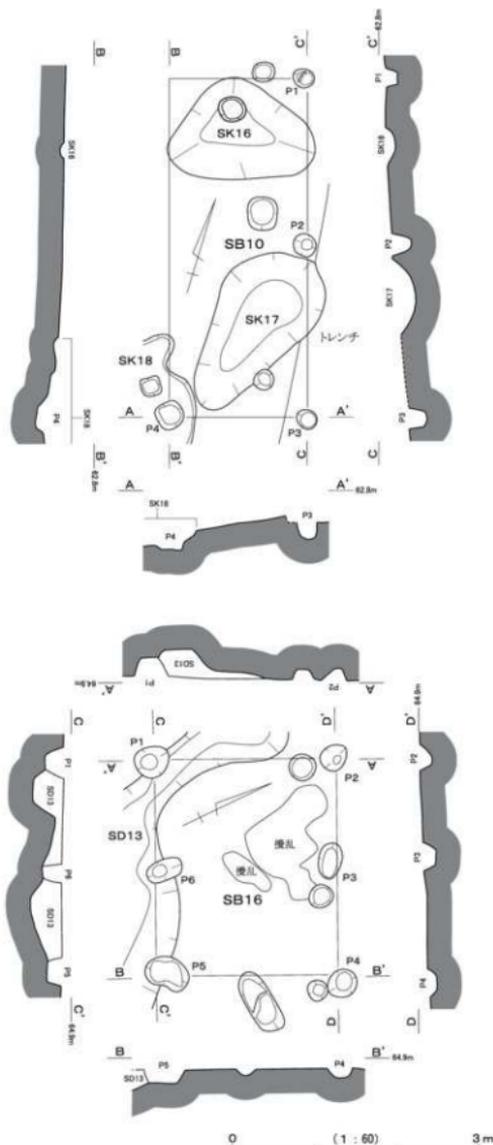
掘立柱建物とした場合は棟はほぼ北西 (N-41°-W) に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.6倍である。梁と桁は斜交する。桁の柱間は東側で北側から約2.1m、1.9mであり、一定しない。

柱穴は、円形あるいは隅丸方形で、直径 (一辺) 約0.35～0.5m、深さ約0.15～0.2mである。

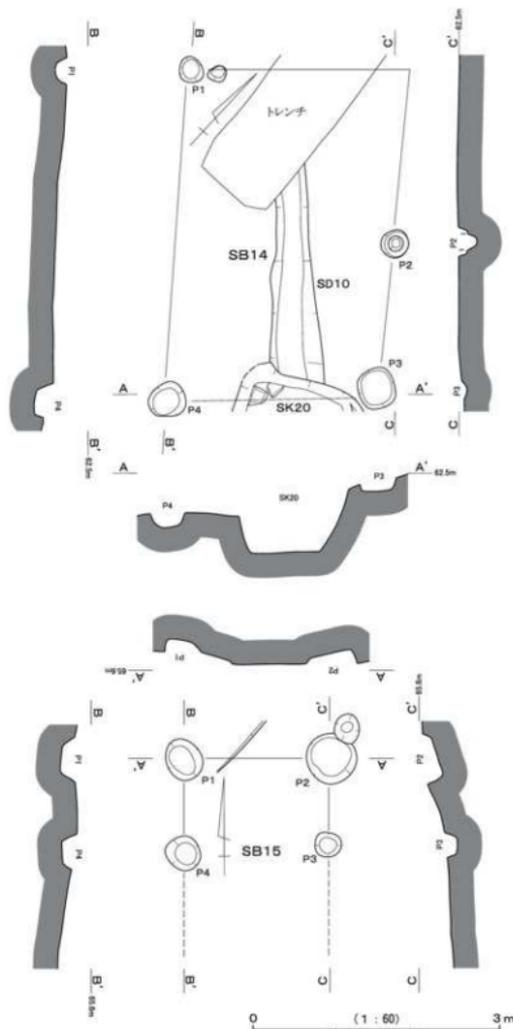
掘立柱建物であった場合、建物の構造からみると、SB14は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないことから時期を特定することはできない。



第77図 角庵II遺跡 SB10・SB16実測図



第78図 角庵II遺跡 SB14・SB15実測図

位置 SB16は5区中央部のT2グリッドに位置する。

特徴 SB16は梁間1間×桁行2間、約2.2×2.7mのやや東西に長い長方形の掘立柱建物（P1～P6で構成）である。棟を西北西（N-74°-W）に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.2倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通らない。桁の柱間は北側で西側から約1.3m、1.4m、南側で西側から約1.4

(4) 15号掘立柱建物（SB15、第38・41・78図、第18表、図版31）

位置 SB15は5区R1・2、S1・2グリッドに位置する。SH03と重複関係にあるが、先後関係は不明である。

特徴 SB15は梁間1間×桁行1間以上、約1.75×1.2m以上のやや南北に長い長方形の掘立柱建物（P1～P4で構成）の可能性はあるが、柱間の間隔がやや狭いことから掘立柱建物ではない可能性は排除できない。

掘立柱建物とした場合は棟はほぼ北（N-0°-W）に向ける。梁間に対する桁行の比率は不明である。梁と桁はほぼ直交する。柱穴は、円形あるいはやや不整形な円形で、直径約0.3～0.6m、深さ約0.15～0.2mである。大型のP1・P2は柱が抜き取られた可能性がある。

掘立柱建物であった場合には、建物の構造からみると、SB15は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

(5) 16号掘立柱建物（SB16、第38・41・77図、第18表、図版37・38）

m、1.3mであり、一定しない。身舎柱は正対しない。

柱穴は、円形あるいはやや不整形な楕円形で、直径(長軸)約0.35～0.55m、深さ約0.15～0.2mである。

掘立柱建物であった場合には、建物の構造からみると、SB16は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物はない。

時期 出土遺物がないことから時期を特定することはできない。

(6) 19号掘立柱建物 (SB19, 第38・39・79図, 第18表, 図版37)

位置 1区TX2・UX2グリッドに位置する。

特徴 SB19は梁間1間×桁行2間、約3.0×4.1mの東西に長い長方形の掘立柱建物(P1～P4で構成)の可能性があるが、柱穴が確認できない場所があり、掘立柱建物ではない可能性は排除できない。

掘立柱建物とした場合は棟をほぼ西(N-87°-W)に向ける。梁間に対する桁行の比率は約1.4倍である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋を通らない。桁の柱間は南側で西側から約2.2m、1.9mであり、一定しない。

柱穴は、円形あるいは不整形な長方形で、直径(長辺)約0.4～0.55m、深さ約0.1～0.4mであり一定しない。

掘立柱建物であった場合には、建物の構造からみると、SB19は規格性の低い建物である。

出土遺物 出土遺物はない。

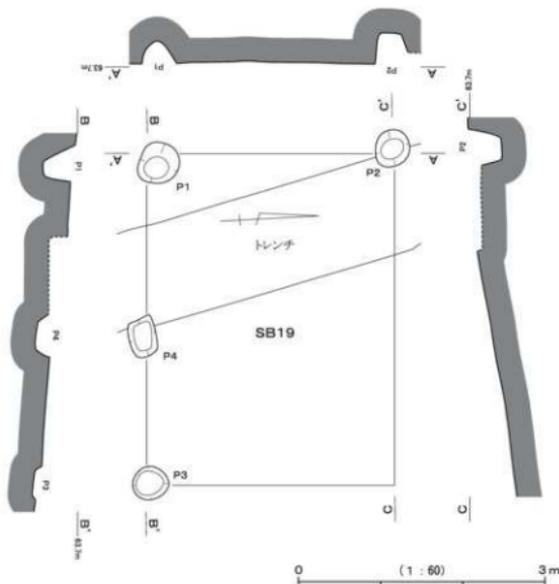
時期 出土遺物がないことから、時期を特定することはできない。

3 柵列

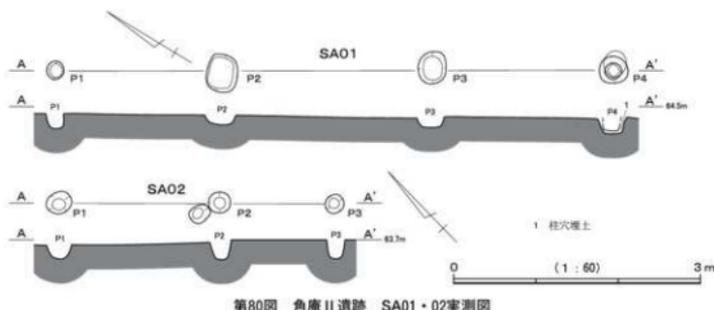
ここでは、柵列の可能性が高い、小穴が一直線に並ぶものについて柵列と認定し、報告したい。

(1) 1号柵列 (SA01, 第38・40・80図, 第19表)

SA01は2区北東隅、W2、X1・2グリッドで確認した。SA01は3間分確認できる。長さ4.55m、柱の間隔は、(柱穴の芯芯間)北側から約1.35m、1.7m、1.5mであり、一定していない。P4は柱痕を確認することができ、柱は約20cmの丸太が用いられた可能性が高い。



第79図 角庵II遺跡 SB19実測図



第80図 角庵II遺跡 SAO1・02実測図

SB03から約0.7mの位置に当たり、何らかの有機的な関係があった可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

(2) 2号櫓列 (SAO2, 第38・40・80図, 第19表, 図版32)

2区北西側、V1・W1グリッドに位置する。SH07の南西側で確認された。2間分確認でき、全長約3.4m、柱間は北側から約2.0m、1.4mである。出土遺物はなく、時期は不明である。

4 土坑 (第38・40・81~84図, 第20・23・27表, 図版30・48)

SK01 (図版30) SK01 (第81図) は2区V2グリッドにある南北に長い長方形の土坑であり、北側が調査区外に延びる。断面は逆台形である。内部には5~35cmの河原石—10~20cm前後のものが主体—が陶器やかわらけとともに廃棄されたような状態で出土した。南北1.8m以上、東西約1.3m、深さ約0.5mである。

出土遺物にはかわらけ、陶器(註2)がある。かわらけ(127)は、ロクロ成形かわらけで、底部から外上方に向かって逆ハ字形に立ち上がった後、湾曲させて口縁部を上部に引き出すもので、口径8.7cm、器高3.3cmである。陶器は瀬戸美濃、志戸呂がある。125は瀬戸美濃(美濃産)灯明皿で、藤澤良祐氏(藤沢1987)編年登窯第10小期、19世紀前半~中葉に位置づけられる。126は志戸呂仏餉器で18世紀代に位置づけられる。128は瀬戸美濃(瀬戸産)染付丸皿で、藤澤編年の登窯第8小期、18世紀末に位置づけられる。129は瀬戸美濃(瀬戸産)甕で、藤澤編年登窯第10か11小期、19世紀前半~中葉に位置づけられる。したがって、SK01は出土した陶器から、19世紀前半~中葉以降に位置づけられる。

SK03・06・10・26 SK03・06・10・26はやや不整形な楕円形の土坑であり、断面皿状である。いずれも出土遺物がなく時期は特定できない

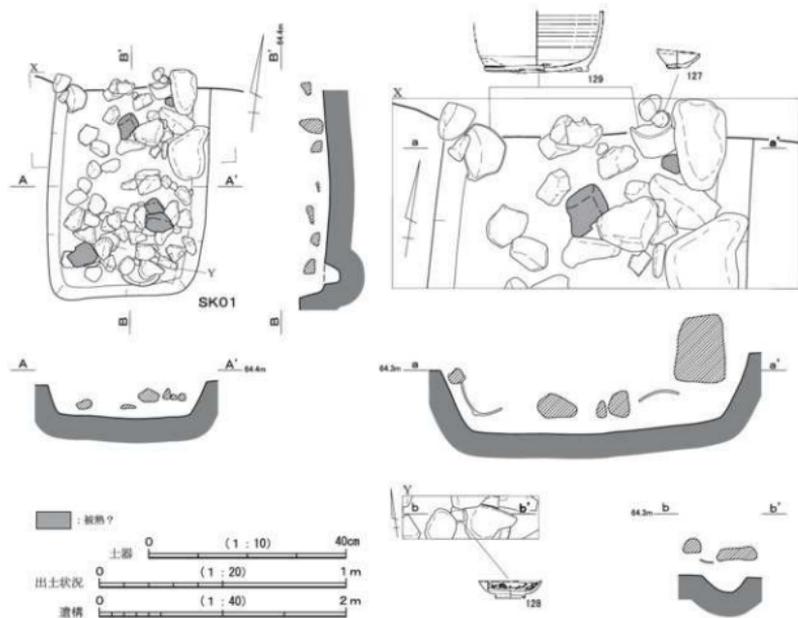
SK15 SK15は細長い溝状の土坑で、断面は皿状である。出土遺物はなく、時期は特定できない。

SK16 SK16は平面隅丸三角形、断面U字形の土坑である。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

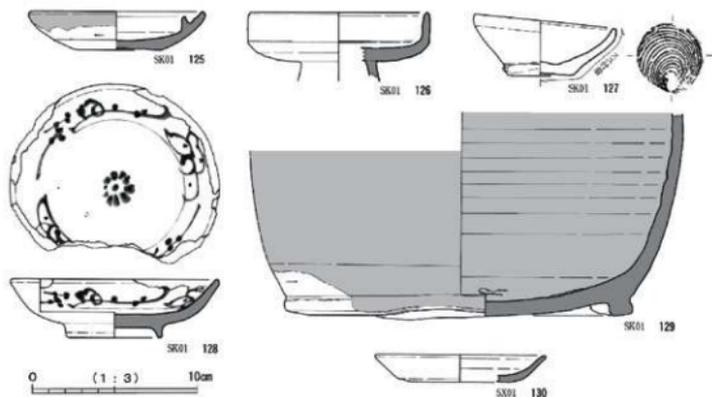
SK18 不整形な土坑である。上部から銅銭「寛永通寶」が出土したがこの遺構に伴うか、あるいは2区谷部に流れ込んだか不明である。したがって、SK18の帰属時期は不明である。

SK17 SK17は平面が不整形な細長い滴形の土坑で、断面はU字形である。平面・断面形態がSK16と類似するため、同じような性格の土坑の可能性が高い。出土遺物はなく、帰属時期は明確ではない。

SK19・20 (図版30) SK19・20は平面隅丸方形で、床面に段が設けられている。大きさはSK19がほぼ1.5m四方、SK20が南北約1.4m、東西約1.6mで、ほぼ同様であることから同じような性格の土坑であ



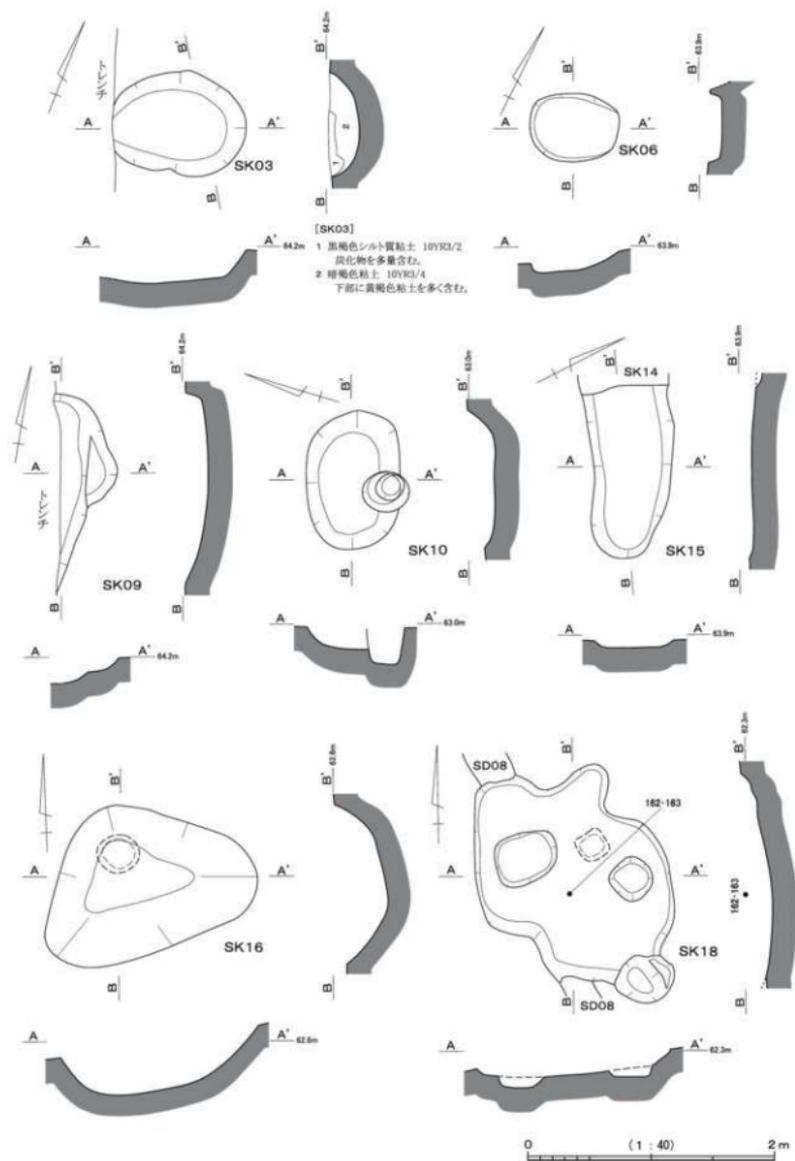
第81図 角鹿II遺跡 SK01実測図



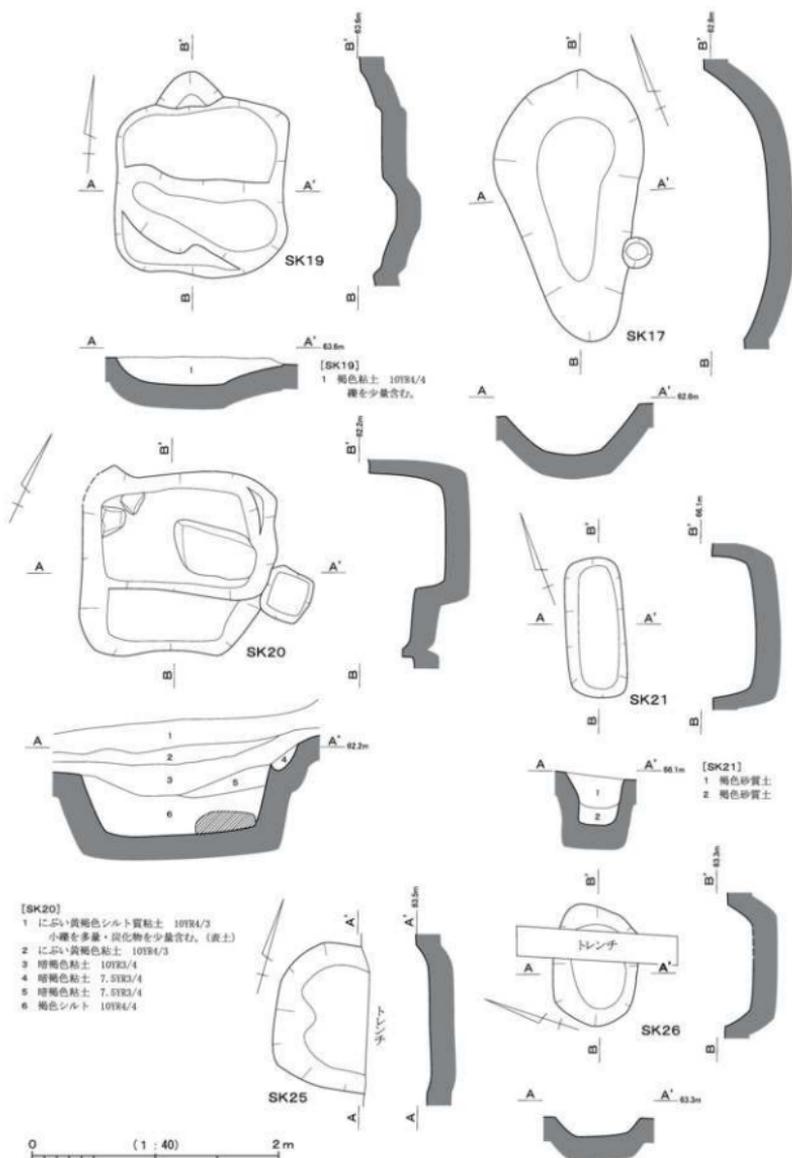
第82図 角鹿II遺跡 SK01・SX01出土遺物実測図

ると考える。SK20の下段には長さ70cm、幅40cm、厚さ20cmの大型の石材が据えられている。出土遺物はなく、時期不明である。

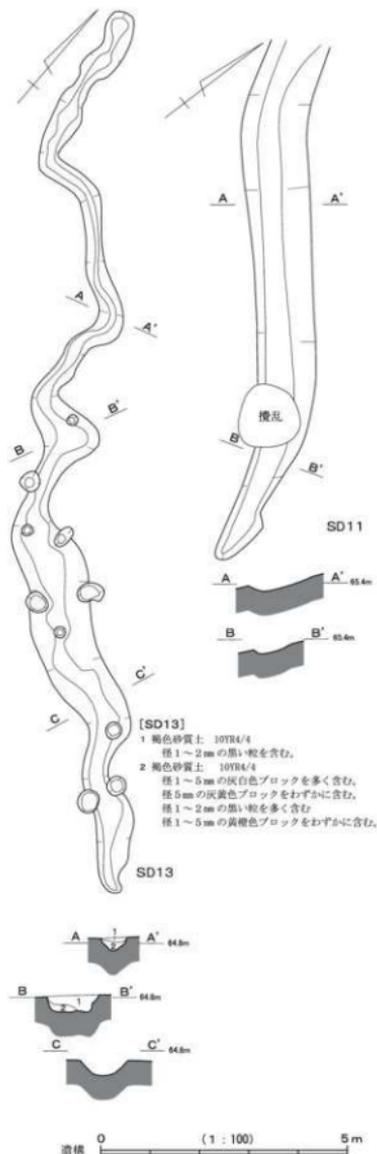
SK21 (図版30) SK21は平面が隅丸長方形、断面が箱形の土坑である。南北約1.2m、東西約0.5m、



第83図 角庵II遺跡 土坑実測図①



第84図 角庵Ⅱ遺跡 土坑実測図②



第85図 角亀日遺跡 溝状遺構実測図①

深さ約0.3mである。形態的には弥生時代後期の土壌墓の可能性のあるSK11などと類似するが、規模がやや小さいことから、SK21の性格は不明といわざるを得ない。

SK09・25 SK09は西側が試掘溝で破壊されており、現状で平面が細長い三角形の土坑となっている。断面皿状である。性格不明である。出土遺物はなく、時期不明である。

SK25は東側が試掘溝で破壊されており、本来は隅丸方形であった可能性が高い。断面皿状である。出土遺物はなく、時期不明である。

5 溝状遺構 (第38・40・41・85・86図, 第21表, 図版38)

溝状遺構は16条 (SD01～16) を確認したが、いずれも遺物が小破片があるいは全く出土遺物がなく、時期を特定することはできない。

SD02・05 本章第3節で報告したように、SK11～SK14を取り囲んでいた方形周溝墓の周溝の可能性が高い。断面逆台形で、底面は水平であった可能性が高い。

ただし、方形周溝墓としては幅0.7m、深さ0.3mであることからやや幅が狭い。また、SD02・05ともに深さ0.3mほどでありながら、SD05は北側へ、SD02は西側へ伸びていないことから方形周溝墓の周溝であった場合にも、四隅が繋がらないタイプあるいは、四隅が浅くなるタイプの周溝であった可能性が高い。

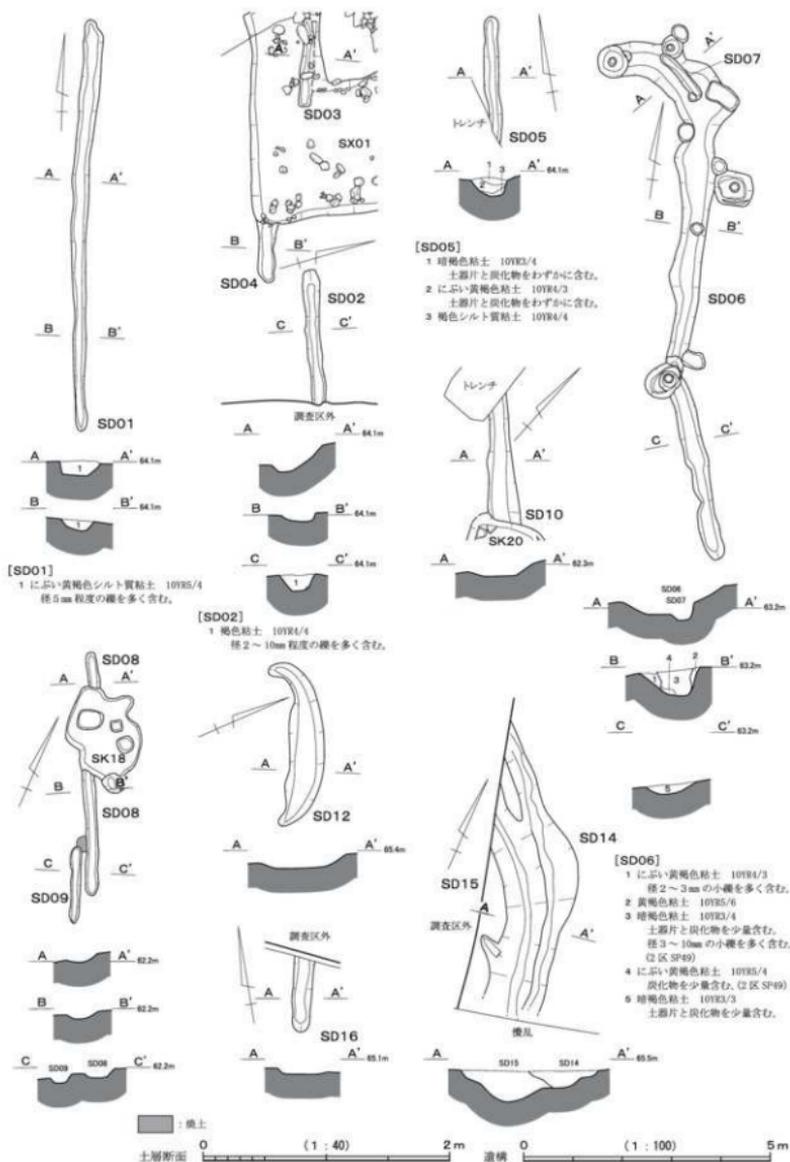
SD01・03・04・07～10・16 これらの溝は細長い溝で、幅0.2～0.4mで、深さが0.1～0.3mである。

SD06・11～13 SD06・11～13の曲り方は異なるものの、自然流路の可能性が高い。

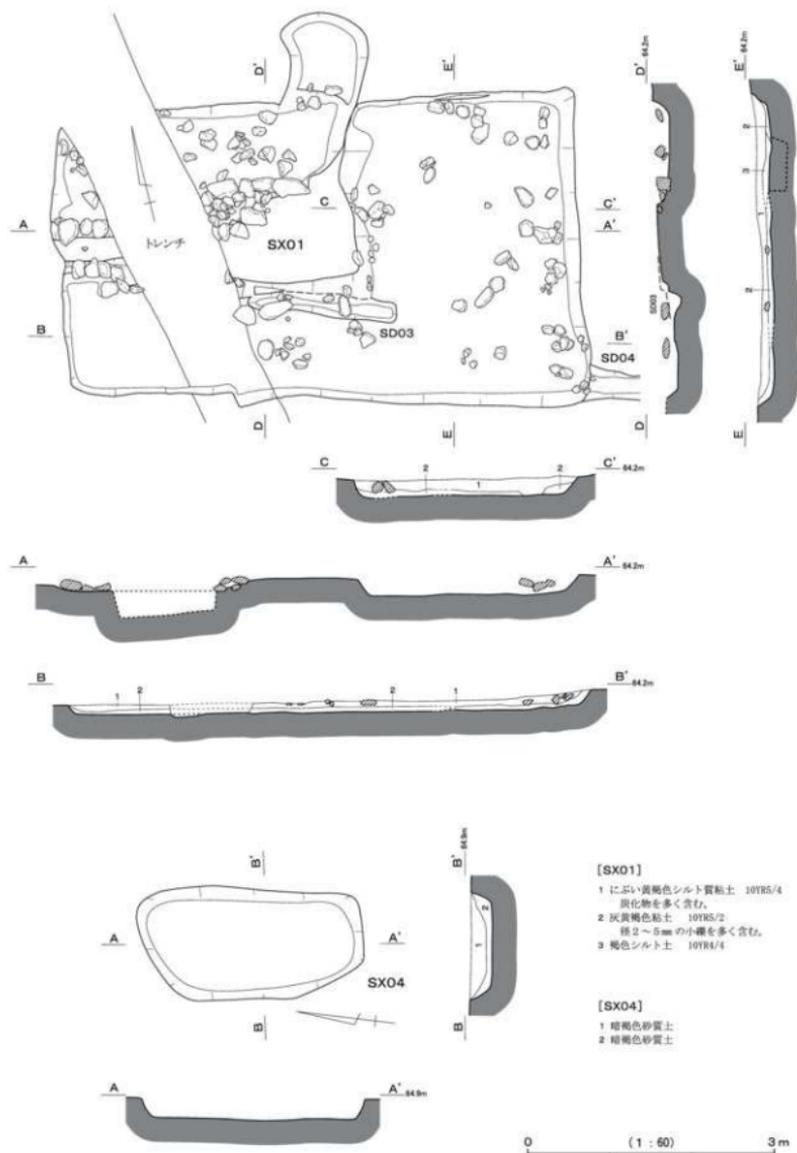
SD14・15 SD14・15は5区北側で確認された大型の溝であるが、南側には延伸しないようである。断面はレンズ状堆積であり、自然流路の可能性が高い。

6 性格不明遺構 (第38・40・41・82・87・88・90図, 第22・23・25・27表, 図版30・48)

性格不明遺構は、6基出土したが、SX03については弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる可能性が高いため第3節で報告している。そちらを参



第86図 角庵II遺跡 溝状遺構実測図②



第87図 角塚II遺跡 性格不明遺構実測図①

照願したい。

SX01 (図版30・48) SX01は、東西に長い大型の長方形の遺構であり、この遺構に伴うかどうか明確ではないが北辺中央が北側に広がりを見せる。この部分から図中にSX01と記載した範囲までは攪乱されている可能性があるが調査段階では判断がつかなかった。

遺構の平面は東西に長い長方形で、断面は図中の中央がやや高く、それを囲むように凹形に低くなっている。規模は東西約6.5m、南北約3.7m、深さ約0.2mである。

SX01からは陶器、鉄銭（「寛永通寶」の可能性が高い）と鉄釘が出土している。

陶器（第82図130）は、志戸呂灯明皿で、18世紀代に位置づけられる可能性が高い。

鉄銭（第90図150）は明瞭ではないが、X線写真により文字が書かれている可能性が高く、形状からは鉄銭の可能性が高い。時期的には「寛永通寶」の鉄銭の可能性が高い。

釘（第90図151～161）は小釘で、頭部がL字形に折り返されるものである。断面は方形である。最も短い158は2.3cm、最も長くなる可能性のある161は5cm以上である。

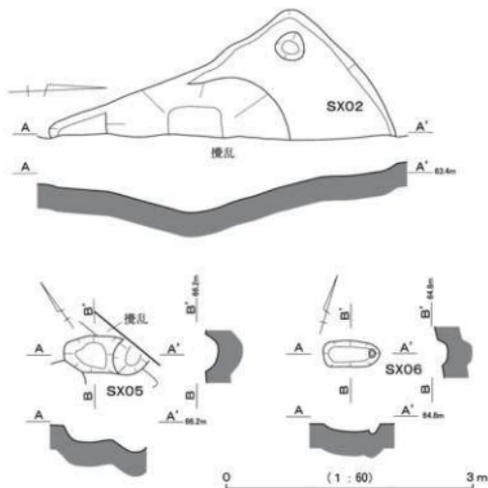
SX01の帰属時期は鉄銭「寛永通寶」は1739年以降に鑄造されたものであることから、この遺構は少なくとも江戸時代後期中葉以降に位置づけられる。また、遺構の性格については、鉄銭は六道銭としては用いないことから、釘が相伴しているがこの遺構は近世墓ではない可能性が高い。大型の長方形であること、礫を伴うことから、建物の倉庫の可能性もある（註3）。

SX02 SX02は東側が破壊されているため正確な形状は不明であるが、現状では直角三角形のような形状を呈する。南側がやや深く掘り窪められている。南側の深くなる部分が別遺構であるとすれば、竪穴建物の可能性も残るが、機能を特定することはできない。南北約4.2m、東西1.6m以上、深さは北側で約0.1m、最深部で約0.5mである。

SX04 SX04は土坑状の遺構で、平面形はやや不整形な南北に長い長方形、断面は逆台形で底面はほぼ水平である。南北約2.7m、東西約1.4m、深さ約0.25mである。出土遺物はなく時期は明確ではないが、SK11のような土壌墓の可能性もある。

SX05 SX05は土坑状の遺構で、2つの土坑が重複するような状況を呈している。遺構の西側部分が浅く、東側部分が一段深くなっている。どのように使用されたか不明である。東西約1.1m以上、南北約0.4m、深さは西側で約0.2m、東側で約0.35mである。

SX06 SX06は土坑状の遺構で、東西に長い。断面皿状で、東端が柱穴のように深くなっている。性格不明である。東西約0.7m、南北約0.3m、深さ0.1mである。



第88図 角庵II遺跡 性格不明遺構実測図②

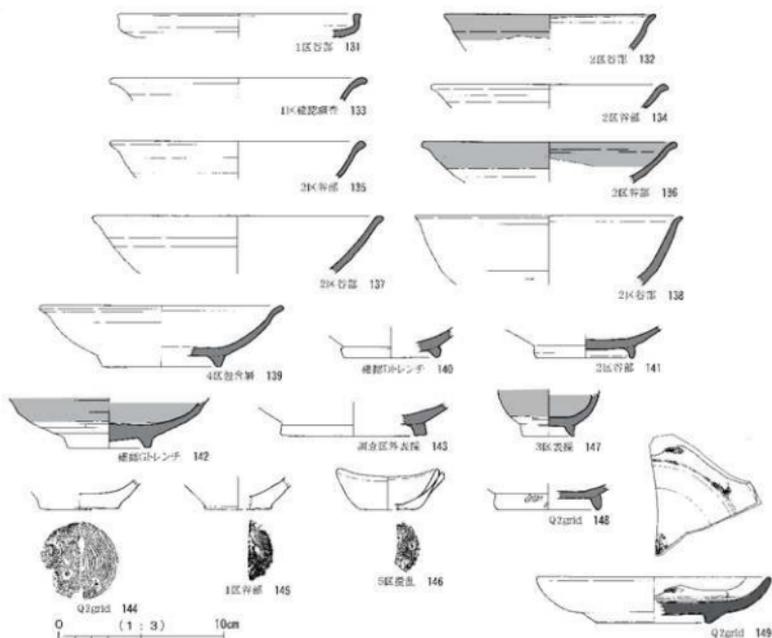
7 遺構に伴わない遺物 (第89・90図, 第23~25, 27表, 図版40・46~48)

角庵Ⅱ遺跡では、遺構に伴わず出土した遺物には、灰釉陶器、陶器(古志戸呂・志戸呂、瀬戸美濃)、磁器(肥前)かわらけ、金属製品がある。

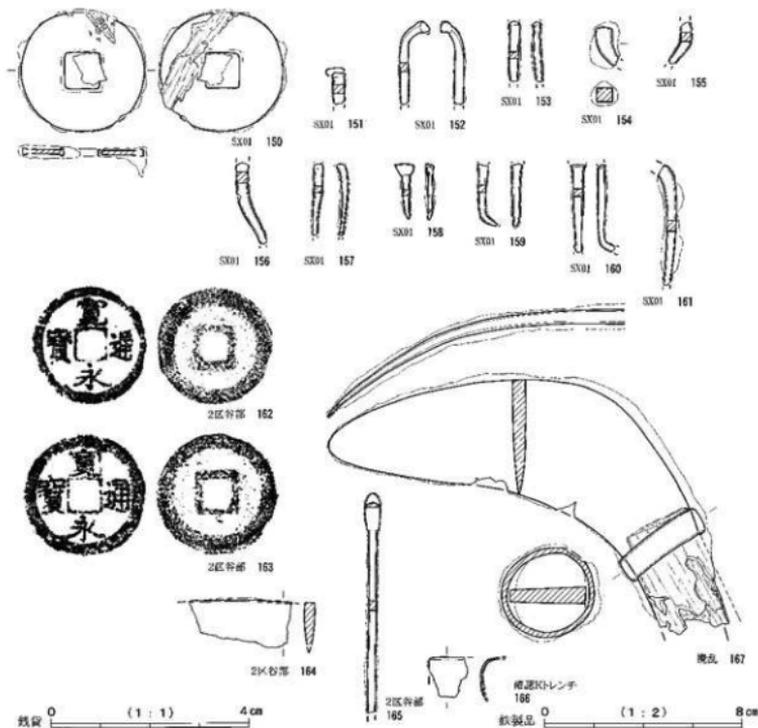
灰釉陶器 灰釉陶器は碗が出土している。131は須恵器盤(あるいは摘蓋)の可能性はあるが、釉葉が口縁部外面まで及んでいること、自然釉の印象とは異なることから、灰釉陶器と考えている。

138は碗で、口縁部は見込みからゆったりと立ち上がり、口縁端部を急激に外反させるものである。底部はケズリ調整が行われ、灰釉は内面のみ刷毛塗りされている。これらの特徴から、愛知の猿投窯産で黒笹14~90号窯式(K14~K90窯式)に位置づけられる可能性が高い。137は口縁端部を外反させ、内面のみ刷毛塗りしている可能性が高い。同じく猿投窯産でK14窯式に位置づけられようか(斎藤1989・山下1995)。139は碗で高台は三角高台で、底部は糸切り未調整である。口縁部は口縁下部を強く外反したような状態を作り出している。清ヶ谷産で松井編年Ⅲ期に位置づけられる可能性が高い。132~136は碗で口縁部を強く外反させる。139と形態的に類似することから、同時期と想定する。掛川市(旧大須賀町)の清ヶ谷古窯産の可能性が高く松井編年Ⅲ期、10世紀後半に位置づけられる可能性が高い(松井1989)。141は低い三日月形高台で、底部はヘラ削りが行われている。胎土の特徴から浜松市浜北区宮口窯産の可能性が高く、松井編年Ⅲ期、10世紀後半に位置づけられる可能性が高い。140は三角高台である。時期は清ヶ谷窯産で松井編年Ⅲ-2期、10世紀後半~末に位置づけられる可能性が高い。

古志戸呂 図示していないが調査区(2・3・5区)から、播鉢片が6片出土している。複数の調査



第89図 角庵Ⅱ遺跡 遺構に伴わない遺物実測図



第90図 角庵II遺跡 金属製品実測図

区から出土していることから、複数個体が持ち込まれていた可能性が高い。15世紀中葉～後半に位置づけられることから、この時期に人為が及んでいたことが判明する。

瀬戸美濃 瀬戸美濃では折縁輪弁鉢(148)、小碗(147)が出土している。いずれも美濃産である。147が藤澤福年登窯第8小期(18世紀末)、148が同登窯第7小期(18世紀中葉～後半)に位置づけられる(藤澤1987)。その他、碗皿類などの破片が出土している。

志戸呂 143は筒形の碗で、17世紀以降に位置づけられるが、時期が確定する遺物では18世紀中葉以降のものが多いことから、18世紀中葉以降の製品であろう。142は碗で、18世紀代中葉～後半に位置づけられる。

肥前 149は肥前染付皿である。18世紀以降に位置づけられる。

かわらけ かわらけはある程度出土しているが小片が多く、図示できないものが多い。ここには3点図示した。いずれもロクロ成形かわらけで、146は口径6～7cmと小型であることから、18世紀後半以降に位置づけられる可能性が高い。

鉄鎌 鉄鎌(167)は攪乱から出土した(図版40)。167は茎からく字形に曲がり、刃部は先端に向かって幅を狭める。茎と刃部との境目は明瞭ではない。茎に木柄が残存しており、先端は鉄製貴金具(録金)

で止められている。茎と柄の装着方法は、木柄の先端を削り込んで、そこに鎌茎を差し込み、最後に貫金具で固定する方法を採用している。茎に残る木材は柁目である。

大きさは、残存長15.5cm、幅14.0cm、刃部棟厚さ5mmである。貫金具は直径3.8cm、幅1.0cm、木柄は直径2.8cmである。

用途不明鉄製品 用途不明鉄製品(164・165)は2区谷部の出土であり、164の断面は二等辺三角形であることから、刃物であることは間違いなく、棟がやや湾曲することから、167と同様鎌の可能性が高い。165は図上部がやや幅が広いもので、古墳時代後期後半～終末期(6世紀後半～7世紀)の尖根柳葉式鉄鎌の可能性が高い。頸部と想定する箇所は断面方形、鎌身と想定する部分は錆びれて不明確であるが、片丸造の可能性が高い。頸部と鎌身は直角で区画されている可能性が高い。角庵Ⅱ遺跡では古墳時代後期末～終末期の竪穴建物で確認されることから、当該期の鉄鎌であっても全く問題はないが、可能性があることの想定にとどめたい。166はKトレンチ出土の鉄製品で、環状の可能性が高いことから、刀子の縁金具(鋸)の可能性が高い。

銅銭 2区谷部(あるいはSK18)から銅銭「寛永通寶」2点(162・163)が出土した。いずれも「寛」の12画目と13画目が繋がりが、「寶」の貝面末尾がいわゆる「ス貝寶」である(兵庫県埋蔵銭調査会1996)ことから古寛永(1636年初鑄)である。

8 小結—角庵Ⅱ遺跡の中世土器・陶磁器について—

第15表 角庵Ⅱ遺跡出土
中世土器・陶磁器の構成

項目	破片数	個体数
志戸呂産	6	2
天目茶碗	6	2
碗類		
皿類		
卸皿類		
楕鉢		
壺・瓶類		
仏具類 その他 不明		
合計	6	2
調査面積(m ²)	3,060	3,060
m ² あたり点数	0.002	0.001

角庵Ⅱ遺跡で出土した中世土器・陶磁器について、まとめておきたい。

小片のため図示しなかったものの中に古志戸呂の楕鉢片が6点含まれているほかは、明確にこの時期に位置づけられる遺物はない(第15・16表)。また、灰胎陶器は数片出土しているが、一般的に出土する山茶碗は一切確認できない。

したがって、角庵Ⅱ遺跡では9世紀後半～11世紀前半、15世紀中葉～後葉、18世紀～19世紀前半の遺物が少量ずつ確認されるだけである。平安時代、中世の遺構は明瞭ではなく、遺跡がどのように使用されたか明確ではなく、近世においても遺物量が少ないことから、居住が行われたとしても断続的に短期間行われた可能性が高い。

第16表 角庵Ⅱ遺跡出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成

器種名	古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期				古瀬戸 計	美濃製品						不明	合計		
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV		計	1	2	3	4	5			6	
天目茶碗													0	0							0	0	0
碗類													0	0							0	0	0
皿類													0	0							0	0	0
卸皿													0	0							0	0	0
楕鉢													6	6							0	0	6
壺・ 瓶類													0	0							0	0	0
灰胎四耳壺													0	0							0	0	0
合計													6	6							0	0	6

註(第5章)

- 1 縄文土器の型式分類について、向坂彌二氏、渋谷昌彦氏、池谷信之氏、小崎晋氏、原田雄紀氏に御教示頂いた。銘記して感謝します。
- 2 陶磁器については、愛知学院大学 藤澤良祐先生に鑑定いただくとともに御教示頂いた。また、分類にあたっては、静岡県教育委員会文化財保護課 河合 修氏、当センター足立順司、溝口彰啓両氏に御教示を得た。銘記して感謝します。
- 3 鉄銭については当センター 足立順司氏に鑑定及び御教示頂いた。また、SX01のような特徴をもつ江戸期の倉庫があることについても御教示頂いた。銘記して感謝します。

第6節 遺構・遺物観察表

1 遺構観察表

(1) 竪穴建物の概要

第17表 角鹿II遺跡 竪穴建物の概要

遺構番号	Fig	PL	区	グリッド	主軸方位	規模 (南北×東西)	高さ	床面	伊・甕	出土遺物	時期	備考
SH01	38・40・47	25・42	2	W2	N-32°-W	3.5×3.8	0.2	貼床式	伊	土師器(筒形土器)	古墳前期中2	
SH02	38・40・48・49	26・43	5	Q2	N-1°-W	2.9×5.0+	0.15	貼床式	不明	土師器(台付甕)	古墳前期中2	
SH03	65~67	28・29・31・44	2	R2・S2	N-44°-W	6.6×7.2	0.2	貼床式	甕	土師器(杯・甕・須恵器(杯蓋))	古墳終末期	
SH04	67・68	29・45	5	T1	N-30°-W	3.5×3.4+	0.2	貼床式	甕	須恵器(杯蓋)	古墳終末期	
SH05		N-30°-W			3.9×3.5+	0.25	貼床式					
SH06	69	32	2	W1	N-55°-E	2.5×2.6	-	不明	不明	-	古墳終末期	
SH07	50				N-32°-E	2.1×2.2	-	不明	不明	-	甕	甕
SH08	69	31	2	WX2・XX2	N-0°-W	2.0×2.0	-	不明	不明	-	古墳終末期	
SH09		-			XX2	N-80°-E	3.0×2.1	-	不明	不明	土師器片	古墳終末期
SH10	70	-		VX1・WX1	N-30°-W	-	-	不明	不明	-	古墳終末期	

※1 甕生=甕生時代後期~古墳時代前期

※2 古墳時代前期の可能性が高い。

単位 (m)

(2) 掘立柱建物の概要

第18表 角鹿II遺跡 掘立柱建物の概要

遺構番号	Fig	PL	区	グリッド	主軸方位	間数 (梁×桁)	規模 (梁×桁)	出土遺物	時期	備考
SB01	51	32	2	V2・W2	N-36°-E	2×2	2.9×3.1	-	甕生中1	
SB02	52			V1・2, W1・2	N-64°-W	3×3	3.3×5.9	-	甕生中1	
SB03	76	-		W2	N-40°-W	1×1	1.4×2.5	-	不明	
SB04	53	33	2	W1・2	N-66°-E	1×2	2.8×3.3	-	甕生中1	
SB05					N-40°-W	2×2	2.3×3.1	-	甕生中1	
SB06	54	40・43		W1	N-40°-W	2×2	2.8×3.2	甕生or土師器台付甕	甕生中1	
SB07	55	35		VX1・WX1	N-35°-W	2×2	3.0×3.3	-	甕生?中1	
SB08	56	34・35・40	2	VX1・2	N-15°-W	1×2	2.0×3.5	-	甕生?中1	二列の構列の可能性あり。
SB09	71	34・35		WX1・2	N-24°-E	1×2	2.4×2.8	土師器小片	古墳終末期	
SB10	77	34		VX2	N-18°-W	1×2	1.7×4.2	-	不明	掘立柱建物ではなく、構列の可能性あり。
SB11	57	34・35		WX2	N-75°-E	1×1	1.7×2.3	-	甕生中1	竪穴建物の可能性あり。
SB12	58	34・36	2	WX1・2, XX1	N-69°-E	1×2	3.6×4.2	-	甕生中1	
SB13	59			WX2	N-67°-E	1×2	2.2×3.0	-	甕生中1	
SB14	78	31	5	WX2・3	N-41°-W	1×2	2.6×4.1	-	不明	掘立柱建物ではない可能性あり。
SB15	77			R1・2	N-0°-W	1×1+	1.75×1.2	-	不明	掘立柱建物ではない可能性あり。
SB16	77	37・38	5	T2	N-74°-W	1×2	2.2×2.7	-	不明	
SB17	71	38			N-15°-W	1×2	2.5×3.2	土師器小片	古墳終末期	
SB18	72	-		T2・U2	N-8°-E	1×1	1.9×1.1	土師器小片	古墳終末期	掘立柱建物ではない可能性あり。
SB19	79	37	1	TX2・UX2	N-87°-W	1×2	3.0×4.1	-	不明	掘立柱建物ではない可能性あり。

※1 甕生=甕生時代後期~古墳時代前期

単位 (m)

(3) 構列の概要

第19表 角鹿II遺跡 構列の概要

遺構番号	Fig	PL	区	グリッド	主軸方位	規模	出土遺物	時期	備考
SA01	80	-	2	W2, X1・2	N-30°-W	4.55	-	不明	
SA02		32		V1・W1	N-50°-W	3.4	-	不明	

単位 (m)

(4) 土坑の概要

第20表 角鹿日遺跡 土坑の概要

遺構番号	Fig.	PL	区	グリッド	規模 (南北×東西)	深さ	主な出土遺物	時期	備考	
SK01	81・82	30・47	2	V2	1.8×1.3	0.5	かわらけ・志戸呂・瀬戸美濃	19世紀前半～中葉		
SK02	63	25			2.2×1.25	0.5	弥生土器・土師器片	弥生後期中		
SK03	83	—				0.9×1.1+	0.25	—	不明	
SK04	63	27・42		V1・2	2.05×4.1	0.2	弥生土器(高杯・台付甕)	弥生後期中葉		
SK05	43	—		V1	0.65×0.45	0.25	耳飾	弥生中葉	縄文	
SK06	83	—				0.6×0.7	0.1	—	不明	
SK07	91~107	49~59		W1	1.15×1.65	0.1	礫石経331	18世紀後半	礫石経塚。	
SK08	63	25・41			2.8×1.55	0.4	弥生土器か土師器(台付甕)	弥生中葉	土壌墓の可能性が高い。	
SK09	83	—				1.6×0.4+	0.15	—	不明	
SK10	—	—		WX1	0.75×1.1	0.2	—	不明		
SK11	48・	28・43	2	XX1	2.1×0.8	0.2	弥生土器(甕)	弥生後期前半	土壌墓の可能性が高い。	
SK12	61・62	28・42			2.3×1.2	0.3	弥生土器(高杯)・ガラス小玉	弥生後期前半	土壌墓の可能性が高い。	
SK13	—	—				1.8×0.75	0.2	—	弥生後期前半?	土壌墓の可能性が高い。
SK14	61・62	28				2.1×0.95	0.2	弥生土器(甕)	弥生後期前半?	土壌墓の可能性が高い。
SK15	—	—				1.4×0.7	0.5	—	不明	
SK16	—	—				1.3×1.7	0.35	—	不明	
SK17	84	—		WX2	2.2×1.2	0.5	—	不明		
SK18	83	—			1.8×1.6	0.2	(銅銭)	不明	不整形。遺物は谷部出土?	
SK19	—	—		XX2	1.5×1.5	0.2	—	不明	SK20と同様の性格か。	
SK20	84	—		WX2・3	1.4×1.6	0.6	—	不明	SK19と同様の性格か。	
SK21	—	—			1.2×0.5	0.3	—	不明		
SK22	65~67	28・44	5	R2	0.7×0.85	0.3	土師器(甕)・須恵器(杯蓋)	古墳終末期	SH03の貯蔵穴。	
SK23	72	28		T2	1.6×0.9	0.45	—	古墳終末期		
SK24	64	27		UX1・2	3.2×2.1	0.2	弥生土器・土師器片	弥生中葉		
SK25	84	—	1	TX2・UX2	1.2×0.8+	0.1	—	不明		
SK26	—	—		UX2	0.7×1.0	0.2	—	不明		
SK27	47	—	2	V2	0.5×0.5	0.4	—	古墳前期	SH01の貯蔵穴。	

※SK11~14については、方形周溝墓の埋葬施設の可能性が高い。

単位 (m)

※1 弥生=弥生時代後期～古墳時代前期

(5) 溝状遺構の概要

第21表 角鹿日遺跡 溝状遺構の概要

遺構番号	Fig.	PL	区	グリッド	長さ	幅	深さ	出土遺物	時期	備考
SD01	86	—	2	X1	8.5	0.4	0.1	—	不明	
SD02	62・86	—		XX1	2.8	0.35	0.15	—	弥生中葉1か	方形周溝墓の周溝の可能性あり。
SD03	86	—		W1・X1・XX1	1.8	0.3	0.05	鉄片	不明	
SD04	86	—		XX1	1.3+	0.35	0.05	土師器?小片	不明	
SD05	62・86	—		XX1	2.6+	0.3	0.15	—	弥生中葉1か	方形周溝墓の周溝の可能性あり。
SD06	—	—		WX1・2	10.7	1.0	0.2	—	不明	自然流路か。
SD07	—	—		WX1	1.2	0.2	0.15	—	不明	
SD08	86	—		WX2	5.0	0.2	0.1	—	不明	
SD09	—	—		WX2	1.6	0.2	0.05	—	不明	
SD10	—	—		WX2	2.6+	0.6+	0.1	—	不明	
SD11	85	—	5	Q2, R1・2	10.7	1.3	0.2	土師器・かわらけ片	不明	自然流路か。
SD12	86	—		R1・2	3.3	0.7	0.1	—	不明	
SD13	85	38		S3・T2・U2	18.1	1.3	0.3	縄文土器?・土師器片	不明	自然流路か。
SD14	—	—		U4	6.2+	0.5+	0.15	—	不明	
SD15	86	—		U4	6.2+	0.8	0.25	—	不明	
SD16	—	—		S1	1.6+	0.4	0.05	—	不明	

※1 弥生=弥生時代後期～古墳時代前期

単位 (m)

(6) 性格不明遺構の概要

第22表 角鹿日遺跡 性格不明遺構の概要

遺構番号	Fig.	PL	区	グリッド	規模 (南北×東西)	深さ	主な出土遺物	時期	備考
SX01	82・87	30・47・48	2	W1・X1・WX1・XX1	3.7×6.5	0.2	志戸呂・鉄銭・釘	18世紀後半以降	倉庫?
SX02	88	—			4.2×1.6+	0.5	—	不明	
SX03	60	26・31	5	R2・3, S1・2	4.1×3.9+	0.2	—	弥生中葉1	窟穴建物か
SX04	87	—			S2・3	2.7×1.4	0.25	—	近世
SX05	—	—		U5	0.4×1.1+	0.35	—	不明	
SX06	88	—		T1	0.3×0.7	0.1	—	不明	

※1 弥生=弥生時代後期～古墳時代前期

単位 (m)

2 遺物観察表

(1) 土器・土製品・陶磁器観察表

第23表 角鹿II遺跡出土土器・土製品・陶磁器観察表

No	Fig	PL	区	グリッド	遺構名	種別	器種	部位	残存	口径	器径	底径	器高	色調(外面)	色調(内面)	備考	
1																	
2																	
3			2	VX1		谷部	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	明赤褐色(10YR5/6)	にぶい黄褐色(10YR6/4)		
4				WX2			深鉢	口縁	-	-	-	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		
5				VX1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	灰褐色(7.5YR4/2)	にぶい褐色(7.5YR5/3)		
6			5	V1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	褐色(5YR6/6)		
7				VX1	SH04-05		深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR6/3)	明褐色(7.5YR5/6)		
8				V1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR6/4)	にぶい褐色(5YR6/4)		
9			2	V1			深鉢	口縁	-	-	-	-	-	灰黄褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(7.5YR6/4)		
10				VX1		谷部	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR6/4)		
11				V1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい褐色(7.5YR7/4)		
12				VX1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい褐色(7.5YR6/3)		
13			1	VX3		縄文	深鉢	底部	25%	-	(7.0)	-	-	にぶい褐色(7.5YR5/6)	明赤褐色(5YR5/6)		
14			1	WX2	SB05-PI		深鉢	胴部	20%	-	(7.0)	-	-	明赤褐色(5YR5/6)	黒灰(7.5YR4/1)		
15				V1		谷部	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR5/4)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		
16				V1			深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(5YR6/4)	にぶい黄褐色(7.5YR6/4)		
17				V1			深鉢	口縁	-	-	-	-	-	褐色(5YR6/6)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		
18			-	-		煮土	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		
19				V1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR5/4)		
20			1	-			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	明赤褐色(5YR5/6)	暗灰黄(2.5Y5/2)		
21			2	VX1		谷部	深鉢	胴部	-	-	-	-	-	灰褐色(7.5YR5/2)	灰褐色(7.5YR4/2)		
22				VX1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR5/3)		
23			1	VX2			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR6/3)		
24				V1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい赤褐色(5YR5/4)	明赤褐色(5YR5/6)		
25				V1			深鉢	胴部	-	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR6/4)		
26			2	VX1		土製品	土埴	ほぼ全体	90%	2.1	0.7	-	5.7	褐色(7.5YR7/6)	-		
27				V1	SK05		耳飾	-	30%	4.6	3.0	-	2.0	にぶい黄褐色(10YR7/4)	褐色(7.5YR7/6)		
35			42	2	W2	SH01	硬形土器	全体	30%	(10.7)	(10.7)	(4.3)	6.2	にぶい黄褐色(10YR7/4)	黒褐色(10YR3/1)		
36			5	Q2	SH02-P2		台付甕	台部	50%	-	-	(9.8)	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		
37			43	W1	SH06-P2	弥生?	台付甕	台基部	30%	-	-	-	-	灰褐色(5YR4/2)	にぶい赤褐色(5YR5/4)		
38				V1	SK04		高杯	脚基部	60%	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR7/4)	浅黄褐色(10YR8/3)		
39				高杯	脚部	70%	-	-	10.2	-	-	-	-	浅黄褐色(10YR8/3)	黄灰(2.5Y5/1)		
40				甕	口縁	10%	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/3)	浅黄褐色(10YR8/3)		
41			2	W1	SK08	弥生	台付甕	台基部	70%	-	-	8.2	-	にぶい赤褐色(5YR5/4)	にぶい黄褐色(5YR5/4)		
42				SK11		甕	頸部	60%	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR6/3)	にぶい黄褐色(10YR6/3)		
44				XX1	SK12		高杯	杯部	50%	-	-	-	-	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)		
45				SK14		甕	底部	20%	-	-	(7.2)	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		
46			42	W2	SP14	弥生?	ミナチヤ道	全体	100%	3.2	6.1	3.9	5.3	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい褐色(7.5YR7/6)		
47			43	1	VX2		高杯	脚基部	80%	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	菊川式	
48				高杯	脚基部	80%	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	菊川式	
49				V1		土師器	高杯	脚基部	40%	-	-	-	-	褐色(7.5YR7/6)	浅黄褐色(10YR8/4)	元屋敷	
50				高杯	脚部	30%	-	-	(10.4)	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/3)	灰黄褐色(10YR6/2)	菊川式	
51				VX1			甕	口縁	10%	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		
52				WX1			甕	口縁	10%	-	-	-	-	褐色(5YR6/6)	褐色(5YR6/6)		
53				WX1			甕	口縁	10%	-	-	-	-	褐色(5YR6/6)	褐色(5YR6/6)		
54			48	W1		弥生小土師器	甕	口縁	10%	(19.4)	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR7/4)	浅黄褐色(10YR8/3)		
55				VX1			甕	口縁	15%	(18.0)	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		
56							甕	底部	60%	-	-	(8.4)	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		
57				V1		谷部	甕	底部	15%	-	(6.5)	-	-	にぶい黄褐色(10YR6/4)	明黄褐色(10YR7/6)		
58							甕	底部	80%	-	(8.6)	-	-	にぶい褐色(7.5YR7/4)	浅黄褐色(10YR8/3)		
59				VX1		谷部	甕	底部	25%	-	(6.6)	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		
60				W1			甕	底部	60%	-	(7.4)	-	-	にぶい褐色(7.5YR6/4)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		
61				V1			甕	底部	100%	-	5.5	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	褐色(7.5YR7/6)		
62				VX1			甕	底部	70%	-	4.3	-	-	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)		
63			42-43	-		弥生?	台付甕	台部	60%	-	-	-	-	にぶい褐色(5YR6/4)	灰黄褐色(10YR6/2)		
64				V1			台付甕	台基部	70%	-	-	-	-	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)		
65				VX1			台付甕	台基部	70%	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		
66							台付甕	台基部	80%	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい褐色(5YR7/4)		
67			42	1	-		台付甕	台基部	70%	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/3)	浅黄褐色(10YR8/4)		
68							台付甕	台基部	40%	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR7/4)	黄褐色(10YR8/6)		
69				VX1			台付甕	台基部	80%	-	-	-	-	褐色(7.5YR7/6)	灰黄褐色(10YR6/2)		
70			43				台付甕	台基部	70%	-	-	-	-	にぶい褐色(7.5YR7/4)	褐色(7.5YR7/6)		
71				1	-	確認	台付甕	台基部	30%	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR7/4)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		
72				2	-	表証	甕	底部	25%	-	(8.4)	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)		
73				R2-S2	SH03	須恵器	杯蓋	口縁	15%	(9.6)	(9.6)	-	-	青灰(5B6/1)	青灰(5B6/1)		
74				SH03-PI			杯蓋	天井	30%	-	-	-	-	灰(5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	煮蓋	
75				R2	SH03	土師器	杯	ほぼ全体	40%	(10.6)	(11.0)	-	3.8	褐色(7.5YR6/6)	褐色(5YR6/6)		
76			67	44	5		甕	胴-底部	20%	-	-	(6.3)	-	浅黄褐色(10YR8/4)	褐色(7.5YR7/6)		
77							甕	胴部	10%	-	-	-	-	にぶい黄褐色(10YR5/3)	にぶい黄褐色(10YR7/4)		

第5章 角地目造

No	Fig	PL	区	グループ	遺構名	種別	部種	部位	残存	口徑	部径	底径	高さ	色調(外面)	色調(内面)	備考	
78					SH03	土師器	甕	胴部	10%	—	—	—	—	にぶい・黄緑(10YR6/3)	灰黄緑(10YR6/2)		
79					SH03・SK22	須恵器	杯蓋	全体	90%	9.9	10.1	—	3.5	明緑灰(7.5GY7/1)	灰(7.5Y6/1)		
80					SK22	土師器	杯	全体	100%	10.8	11.2	5.3	4.0	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)		
81	67		5				甕	全体	90%	18.7	17.0	5.9	27.7	にぶい・黄緑(10YR7/4)	にぶい・黄緑(10YR7/4)		
82					SH04-05		杯蓋	全体	20%	(11.8)	(11.8)	—	4.2	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)		
83			1	VX2			杯蓋	口縁~天井	15%	(11.4)	(11.4)	—	(3.2)	灰(10Y5/1)	緑灰(5Y6/1)		
84			2	VX1			杯蓋	口縁~天井	15%	(11.1)	(11.1)	—	—	灰(N5/7)	灰(10Y6/1)		
85							杯蓋	口縁~天井	10%	(9.6)	(9.6)	—	(3.6)	灰白(5Y7/1)	灰白(10Y8/1)		
86				VX3			杯蓋	口縁~天井	10%	(10.0)	(10.0)	—	—	暗赤灰(SR4/1)	暗赤灰(SY4/1)	森山原	
87			1	VX2-3			杯蓋	全体	30%	(10.0)	(10.0)	—	4.3	青灰(10B6/5/1)	青灰(10B6/5/1)		
88							杯身	全体	20%	(10.6)	(12.4)	—	—	灰(7.5Y6/1)	灰(5Y6/1)		
89			2	VX1			杯身	全体	70%	9.4	11.6	4.7	4.4	青灰(10B6/5/1)	灰(N5/7)		
90			1	VX2-3			杯身	口縁~底部	70%	8.7	11.1	3.9	3.9	青灰(10B6/5/1)	青灰(10B6/5/1)	森山原	
91			2	VX1	谷部		杯身	口縁~底部	10%	(9.9)	(12.1)	—	—	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)		
92			45				杯身	口縁全体	15%	(10.2)	(11.6)	(4.6)	3.2	青灰(SB6/1)	灰(7.5Y6/1)		
93			1	VX3			杯身	口縁全体	20%	(8.1)	(10.8)	(6.2)	3.8	灰(10Y6/1)	灰(7.5Y6/1)		
94				VX1			杯身	口縁~底部	15%	(9.5)	(11.4)	—	—	灰(10Y6/1)	灰(5Y6/1)		
95			2	WX1			高杯	口縁~脚部	30%	(15.0)	(15.0)	—	—	黄灰(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)		
96				VX3			甕	口縁	5%	(15.2)	(15.2)	—	—	灰(5Y6/1)	灰白(5Y7/1)	横倉?	
97				UX2			高杯	口縁	10%	(15.6)	(15.6)	—	(2.0)	にぶい・黄緑(10YR5/3)	灰黄緑(10YR5/2)		
98			1	UX3			杯身	口縁	5%	(15.0)	(15.0)	—	—	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	有台杯	
99				VX3			高杯	脚基部	80%	—	—	—	—	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)		
100			2	V-WX1			フラスコ皿	口縁~底部	50%	7.8	—	—	(22.8)	灰白(5Y8/1)	灰黄(2.5Y7/2)		
101			1	—			杯身	底部	15%	—	—	(8.4)	—	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	有台杯	
102			44	5	U2	SP048	杯蓋	全体	90%	11.1	11.1	—	3.9	明赤(5YR7/1)	青灰(SB6/1)		
103			2	V1			高杯	脚部	30%	—	—	—	—	灰(N6/7)	灰(N6/7)	二階造	
104			1	—	確認		杯蓋	口縁	30%	(10.2)	(12.6)	(5.2)	3.6	青灰(SB5/1)	青灰(SB5/1)		
105			45	確認	—	T-J	杯蓋	口縁	20%	(9.8)	(9.8)	—	—	青灰(SB5/1)	灰(10Y5/1)		
106			5	R2		覆瓦	杯身	口縁~底部	20%	(8.3)	(11.3)	—	—	灰(10Y6/1)	灰(5Y6/1)		
107							甕	口縁~頸部	10%	(16.2)	—	—	—	にぶい・黄緑(10YR7/4)	にぶい・黄緑(10YR7/3)		
108							甕	口縁~頸部	30%	(19.1)	—	—	—	にぶい・橙(7.5YR7/4)	にぶい・橙(7.5YR7/4)		
109							甕	口縁~頸部	20%	(20.6)	—	—	—	にぶい・橙(7.5YR7/4)	にぶい・橙(7.5YR7/4)		
110				V-WX1			甕	口縁~頸部	15%	(23.4)	—	—	—	にぶい・黄緑(7.5YR7/4)	にぶい・黄緑(10YR7/3)		
111							甕	口縁~胴	10%	(27.2)	—	—	—	にぶい・黄緑(10YR7/4)	灰黄緑(10YR5/2)		
112			1	UX3			甕	口縁~胴	10%	(24.2)	—	—	—	にぶい・黄緑(7.5YR7/4)	にぶい・黄緑(10YR7/4)		
113							甕	口縁~胴	15%	(30.4)	(35.3)	—	—	灰黄緑(10YR5/2)	灰黄緑(10YR5/2)		
114				VX1	谷部		甕	口縁~頸部	10%	(36.8)	—	—	—	灰黄緑(10YR5/2)	にぶい・黄緑(10YR7/3)		
115				WX1	土師器		甕	口縁~頸部	15%	(31.6)	—	—	—	にぶい・橙(7.5YR7/4)	にぶい・黄緑(10YR7/3)		
116			76				甕	口縁~頸部	15%	(31.2)	—	—	—	灰黄緑(10YR5/2)	にぶい・橙(5YR7/4)		
117							甕	口縁~頸部	10%	(23.6)	—	—	—	にぶい・黄(7.5YR6/2)	にぶい・黄(10YR7/3)		
118				WX1			台付甕	台基部	30%	—	—	—	—	にぶい・黄緑(10YR7/3)	にぶい・橙(7.5YR7/4)		
119				VX1			台付甕	台基部	30%	—	—	—	—	にぶい・黄緑(10YR7/3)	残黄緑(10YR8/3)		
120				WX1			台付甕	台部	15%	—	—	(15.2)	—	にぶい・黄緑(10YR7/3)	にぶい・橙(7.5YR7/4)		
121			45	1	VX3		台付甕	台部	90%	—	—	5.8	—	橙(7.5YR7/6)	灰白(10YR8/2)		
122			46	2	V1		甕	底部	90%	—	—	4.4	—	橙(7.5YR6/6)	黄緑(7.5YR7/8)		
123				WX1	SP39		甕	口縁~頸部	15%	(32.2)	—	—	—	にぶい・橙(7.5YR6/4)	にぶい・黄緑(10YR7/4)		
124				確認	—	T-C	甕	口縁~頸部	10%	(22.9)	—	—	—	褐灰(10YR4/1)	褐灰(10YR5/1)		
125							瀬戸式酒樽	灯明皿	全体	90%	10.6	10.6	5.2	2.3	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(5Y7/2)	美濃産
126							志戸呂	弘明器	口縁~脚部	20%	(10.9)	—	—	—	残黄(5Y7/3)	残黄(5Y7/3)	
127							かみらけ	ロタロ	全体	90%	8.7	—	4.0	3.7	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	
128							瀬戸式酒樽	染付丸皿	全体	80%	12.6	12.6	5.8	3.5	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	瀬戸産
129							瀬戸式酒樽	甕	胴部	90%	—	—	21.0	—	暗褐(7.5YR3/4)	暗褐(7.5YR3/4)	瀬戸産
130				W1はか	SX01	志戸呂	灯明皿	底部	10%	(10.4)	(10.4)	(6.2)	1.7	灰黄(5YR4/2)	灰黄(5YR4/2)		
131				VX3	谷部		甕?	口縁	5%	(14.7)	—	—	(1.4)	灰黄(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1)		
132			2	WX2			甕	口縁	7%	(12.8)	(12.8)	—	—	2.2	暗赤(2.5Y5/2)	灰黄(2.5Y6/2)	
133			1	確認			甕	口縁	5%	(15.6)	(15.6)	—	(1.4)	にぶい・黄(2.5Y6/3)	灰白(2.5Y8/1)		
134				VX1- WX1	谷部		甕	口縁	15%	(14.4)	(14.4)	—	—	残黄(2.5Y7/4)	残黄(2.5Y7/3)		
135				VX1			甕	口縁	4%	(15.3)	(15.5)	—	(2.3)	灰白(2.5Y7/1)	灰白(5Y7/1)		
136				WX1			甕	口縁	7%	(15.4)	(15.4)	—	—	灰黄緑(10YR6/2)	灰白(2.5Y7/1)		
137				VX1- WX1			甕	口縁	—	(17.2)	(17.6)	—	3.5	灰黄(2.5Y7/2)	灰赤(2.5Y7/2)		
138							甕	口縁	10%	(16.1)	(16.1)	—	—	灰白(2.5Y8/2)	灰白(5Y7/2)		
139				包含層			甕	口縁	20%	(14.7)	(14.7)	(7.2)	3.8	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y8/1)		
140			4	—	T-D		甕	底部	10%	—	—	(5.8)	—	灰白(5Y8/1)	灰白(5Y8/1)		
141			2	WX1	谷部		甕	底部	90%	—	—	5.9	—	灰白(2.5Y8/2)	残黄(2.5Y7/3)		
142			確認	—	T-G		甕	底部	70%	—	12.0	5.1	—	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)		
143			47	区外	—	志戸呂	筒形甕	底部	10%	—	—	(8.8)	—	灰黄(7.5YR5/2)	灰黄(7.5YR5/2)		
144			5	Q2	包含層		ロタロ	底部	90%	—	—	4.8	—	にぶい・橙(5YR6/4)	にぶい・橙(5YR6/4)		
145			1	—	谷部		ロタロ	底部	40%	—	—	(4.0)	—	橙(7.5YR7/6)	にぶい・橙(7.5YR7/4)		
146			5	T3	覆瓦		ロタロ	口縁	30%	(6.2)	(6.2)	(3.6)	(2.0)	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)		
147			3	—	表層		小碗	底部	70%	—	6.0	3.1	—	灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/2)	美濃産	
148				Q2	包含層		若緑輪巻鉢	底部	50%	—	—	(6.0)	—	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	美濃産	
149			46	Q2			肥前	染付皿	口縁	20%	(14.2)	(14.2)	(6.8)	2.8	灰白(5GY9/1)	灰白(5GY9/1)	

※ 弥生?とした土器については弥生土器か古式土師器の判断がつかないものである。

※ 法量記載の括弧内は復原値

単位(cm)

(2) 石器・石製品観察表

第24表 角鹿II遺跡出土石器・石製品観察表

No	Fig	PL	区	グリッド	遺構名	器種	使用石材	全長	幅	厚さ	重量	備考
28			2	W2	SH01	石鏃	珉質頁岩(暗灰色)	21.8	17.6	4.2	1.4	
29			5	R2・S2	SH03	石鏃未製品	珉質頁岩(灰色)	30.0	22.0	8.0	4.66	
30						石鏃	珉質頁岩(灰色)	23.2	20.0	7.9	3.1	
31	46	42		V1	SK04	磨蝕石	中粒砂岩	101.0	73.6	51.6	515.2	
32			1	VX2		スクレイパー	シルト岩	82.6	40.6	15.5	38.2	
33			2	WX1	谷部	スクレイパー	シルト岩	65.0	49.0	10.0	32.32	
34				V1		石製品	圧砕岩	91.4	18.9	7.5	22.6	

単位：全長・幅・厚さ (mm) 重量 (g)

(3) 鉄製品観察表

第25表 角鹿II遺跡出土金属製品観察表

No	Fig	PL	区	グリッド	遺構名	材質	器種	全長	幅	厚さ	重量	備考	
151						鉄	釘	(1.3)	0.4	0.4	0.83		
152						鉄	釘	(3.4)	0.3	0.4	1.47		
153						鉄	釘	(2.5)	0.4	0.3	1.27		
154						鉄	不明	(1.6)	0.7	0.6	3.90		
155						鉄	釘	(1.7)	0.4	0.4	0.61		
156						鉄	釘	(3.2)	0.5	0.4	1.95		
157						鉄	釘	(2.9)	0.4	0.3	0.65		
158						鉄	釘	2.3	0.3	0.2	0.59		
159						鉄	釘	(2.5)	0.3	0.3	0.98		
160						鉄	釘	(3.6)	0.5	0.3	1.30		
161						鉄	釘	(4.9)	0.4	0.5	4.22		
164						鉄	不明	(4.2)	(1.9)	0.4	11.71	鏃か?	
165					谷部	鉄	鉄鏃?	(8.0)	0.6	0.4	5.21	鉄鏃の可能性があるが確定的ではない。	
166						銅	不明	(1.6)	(1.6)	0.1	0.69	刀子の柄縁金具or筒形金具か	
167			48	2	W2	攪乱	鉄	鏃	(15.5)	(14.0)	0.5	141.21	刃部幅3.0~4.7

※括弧内は残存値

単位：全長・幅・厚さ (cm) 重量 (g)

(4) 玉類観察表

第26表 角鹿II遺跡出土玉類観察表

No	Fig	PL	区	グリッド	遺構名	材質	種類	色調	直径	高さ	孔径	重量	備考
43	48	42	2	XX1	SK12	ガラス	小玉	スカイブルー	3.8	3.9	0.5	0.08	

単位：直径・高さ・孔径 (mm) 重量 (g)

(5) 銭貨観察表

第27表 角鹿II遺跡出土銭貨観察表

No	Fig	PL	区	遺構名	グリッド	種別	銭名	国名	初鋳年	銭径	内径	孔幅	重量	備考
150				SX01	W1ほか	鉄銭?	寛永通寶	日本	1739年	2.4	—	0.7	2.61	「寛永通寶」鉄銭の可能性が高い。
162	90	48	2区			銅銭	寛永通寶	日本	1636年	2.4	1.9	0.6	2.39	古寛永。
163				SK18か谷部	WX2	銅銭	寛永通寶	日本	1636年	2.5	2.0	0.6	2.21	古寛永。

単位：外径・内径・孔幅 (cm) 重量 (g)

第7節 礫石経塚（角庵経塚）の調査成果

1 概要

SK07からは礫石経が多数出土している。第6章第4節で足立順司氏が述べるように、礫石経（以下、経石）が収められたからといって経塚であることの保証はなく、墓に伴う遺物であることも考えられる。しかし、SK07では礫石経以外、遺構の性格を特定するような遺物は出土していないことから、ここではSK07を「礫石経塚」であると想定して報告する。なお、当遺構の性格や造営の意味については静岡県内（遠江・駿河・伊豆）の事例をもとに第6章第4節にて足立順司氏が詳説しているので、そちらを参照願いたい。

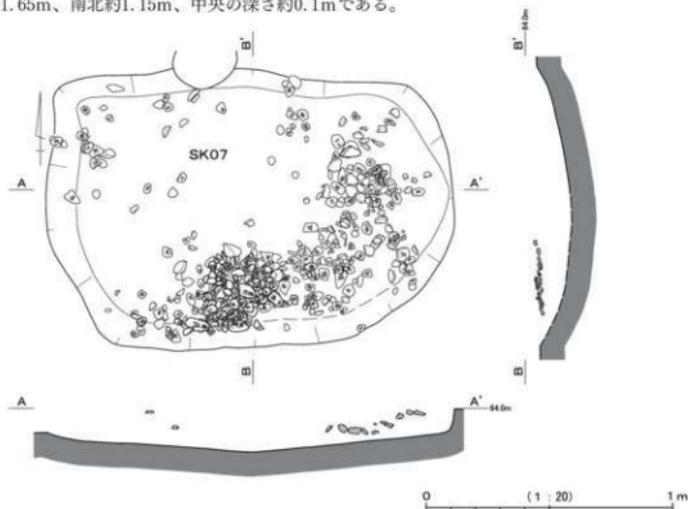
2 位置と構造

(1) 位置（第38・40図）

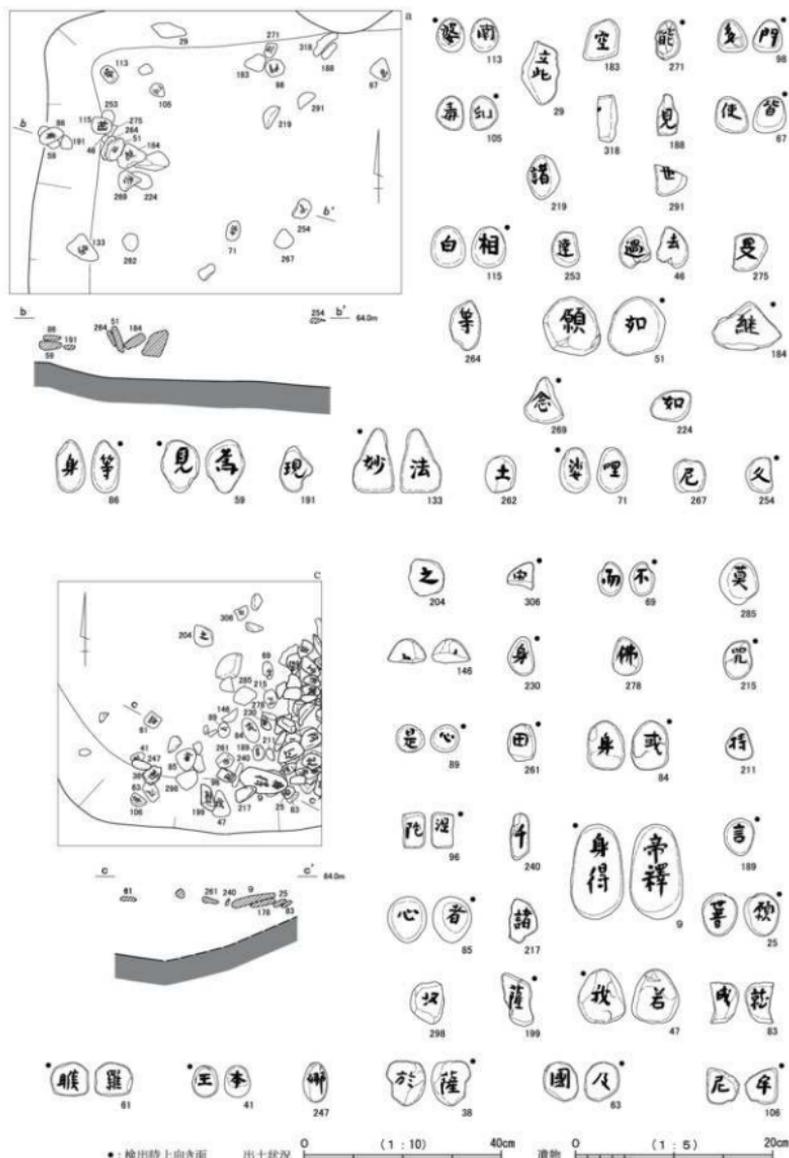
SK07は角庵Ⅱ遺跡2区の中央やや北よりの、W1グリッドに位置する。1・5区と2区の間にある谷に向かって尾根が平坦面から緩やかに下り始める場所に位置する。標高は64m前後に立地している。

(2) 構造と経石出土状況（第91～95図，第20表，巻頭図版8，図版49・50）

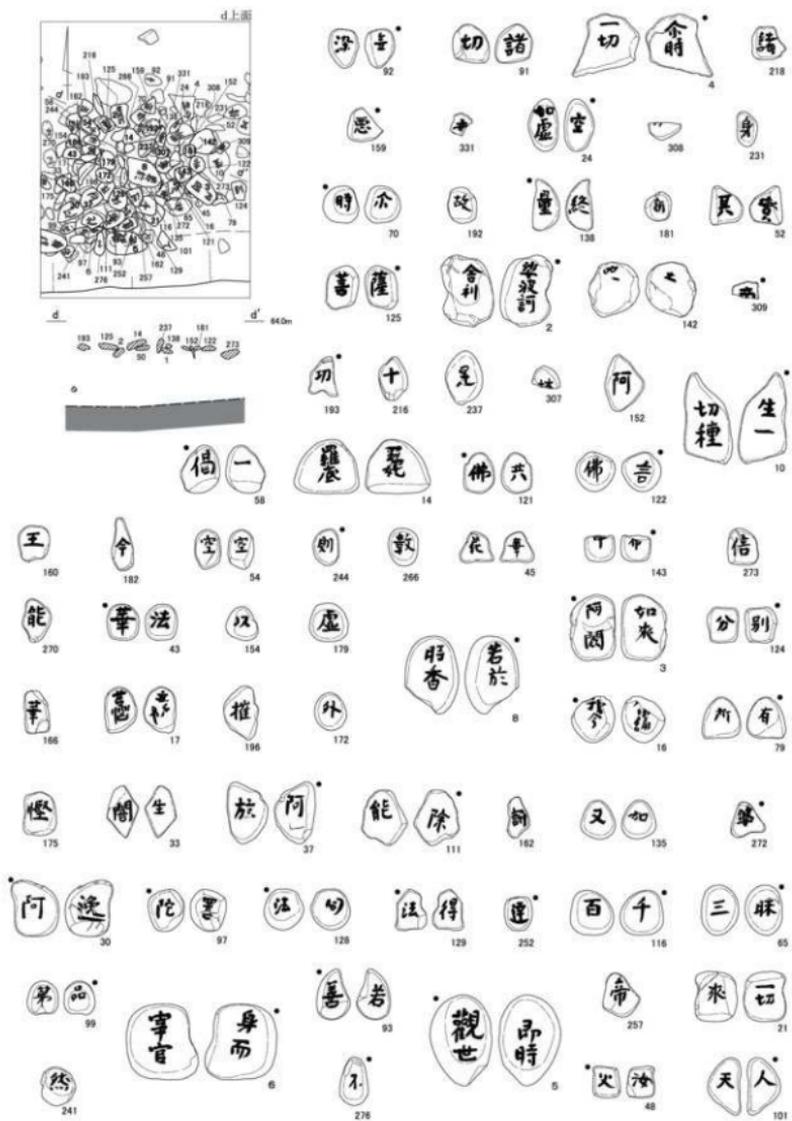
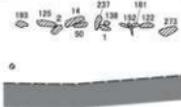
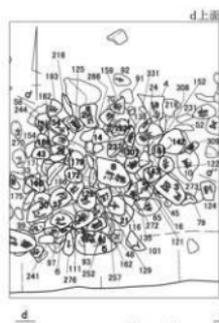
構造 SK07の平面形は、東西に長い隅丸長方形で、短辺がほぼ南北を、長辺が東西を向いており、東西南北を意識して掘削された可能性がある。断面について東西は箱形である。南北は断面図ではレンズ状に表現しているが、SK07を完掘した段階でSK08を破壊して掘削されたことが判明し、当初SK07と考えた、写真（図版49）で一段さがっている部分はSK08の上部を誤って掘削したためであると想定できるため、本来は南北も箱形であった可能性が高い。その仮定が正しければ、平面長方形、断面箱形の土坑で長辺約1.65m、南北約1.15m、中央の深さ約0.1mである。



第91図 角庵Ⅱ遺跡 礫石経塚（SK07）実測図

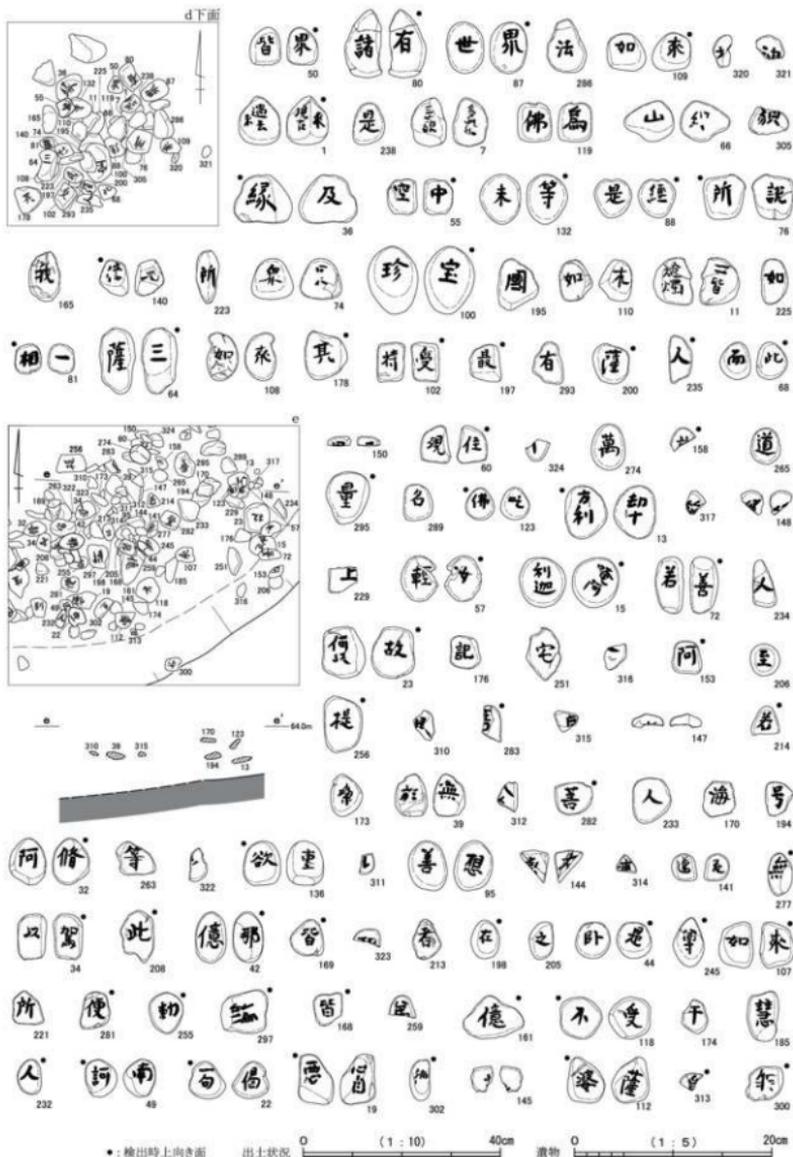


第93図 角塚II遺跡 碑石経塚 (SK07) 碑石経出土状況②



●: 検出時上向き面 出土状況 0 (1:10) 40cm 遺物 0 (1:5) 20cm

第94図 角地II遺跡 礎石経塚 (SK07) 礎石経出土状況③



第95圖 角塚II遺跡 碑石経塚(SK07) 碑石経出土状況④

経石出土状況 SK07内部には経石が収められているが、中には経文が書かれていないものも一部(100石程度)確認できた。経石はSK07の南側から東側にかけて多数確認できるが、中央と北側から西側にかけては経石が少ないことから、一旦収めた経石を取り出した可能性も排除できない。

遺構内にはほぼ10cm以下の平坦面のある扁平な石材を用いて経典を書写した経石を、床面から2~5cm程度上に、積み重ねるように置いた状況を示している。ほぼ床面に積み上げたといえる。一部南側のみ、経石を取り上げるとその下位(d2面=下面)からさらに経石が出土した。ただし、第92~95図(遺物出土状況の詳細図)で示したように経典順番どおりに並べたような状況は確認できず、隣接する経石をつなげて経典の一文を推測できるような状況にはない。さらに、両面に文字が書写されたものについてみると、133の「妙・法」(第93図)、や43の「法・華」(第94図)、65「三・昧」(第94図)のように本来先に来るべき「法」や「三」が下向きに置かれているものがあり、経典の文字順で先の文字を上に向けるような意図は確認できない。

なお、土坑内の覆土からは経石以外は出土しておらず、また経石の下の僅かな土砂からも、何も出土していない。

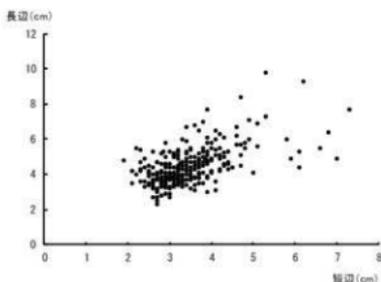
3 出土遺物

(1) 出土数と法量(第96~107図, 第28表, 巻頭図版8, 図版51~59)

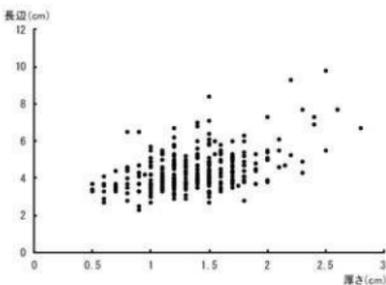
SK07からは、400個前後の石材が出土しているが、そのうち墨書があると判断できた石(経石)は331点(1~331)であり、文字が書かれたもの(経石)についてはすべて図示した(第99~107図)。第96図には長辺と短辺の分布図を、第97図には長辺と厚さの分布図を、第98図には使用された重量ごとの数を示した。

経石に利用された石材は角の取れた川原石である。長辺では2cm以上10cm未満、短辺では2cm以上8cm未満の石材が利用され、厚さは0.5~3cm未満、重量では5~200gの石材が利用されている。長辺×短辺では長辺2~6cm、短辺2~5cm、厚さでは0.5~2cm、重量10~50gの石材に集中傾向にある。おおよそ同じくらいの石材を集めていた可能性が高い。

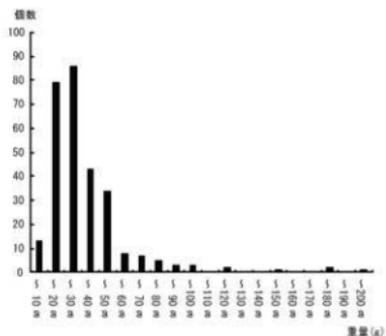
なお、長辺と短辺が大きい石材の文字数が多い傾向にあるが、「過去未来現在」のように長辺4.9cm、短辺4.2cmの石材に6字を記入しているものもある。



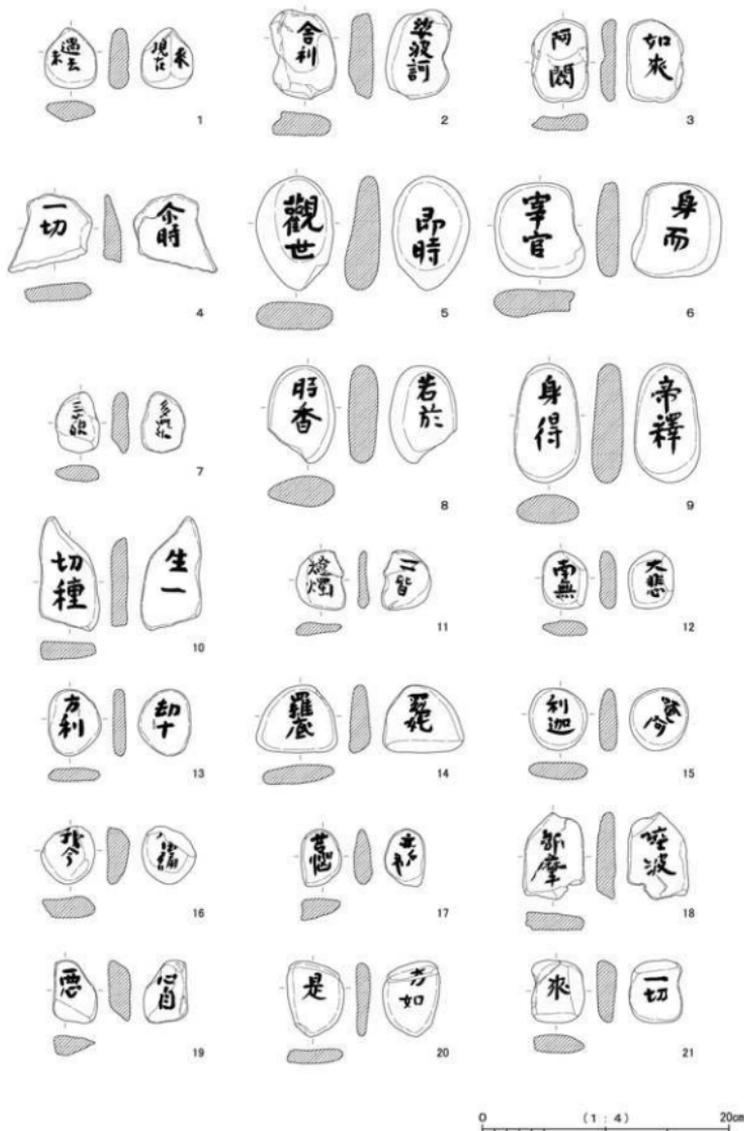
第96図 礎石経塚出土経石の法量分布図①(長辺×短辺)



第97図 礎石経塚出土経石の法量分布図②(長辺×厚さ)



第98図 礎石経塚出土経石の重量別出土数



第99回 塚石経塚出土経石実測図①



第100図 礫石経塚出土経石実測図②



第101図 礫石経塚出土経石実測図③

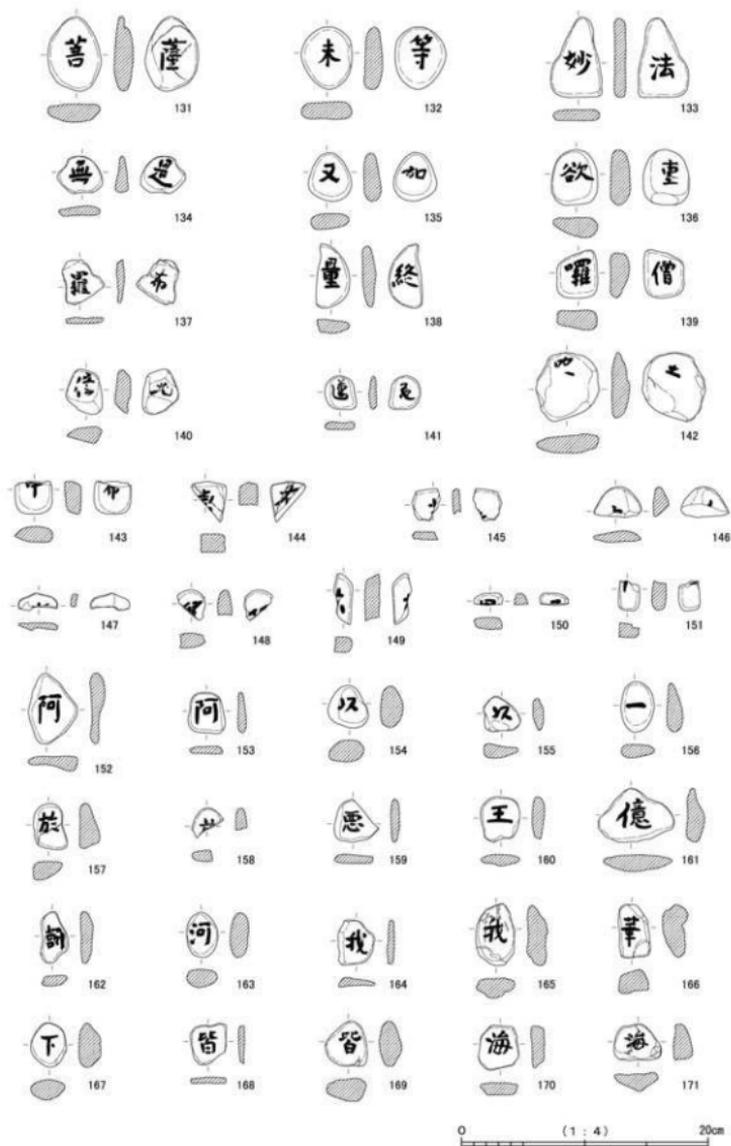


0 (1:4) 20cm

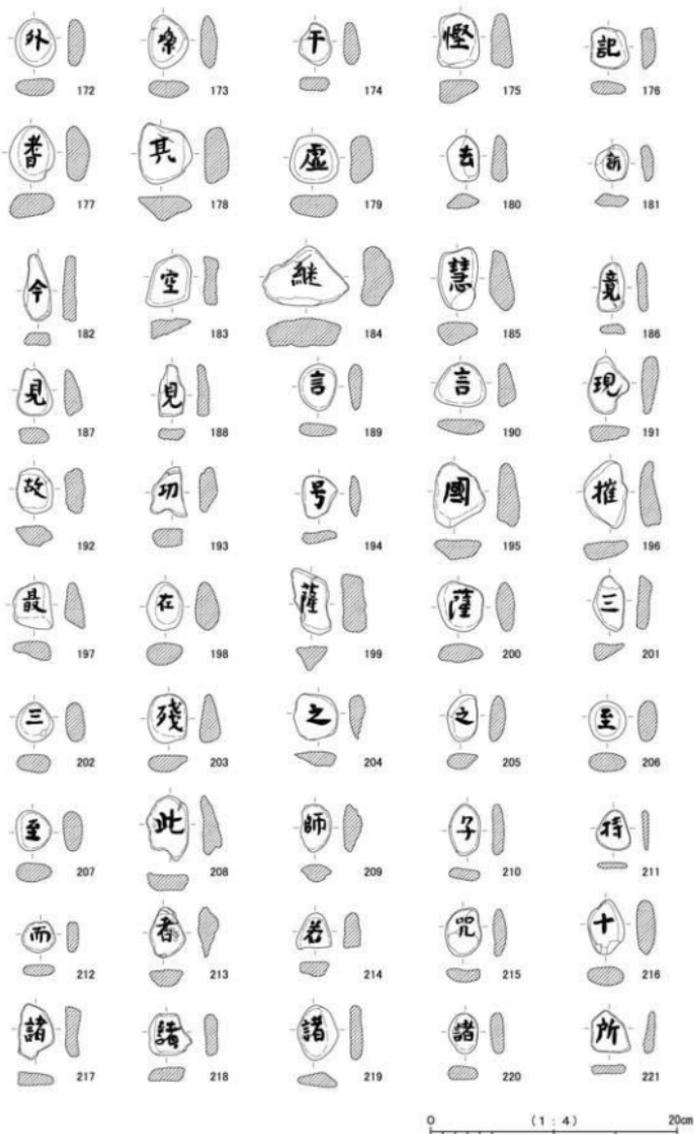
第102図 磯石経塚出土経石実測図④



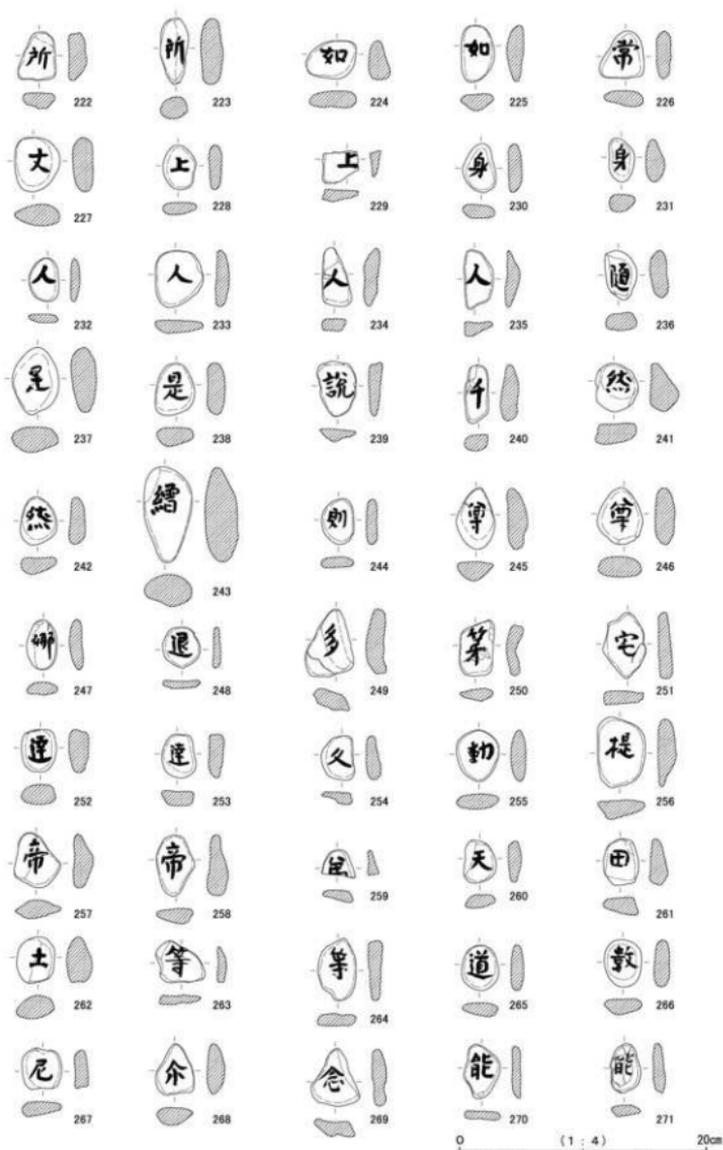
第103図 礫石経塚出土経石実測図⑤



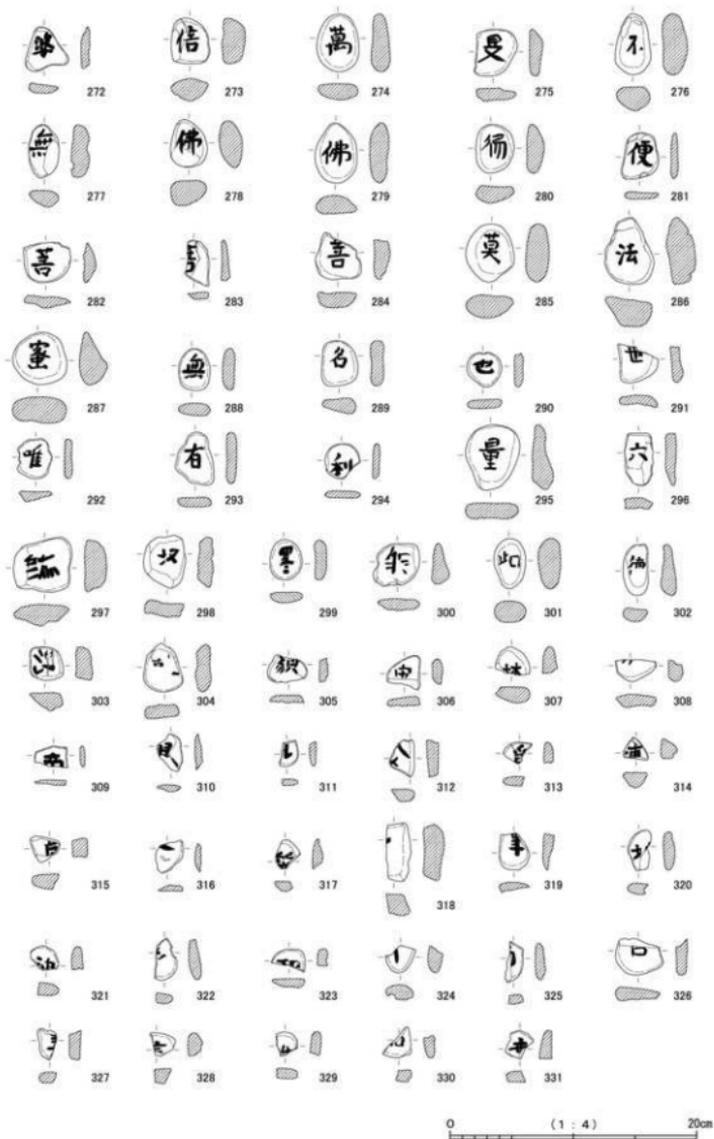
第104図 礫石経塚出土石経実測図⑥



第105図 礫石経塚出土経石実測図⑦



第106図 礫石経塚出土経石実測図⑧



第107図 礫石経塚出土経石実測図⑨

No	文字		よみ		画	文字数	寸法(cm)	重量(g)	石材	法華	世界	備考	
	A面	B面	A面	B面									
81	相	一	ショウ(ソウ)	イツ(イチ)	画	2	1×1	3.1	2.7	12	14.1	砂岩 ○	「一相」→「一相」(第3・5・14・21)
82	相	懸	ショウ(ニョウ)	ビン(ミン)	画	2	1×1	5.3	6.1	1.6	73.3	砂岩 ○	「相懸」(第7)
83	成	成	ショウ	ジュ	画	2	1×1	4.2	2.8	1.0	18.9	砂岩 ○	「成成」(多数)
84	身	成	シン	ワツ(コク)	画	2	1×1	5.0	3.8	1.1	31.0	砂岩 ○	「身成」(第16・24)
85	心	成	シン	シヤク	画	2	1×1	4.7	3.9	1.8	43.8	砂岩 ○	「心成」→「心成」(第8・14・16・17・23・27)
86	身	成	シン	トウ	画	2	1×1	5.3	2.85	1.9	28.5	砂岩 ○	「身成」(第19・25)
87	世	成	セ	カイ?	画	2	1×1	5.3	3.8	1.6	44.0	砂岩 ○	「世成」(多数)
88	足	成	ゼ	タイ(キョウ)	画	2	1×1	4.0	3.7	1.2	26.5	砂岩 ○	「足成」→「足成」(多数)
89	足	心	ゼ	シン	画	2	1×1	2.8	2.8	1.8	15.5	砂岩 ○	「足心」(第10・14・16)・「足心」(第7・27)
90	生?	成	セイ(ショウ)?	セ	画	2	1×1	3.8	2.2	0.9	10.3	砂岩 ?	
91	切	成	セツ	ショ	画	2	1×1	3.8	3.7	1.4	27.7	砂岩 ○	「切成」(多数)
92	胎?	成	セン?	○	画	2	1×1	3.9	3.0	1.5	22.2	砂岩 ?	
93	善	成	ゼン	ジャツ(チャツ)	画	2	1×1	5.2	3.4	1.8	40.0	砂岩 ○	「善成」(第17・19・26・27)
94	善	是	ゼン	ゼ	画	2	1×1	4.3	3.2	1.6	30.0	砂岩 ○	「善是」(第19)
95	善	想	ゼン	ソウ	画	2	1×1	3.1	3.9	1.7	45.3	砂岩 ○	「善想」(第24)
96	陀	野	ダ(ダ)	ネツ(ダ)	画	2	1×1	3.6	2.3	1.3	15.2	泥岩 ×	「陀野」(宝飯陀羅尼)
97	陀	野?	ダ(ダ)	リ?	画	2	1×1	4.3	3.6	1.7	38.0	砂岩 ?	「野陀」→「陀野」はなし
98	多	門	タ	モン	画	2	1×1	3.3	2.9	1.6	21.1	砂岩 ○	「多門」(多数)
99	多	品	ダイ	ホン	画	2	1×1	3.5	3.2	1.2	19.0	砂岩 ○	「多品」(多数)
100	抄	宝	チン	ホウ	画	2	1×1	6.9	5.1	2.4	110.4	砂岩 ○	「抄宝」(多数)
101	天	人	テン	ジン	画	2	1×1	5.9	3.4	1.5	40.5	砂岩 ○	「天人」/「天人」(多数)
102	持?	受	トリ(ツ)	ジュ	画	2	1×1	4.1	3.8	1.8	40.3	砂岩 ?	「持」は母の字か? (受持)(多数)
103	持	受	トリ	ヂウ	画	2	1×1	5.2	2.1	1.4	32.3	砂岩 ○	「持受」(第2・7・17)
104	持?	受?	トリ?	ジュ?	画	2	1×1	4.0	4.5	1.45	35.3	砂岩 ?	「持受」(第3・4・17)
105	毒	○	ドク	○	画	2	1×1	3.6	2.8	0.6	9.5	砂岩 ?	
106	足	牟	ニ	ム	画	2	1×1	3.7	3.3	1.0	17.2	泥岩 ○	「足牟尼」(多数)
107	如	來	ニョ	ライ	画	2	1×1	4.7	3.5	1.4	36.1	砂岩 ○	「如来」(多数)
108	如	來	ニョ	ライ	画	2	1×1	4.9	3.2	1.0	22.3	泥岩 ○	「如来」(多数)
109	如	來	ニョ	ライ	画	2	1×1	3.9	3.9	1.7	37.1	砂岩 ○	「如来」(多数)
110	如	來?	ニョ	ライ?	画	2	1×1	4.3	3.3	1.5	21.2	砂岩 ○	「来」は「東」か? 漢字の可能性が高い。
111	龍	珠	リウ	ジュ(ジュ)	画	2	1×1	6.7	4.6	1.2	45.3	泥岩 ○	「龍珠」(第21・23)
112	龍	珠	リウ	ジュ	画	2	1×1	4.7	3.8	1.5	36.1	砂岩 ○	「龍珠」(第28)・「龍珠」(第28)
113	龍	珠	リウ	ナン	画	2	1×1	3.5	2.8	1.4	15.9	砂岩 ×	「龍珠」(龍)(大慈心陀羅尼)
114	疑?	佛	バツ	フツ	画	2	1×1	2.4	2.7	0.7	5.9	砂岩 ×	
115	白	相	ハク(ビヤク)	ショウ(ソウ)	画	2	1×1	4.2	3.5	1.4	30.1	砂岩 ○	「白相」(第27)
116	百	千	ヒヤク	セン	画	2	1×1	4.6	4.4	2.1	64.9	砂岩 ○	「百千」(多数)
117	不	共	フ	キョウ	画	2	1×1	5.2	2.8	1.3	25.9	砂岩 ○	「不共」(第3・12・14・24)
118	不	受	フ	ジュ	画	2	1×1	4.3	4.2	1.1	28.7	砂岩 ○	「不受」(第3・5)・「不受」(第3・5)
119	佛	為	ブツ	イ	画	2	1×1	4.0	3.4	1.4	32.7	砂岩 ○	「佛為」(多数)
120	佛	為	ブツ	オク	画	2	1×1	3.7	3.5	1.3	24.6	砂岩 ○	「佛為」(多数)
121	佛	為	ブツ	キョウ	画	2	1×1	4.1	3.1	0.6	13.1	砂岩 ○	「佛為」(第21・23)
122	佛	言	ブツ	ゲン	画	2	1×1	4.1	4.0	1.8	40.1	砂岩 ○	「佛言」(言佛)(多数)
123	佛	○	ブツ	○	画	2	1×1	3.25	2.9	1.0	12.7	砂岩 ?	○は真真にみられる○か?
124	分	別	フン	ベツ	画	2	1×1	3.6	3.2	1.5	26.1	砂岩 ○	「分別」(多数)
125	音	韻	ホン	オン	画	2	1×1	4.5	3.3	1.4	36.1	砂岩 ○	「音韻」(多数)
126	音	撰	ホン	ダイン	画	2	1×1	4.5	4.7	1.9	47.3	砂岩 ○	「音撰」(多数)
127	法	之	ホウ	シ	画	2	1×1	3.6	3.3	1.9	20.1	砂岩 ○	「法之」(法)(多数)
128	法	同?	ホウ	ドウ?	画	2	1×1	4.2	4.0	1.3	38.8	砂岩 ×	「同」が句とした場合もなし
129	法	輪	ホウ	リン	画	2	1×1	4.3	3.2	0.9	17.0	砂岩 ○	「法輪」(得法)(多数)
130	法	輪	ホウ	リン	画	2	1×1	6.1	3.9	2.1	69.0	砂岩 ○	「法輪」(多数)
131	音	韻	ホン	オン	画	2	1×1	6.1	4.3	1.5	52.1	砂岩 ○	「音韻」(多数)
132	末	等	ミ	トウ	画	2	1×1	5.1	4.1	1.4	45.4	砂岩 ○	「末等」(第11・17)
133	妙	法	ミョウ	ホウ	画	2	1×1	6.5	4.1	0.9	36.4	砂岩 ○	「妙法」(多数)・「法妙」(第2)
134	無	量	ム	ゼ	画	2	1×1	3.1	3.6	1.0	14.0	砂岩 ○	「無量」(第14)・「無量」(多数)
135	又	知	ユウ	ジュ(ニョ)	画	2	1×1	4.0	3.5	1.2	26.3	砂岩 ○	「又知」(第10・19・23・27)
136	取	善	ク	ジュウ(ショウ)	画	2	1×1	4.5	3.7	1.6	41.6	砂岩 ○	「取善」(多数)
137	羅	布	ラ	フ	画	2	1×1	3.7	3.4	0.5	8.5	砂岩 ×	「羅布」(多数)
138	羅	布	ラウ	シュウ	画	2	1×1	5.3	2.6	1.1	23.8	砂岩 ○	「羅布」(第19)
139	囉	囉	ラウ	ソウ	画	2	1×1	3.9	3.3	1.7	31.8	砂岩 ×	「囉囉」(大悲心陀羅尼)
140	圓?	高?	ウヱン?	カウ?	画	2	1×1	3.7	2.9	1.4	18.3	砂岩 ?	
141	圓?	○	ウヱン?	○	画	2	1×1	2.7	2.6	0.6	5.8	砂岩 ?	
142	○	○	○	○	画	2	1×1	5.6	5.1	1.4	56.3	泥岩 -	
143	○	○	○	○	画	2	1×1	2.7	3.0	1.3	17.7	砂岩 -	
144	○	○	○	○	画	2	1×1	3.3	2.8	1.5	16.2	玄武岩 -	中/佛?
145	○	○	○	○	画	2	1×1	2.6	2.3	0.6	4.9	泥岩 -	子/在?
146	○	○	○	○	画	2	1×1	2.5	3.8	1.1	12.8	砂岩 -	
147	○	○	○	○	画	2	1×1	1.4	3.2	0.6	3.3	泥岩 -	
148	○	○	○	○	画	2	1×1	2.0	2.1	1.2	7.7	砂岩 -	
149	○	○	○	○	画	2	1×1	3.8	1.5	1.2	11.7	砂岩 -	
150	○	○	○	○	画	2	1×1	1.0	2.3	1.0	4.2	砂岩 -	
151	○	○	○	○	画	2	1×1	2.4	1.7	1.2	7.7	砂岩 -	
152	阿	ア	-	-	片	1	1	5.8	4.0	1.2	31.3	砂岩 ○	「阿羅羅」など(多数)
153	阿	イ	-	-	片	1	1	3.3	3.0	0.6	10.8	砂岩 ○	「阿羅羅」など(多数)
154	以	イ	-	-	片	1	1	4.2	3.3	1.7	25.8	砂岩 ○	「以」(多数)
155	以	イ	-	-	片	1	1	2.9	3.0	1.2	10.9	砂岩 ○	「所以」(多数)
156	一	イチ(イツ)	-	-	片	1	1	4.1	2.7	1.1	18.2	安山岩 ○	「一切」など(多数)
157	於	オ	-	-	片	1	1	3.8	2.7	1.5	19.9	砂岩 ○	「於」(多数)
158	於	オ?	-	-	片	1	1	2.4	2.6	0.9	5.8	砂岩 ?	「於」(多数)
159	應	オ(アツ)	-	-	片	1	1	3.5	3.7	0.8	11.5	泥岩 ○	「應心」など(多数)
160	王	オウ	-	-	片	1	1	3.7	3.2	0.9	15.3	砂岩 ○	「法王」など(多数)
161	億	オウ	-	-	片	1	1	4.4	6.1	1.3	42.0	砂岩 ○	「千萬億」など(多数)
162	阿	カ	-	-	片	1	1	4.2	2.3	1.0	12.6	砂岩 ○	「阿羅羅」など(多数)
163	阿	カ(カ)	-	-	片	1	1	3.7	2.6	1.5	17.7	安山岩 ○	「阿羅羅」など(多数)
164	我	カ	-	-	片	1	1	3.7	3.0	0.8	9.6	砂岩 ○	「我阿」など(多数)

No	文字		よみ		画数	文字数	寸法(cm)		重量(g)	石材	法華	世界	備考
	A面	B面	A面	B面			長さ	幅					
165	我	ガ	—	—	片	1	5.1	3.1	17	32.4	安山岩	○	「我爾」など(多数)
166	我	カ(ケ)	—	—	片	1	4.4	2.6	1.9	32.8	泥岩	○	「法華」など(多数)
167	下	カ(ゲ)	—	—	片	1	3.6	2.9	1.75	21.3	泥岩	○	「樹下」など(多数)
168	皆	カイ	—	—	片	1	3.4	2.9	0.5	8.6	砂岩	○	「皆阿彌多羅三藐三菩提」など(多数)
169	皆	カイ	—	—	片	1	3.7	3.4	1.9	31.7	チャート	○	「皆阿彌多羅三藐三菩提」など(多数)
170	海	カイ	—	—	片	1	3.7	3.3	1.0	22.2	砂岩	○	「我が海中」など(多数)
171	海	カイ	—	—	片	1	3.0	3.9	1.5	20.9	砂岩	○	「我が海中」など(多数)
172	外	ガイ(ゲ)	—	—	片	1	3.8	3.2	1.3	24.4	安山岩	○	「外道」など(多数)
173	樂?	ガク(ラク)?	—	—	片	1	4.3	3.2	1.3	24.5	砂岩	○	「楽説椰子」など(多数)
174	干	カン	—	—	片	1	3.5	2.6	1.3	15.3	砂岩	○	「干の可能性あり?」若干(多数)
175	檀	カン(タン)	—	—	片	1	4.5	3.4	1.9	43.0	砂岩	○	「檀」(第2・19・22・24)
176	記	キ	—	—	片	1	3.4	3.1	1.1	19.0	砂岩	○	「阿記」など(多数)
177	善	キ(ケ)	—	—	片	1	4.5	3.6	1.9	42.3	砂岩	○	「善阿彌山」など(多数)
178	其	キ(ギ・コ)	—	—	片	1	5.0	4.3	2.0	47.9	砂岩	○	「其阿彌山」など(多数)
179	虚	キョ(コ)	—	—	片	1	3.8	3.9	1.8	41.5	砂岩	○	「虚空」など(多数)
180	去	キョ(コ)	—	—	片	1	3.7	2.6	1.2	15.1	泥岩	○	「過去」など(多数)
181	厨?	ソ	—	—	片	1	3.0	2.7	1.0	11.6	泥岩?	?	「厨」はなし
182	令	キン(コン)	—	—	片	1	5.5	2.2	1.0	17.6	砂岩	○	「令の可能性あり」令「令」(多数)
183	空	クウ	—	—	片	1	4.3	3.6	1.7	30.4	砂岩	○	「空中」など(多数)
184	纏	ケイ	—	—	片	1	4.9	7.0	2.3	91.9	安山岩	○	「纏纏佛徳」(第1)
185	慧	ケイ(エイ)	—	—	片	1	5.1	3.2	2.0	42.3	砂岩	○	「智慧」など(多数)
186	慧	タイ(エイ・ウ)	—	—	片	1	4.0	3.2	0.8	11.5	砂岩	○	「慧」など(多数)
187	見	ケン	—	—	片	1	3.85	2.8	1.4	20.0	砂岩	○	「正覚見」など(多数)
188	見	ケン	—	—	片	1	4.2	2.1	0.95	12.8	泥岩	○	「正覚見」など(多数)
189	言	ゲン	—	—	片	1	3.8	3.0	1.1	16.5	砂岩	○	「而説佛言」など(多数)
190	言	ゲン	—	—	片	1	3.6	4.1	1.2	25.3	砂岩	○	「而説佛言」など(多数)
191	現	ゲン	—	—	片	1	4.65	3.35	1.3	23.7	砂岩	○	「現在」など(多数)
192	故	コ	—	—	片	1	3.7	2.9	1.7	23.7	泥岩?	?	「因縁故」など(多数)
193	功	コウ(ク)	—	—	片	1	4.1	3.0	1.5	20.4	砂岩	○	「功徳」など(多数)
194	号	ゴウ	—	—	片	1	3.5	2.9	1.1	11.7	砂岩	○	「號」など(多数)
195	魂	コウ	—	—	片	1	4.4	4.1	1.6	43.6	砂岩	○	「魂」など(多数)
196	麻	マ	—	—	片	1	5.5	3.5	1.6	41.0	砂岩	○	「麻」(第3・8・23)
197	葛	サイ	—	—	片	1	3.8	3.2	1.6	26.1	砂岩	○	「葛藤」など(多数)
198	在	ザイ	—	—	片	1	3.9	2.9	1.8	26.8	砂岩	○	「現在」など(多数)
199	薩	サツ	—	—	片	1	5.4	3.2	2.0	35.5	泥岩	○	「菩薩」など多数
200	薩	サツ	—	—	片	1	4.1	3.7	1.5	28.8	砂岩	○	「菩薩」など多数
201	三	サン	—	—	片	1	4.5	2.5	1.4	18.0	砂岩	○	「三千大千世」など(多数)
202	三	サン	—	—	片	1	3.2	3.0	1.5	21.1	砂岩	○	「三千大千世」など(多数)
203	幾	ゼン	—	—	片	1	4.0	3.2	1.3	26.3	砂岩	○	「幾」(第3)
204	幾	ゼン	—	—	片	1	3.8	3.6	1.3	18.7	泥岩	○	「幾」(第3)
205	之	シ	—	—	片	1	3.4	2.5	1.3	16.1	砂岩	○	「阿耨多羅三藐三菩提」など(多数)
206	至	シ	—	—	片	1	3.25	3.0	1.5	19.3	砂岩	○	「至聖」など(多数)
207	至	シ	—	—	片	1	3.3	2.8	1.5	20.9	砂岩	○	「至聖」など(多数)
208	此	シ	—	—	片	1	5.3	3.4	1.4	31.4	砂岩	○	「佛説此經」など(多数)
209	師	シ	—	—	片	1	3.9	2.5	1.4	14.0	砂岩	○	「法師」など(多数)
210	子	シ(ス)?	—	—	片	1	4.2	2.5	1.0	14.1	安山岩	○	「子」(多数)
211	持	ジ	—	—	片	1	3.3	2.8	0.5	6.5	砂岩	○	「所持」など(多数)
212	若	ジ(ニ)	—	—	片	1	2.5	2.7	0.9	9.8	砂岩	○	「而説佛言」など(多数)
213	若	ジ(ニ)	—	—	片	1	4.1	3.9	1.6	17.7	砂岩	○	「聖賢」など(多数)
214	若	ジャク(ニヤク)	—	—	片	1	2.9	2.9	1.3	15.9	砂岩	○	「若善男子」など(多数)
215	究	ジュ・ジュ	—	—	片	1	3.9	2.9	1.1	16.0	砂岩	×	「究」は法華経にはない。陀羅尼(大悲咒)か
216	十	ジュウ	—	—	片	1	4.5	2.9	1.5	25.6	砂岩	○	「十方」など(多数)
217	諸	ショ	—	—	片	1	4.6	2.9	1.1	23.3	泥岩	○	「諸法」など(多数)
218	諸	ショ	—	—	片	1	3.4	3.4	1.1	18.5	砂岩	○	「諸法」など(多数)
219	諸	ショ	—	—	片	1	4.5	3.3	1.2	20.4	砂岩	○	「諸法」など(多数)
220	諸	ショ	—	—	片	1	3.3	2.4	1.1	12.7	砂岩	○	「諸法」など(多数)
221	所	ショ	—	—	片	1	3.5	3.1	0.7	12.9	砂岩	○	「所以者何」など(多数)
222	所	ショ	—	—	片	1	3.9	3.1	1.4	21.1	砂岩	○	「所以者何」など(多数)
223	所	ショ	—	—	片	1	5.4	2.3	1.8	29.1	砂岩	○	「所以者何」など(多数)
224	如	ジョ(ニョ)	—	—	片	1	3.1	4.1	1.3	28.3	砂岩	○	「如来」など(多数)
225	如	ジョ(ニョ)	—	—	片	1	4.7	2.7	1.4	20.7	砂岩	○	「如来」など(多数)
226	常	ジョウ	—	—	片	1	3.85	3.6	1.2	22.6	砂岩	○	「我常思念」など(多数)
227	丈	ジョウ	—	—	片	1	4.4	3.7	1.7	40.9	砂岩	○	「丈夫」(多数)
228	上	ジョウ(ショウ)	—	—	片	1	3.7	2.7	1.0	14.6	砂岩	○	「上至有頂」など(多数)
229	上	ジョウ(ショウ)?	—	—	片	1	4.7	3.0	1.0	7.8	砂岩	○	「上至有頂」など(多数)
230	身	シン	—	—	片	1	4.0	2.7	1.1	17.1	砂岩	○	「身心不動」など(多数)
231	身	シン	—	—	片	1	3.5	2.1	1.6	14.5	砂岩	○	「身心不動」など(多数)
232	人	ジン(ニン)	—	—	片	1	3.6	2.4	0.7	9.8	砂岩	○	「人非人」など(多数)
233	人	ジン(ニン)	—	—	片	1	4.7	3.9	1.0	28.8	砂岩	○	「人非人」など(多数)
234	人	ジン(ニン)	—	—	片	1	4.7	2.3	1.2	19.0	泥岩	○	「人非人」など(多数)
235	人	ジン(ニン)	—	—	片	1	4.9	2.4	1.2	15.6	砂岩	○	「人非人」など(多数)
236	爾下	ズイ?	—	—	片	1	4.0	2.6	1.5	22.0	砂岩	○	「爾語一切佛」など(多数)
237	是	ゼ	—	—	片	1	5.5	3.8	2.1	55.0	砂岩	○	「是説」など(多数)
238	是	ゼ	—	—	片	1	4.3	3.2	1.6	27.5	砂岩	○	「是説」(多数)
239	説	ゼ	—	—	片	1	4.5	3.2	1.1	15.6	泥岩	○	「如佛所説」など(多数)
240	千	セン	—	—	片	1	4.8	1.9	1.3	20.4	砂岩	○	「百千萬億」など(多数)
241	然	ゼン(ネン)	—	—	片	1	3.9	3.5	1.7	38.0	砂岩	○	「自然智」など(多数)
242	然	ゼン(ネン)	—	—	片	1	3.9	3.0	1.4	18.1	砂岩	○	「自然智」など(多数)
243	爾	ゾウ(ショウ)	—	—	片	1	7.7	3.9	2.6	94.9	砂岩	○	「爾」(第3・6・10・17・23)
244	爾	ゾウ	—	—	片	1	3.7	2.7	0.9	12.2	砂岩	○	「今爾我身」など(多数)
245	尊	ソン	—	—	片	1	5.0	3.1	1.6	31.0	砂岩	○	「佛尊」など(多数)
246	尊	ソン	—	—	片	1	4.6	3.7	1.7	31.0	泥岩	○	「佛尊」など(多数)
247	經	ギョウ	—	—	片	1	4.1	2.5	1.1	14.3	砂岩	×	「經」(寶篋印陀羅尼)
248	進	タイ	—	—	片	1	3.3	3.1	0.7	9.9	砂岩	○	「不退」など(多数)

第5章 角梅目造形

No.	文字		よみ		画数	文字数	寸法(mm)		重量(g)	石材	法華	法外	備考	
	A面	B面	A面	B面			長さ	幅						高さ
249	多	多	-	-	片	1	5.3	3.9	1.4	40.6	砂岩	○	「得阿彌多羅三藐三僧」など(多数)	
250	多	ダイ	-	-	片	1	4.6	2.8	1.0	18.8	砂岩	○	「第一」など(多数)	
251	宅	タク	-	-	片	1	5.4	3.5	1.1	29.1	砂岩	○	「火宅」など(多数)・「宅」(第3・7・14)	
252	達	ダツ(タツ)	-	-	片	1	3.4	2.8	1.6	25.7	砂岩	○	「阿耨達多」など(多数)	
253	達	ダツ(タツ)	-	-	片	1	3.6	2.8	1.2	19.5	砂岩	○	「阿耨達多」など(多数)	
254	達	タツ	-	-	片	1	3.6	2.6	1.1	14.9	灰岩	○	「阿耨達多」など(多数)	
255	勸	チヤク	-	-	片	1	4.2	3.4	1.2	24.1	虎石	×	「教はあはるが勸」はない	
256	説	タイ	-	-	片	1	5.8	3.9	1.5	44.3	砂岩	○	「音説」など(多数)	
257	帝	タイ(タイ)	-	-	片	1	4.5	3.8	1.6	29.5	砂岩	○	「帝釈」など(多数)	
258	帝	タイ(タイ)	-	-	片	1	5.0	3.1	1.2	28.1	砂岩	○	「帝釈」など(多数)	
259	帝	タイ(タイ)フ	-	-	片	1	1.7	2.3	2.7	0.9	6.3	砂岩	○	「弟子」(多数)
260	天	テン	-	-	片	1	3.5	2.6	1.1	13.4	砂岩	○	「露天宮殿」など(多数)	
261	田	デン	-	-	片	1	3.8	2.9	1.5	21.6	砂岩	○	「田」(第3・4・14・18)・「田所」か	
262	土	ド・ト	-	-	片	1	3.8	3.0	2.0	27.6	砂岩	○	「阿耨多羅三藐三僧」など(多数)	
263	寺	トウ	-	-	片	1	3.4	3.6	0.7	14.4	砂岩	○	「我等」など(多数)	
264	寺	トウ	-	-	片	1	5.1	3.1	1.0	24.7	砂岩	○	「我等」など(多数)	
265	道	ドウ	-	-	片	1	3.7	3.0	1.1	16.7	砂岩	○	「一心求道」など(多数)	
266	数	スウ	-	-	片	1	3.8	3.0	1.3	20.7	砂岩	?	「数」など(多数)	
267	尼	ニ	-	-	片	1	3.4	3.2	1.2	19.8	砂岩	○	「比丘尼」など(多数)	
268	爾	ニ(ジ)	-	-	片	1	4.1	3.1	1.4	22.9	砂岩	○	爾の異体字。「爾時」など(多数)	
269	念	ネン	-	-	片	1	4.8	4.0	1.5	24.8	砂岩	○	「佛所念」など(多数)	
270	念	ネン	-	-	片	1	4.4	3.0	0.7	14.5	砂岩	○	「念成無数」など(多数)	
271	念	ネン	-	-	片	1	4.1	2.5	0.9	11.3	灰岩	○	「念成無数」など(多数)	
272	験	ペン	-	-	片	1	3.7	3.5	0.7	12.3	灰岩	○	「験」など(多数)	
273	倍	バイ	-	-	片	1	3.7	3.1	1.9	27.3	灰岩	○	「倍復加増」など(多数)	
274	萬	バン(マン)	-	-	片	1	4.7	3.4	1.5	32.3	砂岩	○	「百千萬億」など(多数)	
275	見	ミン	-	-	片	1	3.9	3.5	1.1	20.8	砂岩	×		
276	不	フ	-	-	片	1	5.0	2.9	2.0	37.1	砂岩	○	「不道」など(多数)	
277	無	ム(ブ)	-	-	片	1	4.4	3.4	1.5	21.1	砂岩	○	「無量」など(多数)	
278	佛	ブツ	-	-	片	1	3.9	3.0	2.0	29.0	砂岩	○	「阿耨多羅三藐三佛」など(多数)	
279	佛	ブツ	-	-	片	1	4.9	3.4	1.5	35.0	砂岩	○	「阿耨多羅三藐三佛」など(多数)	
280	佛	ブツフ	-	-	片	1	4.0	3.1	1.4	25.2	砂岩	?	「佛」か?	
281	便	ベン	-	-	片	1	3.7	2.8	0.6	10.8	灰岩	○	「方便」など(多数)	
282	音	ボン	-	-	片	1	3.3	3.3	0.9	15.3	砂岩	○	「音説」など(多数)	
283	音	ボン	-	-	片	1	(1) 2.7	2.0	0.7	6.6	砂岩	○	「音説」など(多数)	
284	音	ボン	-	-	片	1	3.85	3.6	1.25	22.8	砂岩	○	「音説」など(多数)	
285	法	バク	-	-	片	1	4.8	3.9	1.9	47.9	砂岩	○	「法」(第2・3・4・7・24・26)	
286	法	ホウ	-	-	片	1	5.5	4.0	2.5	61.0	砂岩	○	「法華」(多数)	
287	滅	ミツ	-	-	片	1	4.3	4.4	2.3	47.9	砂岩	○	「滅盡」など(多数)	
288	無	ム	-	-	片	1	3.4	2.5	1.0	13.9	砂岩	○	「無量」など(多数)	
289	名	メイ・ミョウ	-	-	片	1	3.8	3.0	1.3	20.7	砂岩	○	「名」(多数)	
290	也	ヤ	-	-	片	1	2.8	2.8	0.8	9.3	砂岩	○	「也」(多数)	
291	世	ゼ	-	-	片	1	3.2	3.2	1.0	11.5	砂岩	○	「世界」など(多数)	
292	唯	ユイ	-	-	片	1	3.3	2.8	0.9	10.9	砂岩	○	「唯」(多数)	
293	有	ユウ(ウ)	-	-	片	1	4.4	3.1	0.8	16.0	砂岩	?		
294	利	リョウ	-	-	片	1	1.7	2.9	2.6	6.5	砂岩	○	「舍利佛」など(多数)	
295	業	リョウ	-	-	片	1	5.3	4.4	1.7	48.4	砂岩	○	「無量」(多数)など(多数)	
296	六	ム(ロク)	-	-	片	1	4.3	2.9	0.9	13.5	灰岩	○	「六」(多数)	
297	〇	〇	-	-	片	1	4.4	4.5	1.8	46.4	灰岩	-	「〇」?	
298	〇	〇	-	-	片	1	4.3	3.4	1.4	28.5	灰岩	-	「〇」?	
299	〇	リョ	-	-	片	1	3.3	2.6	0.9	12.0	砂岩	?	「〇」?「阿彌」(第13・14・20)	
300	〇	〇	-	-	片	1	3.5	3.7	1.4	21.8	灰岩	-	「〇」?「〇」?	
301	〇	〇	-	-	片	1	4.1	2.5	1.8	26.8	砂岩	-	「〇」?	
302	〇	〇	-	-	片	1	4.2	2.1	1.1	16.3	砂岩	-	「〇」?	
303	〇	〇	-	-	片	1	2.7	2.7	1.5	16.4	灰岩	-		
304	〇	〇	-	-	片	1	4.0	3.2	1.2	18.7	灰岩	-		
305	〇	〇	-	-	片	1	2.3	3.2	0.7	6.1	砂岩	-		
306	〇	〇	-	-	片	1	2.7	2.9	0.8	8.3	灰岩	-	「〇」?	
307	〇	〇	-	-	片	1	2.4	2.8	1.4	9.2	砂岩	-		
308	〇	〇	-	-	片	1	1.8	3.3	1.2	7.4	砂岩	-		
309	〇	〇	-	-	片	1	1.7	2.6	0.4	2.7	砂岩	-		
310	〇	〇	-	-	片	1	3.1	2.0	0.6	4.0	灰岩	-		
311	〇	〇	-	-	片	1	2.1	1.3	0.5	2.7	砂岩	-		
312	〇	〇	-	-	片	1	3.0	2.0	1.1	8.3	灰岩	-		
313	〇	〇	-	-	片	1	1.8	2.3	0.8	3.5	砂岩	-		
314	〇	〇	-	-	片	1	1.9	2.1	1.3	4.3	砂岩	-		
315	〇	〇	-	-	片	1	2.1	2.4	1.3	6.9	砂岩	-		
316	〇	〇	-	-	片	1	2.4	2.3	0.5	3.5	砂岩	-		
317	〇	〇	-	-	片	1	2.4	2.0	0.9	4.1	砂岩	-		
318	〇	〇	-	-	片	1	4.8	2.0	1.6	24.3	砂岩	-		
319	〇	〇	-	-	片	1	3.0	2.5	0.8	8.1	砂岩	-		
320	〇	〇	-	-	片	1	3.3	1.9	0.9	6.8	砂岩	-		
321	〇	〇	-	-	片	1	2.0	2.3	1.0	5.9	砂岩	-		
322	〇	〇	-	-	片	1	3.4	1.8	0.9	6.8	砂岩	-		
323	〇	〇	-	-	片	1	1.9	2.8	0.8	5.0	砂岩	-		
324	〇	〇	-	-	片	1	2.3	2.5	1.2	5.7	砂岩	-		
325	〇	〇	-	-	片	1	3.4	1.5	0.8	4.8	砂岩	-		
326	〇	〇	-	-	片	1	3.0	3.8	1.1	15.4	砂岩	-		
327	〇	〇	-	-	片	1	2.6	1.5	0.9	4.8	砂岩	-		
328	〇	〇	-	-	片	1	1.9	2.1	1.3	4.6	砂岩	-		
329	〇	〇	-	-	片	1	2.0	1.7	0.9	3.9	砂岩	-		
330	〇	〇	-	-	片	1	2.5	2.3	1.0	5.0	砂岩	-		
331	〇	〇	-	-	片	1	2.3	2.3	1.05	3.8	砂岩	-		

※「法華」=「法華三部経」 法外=「法華三部経」以外の経典など ○=あり 「-」=不明

(2) 文字数と文字(第108~114図, 第28・29表, 図版51~59)

文字の実測について 写真図版(51~59)をご覧いただければわかるとおり、実測図に示した文字については、赤外線写真などを参考にして実際よりも強調して書いているものもある。また、部分的に薄く消えてしまったりしている文字もあることから赤外線写真でも判別しにくい文字については、漢字を誤認している場合も考えられる。その点ご容赦願いたい。

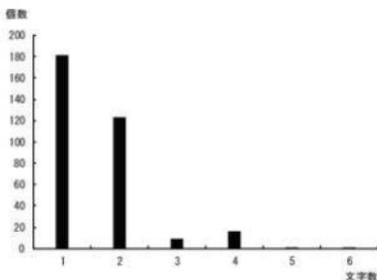
文字数について SK07出土経石には、片面のみ写経されたもの(156点)と、両面に写経されたもの(148点)の2者があり、さらに後者には、1文字を両面に写経したのから3文字を両面に写経したのまで確認できる。片面に1文字を記入したものが154点(破片27点除く)と最も多く、つづいて両面に1文字ずつ記載したものが123点で、この2者で約9割を占める(第108・109図)。2文字両面が16点、1文字+2文字が9点ある。5・6字を写経したものは1石ずつであり、3文字以上のものは1割に満たない。したがって、基本的には面に1文字書くことが基本であった可能性が高いことが判明する。

また、同じような大きさでも多字のものもあれば一字のものがあり、一面に複数の文字が書かれるものと一字のものがある。この差異については明らかにすることができない。写経にあたって、一石に記載する文字数の決まりはなく、一石に写す文字数は写経者個々に委ねられていたのであろうか。

なお、遺物番号1は「過去未来現在」が両面に3文字ずつ書かれており、後述するように「妙法蓮華経」一部の意味が通る場所を写経しているが、「経因」「縁及」のように本来は「知佛所説経 因縁及次第」(第二十一)であるが、それを跨って写しており、個々では意味が通らないが複数個体を組み合わせることで経文の語順を順守して写経したことが明らかになるものもある。

文字について 第99~107図、第28表には文字数が多いものから順に掲載し、文字数が同じものについては写経された文字の五十音中で早い読みをする漢字を順番に示した。文字が消えかかっているもの、漢和辞典などには確認できない文字や異体字などがあり、完存(に近い)の約300点のうち9割程度が判別できただけであり、残りの一割が判読できていない。

第110~114図、第29表には、使用された文字を画数順で文字ごとに一覧表として示した。確認できた漢字数は約230字である。



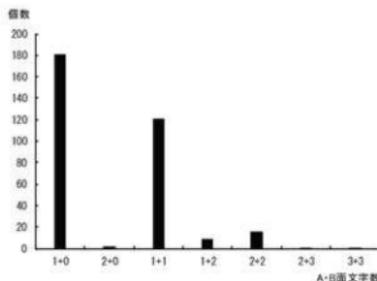
第108図 礫石経塚出土経石の文字数別出土数

(3) 筆跡にみる写経した人数(第110~114図)

第110~114図には筆跡を比較するため、撮影した写真を文字ごと画数ごとに連続して掲載した。

掲載した文字の中で同一漢字の数量が多い、「如」・「佛」・「身」・「来」・「法」・「是」・「無」などを観察すると、大きく一画ずつ楷書のように明瞭に記載する、行書のように次の画順とつながるように記載するなどの特徴が確認できる。また、これは筆先の消耗具合にもよるが、太く重量感のあるもの、細く華奢な感じを受けるものなどがあり、一人のみで写経したのではないことが判明する。

細かくみると、「若」のように「くさかんむり」



第109図 礫石経塚出土経石の各面の文字数別出土数

第29表 角庵日遺跡 礫石経塚出土経石に書かれた文字一覧

面数	文字	ヨミ	経石番号	備考
1	一	イチ	4・10・21・22・58・81・156	
2	二	ニ・ジ	11	
	十	ジュウ	13・216	
	人	ジン	101・232・233・234・235	
	又	ユク	135	
	三	サン	7・64・65・201・202	
	大	ダイ		
	良	キョウ	36・63	
	山	サン	66	
	千	セン	116・240	
	下	カ	167	
	千	カン	174	
	丈	ジョウ	227	
	上	ジョウ	228・229	
	欠	チヤ	254	[欠] ?
	土	ド	282	
	也	ヤ	290	
	子	シ	210	
	之	シ	127・204・205	
	不	フ	69・117・118・276	
	切	サイ・セツ	4・10・21・91	
	方	ホウ	13・20	
	今	コン	16・182	
	心	シン	19・85・89	
	圧	ヒ	98	[此] ?
	五	オウ	41・160	
	水	カ	48	
	中	チュウ	55	
	夫	フ	101・260	
	分	フン・ブン	124	
	六	ム(ロク)	296	
	未	ミ	1・132	
	去	キョ	1・46・180	
	爾	ジ	4・70・268	爾の異体字「尔」
	世	ヨ・セ	5・25・87・291	
	生	セイ・シヨウ	10・28・33・90	
	旬	ク	22	
	以	イ	23・34・154・155	
	立	リュウ・リツ	29	
	本	ホン	41	
	尼	ニ	106・267	
	白	ハク・ビヤク	115	
	布	フ	137	
	外	ガイ	172	
	道	ドウ(ダ)	193	
	分	ゴウ	194	
	田	デン	261	
	此	シ	29・68・208	
	在	ザイ	1・198	
	如	ニョ・ジョ	3・20・24・51・107・108・109・110・135・224・225	
	而	ジ	6・68・69・212	
	多	タ	7・98・249	
	自	ジ	19	
	依	ジョ(ニョ)	48・57	
	因	イン	66	
	有	ウ・ユウ	79・80・293	
	成	セイ・ジョウ	83	
	先	セン	94	
	半	ム	106	
	百	ヒヤク・ビヤク	116	
	共	キョウ	117・121	
	同	ドウ	128	
	至	シ	206・207	
	至	シ	251	
	長	チャウ	140	
	吒	マイ(ミョウ)	289	
	吒	ト	123	
	吒	タ	14	
	利	リ	2・13・15・294	
	即	ソク	5	
	身	シン	6・9・84・86・230・231	
	劫	ゴウ	13	
	我	ガ	16・47・103・164・165	点のない我(103)
	我	カ	23	
	囉	ダ・ナ	42	
	左	サ	45	
	夏	ケン	59・187・188	
	住	ジュウ	60	
	言	ゴン・ゲン	122・189・190	
	言	ベツ	124	

面数	文字	ヨミ	経石番号	備考
7	砂	ミョウ	133	
	佛	ブツ	27・114・119・120・121・122・123・278・279・280	280は別字?
	年	チイ	259	文字不明確
	住	ゴン	31	
	陀	ニ	73	
	陀	ダ	96・97	
	家	ライ	1・3・21・107・108・109・110	110は家(マウ、パツ?)
	舍	シャ	2	
	波	パ・ハ・ワ	2・18	
	阿	ア	3・15・30・31・32・37・152・153	
	官	カン	6	
	若	ジャク・ニヤク	8・47・72・93・214	くさかんむりが讀んでいるもの(72)あり
	於	オ	8・37・38・39・157・158	
	陀	タイ	14	
	迦	カ	15	
	空	クウ	24・54・54・55・183	24以外は7面の可能性あり。
	或	ワク・コク	35・84	
	法	ホウ	40・43・77・127・128・129・130・133・286	
	俱	ク	44	
	其	キ・ギ	52・178	
	使	シ	67	
	所	ショ	76・79・221・222・223	
	者	シャ	85・213	
	門	モン	98	
	宝	ホウ	100	
	受	ジュ	102・118	
	場	ドウ	105	
	阿	カ(ガ)	163	
	无	シヨ・ジュ	215	
	念	ネン	269	
	足	ジン・ミン	275	
	苦	ク	17	
	香	コウ・キョウ	8・62	
	帝	チイ	9・257・258	
	南	ナン	12・49・113	
	足	ゼ	20・44・88・89・94・134・237・238	
	故	コ	223・192	
	音	オン・イン	25	
	界	カイ	50・87	
	味	マイ	65	
	相	ソウ	81・115	
	染	セン	92	
	品	ホン・ヒン	99	
	妙	チン	100	
	佛	ホフ	170・171	
	持	ジ	211	
	頭	ゾウ	244	
	進	テイ	248	
	軌	キョク	255	
	便	ベン・ピン	281	
	告	カイ	11・50・67・168・169	
	律	リツ・リュウ	26	
	重	ジュウ	136	
	為	イ	59・119	
	婆	パ・ワ	2・71	[サ・シャ]
	經	ジ	4・5・8・62・70	
	至	シ	6	
	恆	ノウ	17	
	背	キ・ギ	26・177	
	業	カ(ケ)	43・45・166	
	哩	リ	71	
	西	ハン	96	
	能	ノウ	111・270・271	
	除	ジョ	111	
	記	キ	176	
	師	シ	209	
	囉	ダ・ナ	247	
	借	バイ	273	
	空	クウ(キョウ)	75	
	無	アツ・オ	19・159	1面少ない「無」
	莫	バク・マク	285	
	持	トウ(ジュ)	102	文字不明確
	佛	シユウ・シュ	32	

画数	文字	ヨミ	経石番号	備考
11	現	ガン	1・35・60・191	
	得	トク	9・129	
	嶋	オン・エン	15	
	庫	キョ・コ	24・179	
	高	イフ	30	
	圃	コク	63・195	
	貫	ボン	78	
	絆	シュウ	138	
	妻	バ・ウ	112・113・114・272・27	
	欧	ヨク	136	
	常	ジョウ	226	
12	良	タイ(キョウ)	186	
	弊	ユイ・イ	292	
	庫	ミツ	287	
	備	ゾ	22・58	22・58で両数相違
	背	ボ	125・126・131・282・283・284	
	達	ダツ(タツ)	252・253	
	兼	シュウ	28・74	
	馬	ゼン・ネン	241・242	
	浜	ソ	181	
	最	サイ	197	
	過	カ	1・46	
13	河	カ	2・49・162	
	無	ム	12・39・134・277・288	
	忠	ヒ	12	
	善	ゼン	72・93・95	
	直	ス	73	
	流	ジョウ・シュウ	83	
	等	トウ	86・132・263・264	
	道	ダイ	99・250	
	道	ドウ	103・104・265	
	堤	ダイ	126・256	
	量	リョウ	138・295	
14	殖	ゾク	303	
	番	ワン	245・246	
	番	パン・マン	274	
	頓	トン	266	
	皆	リ	97・299	
	義	ギ	53	
	経	キョウ・タイ	56・88	

画数	文字	ヨミ	経石番号	備考		
15	感	ビン・ミン	82			
	思	ソウ	95			
	僧	ソウ	139			
	感	ケイ	184			
	庚	セイ	76・239			
	圃	シュク	3			
	種	ジュ	10			
	溝	ジュ・ショウ	16			
	實	カン	52			
	程	ケイ	57			
	恆	ケン・カン	175			
16	座	サイ・ザイ	196			
	縁	エン・ネン	36			
	摩	マ	18			
	高	ゴ	34			
	軍	グン	42・120・161・140			
	犯	ガン	61			
	誦	ショ	75・77・78・80・91・104・217・218・219・230			
	慧	ケイ(エ)	185			
	華	ラク・ガク	173			
	輪	リン	130			
	邊	ジュン	141			
17	傍	トウ	11			
	通	スイ	236			
	博	オク	40			
	博	ショク	11			
	数?	ス・スウ	266			
	開	オン・アン	33			
	邊	ソウ	243			
	18	裁	ミヤク(バク)	7		
		歲	ザツ	38・64・112・125・131・199・200		
		19	麗	ラ	7・14・61・137	
			頓	ガン	25・51	
種			シュク	9		
21 然			ジュウ・ニョウ	82		
22 囉			ラ	139		
25 數			カン	5		

申しんじょうは3画としている

を3画で記載するものと4画で記載するもの、「法」・「婆」のように「さんずい」の書き方などに特徴が確認できることから、少なくとも二人以上で写経された可能性が高い。さらに、「是」の上部の「日」部分を観察すると1画目が4画目より下に突き出すもの(20・44など)、逆に4画目が1画目より左から書かれるもの(134)、1画目と4画目が繋がりがどちらもつきださないもの(88・89)がある。したがって、少なくとも三人以上が写経にかかわっていた可能性が高いことが判明する。字の太さなどを含めて、筆跡鑑識の技術を用いて検討すればさらに人数が増える可能性が高い。

ここでは、少なくとも三人(以上)が写経に関わっていたことが判明したことを報告しておきたい。

(4) 書写された経典について(第30・31表)

ここでは、経石に書写された語句と文字を経典などと対照することで、角庵II遺跡礎石経塚で写経された経典について明らかにしておきたい。

経塚が造営される場合、『妙法蓮華経』が写経されることが最も多いことから、それとの対照をまず行ううえで、それに確認できない経文(語句・文字)について、別の経典や陀羅尼、真言等との対照を行うこととした(註1, 註は150頁に記載)。

なお、経石一覧表(第28表)の備考欄に、鍵括弧で該当する経文、その後ろに括弧で経文や陀羅尼などを記載したが、その中で「第〇」と記載したものは『妙法蓮華経』の品数、「多数」としたものは『妙法蓮華経』の該当経文が6箇所以上の文字・語句であることを示している。

以下に、経典などと出土した経石の経文との対応関係を報告する。

『妙法蓮華経』が写経されたもの『妙法蓮華経』(東洋哲学研究所1977『法華経一字索引』)と比較す



第111図 羅石経塚出土経石に書かれた文字比較図②



第112図 礫石経塚出土経石に書かれた文字比較図③



第113図 羅石経塚出土羅石に書かれた文字比較図④



第114図 碑石経塚経石に書かれた文字比較図⑤

ると、経石に書かれた経文・文字で判読できた262石中、234石（約9割）が『妙法蓮華経』で確認できる経文・文字であることがわかる。さらに、これらの中に特定の品数にしかない経文（語句・語順）があることから『妙法蓮華経』が写経されたという前提に立てば、品数を特定できる。

第30表に示したように、主に多字一石に写経された語句を調べると、経文が特定できるのは『妙法蓮華経』のうち第1・3・7・14・17・19・21・22・23・24・25・27・28品にしかない語句が確認できるため、少なくともこれらの品については写経された可能性が高い。17品以降の『妙法蓮華経』の後半部分に該当するものが比較的多い。

また、上記の想定が正しければ最初の第1・3品、最後の第28品が写経され、中間の第7・14・19品も写経されていることから、元来は『妙法蓮華経』すべてが写経されていた可能性が高い。なお、繰り返しになるが、日本人に好まれる『観音経』（『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五』）も写経されていることが明らかとなる。

『無量義経』が写経されたもの「億那」（42）は『妙法蓮華経』には確認できず、法華三部経の中では『無量義経』に確認できることから、無量義経が写経された可能性がある。

したがって、残存する経石の中では、法華経後半部分の第14～25品の経文が多いようである。

第30表 角鹿II遺跡 礎石経塚の経文と法華三部経の対応関係

『妙法蓮華経』	経文が該当するもの
序品第一	「(相) 継 (得成佛) (184)
方便品第二	
譬喻品第三	「(一) 門多 (衆) (98); 「残 (害) (203)
信解品第四	
薬草喻品第五	
授記品第六	
化城喻品第七	「怒饒益 (82)
五百弟子受記品第八	
授学無学人記品第九	
法師品第十	
見宝塔品第十一	
提婆達多品第十二	
勸持品第十三	
安樂行品第十四	「過去未来現在 (1)
從地涌出品第十五	
如來寿命品第十六	
分別功德品第十七	「(能) 生一切種 (智) (10)
隨喜功德品第十八	
法師功德品第十九	「時香若於 (8); 「時香 (62); 「是先 (94); 「量終 (138)
常不輕菩薩品第二十	
如來神力品第二十一	「來一切 (21); 「生間 (33); 「経因縁及 (56・36)
嘱累品第二十二	「立此 (誓言) (29)
薬王菩薩本事品第二十三	「住現 (60)
妙音菩薩品第二十四	「(那) 含阿 (羅漢) (31); 「想善 (男子) (95)
觀世音菩薩普門品第二十五	「即時觀世 (5); 「宰官身而 (6)
陀羅尼品第二十六	
妙莊嚴王本事品第二十七	「(妙莊嚴) 王本 (事品) (41); 「相白 (115)
普賢菩薩勸発品第二十八	「娑薩 (か) 薩薩 (112)
『無量義経』	「徳那 (42)

第31表 角鹿II遺跡 礎石経塚の経文と法華三部経以外の対応関係

經典・陀羅尼など	経文が該当するもの
『仏説摩訶般若波羅蜜多心経』	「(色不異) 空空 (不異色) (54)
『華嚴経』 普賢行願品	「劫十方利 (13)
『大悲心陀羅尼経』	「南無大悲 (12); 「惡心自 (19); 「(觀) 世音願 (25); 「咒 (215)
大悲心陀羅尼	「(娑婆) 訶南 (無) (49); 「(標駄) 婆南 (無) (113); 「囉僧 (139); 「娜 (247)
宝篋印陀羅尼	「陀涅 (96); 「咒 (215); 「娜 (247)
虚空藏菩薩真言	「(南無阿迦舍揭婆耶) 唵阿利迦 (摩利莎哇可) (15)
十三仏・王	「阿闍如来 (3); 「華花 (王) (45)

蓮華三部経以外の經典や陀羅尼等が写経されたもの 上述した『妙法蓮華経』『無量義経』『仏説觀世音菩薩行法経』の法華三部経には確認できない経文(語句・語順)や文字も全体の1割程度確認できる。

『大悲心陀羅尼経』と『大悲心陀羅尼(大悲咒)』『南無大悲(觀世音)』(12)や『惡心自』(19)、『觀世音願』(25)、『娑婆訶 南無』(49)、『咒』(215)など。

『一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼経』と『一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼』 宝篋印塔に納められることが多い『宝篋印陀羅尼経』の陀羅尼に『陀涅』(96)や『娜』(247)がある。単独では『陀涅』しかないが、この2字を連続させる経文は法華三部経などの經典には確認できない。

『般若心経(仏説摩訶般若波羅蜜多心経)』『空空』(54)や『妙法蓮華経』にもある『多羅三藐』(7)があるが、実際に写経されたかどうかの判断は難しい。ただし、上述した法華三部経や『大悲心陀羅尼』、『宝篋印陀羅尼』には確認できない。日本人に好まれた『般若心経』が写経された可能性は十分にある。

『華嚴經入不思議解脱境界普賢行願品』〔劫十・方利〕(13)は『華嚴經』普賢行願品に確認できることから、『華嚴經』普賢行願品が写経された可能性がある。

經典や陀羅尼以外のもの 報告者の調査では經典・陀羅尼などでは確認できないが、該当する可能性のあるものを挙げておく。

虚空藏菩薩真言〔南無阿迦舍揭婆耶 唵阿利迦(摩利莎哇可)〕(15)

十三仏信仰〔阿闍如来〕(3)・〔華花(王)〕(45)

写経された經典が判別できないもの 判読できるが經典などが不明なものとして、『舍利・娑波訶』(2)、『燈燭・二皆』(11)、『羅・布』(137)、『哩・娑』(71)(註4)などがある。また、一部が判読できず、經典が不明なものとしては『羅底・〇〇』(14)、『苦惱・〇〇』(17)などがある。

4 小結—写経された經典から想定される角庵経塚の造営の意味—

角庵経塚(角庵Ⅱ遺跡礫石経塚)は、経文の分析から、少なくとも3人以上が写経に加わり、『妙法蓮華經』をはじめ、『大悲心陀羅尼』、『宝篋印陀羅尼』を写経し、さらに『阿闍如来』や『虚空藏菩薩』を示す真言や文字を書き記している。

これらの經典から経塚が造営された意味を考えると、①仏教經典の中で最高とされる『妙法蓮華經』(註2)を写経することで写経者自身、写経者集団の徳を高める、②『大悲心陀羅尼』を写経することで観音菩薩の慈悲を受けること、③『宝篋印陀羅尼』を写経することで現生における「滅罪」すること、④十三仏信仰に伴う『阿闍如来』『華花王(阿闍如来が本迹)』(7回忌)、『虚空藏菩薩』(13回忌・最終、註3)を写経することで死者の冥福・涅槃を願う追善供養、を発願して行われた可能性が高いことが想定できる。

したがって、角庵経塚の造営の目的は、『追善供養』に伴う『経塚』である可能性が高い。

『妙法蓮華經』を修めることで功德を高め、観音菩薩の慈悲を受け、『阿闍如来』『華花王』の導きにより修行を終え、最終的に『虚空藏菩薩』の導きにより『涅槃』に到達せよという願い(追善供養)が込められていた可能性が高い。また、掛川市北部は遠江三十三観音霊場の『顕光寺』、角庵経塚に近接する『長源庵』があり、民間の観音信仰が盛んで、この民間の観音信仰が礫石経塚の造営の背景にあったと考えたい。

つまり、角庵経塚の造営は、寺院(僧)と民衆の両者により死者への追善供養とともに、観音菩薩の慈悲、『法華經』による加護・功德等が込められて行われた経塚である可能性が高い。

なお、角庵Ⅱ遺跡礫石経塚は造営時期を特定することは難しいが江戸時代後期、18世紀後半の造営と想定しており、礫石経塚が造営された時代背景や意義については、次章第4節を参照いただきたい。

注

- 1 礫石経に写経された經典の判定にあたり、当センター足立順司氏に格別のご指導をいただいた。また、さらに経塚造営の意味についても御教授いただいた。銘記して感謝します。
- 2 『華嚴經』普賢行願品が写経されたことすれば、普賢菩薩の十誓願による『法華經』による教への実行が願われた可能性がある。
- 3 15が虚空藏菩薩真言であるとすれば、虚空藏菩薩も十三仏であることから、この経文も十三仏信仰に伴うもので、7回忌の『阿闍如来』、『華花王(阿闍如来が本迹)』、13回忌の『虚空藏菩薩』が記載されていたと判断できる。したがって、該当經典や陀羅尼が確認できない『阿闍如来』や『華花』は十三仏信仰による追善供養を行うことを意味し、対象となる死者が『涅槃』に至ることを望んだ可能性が高いことが想定できる。
- 4 『哩・娑』は『消災妙吉祥陀羅尼』に『至惡哩 娑發舍倍』とあり、この陀羅尼が写経された可能性がある。

参考文献

参考文献は第7章末(176頁)に掲載している。

第6章 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の評価

第1節 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の変遷

1 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の変遷とその特徴 (第115・116図)

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は近接する遺跡であり、同時期の遺構・遺物が確認できることから何らかの関連を有していた可能性が高い。ここでは、一連の遺跡として、その時期的変遷をまとめておきたい。

(1) 縄文時代

縄文時代(第115図上, 第32表)については、明確な遺構は少なく、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡とも自然流路(の可能性が高い)に流れ込むように縄文土器や石器が出土している。

角庵Ⅰ遺跡では早期の押型文土器、上ノ山式土器、入海式土器、前期末～中期前半の大歳山式、鷹

島式(船元Ⅰ式)、五領ヶ台式併行期の土器、中期後半～末の加曾利E式土器・曾利式土器が、角庵Ⅱ遺跡では、中期前半の鷹島式(船元Ⅰ式)、五領ヶ台式併行期の土器、山田平式土器、後期後半の堀之内式土器、晩期の規塚式土器が出土している。土器型式からみれば、同時期に人には及んでおらず、まず早期、前期末～中期に角庵Ⅰ遺跡、中期前半と後～晩期は角庵Ⅱ遺跡に営為が及んでいた可能性が高い。中期前半に両者ともに人為が確認できる以外は、平行しない。

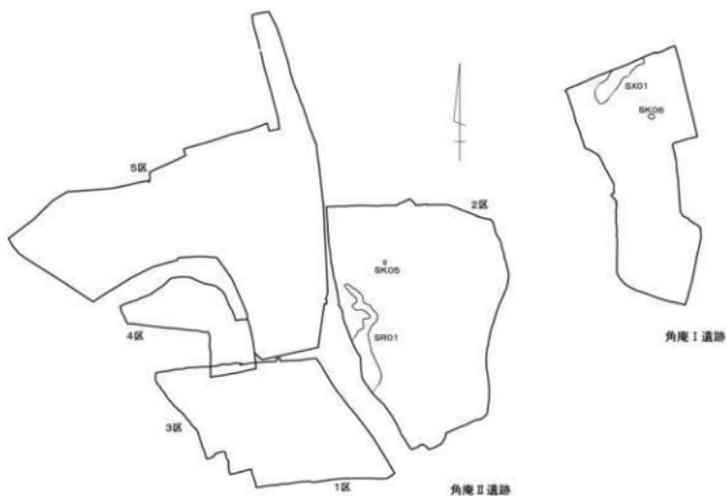
原野谷川中流域では、太田川の北岸の丘陵部に縄文時代の遺跡が連続と確認できるが、その中では角庵Ⅰ遺跡は、萩ノ段遺跡とともに草創期の堂山遺跡に続いて比較的早い時期に形成された遺跡であり、縄文人がまず人為を及ぼせた遺跡として認定してよいと考える。前期の遺跡が明瞭ではなく、前期末頃から再び人為が及ぶようで、中期になると角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡をはじめ、上ノ平遺跡、上ノ段遺跡、萩ノ段遺跡で確認され、この他の縄文時代の遺跡も同時期の遺跡と想定でき、原野谷川中流域では中期に遺跡数が急増したと考えられる。一方で、後期～番期は現状では角庵Ⅱ遺跡、上ノ段遺跡が確認される程度で、遺跡数が減少していた可能性が高い。こうした遺跡数が減少する中で角庵Ⅱ遺跡が後～晩期に人為が及んでいる点は興味深い。

第32表 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の縄文土器の編年の位置

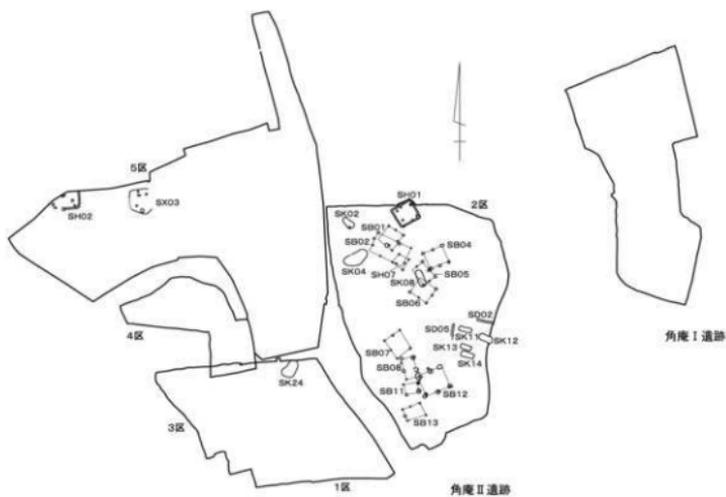
時期/遺跡名	上ノ平遺跡	角庵Ⅱ遺跡	角庵Ⅰ遺跡	原野谷川中流域
草創期				堂山遺跡
早期			押型文 上ノ山式・入海式	萩ノ段遺跡
前期			大歳山	
中期	加曾利E式・曾利式 北屋敷式	鷹島・五領ヶ台式 山田平式	鷹島式・五領ヶ台式 加曾利E式・曾利式	萩ノ段遺跡 上ノ段遺跡
後期		堀之内式		上ノ段遺跡
晩期		規塚式		上ノ段遺跡

(2) 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代後期～古墳時代前期(第115図下)には、角庵Ⅰ遺跡では明確な遺構は出土しておらず、弥生



縄文



弥生後期～古墳前期

第115図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡における遺構の時期別変遷図①

土器と想定する土器片が1片出土しているだけであり、人為はほとんど及んでいなかった可能性が高い。一方、角庵Ⅱ遺跡では竪穴建物、掘立柱建物など遺構が確認されており、遺物も出土している。出土遺物からみると弥生時代後期前半と古墳時代前期に区分することが可能で、竪穴建物（SH01・02）は古墳時代前期、土壇墓の可能性が高いSK11～14（SD02・05で囲まれる方形周溝墓の埋葬施設の可能性はある）は弥生時代後期前半～中葉に位置づけられる。これ以外のSK02・04・08・24なども弥生時代後期前半～中葉に位置づけられる。掘立柱建物については積極的に当該期の建物とする根拠は薄いものの、弥生土器～古式土師器のみが出土していることから、この時期のものとした。竪穴建物との関係を考えれば、古墳時代前期に位置づけられる可能性が高いか。

したがって、詳しくは次節で論じるが、角庵Ⅱ遺跡は墓域として始まり、古墳時代前期に集落に変化した可能性を想定しておきたい。

なお、角庵Ⅰ遺跡で今回の調査区では弥生時代の人為が確認できないが、東に隣接する平Ⅰ・Ⅱ遺跡ではこの時期の遺物が採集されていることを考慮すると、調査区よりも北側に当該期の遺跡が広がっている可能性が高い。今後の調査が俟たれる。

（3）古墳時代終末期

弥生時代後期～古墳時代前期（前半，3世紀～4世紀）の集落が廃絶し、古墳時代中・後期（5～6世紀）には人為が及んでいない。このうち古墳時代終末期（7世紀）になって再び集落が形成される。遠江Ⅳ期後半の遺物がSH08で確認されていることから少なくとも一部の建物が7世紀後半まで継続していた可能性が高い。また、奈良時代（遠江Ⅴ型式）の須恵器が若干出土しており、奈良時代前期までは集落が継続していた可能性があるが、出土した土器の大部分が遠江Ⅳ期前半（7世紀前半～中葉）のものであり、7世紀前半の原野谷川中流域の開発に伴い、この地に集落が形成され、短期（50～70年程度）のうちに集落としては廃絶した可能性が高い。

また、角庵Ⅰ遺跡で竪穴建物の切合関係が確認できることから、少なくとも1回の建て替えが行われるほどの期間集落が営まれていた可能性が高い。

さらに、竈をもつ竪穴建物を中心として、掘立柱建物が確認できるが、角庵Ⅰ遺跡では竪穴建物のみ、角庵Ⅱ遺跡では中央の谷を挟んで東側に掘立柱建物、西側に竪穴建物があり、竪穴建物と掘立柱建物（倉庫か）を区分して造営していた可能性がある。また竪穴建物は、北側に竈を向けていた可能性が高いもの（Ⅰ-SH01・02など）と、北西に向けていたもの（Ⅰ-SH08，Ⅱ-SH03・04）があり、角庵Ⅰ遺跡SH08が7世紀後半の築造である可能性が高いことを考慮すると、竈の取りつけられる位置は時期差の可能性が高く、ほぼ南北に主軸を建物から主軸をやや北西へ向けるものへ変化した可能性がある。

（4）平安時代

平安時代の遺構は明確ではないが、灰釉陶器が出土している。

角庵Ⅱ遺跡で黒笹14・90号窯式、清ヶ谷Ⅲ期、宮口Ⅲ期が出土しており、遺物数は少ないものの、9世紀～10世紀まで人為が及んでいる。一方、角庵Ⅰ遺跡では、清ヶ谷Ⅳ期（10世紀末～11世紀）の製品が確認でき、この時期に短期的に人為が及んでいたことがわかる。

近接する両遺跡で同時期のものが出土していないことから、時期により集落などが場所を変えていた可能性も想定できる。角庵Ⅱ遺跡では比較的古い時期（黒笹14・90号窯式）の灰釉陶器が出土しており、のちの「原田荘」の成立等と関連している可能性があり、今後の調査が俟たれる。

第33表 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の平安時代～近世の遺構と遺物

	角庵Ⅱ		角庵Ⅰ		関連するものごと
	遺構	遺物	遺構	遺物	
9世紀		灰袖陶器			「幡羅郷」
10世紀		灰袖陶器			平安海邊・新田開発
11世紀				灰袖陶器	
12世紀					
13世紀					「原田荘」成立・原氏
14世紀					
15世紀		古志戸呂			高藤城の築城・原氏没落
16世紀			土壇墓 (SK11)	初山・かわらけ	孕石氏の知行
17世紀					
18世紀	礫石経塚 掘立柱建物・SX01・SK01・SK20	礫石経 瀬戸美濃・志戸呂・肥前・銅銭・鉄銭・釘・鎌	土坑・掘列・性格不明遺構	鉄製品	
19世紀				かわらけ	

(5) 中・近世

中世 平安時代以降、遠江の遺跡では一般的に出土する山茶碗が出土しないことは、11世紀～13世紀ごろまで人為が及んでいなかったことが想定でき、それ以降も角庵Ⅱ遺跡で15世紀中頃～後半の古志戸呂焼が出現するまで400年ほど人為が及ばない。角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の空白期間となるこの時期は、「原田荘」が置かれ、土着豪族「原氏」「孕石氏」が居城を築き、支配していた時代と考えられているが、両遺跡ではその営為は見えてこない。原田荘実態解明などが進めば、当該期の土地利用についても明らかになってくると思われる。

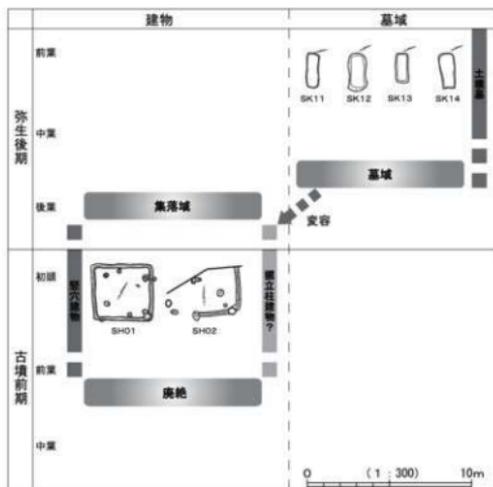
中世の遺構も明瞭ではないが、角庵Ⅰ遺跡SK11が土壇墓の可能性が高く、中世末に位置づけられる可能性がある。SK11が土壇墓であるとなれば、中世末には角庵Ⅰ遺跡は墓域であった可能性が高い。

近世 近世では、礫石経塚 (SK07)、性格不明遺構 (SX01, 倉庫か)、掘立柱建物、土坑などが確認されている。出土した土器はいずれも18世紀以降であり、18世紀中葉以降に再び人為が及んでいる。礫石経塚と掘立柱建物やその他の遺構との前後関係は不明確であるが、礫石経塚の分析から追善供養に伴うとすれば、集落と同時期に併存した可能性は低く、礫石経塚は18世紀前半まで遡る可能性が高い。

18世紀後半以降に掘立柱建物などで構成される集落に変化した可能性が高い。しかし、出土遺物が少ないことから判断して、大規模な集落とは考えにくく、数軒からなる小規模な集落であった可能性が高い。

第2節 弥生後期～古墳前期の動向からみた角庵Ⅱ遺跡

1 角庵Ⅱ遺跡の弥生時代後期から古墳前期の変遷

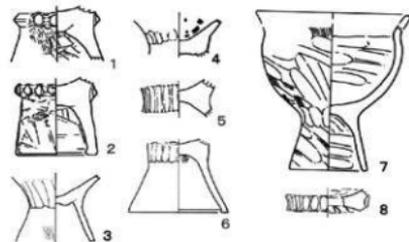


第117図 角庵Ⅱ遺跡の弥生時代後期～古墳時代の遺構の編年の位置

物と同時に機能していたとすれば古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。

したがって、竪穴建物と土壇墓には時期差があり、弥生時代後期前葉は墓域であり、弥生時代中葉から後葉の様相は不明確であるが、古墳時代前期（初頭）には竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落に変化し、古墳時代中期には至らず、廃絶した可能性が高い。

2 台付甕からみた角庵Ⅱ遺跡—粘土帯を台基部に付加する台付甕について—



1・2 角庵Ⅱ遺跡 3 領家遺跡
4～6 上ノ平遺跡 7・8 愛野向山遺跡

第118図 原野谷川・逆川流域の粘土帯を付加する台付甕

角庵Ⅱ遺跡は、当該時期に位置する竪穴建物3基と土坑数基が確認された。このうち土坑SK12から弥生土器とともにガラス小玉が出土していることから埋葬施設の可能性が高い。SK12に隣接するSK11・13・14はほぼ同規模で、長軸を同方向に向けていることを考慮して4基の土壇墓と判断した。これらの土壇墓から出土している土器は菊川式土器で、古段階（弥生時代後期前葉）に位置づけられるものである。一方、竪穴建物は平面方形であることやミガキ調整を多用する土器の出現など菊川式土器には確認できない特徴を持つ土器が出土していることから古墳時代前期に位置づけられる。掘立柱建物の時期は不明確であるが、竪穴建物

角庵Ⅱ遺跡では、台付甕が出土しているが、中でも胴部と台部の接合部に粘土帯を巻き付ける特徴をもつ台付甕が出土している。角庵Ⅱ遺跡出土の粘土帯台付甕は接合した粘土を押圧することで突起一周貼り付けたような状況を示している（第118図）。

掛川市上ノ平遺跡の調査報告でも考察されている（田村2008）が、同様の特徴を有する台付甕は天竜川以西の西遠江で多く確認されるものである。一方で、角庵Ⅱ遺跡が位置する原野谷川、逆川、太田川流域においてもいくつかの遺跡で確認されている（第118図）。

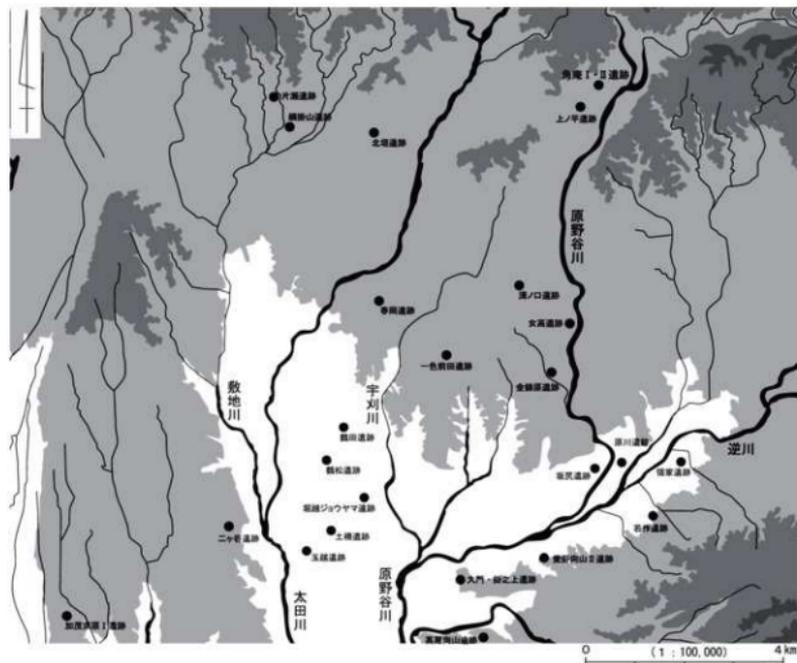
上ノ平遺跡ほか、袋井市愛野向山Ⅱ遺跡（袋井市教委2004）、掛川市領家遺跡（静岡埋文研2000）などである。図に示したように、角庵Ⅱ遺跡は押圧が強く、突起が掘み出されたような状態を示すが、上ノ平遺跡、領家遺跡、愛野向山遺跡では、粘土帯を巻き付けて押圧を加えているが、角庵Ⅱ遺跡ほど突起はしていない。角庵Ⅱ遺跡は原野谷川流域の他遺跡と同様粘土帯を巻き付けるが、接合のための押圧から突起を形成して飾るという特徴のある台付甕を形作ったといえよう。

なお、粘土帯を巻き付ける台付甕は、弥生時代後期後葉以降に多いとされているが、角庵Ⅱ遺跡においては、竪穴建物は古墳時代前期に位置づけられる可能性が高いため、その傾向と合致している。

3 上ノ平遺跡の動向からみた角庵Ⅱ遺跡

角庵Ⅱ遺跡は、上ノ平遺跡の谷を挟んだ東隣の丘陵上に位置しており、当然のことながら切っても切り離すことができない遺跡である。角庵Ⅱ遺跡として別名を与えられているが、弥生時代に関しては、上ノ平遺跡群として、一連の関連する遺跡として認識し、分析が必要であろう。

弥生時代後期前半の画期 角庵Ⅱ遺跡は後期前半の土壌墓で構成される。一方、上ノ平遺跡は後期前半に集落の造営が開始される。この段階では上ノ平遺跡では墳墓は確認されていない。上ノ平遺跡の範囲は広く、一部が調査されただけであり、遺跡が立地する尾根の先端に墓域が形成された可能性があるが、墓域の一端が角庵Ⅱ遺跡まで及んでいた可能性がある。



第119図 角庵Ⅱ遺跡周辺の主な弥生時代の集落

古墳時代前期の画期 上ノ平遺跡は弥生時代後期前半に集落の形成が開始され、後期後半に周溝を有する竪穴建物となり、古墳時代前期（初頭）には、周溝を有する竪穴建物から周溝のない竪穴建物へと変遷することが明らかとなっている（田村2008）。角庵Ⅱ遺跡では同時期の竪穴建物が少なくとも2基（SH01・02）が確認されていることから、この時期に墓域から集落へ性格が変化した可能性がある。この遺跡の性格変化について上ノ平遺跡での竪穴建物の変化および集落構造の変化の影響が角庵Ⅱ遺跡まで及んでいた可能性が高いと想定できる。

4 原野谷川流域の様相からみた角庵Ⅱ遺跡

長谷川睦氏は掛川市領家遺跡の評価を行うにあたり、原野谷川流域だけではなく逆川流域、太田川流域の弥生時代の集落の消長について調査し、下記のような特徴があることを述べている。①弥生時代中期に集落が形成され、古墳時代前期まで長期継続する遺跡、②弥生時代後期に集落が形成される遺跡、である。①・②の集落ともに古墳時代前期には継続しないか、規模が縮小すると考えている（長谷川2001）。これは、井村広巳氏による遠江全域の弥生時代集落の検討において、A 弥生時代中期中葉以降に集落の形成が開始され、B 弥生時代後期に集落が拡散することが確認され、A・Bいずれの集落も古墳時代前期初頭まで継続する遺跡は少ないことが指摘されることと合致する（井村2002）。

また、田村隆太郎氏の中・東遠江の弥生時代集落の分析においても、弥生時代後期前葉に集落が拡散

遺跡名	所在地	流域	立地	環境	前期	中期			後期		古墳前期	備考
						前葉	中葉	後葉	前葉	後葉		
加茂東原Ⅰ遺跡	磐田市	天竜川	台地上	○								
元茂遺跡	磐田市	太田川	砂堤列上									
ニッ谷遺跡	磐田市	太田川	台地上									
御殿・二之宮遺跡	磐田市	天竜川	台地南縁									
玉越遺跡	磐田市	太田川	自然堤防上					?			?	
鶴松遺跡	袋井市	太田川	自然堤防上	○?								
土橋遺跡	袋井市	太田川	自然堤防上	○								
鶴田遺跡	袋井市	太田川	自然堤防上									
堀越ジョウヤマ遺跡	袋井市	太田川	自然堤防上	○?								
一色前田遺跡	袋井市	太田川	丘陵上	○								
春岡遺跡	袋井市	太田川	丘陵上	○								
十二所遺跡	袋井市	原野谷川	自然堤防上	○?								
掛子塚遺跡	袋井市	原野谷川	丘陵上									
角庵Ⅰ遺跡	掛川市	原野谷川	段丘上									
角庵Ⅱ遺跡	掛川市	原野谷川	段丘上									
上ノ平遺跡	掛川市	原野谷川	段丘上									
金峰原遺跡	掛川市	原野谷川	段丘上									
溝ノ口遺跡	掛川市	原野谷川	段丘上									
女高遺跡	掛川市	原野谷川	段丘上									
愛野向山Ⅱ遺跡	袋井市	原野谷川	丘陵上									
大門・掛之上遺跡	袋井市	原野谷川	段丘上	○?								
坂尻遺跡	袋井市	原野谷川	自然堤防上									
原川遺跡	掛川市	原野谷川	自然堤防上									
領家遺跡	掛川市	逆川	自然堤防上	○			?					
若青遺跡	袋井市	逆川	丘陵上									
原新田遺跡	掛川市	逆川	丘陵上	○								
踏原遺跡	掛川市	逆川	丘陵上									
白岩遺跡	菊川市	小笠川	自然堤防上									
赤谷遺跡	菊川市	菊川	段丘上									
三匹原遺跡	菊川市	菊川	段丘上									
耳川遺跡	菊川市	小笠川	自然堤防上									
久保之谷遺跡	菊川市	牛瀬川	丘陵上									

第120図 角庵Ⅱ遺跡周辺の主な弥生時代の集落の消長（長谷川2001に加筆）

することが述べられ、その一連の流れの中で上ノ平遺跡が形成されたことが述べられている（田村2008）。

したがって、上ノ平遺跡は大規模な集落である一方で、角庵Ⅱ遺跡は墓域であった可能性が高く、性格が異なるが、角庵Ⅱ遺跡は弥生時代後期前葉の遠江における集落の拡散期に上ノ平遺跡とほぼ同時に形成された可能性が高い。

一方で、角庵Ⅱ遺跡が集落に変容し、また廃絶する古墳時代前期初頭の時期は、周辺の遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期に集落の廃絶や性格の変化が確認されており、さらに古墳時代中期まで継続する遺跡は稀有である。このような周辺の遺跡での変化は遠江における弥生時代から続く集落の廃絶や再編期（長谷川2001、井村2002など）と連動していたと想定できる。

こうした弥生時代後期から古墳時代前半の大きな変化の影響は上ノ平遺跡の建物構造や集落構造、墓域と集落との関係を変化させた（田村2008）だけではなく、墓域から集落への性格の変化、平面方形の竪穴建物の採用など、角庵Ⅱ遺跡へも及んでいる。そして、前後半に続く遺跡はほとんどないように、角庵Ⅱ遺跡も上ノ平遺跡も、他の原野谷川流域の集落も灯が消える。

角庵Ⅱ遺跡は弥生時代後期の大きな时期的な変化を反映して、集落の拡散期に形成され、古墳時代に向けての大きな社会の変化に対応し、墓域から集落へと変化した、最終的に周辺の集落の廃絶と連動して集落が終焉を迎えたといえ、当該期の社会情勢を如実に表した遺跡であったのである。

参考文献

【論文】

- 井村 広巳 2002 「弥生時代集落の概観—西部地域—」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
 田村隆太郎 2008 「まとめ」『上ノ平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
 長谷川 睦 2001 「総括 弥生時代集落としての額家遺跡」『額家遺跡Ⅱ・梅橋古墳』

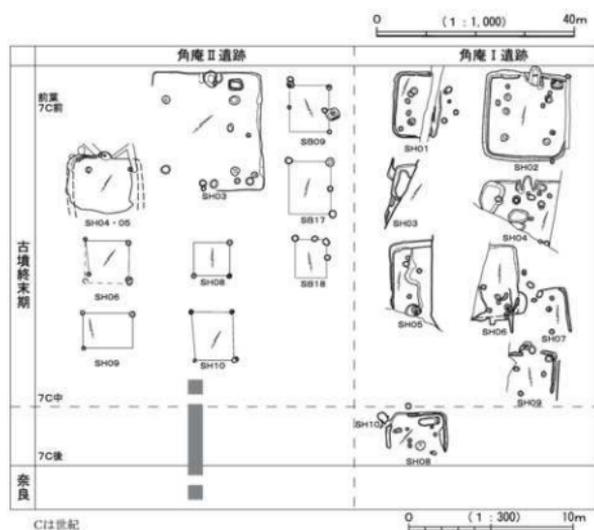
【報告書】

- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 「額家遺跡Ⅱ・梅橋古墳」
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「上ノ平遺跡」
 袋井市教育委員会 2004 「愛野向山Ⅱ遺跡」

第3節 古墳時代終末期における角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の集落について

1 古墳時代終末期の角庵Ⅰ・Ⅱ集落

遺構の特徴 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡ともに、正方形平面で竈が造りつけられ、壁際に壁溝が巡らされるものと巡らせないものがある。また、貯蔵穴がいくつかの建物で確認できるが、角庵Ⅰ-SH02・04・08、角庵Ⅱ-SH03はそれぞれ竈の東側に造り付けられており、竈に向かって同じ位置に貯蔵穴を作る意識が働いていたと想定できる。



第121図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の建物の配置と変遷

いていたと想定できる。

竪穴建物は、角庵Ⅰ遺跡で10軒、角庵Ⅱ遺跡で6軒確認できるが、建物の主軸を北側に向け、竈を北側に配する建物(角庵Ⅰ-SH02・SH04など)と、建物の主軸をやや西側に向け、北側に竈が作りつけられる建物(角庵Ⅰ-SH08や角庵Ⅱ-SH03)、東側に竈が取り付けられた可能性がある建物(角庵Ⅰ-SH10)の3者が存在した可能性がある。角庵Ⅰ遺跡ではSH08とSH02・SH04には若干の時期差が想定されるため、時期による主軸方位が異なる可能性があるが、角庵Ⅱ遺跡の主軸を北西に向ける建物は角庵Ⅰ-SH02・04と同時期と考えられ、遺跡により時期ごとに主軸方位が異なっていた可能性がある。

また、当遺跡内では残存状況の良い角庵Ⅱ-SH03が一辺6m程度で最も大きいが、角庵Ⅰ-SH08は一辺3m強であり、規模差が確

認できる。この規模差は建物の規模による階層差や建物の性格差が想定されるが、建物の残存状況が良好ではない上、出土遺物が少なく、規模差を生み出した要因については明確ではない。

掘立柱建物は現状では角庵Ⅰ遺跡では確認できず、時期が確定的ではないが角庵Ⅱ遺跡で3

基が確認できる。この3棟は集中していない。また、竪穴建物に近接して存在しているが、主軸方位が一致せず、竪穴建物と同時期に存在していた証拠はない。

遺物の特徴 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡ともに須恵器（杯身・杯蓋・高杯・フラスコ瓶）・土師器（杯・甕）が主体である。

須恵器では、湖西産須恵器とは特徴が異なる胎土・色調の須恵器が出土しており、白色砂を含み、セピア色に発色する特徴は、森町森山古窯群（森山窯，森町史編さん委1998）産須恵器である可能性が高い。森山窯は現状では7世紀中葉～末葉頃の生産が想定されているが、同様の胎土や色調などから森町円明寺3号墳や同高蒲ヶ谷8号墳などに供給していたと考えられ、7世紀前半から生産が行われていた可能性が高い（大谷2012）。

土師器では、角庵Ⅱ遺跡で大型台付甕の可能性が高いものが出土している点は興味深い。大型台付甕は三河で創出され、遠江まで伝播したと想定されている。三河では6世紀代でその生産・使用が行われなくなる一方で、遠江では7世紀以降も用いられており、角庵Ⅱ遺跡ではその傾向に合致しているといえる。一方で現状では角庵Ⅰ遺跡には大型台付甕は確認できない。原野谷川や逆川流域の集落でも大型台付甕が出土する遺跡と出土しない遺跡があるようであり、大型台付甕の有無による遺跡の性格差が存在した可能性がある。したがって、竪穴建物と掘立柱建物の組み合わせや、遺物の種類などからみると角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は同時期に集落が営まれているものの、集落の性格が異なっていた可能性が想定できる。

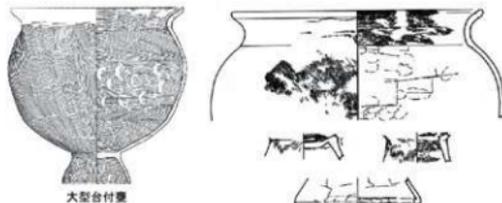
この他の遺物では角庵Ⅰ遺跡SH02から紡錘車未製品2点が出土している。未製品であることからこの遺跡で紡錘車を生産していた可能性があるが、専業で紡錘車を生産していたわけではなく、同一建物内から紡錘車の軸棒に取り付ける錘と想定する石錘が出土しており、紡錘車を自ら生産し紡績を行っていた可能性が高いといえよう。

同時期の古墳からは紡錘車が出土することは少ない（大谷2012）一方で、掛川市大六山遺跡（2号住居，掛川市教委ほか2000）など集落で確認されることがあり、紡績を行っていた集落の様相を明らかにしていくことが可能となろうが、角庵Ⅰ遺跡の集落が紡績を生業の一つとしていた可能性が高いといえよう。

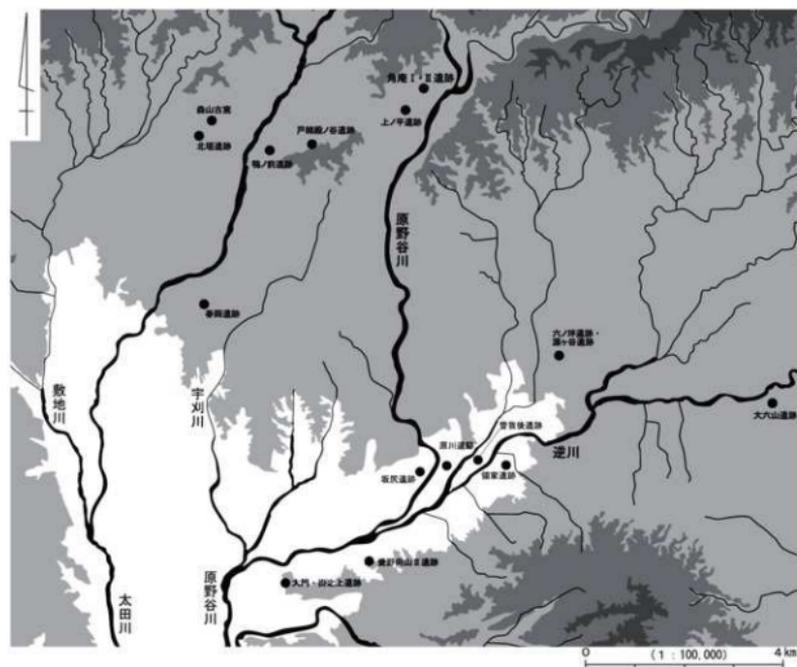
2 周辺の遺跡からみた角庵Ⅰ・Ⅱ集落

(1) 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡が形成された理由について

第二東名建設に伴う調査により掛川市域の原野谷川流域では、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡、宮ノ沢遺跡など8遺跡を調査したが、それらの遺跡は連綿と縄文時代から近世まで続いていたわけではない。8遺跡のうち、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡と同時期に存在していた可能性が高い遺跡は上ノ平遺跡のみである。上ノ平遺跡では7世紀前半～8世紀前半の遺物が若干出土している。竪穴建物は確認されておらず、掘立柱建物3棟が確認されている。



第122図 角庵Ⅱ遺跡出土の大型台付甕



第123図 角庵Ⅱ遺跡周辺の主な古墳時代中期～終末期の集落

したがって、掛川市寺島地区に所在する角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡、上ノ平遺跡がほぼ同時期に遺跡の開発が行われた可能性が高い。したがって、ここでは原野谷川・逆川流域に集落の動向を確認しながら、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の古墳時代終末期の集落の形成と衰退について確認しておきたい。

第123図に角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡が所在する原野谷川中流域と下流域および逆川流域の主な古墳時代中期～終末期の集落遺跡を示した。原野谷川・逆川合流地点にあたる掛川市と袋井市の境界に所在する坂尻遺跡や領家遺跡、曾我後遺跡などは古墳時代中期から古墳時代終末期まで遺物が出土しており、継続的に集落が営まれていた可能性が高い。一方で、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡、上ノ平遺跡、森町北垣遺跡（資料整理中、平成24年度報告書刊行予定）では古墳時代後期末～終末期に突如集落の形成が始まる。これらの古墳時代終末期前後に集落が形成される集落は、竪穴建物数もそれほど多くなく、短期間に廃絶する傾向にある。したがって、長期間継続する集落とは、集落の造営の要因が異なっていた可能性がある。

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡のように古墳時代終末期前半に集落が形成される遺跡には浜松市沢上遺跡や同神々Ⅱ遺跡などがあり（白澤1995）、同時期に集落の形成される遺跡が地域を超えて存在することは興味深い。

ではこの時期に集落が形成される要因は何か？第1案としては、古墳時代終末期前半（7世紀前半）は、世界規模で気温が2～3℃下がった時期と考えられている。この気温の低下による収穫量の減少や気象が不安定な時期となり、河川の氾濫の影響が少ない丘陵上や段丘に集落を新たに形成した可能性が考えられる。つまり、収穫量の減少を補うためにそれまで集落が形成されていない地域に進出し集落を

遺跡名	所在地	流域	立地	中期	後期		終末期		奈良	備考
					前半	後半	前半	後半		
北垣遺跡	森町	太田川	段丘							平安時代
森山古窯	森町	太田川	丘陵							
戸輪殿ヶ谷遺跡	森町	太田川	丘陵							
鴨ノ前遺跡	森町	太田川	丘陵							平安時代
上ノ平遺跡	掛川市	原野谷川	丘陵							平安時代
角庵Ⅰ遺跡	掛川市	原野谷川	丘陵							平安時代
角庵Ⅱ遺跡	掛川市	原野谷川	丘陵							平安時代
原川遺跡	掛川市	原野谷川	自然堤防上							平安時代
領家遺跡	掛川市	逆川	自然堤防上							
曾我後遺跡	掛川市	逆川	自然堤防上							
六ノ坪遺跡	掛川市	逆川	段丘上							平安時代
源ヶ谷遺跡	掛川市	逆川	段丘上							平安時代
大六山遺跡	掛川市	逆川	段丘上							
坂尻遺跡	袋井市	原野谷川	自然堤防上							平安時代
掛之上遺跡	袋井市	原野谷川	段丘上							平安時代

第124図 角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺の古墳時代終末期の集落の消長

形成した可能性が高いと考えられる。

この気温の低下は古墳時代終末期中頃でおさまり、終末期後半には気温上昇が起こったと考えられることから、取糧量が増加するとともに気象も安定し、奈良時代に向けての集落の再編などにより角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡をはじめ、丘陵上の小さな集落は奈良時代を俟たず、あるいは奈良時代前半で集落が廃絶した可能性が高いのではなかろうか。

一方、第2案としては、この時期から集落の形成が始まり、奈良時代まで連続する遺跡が確認されることは間違いない。こうした遺跡は交通の要衝などに造営された集落のちに官衙となるような遺跡であることが多いようであり、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の様相とは異なるようであるが、こうした地域の中心となるような集落の形成と関連して、政治的にそれまで開発が行われていなかった地域に角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡のような集落が形成され、新たな可耕地の開発がすすめられた可能性も考えられる。

角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の場合は、上ノ平遺跡とも関連しているが、丘陵上に形成されていること、大規模な集落ではないことなどから、第1案の自然環境の変化により、自然災害を避け、新たな可耕地や生活する場所を求めて、原野谷川中流域の丘陵上に進出したといえるのではなかろうか。

参考文献

【論文等】

- 大谷 宏 治 2012 「宇藤横穴墓群・天王ヶ谷横穴墓群の評価」『森町円田丘陵の横穴墓群』 静岡県埋蔵文化財センター
 白 澤 崇 1995 「古墳時代後期の集落」『古墳時代の集落』 静岡県考古学会
 田村隆太郎 2008 「まとめ」『上ノ平遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

【報告書等】

- 掛川市教育委員会・加藤学園考古学研究所 2000 「大六山遺跡」
 静岡県埋蔵文化財センター 2012 「森町円田丘陵の横穴墓群」
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 「領家遺跡Ⅱ・梅橋古墳」
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 「森町睦実の遺跡」
 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「上ノ平遺跡」
 袋井市教育委員会 2004 「愛野向山Ⅱ遺跡」
 森町史編さん委員会 1998 「森町史」資料編 森町

第4節 静岡県の礫石経～角庵Ⅱ遺跡礫石経塚をめぐる～

1 はじめに

角庵Ⅱ遺跡からは小さな礫石に墨で経文を書写した礫石経が出土した。通常、礫石経は一文字ずつ書写したものは一字一石経、または数文字ずつ書写したものは多字一石経と呼ばれている。書写された経典の多くが『妙法蓮華経』（以下、法華経）で、この経典を一文字ずつ書写すると69,000余個の礫石が必要となる。角庵Ⅱ遺跡では礫石経を土坑の中に埋納していたが、ほかに第二東名高速道路に伴う発掘調査では藤枝市衣原遺跡においても角庵Ⅱ遺跡と同様に土坑に埋納された例が認められた（勝又2010）。

しかしながら、地上に標識となる塚を盛土してその中に収めたケースや建物の床下に納めたケース、石塔や石碑（経碑）、石幢、石仏の下に埋納したケースもある。地上の標識は削平されたり、石塔、石幢、石仏のように別の場所に移動したりすれば、角庵Ⅱ遺跡と同様に土坑に埋納された状態で検出されよう。

そもそも経典とは仏陀の説法を文字で綴ったものであり、とくに法華経については大乘仏教の最高の経典と考えられていたので、これを書写することや受持することは、読誦することとともに深い信仰表現として考えられていた。そしてその功德として過去、現世、未来に連なる利益を得るとされていた。

したがって書写した礫石の功德を得んという強い思いがあるので、地表にその標識を建立することは自然な思いで、角庵Ⅱ遺跡や衣原遺跡の場合も何らかの標識が設置されていたと考えることができる。

一般に経塚とは経典を書写し地中に埋めたもので、その上部に小さな塚が築かれた施設とされているが、築かれた塚も経典を書写したことを明らかにし、その功德を得んと表示する役割とみることができる。書写した経典を納めることを第一義と考えるならば、塚を築くことや地下に埋納することはそれに付随する行為とみることができよう。したがって地中ではなく、地上の石造りの経箱や台座の中や地表面に礫石経を納めることもある。この点が古代から続く経塚の概念にはおさまらない点であり、近世の礫石経の特徴とみることができる。

礫石経の標識には積土の塚以外が多く、石塔や石碑（経碑）、石幢、石仏があり、そこには造営者の本願や旦那（増越）の氏名、目的、写経した経典、造営や写経した年号が銘文として刻まれている。静岡県内の礫石経について、これらの点を重視し別表の一覧に示した。以下、一覧に示した内容を分析し、角庵Ⅱ遺跡の礫石経では資料不足のためわからなかった点でもある、どのような背景によって、どんな人々によって埋納されたかを考えることとする。そしてそれはこの地域の人々が礫石経に託した思いにまでふれる問題でもある。

2 礫石経と遺跡地名表（第34表）

静岡県教育委員会は埋蔵文化財の掌握のため、県内研究者を総動員し、県下の遺跡分布を調査した。その成果は昭和36（1961）年と同38（1963）年に『静岡県遺跡地名表』とその解説版というべき『静岡県の古代文化』という形で刊行した。後者の中で望月薫弘氏が『静岡県の経塚』を執筆しているが、その叙述には礫石経の出土地を含めている（望月1964）。

その後、遺跡地名表と遺跡分布図の改訂版が昭和54（1979）年に刊行された。この段階での経塚遺跡の取り扱い、一部の研究者が中世や近世の塚や壇について経塚と誤解しているため、その取扱いに注意が必要な場合がある。昭和59年には関秀夫氏による『経塚地名総覧』（関秀夫1984）、昭和63年には鈴木良孝氏の集成（鈴木1988）の中にも、両書の基礎データがこれら遺跡地名表から引用されている。さらに現地調査によらないそのほかの文献を引き継いだため、経塚もしくは納経施設とそれ以外の遺構の

第34表 静岡県の磐石経出土地名表

No.	名称	所在地	立地	種類	地上標高	地下埋込	年代	造営者	目的	その他
1	北平1		平地	多字	自然石		天保3	大野頼仁	先祖供養	
2	北平2	浜松市北区三ヶ日郡築	平地	多字	六角形		寛政10	大野三左衛門		石経の碑文
3	北平3		平地	多字	石塔					金光明経
4	庄久東	浜松市北区三ヶ日庄久東	平地	多字	六角石	遺				
5	四方浄	浜松市北区引佐四方浄	丘陵地	多字	宝印塔	塔内	宝暦6		釈迦佛寿命延長	
6	正照寺	浜松市北区引佐百前	寺社境内	多字	観音石仏			月津澄		経塚供養の碑文
7	天神社	磐田市見付	社内	多字						妙法蓮華経巻八の墨書
8	大原蓮華寺	磐田市大原	墓地	一字	塚	礎石				
9	平土	磐田市平土	平地	多字						伝四宮石塚遺教
10	黒龍院	浜南市五十間	寺社境内	多字	観音石仏					
11	栗倉	森町栗倉	丘陵地	不明						中世墓か
12	万松寺	森町万松	寺社境内	多字	雲台		文化9	扇尾忠兵衛		石塔一部塔の碑文
13	大洞院	森町堀	寺社境内	多字	雲台		寛政3	石川・北島氏		石書金光明・経土の碑文
14	三角神社	森町森	寺社境内	多字						経塚の碑文
15	市原平石		河原段丘	一字	丸石					
16	市原平石	掛川市中西ヶ谷	河原段丘	一字	丸石					
17	角庵日	掛川市寺島	河原段丘	一字・多字		土坑				1の経塚か
18	長福寺	掛川市本郷	寺社境内	一字	古塚の頂部					
19	徳也	牧の原市上朝比奈	丘陵地	多字	山形角柱		寛政3	松原忠心		経塚供養の碑文
20	海老江	牧の原市海老江	丘陵地	一字	古墳頂部		宝暦3			一字一石の碑文
21	月見沢山	牧の原市地頭方	丘陵地	多字	塚・角柱					納経塚
22	大沢	牧の原市大沢・園	丘陵地	一字	角柱					
23	平田	牧の原市平田	丘陵地	多字	角柱		寛政5	村山氏		
24	聖生寺	牧の原市聖生	丘陵地	一字	塚・自然石			正徳・享保		経各
25	藤倉寺	牧の原市藤倉	寺社境内	多字	地蔵石仏					法華経一行一石の碑文
26	保成寺	牧の原市保成	寺社境内	多字	観音石仏		文化2年	鈴木茂八郎兵衛		石書法華供養の碑文
27	妙昌寺	牧の原市細江善地	寺社境内	一字・多字	無縁塔	石室	宝暦・天明	大塚正道		法華・宝篋印輪尼唐字の碑文
28	水ヶ谷	牧の原市水ヶ谷	平地		塚					扁平な多数字出土
29	山田山	牧の原市山田	墓地		石塔の段					塚より経塚とされる
30	寺ノ塚	牧の原市伏方	寺社境内		石塔の段					経塚か不明
31	福文ヶ谷	牧の原市伏方	寺社境内		石塔の段					経塚か不明
32	石置院	牧の原市取口	寺社境内	礎石	石佛	元禄2		小肌密松院宗元		経塚に由来
33	経塚山	島田市大沢	丘陵地	石佛	石佛	寛政3				表面に摩多敷
34	地蔵院	島田市神尾	山頂	多字	自然石	安永2				摩多敷石の碑文
35	長楽寺	吉田町神戸	寺社境内	一字	塚・雲台		寛政10	本間代五郎・合藤		
36	瑞雲寺	島田市瑞雲	河原段丘	一字	塚					平石・目盛石
37	武佐	島田市武佐丁目	河原段丘	一字	自然石		寛政4	相模忠心		摩多敷石の碑文
38	東光寺	島田市東光寺	寺社境内	多字	山頂		天明8	眞直法印		石経の碑文
39	龍江院	島田市岸	寺社境内	多字						納経塚
40	上平	川根本町青部	河原段丘	一字・多字	塚	土坑				
41	衣原遺跡	藤枝市下之郷	墓地	一字		土坑				
42	長福寺	藤枝市四方	寺社境内	多字	石塔					納経塚
43	石塔	藤枝市藤敷	寺社境内	多字	地蔵石仏					
44	高野門前	藤枝市赤区・寺敷	寺社境内	多字						
45	ヒヤノ土手	静岡市東区日明寺丁目	墓地	一字	自然石		文化10	八木惣貞		
46	法蔵寺	静岡市東区法蔵寺丁目	寺社境内	多字	角柱		享保14	大塚平八郎		
47	片山	静岡市駿河区大谷	墓内	多字	石塔		天明2			碑文
48	龍天山總持院	静岡市東区平山	寺社境内	多字						
49	東神塚	静岡市東区東	山頂	礎石						石経さんの地名
50	平塚塚山	静岡市東区北沼上	山頂							
51	古庄	静岡市東区古庄谷丁目	墓内	礎石	石仏	妻				
52	東一寺	静岡市駿河区一色	墓内	礎石	自然石					石経塚の碑文
53	千手寺	静岡市清水区上原	古墳頂部	礎石	観音石仏		享保4			
54	光福寺	静岡市清水区相模	寺社境内	一字	雲台角柱		寛政11	渡瀬		一字一石の碑文
55	光栄寺		寺社境内	一字	観音石		文政13	甲州当村施入道々		読者供養
56	光栄寺	富士市岩間	寺社境内	一字	角柱		元禄13	結城		法華石経の碑文
57	南禅院		寺社境内	礎石	角柱		寛政5	堀方・徳島忠		供養・安全
58	大・大		河原段丘	礎石	観音石		文政13	甲州当村施入道々		
59	日ノ丸		寺社境内	礎石	角柱		貞享3	日蓮回心		日蓮回心
60	富士市岩間		寺社境内	礎石	山形角柱					写経石の碑文
61	岩間		寺社境内	礎石	自然石					
62	松岡	富士市秋岡	寺社境内	一字						一字一石の碑文
63	下棚	富士市下棚	寺社境内	多字	雲台		安永6	西尾		大乗妙法蓮華の碑文
64	今泉	富士市今泉	寺社境内	一字	山形角柱		文化10			一字一石の碑文
65	伝法山	富士市伝法山	寺社境内	一字	自然石		文化10	扇尾忠兵衛		一字一石の碑文
66	経塚山	富士市経塚	墓内	礎石	自然石					摩多敷
67	久中村	富士市久中村	墓内	礎石	角柱		弘化4	西村茂八		石経一部の碑文
68	今泉	富士市今泉	寺社境内	礎石	角柱		元禄4			石経全部の碑文
69	中里	富士市中里	平地	礎石	観音石		元禄4			大乗妙法蓮華の碑文
70	中比奈	富士市中比奈	寺社境内	一字	五輪塔		宝暦5	古藤通		大乗妙法蓮華の碑文
71	伝法	富士市伝法	平地	一字	経土塔		寛政2	渡瀬平右衛門定常		
72	村山茂岡	富士市村山寺山神	寺社境内	礎石						
73	三好村	富士市重宝久保谷戸	遺跡	一字	釈迦・阿彌陀石仏	石室	宝永6	李弘信・阿彌陀法印		高札成就
74	福山御堂	沼津市福山	寺社境内	礎石	山形角柱		享和3	安石衛門日本宗義		村中安全
75	福山御堂	沼津市福山	遺跡	一字	丸石					石経の碑文
76	大平町致寺	沼津市大平	寺社境内	礎石	山形角柱		享和3	田代・田代		石経の碑文
77	柳沢	沼津市柳沢	寺社境内	一字	観音		天保11	日成		一字一石の碑文
78	赤野観音堂	沼津市赤野	寺社境内	多字	観音		享保3	小野氏		写経石か不明
79	大塚	沼津市大塚	墓地	礎石	自然石		嘉永元	井口兵衛前田新左衛門		石経塚の碑文

No.	名称	所在地	立地	種類	地上標識	地下構造	年代	造営者	目的	その他
80	方田町石行さん	沼津市古田町	奥墓内	一字	自然石		天明4	当村中	書写供養	
81	玉井寺1		寺社境内	一字	三瓶方堂塔		明治4	萬原	万葉供養	一字一石の碑文
82	玉井寺2	清水町伏見	寺社境内	一字	宝塔		明治元年	萬原・高遠石工地上氏	火功	一字一石の碑文
83	宝徳寺		寺社境内	一字	地蔵石仏		明治8	近藤・福留・	群衆供養	台座一字一石の碑文
84	東光寺	清水町長沢	寺社境内	一字	宝塔		明治8	志崎・西園同行	義	一字一石の碑文
85	鹿光寺	清水町鹿嶋	寺社境内	一字	子安地蔵		文政元年	野村常右衛門・舟寺彌助	同因	一字一石の碑文
86	徳吉寺	清水町徳中	寺社境内	一字	雲付角柱		宝暦2	頼土多数	守夜火盛	一字一石の碑文
87	普光寺	清水町上池倉	寺社境内	一字	石塔		文化15	三嶋崎島寺州		一字一石の碑文
88	法泉寺	清水町八幡	寺社境内	一字	三瓶方堂塔			津越・各禮堂堂位	大同9	一字一石の碑文
89	深良町田	新野市深良町田	寺社境内	一字	山笠角柱		享保4	興隆寺住僧		
90	深良町田	新野市深良町田	寺社境内	一字	雲付角柱		享保4	興隆寺住僧・普芳庵		
91	深良町田	新野市深良町田	寺社境内	一字	礎石		文政8	護国寺住僧門下・万人講		
92	庄屋院	西伊豆町大田子	寺社境内	礎石	自然石					
93	正法院内	西伊豆町大田子	寺社境内	一字	雲付角柱		宝暦4	芥沢氏	追善・周保開長	一石一石の碑文
94	延命寺	西伊豆町南名野	寺社境内	礎石	自然石		元治2	佐久間三郎・第九七		写石供養の碑文
95	日金山	熱海市伊豆山	山頂	一字	塚	土坑				
96	貞高	熱海市上芝	山頂	一字	石塔		享和3	大中		石経塚の碑文
97	切高	熱海市高宮ノ前	寺社境内	礎石			安永7			
98	神徳寺	伊東市和田	堂下	一字		土坑				1から田遺構あり
99	法華塚	伊東市富戸	丘頂	礎石	塚	礎様				一字一石の碑文
100	見高	河津町見高	寺社境内	一字	地蔵石仏					一字一石の碑文
101	奥屋	河津町梨本	山頂	一字	角柱					一字一石の碑文
102	観音山	河津町石塔	丘頂	礎石	石塔		寛政2			石経塚の碑文
103	観音寺	河津町谷津	寺社境内	一字	石塔		安永3			一石一石の碑文
104	福壽寺1	下田市白旗	寺社境内	礎石	石塔		文政4			一石一石の碑文
105	福壽寺2	下田市白旗	寺社境内	礎石	石塔		文政3			
106	田平	下田市田平	墓墓内				天保8			詳細不明
107	高柳山	下田市河内山	山頂	礎石	石塔		弘化4			
108	下流	南伊豆町下流	平地	礎石	石塔		嘉永6			
109	伊豆	南伊豆町伊豆	寺社境内	石塔			万暦元年			お経塚の名より
110	栄徳寺	伊豆市十郎	寺社境内	礎石						
111	藤原寺	三島市玉川	寺社境内	礎石	石塔					一石一石の碑文

区別ができていない部分があり、その影響の強さがみられる。基本的には経塚とは書写した経典を納経した納経施設と地上標識のことで、経典が埋納されていない修法壇や塚は含まれない(註1)。

近世の礎石経の埋納には、古代の経塚のような小さな塚を築き埋納する例はあるものの、多くは石塔や石碑(経碑)、石幢、石仏の下に埋納する例が多く、見た目でもそれをそのまま経塚と呼ぶべきか検討の余地がある。たしかに森町三島神社の社前の平地には「経塚」と刻まれた石碑があり、鳥田市大代の経塚山では丘陵頂部に「納経塚」という石碑が建立されている。書写した法華経を埋納したと銘文に刻まれているが、塚を築いているわけではない。石碑(経碑)では供養塔という碑文が多い。これを含め広義、経塚と便宜的に呼ぶとすれば、塚を築かない場合も礎石経塚という概念もありうるだろう。

そもそも塔とは、ストゥーパという古代インドの墓であり、釈迦入滅以後、単なる墳墓ではなく、記念物としての性格が強くなり、仏の骨である舍利や遺髪・記念品を埋め、レンガや石で構築されたものである。それがのちに中国や日本で死者の追善のために立てるものを卒塔婆や塔婆と呼び建物を塔と呼んでいる。すると土盛の塚も石塔・石碑も写経し納経したことを記念する標識と評価できよう。

3 角鹿Ⅱ遺跡周辺の礎石経(第125図, 図版60~62)

長福寺の礎石経 大谷宏治氏(松井・大谷2001)が紹介している経塚で、経塚のある長福寺は掛川市本郷にある曹洞宗の古刹である。この裏山に円墳があり、その発掘の折、礎石経が発見された。礎石経は長径8.3~3.8cmの扁平な川原石に書写した一字一石経である。古墳の頂部に埋納された例である。

市居平経塚と経碑 昭和50年8月、角鹿Ⅱ遺跡の北側にある掛川市中西ヶ谷市居平の茶園開墾の際、四角形の盛り土の塚から一字一石経が出土した。その年の秋か冬、当時、森町で発掘調査をしていた足立のもとに山下茂吉氏がこの一字一石経を持参し、何頃のものかを照会した。足立は説明をするとともに、掛川市教育委員会に連絡した。その後、山下氏の書いたもの(山下1977)と現地調査の結果に基づき、関係深いと思われる経碑について以下、述べてみたい。

掛川市の山間部にある市居平は、海拔300mの丘陵尾根部にある集落である。江戸時代の地誌『掛川誌

稿)によると、江戸時代以来5戸で村を形成し、村中に神祠仏堂なしとされていた。発見された経塚にはもともと球形の自然石が据えてあったが、茶園にするため共同墓地に移動したという。この石はよく「サイ」の神などに見かける直径55cmの丸石で、経塚が村の入口にあたることも関係するのであろうか。

出土した経石は一字一石経である。礫石経は長径4.5～2cm大の扁平な川原石に佛、偈、身、来、在、道、壇、流、常、傳などの文字を書写していた。総数は約1万個が出土し、特別な埋納施設はなく、赤土をたたき締めてあった中から経石は出土したというから、基盤の赤土を掘り込んで、埋納してあったのであろうか。そのうち36個の経石を確認したが、大半は別の場所に埋納したという。山下氏はこの経塚造営について、「かつて原因不明の不審火があって、それから村を守るために多くの僧侶によって読経した」という村の伝承を紹介し、これが経塚造営と関係するのではないだろうかとしている。

共同墓地には「○(日輪) 大乗妙典志壺」と刻まれた高さ約1mの自然石がある。裏には「発記 安芸産人独沙弥郎写 当村鈴木伝次郎建立 天保八□□□□(銘文の旧字は常用漢字に直す)と刻まれている。安芸の聖による大乗妙典である法華経の書写を天保8年に行った記念碑である。おそらくこれが市居平の礫石経書写業をさすと考えられる。沙弥の号から遠く安芸から来た脱俗の人物を感じる。

万松寺の経碑 万松寺は森町天宮にある曹洞宗の寺院で、経碑は境内にある。経碑は笠付角柱形式で、銘文にはおおよそつぎのように彫られていた(森町1998)。

虚相元室上座と玉室妙桂尼上座の菩提を住職の要淳が供養

妙経(法華経)千部読誦石書一部塔

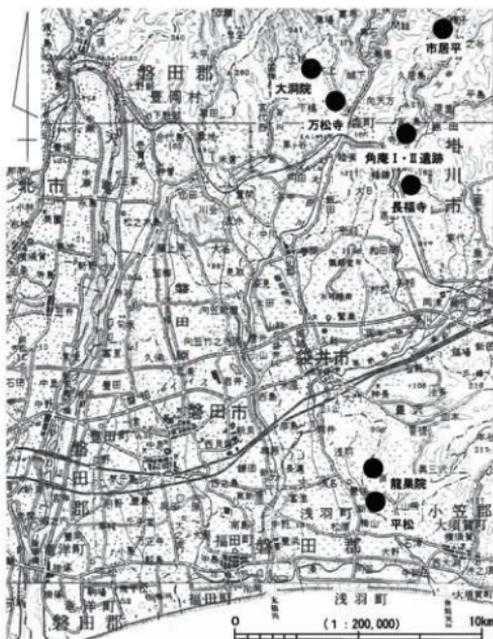
文化九年壬申仲春吉祥旦

功德者は福德を、亡者は苦を離れ、天下安全 国土栄盛 寺門繁昌などを願う

施主 □光 密院本丁上人 堀尾忠兵衛 経石施主貞栴信女(旧字は常用漢字に直す)

これによると法華経の読誦と礫石経一部の書写が2人の人物の菩提供養のため行われ、施主には石塔や供養の施主とともに経石を準備した人物(書写した人物か)がいたことがわかる。礫石経は経碑の下に埋納されたと考えられる。

大洞院の経碑 大洞院は遠江、駿河における曹洞宗大源派の中核寺院で、森町桶にある。境内にある経碑2基は笠付角柱形式で、銘文にはおおよそつぎのように彫られていた(森町1998)。



第125図 角庵日遺跡周辺の礫石経塚

石書金光明経塔

願主現住法千が誌す

喜山派三州長泉寺代化主末山六箇寺主

施主十万諸壇越等

寛政辛亥（三）年五月

石書経王塔

為御地頭所安全

森町 華蔵庵宗峯 石川儀兵衛

施主粟倉村北嶋仲右衛門

七月（旧字は常用漢字に直す）

このことから金光明経と法華経を礫石経として書写し納経したこと、このために三河や隣村天宮の末寺などを願主とし、粟倉村の組頭で酒造業者の北嶋仲右衛門のような近隣の有力者とともに、十万壇越等の文言から広く布施を募ったことが判明する。

龍巢院の一字一石経 龍巢院は袋井市五十岡にある曹洞宗の古刹である。門前の小堂には観音石仏があるが、この堂内の石仏周囲には一字一石経が納められている。石仏の台座には「平民村松九兵衛□□、同姓□□」と刻まれ、石仏の施主のひとりが近隣の有力者とその一門であることがわかる。礫石経納経がどのような願主や施主に依っていたかはなお不明であるが、地上標識としての石仏建立が近隣の人々によるものであることは重視したい。

平松経塚 戦前、袋井市岡崎字平松にある四宮右近脇屋敷と伝えられる土塁から5,320個の多字一石経が出土した（山崎常盤1932）。現存している礫石経の一部を足立が積読したところ、この経文は法華経の観持品、神力品、從地湧出品、授記品であることが判明した。出土地の近くには経碑などは認められなかった。出土地の四宮右近脇屋敷については、今川家家臣三浦右衛門が自刃した場所という伝承があり、横須賀城主となった大須賀康高がその菩提を供養するために、宗有寺（曹洞宗龍巢院末）を脇屋敷の一角に建立した（八木1936）。出土地からすれば出土した礫石経もこのことに関連するかもしれない。

角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経塚の特徴 角庵Ⅱ遺跡周辺の礫石経については、以上の通りである。このことから2、3の指摘をしたい。

どのような場所に納経されるかであるが、角庵Ⅱ遺跡の場合、寺社境内や居住域ではなく、集落を見下ろす村のやや高台であった。その点では市居平経塚の立地と同じである。しかし多くは寺社境内、もしくはその近接地である。平松経塚の場合、埋納地に意味があるかもしれない。

つぎに埋納地に設けられる地上標識の存在である。市居平経塚や古墳の頂部を利用した長福寺経塚の例のように、土盛りの塚もあるが、石塔、石仏もある。これは年代や造営目的の違いもあろうが、施主、造営者の広がりとその布施によると考えられる。

つづいて年代である。経碑・石仏の銘文では18世紀後葉から19世紀前半であり、多くは一字一石経であった。現状では平松経塚の年代は不明であるが、のちに県内の例からのべるが、多字一石経も18世紀代にも認められる。

ではどのような人々・宗派がどんな目的で礫石経も埋納したのであろうか。経碑・石仏の銘文によれば、礫石経書写と埋納の目的は現世にあっては福德がおよぶこと、亡者にあっては苦を離れ成仏すること、その他菩提供養、天下・地頭所安全、国土栄盛、寺門繁昌、市居平の伝承では防火である。

この地域の礫石経施業とは、どのような宗派が勧めたのであろうか。経碑・石仏の銘文や寺院の宗旨、そして江戸時代の村と檀那寺の関係を角庵Ⅱ遺跡のある寺田村や市居平村の含め検討すると、この地域では曹洞宗末派が施業を勧めたと考えられる。

4 各地の礫石経（図版61・62）

（1）遠江

浜松市北区三ヶ日の北平と佐久米の例は、石碑、石塔のほか2例に六角形の龕と石幢を地上標識の塔としている。北平の例は墓所と屋敷地にあり、銘文から書写された経典は法華経と金光明経と刻まれている。一門の墓所に礫石経書写と埋納を行った施主の大野氏は天領北平の村役人の家柄である。

佐久米では地下より壺に入った多字一石経が出土した。地上の石幢には仏像2体が浮き彫りされている。北平と佐久米とも檀那寺の宗旨から曹洞宗寒巖派の施業と推定される。

北区引佐白岩正眼寺は臨済宗方広寺の末寺で、境内に「経塚供養塔 再建文政九丙戌年・」と刻まれた観音像がある。同じ引佐の四方浄にある、推定で高さ2m50cm前後の大形宝篋院塔内部から多字一石経が出土した。宝暦6（1756）年の銘文からは（引佐町教育委員会1987）、世間の諸々の人々である衆生が一切如来陀羅尼などを書写したこと、「百病万病一時消滅、寿命延長、天下泰平国下安全」などを願っていることが判明する。銘文と建立された場所から四方浄の真言宗寺院般若院（現在は廃寺）が施業を進めたと考えられる。

磐田市大原にあった慧慧の発掘調査で、K-13-2号墓と呼称された塚遺構から礫石経が出土した。一辺2m、高さ0.55mの範囲に一字一石経を埋め、その上を盛り土したのであろうか（平野和男1984）。墓地という立地から万霊供養の願意が推定される。

昭和7（1932）年、磐田市見付にある見付天神社の本殿内陣直下から、400個余りの法華経を書写した多字一石経が出土した（山崎1934）。法華経の方で社殿を加護する意味と推定している。

牧之原市では黄葉宗智生寺寺山に一字一石経を積み上げた大形経塚がある。同市平田の臨済宗妙心寺派の中核寺院平田寺があり、その末寺や集落に一字一石塔が認められる。海老江では古墳の上に石塔が建立され、ある人物の父母追善のため、多くの善男善女が石を拾い、写経した旨が刻まれている。村中総出の業といえよう。

曹洞宗大源派石雲院境内には元禄3（1690）年銘の石経書写塔がある。これは「武州小机雲松院別家叟宗天敬白」とあり、小机雲松院とは同じ曹洞宗寺院である。当時、石雲院は輪住寺院であったため、遠い武蔵の僧侶によって、石経書写が行われたと考えられる。それより以降の18世紀中葉～19世紀には石雲院の末寺についても石経書写と塔・石仏建立の業を進めている。吉田町の長源寺（曹洞宗）では石積みの段の中に埋経したと考えられる。

旧遠江分である島田市大代にある経塚山山頂にある納経塚と刻まれた石塔には、寛延3（1750）年に法昌院（曹洞宗）八世了積が建立し、雨乞いに書写した法華経を埋経したと刻まれているが（佐藤2003）、埋納した経文は紙本経か礫石経か不明である。多くの小さな礫が積まれていることから、礫石経の可能性がある。榛原南部については曹洞宗・臨済宗・黄葉宗の禪宗が施業を進めたと考えられる。

（2）駿河

大井川に沿った島田市笹間の馬場平経塚（鈴木1988）と本川根町土平経塚（池田純2003）では不時の発見であったが、その後、発掘調査され報告されている。土平経塚では土坑に埋納された多字一石経の法華経が確認された。詳細はそれらの報告によらる。

焼津市（旧大井川町）飯淵には「石経さま」と呼ばれる「いぼり」に効果があるという地藏堂がある。地藏仏には一字一石経塚と刻まれている。地藏の台座に一字一石経は納められているのであろう。現在は真言宗長徳寺が管理している。

島田市東光寺の天台宗東光寺には明和8（1771）年銘のある経碑がある。釈迦三尊の種子があり、大乘妙典石経塔と刻まれている。島田市道悦の墓地には慶応4（1868）年の経碑がある。茶毘跡や火葬墓

とともに礫石経の発見された藤枝市衣原遺跡、同様に火葬場であった静岡市田町ヒヤノ土手経塚からも礫石経が出土した。これは「妙法蓮華経 巻第五」と一石に品題を書くが、経文は一字一石である。

静岡市内において寺社境内にある経碑は、福寿院門前、宝蔵寺、光福寺が曹洞宗寺院にあり、清水区上原の千手寺が黄檗宗寺院にある。

日蓮宗勢力の強い富士川流域の富士市、富士宮市には、日蓮宗独特の髹題目塔や題目碑の石経書写碑（経碑）が多い。経碑建立の契機は講をつくっての書写業や日蓮上人の遠忌供養の書写業があり、日蓮宗による施業が圧倒的に多い。光栄寺の経碑のように、文政12（1829）年に起こった大風雨による富士川渡船事故者の追善供養の書写業という痛ましいケースもある。翌年に建立された経碑には建立者の中に甲斐三河岸とあり、水難者の家族も加わったものと推定される。清源院（曹洞宗）の石経供養塔の碑文には渡船岸場安全と刻まれている。この辺も富士川流域の願いであった。

富士宮市栗倉二股村経塚は、巡礼成就を記念して宝永7（1709）年に書写した法華経をおさめたもので、本願の僧侶と施主と助縁者の氏名が刻まれている。一字一石経は立像と坐像の2体の釈迦如来の石仏、の台座とした石箱内に納められていた（若林他1987）。結縁者は念仏講の男女46人と大口の施主である。なおこの地の字は十三仏と呼ばれ、念仏講では死者を追善する初七日から三十三回忌の十三仏を信仰するが、このことと一致する。つまりこの地の念仏講を結縁者とした石経供養といえよう。

富士宮市村山浅間神社は、明治以前、神仏習合の富士山興法寺の一派組織からなり、大棟梁権現社、大日堂、七社浅間社諸堂を本山派の村山修験が管理していた。一字一石経は大棟梁権現社跡の近くで出土した。土坑に埋納されたものと推定される。

駿河の礫石経供養は富士川流域の日蓮宗による施業と修験との係わり、さら念仏講による結縁が特徴といえよう。

（3）駿東・伊豆

旧駿河に属する駿東地域は西伊豆と関係深いので、ここに述べる。裾野市の寺院は曹洞宗6寺と念仏系の浄土宗6寺、時宗2寺、真宗2寺がある。裾野市深良ではいずれも曹洞宗寺院が石経書写と造塔を勧めているが、念仏系寺院は関与していないことが明瞭である。沼津市では臨済宗寺院に次いで、日蓮宗寺院があるが、柳沢妙蓮寺の題目塔は一字一石を書写した旨を刻んでいる。住職の日成を本願とし、近郷近在の人々の寄進によって建立されたとしている。真言宗赤野山観音堂には十一面観音の石仏台座に法華経普門品読誦と光明真言十遍を書写したことが刻まれている。紙本経か礫石経かは明確ではない。

清水町から西伊豆町の西海岸では臨済宗妙心寺派寺院に一字一石の碑文をもつ石塔・石碑が多い。法華経や金剛般若経、宝篋院陀羅尼、尊勝陀羅尼など書写を行い、三界万霊等、火坊、諸霊供養、円通大士（観音）供養、子安地藏による回向、守夜火盜の願ったのである。

その中で注目したい例は、臨済宗妙心寺派中興といわれ、「駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山と原の白隠」とまで謳われた白隠の影響である。清水町玉井寺の三界万霊等の文字は白隠の筆勢壮大といわれた書である。これは檀家星屋氏らによって建立され、金剛般若経六巻の一字一石経が塔に納められた。この塔以後、清水町の臨済宗寺院で、一字一石経書写と塔建立が広がりを見せる。結縁には近郷近在の人々ばかりでなく、江戸在住の人物が連なっている。礫石経書写と造塔によって寺院と檀家や信者との距離を大きく縮めたのである。白隠は仮名法語などわかりやすい叙述と説法で民衆の心をつかみ、さらに弟子の育成をすすめたことは広く知られるところである。礫石経書写と造塔を通じて仏教も広く民衆のもとへ入っていったのであり、これは白隠の目指したところでもある。この地域の臨済宗寺院の広がり大いに影響を与えたといえよう。

伊豆東海岸にふれる。熱海市伊豆山にある真言宗走湯山般若院の末寺東光寺裏山には、日金山経塚が

ある。カワラケと渡来銭2枚と一字一石経が出土した。礎石を積み上げ盛り土した塚で、中世後期と考えられる。県内では古い例ではあるが、市史(熱海市史編纂委1972)によれば、一時一石経2,500個が出土したという。熱海市初島東明寺(曹洞宗)には安永7(1775)年の石経塔がある。

伊東市和田の妙隆寺(日蓮宗)堂下の土坑3基から礎石経が3~12点が出土した(尾形礼正ほか1989)。報告書では14世紀後半の遺構とするが、時期の決め手となった陶器片は小片で、混入であろうから、14世紀後半以降としか判断できない。寺院の建物建立や改築に伴うとすれば、江戸時代の中・後期の可能性が高い。

河津町見高の一字一石供養とあるが、臨済宗建長寺派の真乗寺の境内にある。河津町谷津にある栖西寺(臨済宗建長寺派)一石一字本願経と刻まれた石塔がある。下田市禅福寺(曹洞宗)一字一石の石塔がある。東海岸は曹洞宗・臨済宗(建長寺派)・日蓮宗による礎石経書写と造塔活動が、幕末に多く行われた。

5 まとめ

(1) 年代と宗旨(第35表)

熱海市日金山の例を除くと、石碑、石塔、石仏の銘文から県内の礎石経の年代は、17世紀後葉から明治31年までの例があり、多くが18世紀後半~幕末であった。立地をみると、磐田市見付の天神社本願塚下の例のごとく神社もあるが、寺院境内とその周辺が大半を占める。

では礎石経書写と納経に関連深い宗派はどの宗派であろうか。江戸時代の宗派の分布を知る手がかりとして、静岡県仏教会による「寺院名簿」(平成5年度調査)に基づき(静岡県仏教会1993)各地の宗派別一覧を掲げた。角庵日蓮の周辺、掛川市・周智・袋井市では圧倒的に曹洞宗太源派寺院が多く、その寺院に経碑・塔が建立されていることから、礎石経施業に大きく関わっているといえよう。浜松市北区三ヶ日の例は曹洞宗寒厳派寺院の施業と推定され、北区引佐の例は臨済宗方丈寺末寺と真言宗の小

第35表 静岡県における寺院の宗派(静岡県仏教会1993による)

No.	郡・市町	曹洞宗	臨済宗	真言宗	日蓮宗	法華経宗	浄土宗	時宗	真宗	真言宗	天台宗	浄土宗	総数
1	下田市	20	7		3		5		1	1			37
2	東伊豆	15	9		2		2		2				30
3	高伊豆	16	8				4		1	3			30
4	高伊豆	2	29		3		4		1				39
5	田方郡	65	29	1	46		11		7	5			164
6	伊東市	19	1		13	2	5		1			1	42
7	熱海市	10	4		3		6		1	3			27
8	三島市	10	13		16		9	3	3	2			56
9	沼津市	9	46	1	12	17	5	7	3	4		2	106
10	御殿場市	4	2		4	2	8						20
11	裾野市	6					6	2	2				16
12	熱海市	12	18	1	5	5	1	12	3	1			45
13	富士京市	8			37		4		1				50
14	富士市	20	4	5	38	1	6	1	3	1			79
15	富士郡	1	2		17							6	26
16	庵原郡	11	14		10	1	2		1	1			40
17	清水市	28	56	1	22		4	3	3	5			119
18	静岡市	107	38	1	15		17	3	10	3		1	195
19	静岡市	32	1		4		5	3			1		45
20	藤枝市・老土郡	93	7		6		7		1	3	1		118
21	島田市	37		2	2		4		1	3	2		51
22	椛原郡	70	11		5		6	1	5	2			100
23	小笠原郡	60	17		9	1	4		7	4	2		104
24	掛川市	66			3		3		6	4			82
25	袋井市	40	2		1	1	1		1	5			51
26	磐田市	21	10		2		3	2	3	2			43
27	磐田郡	49	6		1		3	1	2	2			64
28	磐田北	44	10		2		1		2	1			58
29	浜松市	72	92	4	13	1	12	3	8	5			212
30	旧浜北市域	17	28	1	3				1	1			50
31	浜西市	14	4		5	7			1	1			32
32	浜名郡	6	14					1	1				23
33	周智郡	42			2	1	1		1	3	2		50
34	引佐郡	25	40	1		1			6				73
	合計	1051	521	19	304	40	147	28	77	72	8	12	2279

寺院による施業であろう。浜名湖西岸湖西市には広義日蓮宗の古利本興寺と妙立寺があって、題目碑も建立されているが、石経供養の文言はない。富士川流域に盛んにあった身延山を総本山とする門流の礫石経供養と異なる。この2寺が日蓮宗身延派ではない点に要因があるのであろうか。県内においても広義日蓮宗諸派の門流があるが、明治以降、身延山を総本山とする門流のある沼津市域と伊豆に礫石経供養がみられる。

臨濟宗寺院は、旧浜松市・浜北市域、旧清水市庵原郡に妙心寺派寺院が多いが、礫石経施業にあまり係わっていないようである。駿東・伊豆地域では妙心寺派と建長寺派寺院による施業が盛んである。

真言宗は別当寺院として係わる例があるが、少ない。天台宗は本山派修験村山浅間神社の例、島田市東光寺の例があるが、もともと県内には寺院そのものが少ないので、盛んに進めたいかの判断材料にはならない。念仏系の浄土宗・時宗、浄土真宗は県内寺院の11%をしめるが、礫石経施業には関与していないようである。

(2) 礫石経に託した願い

経碑・石塔・石仏には礫石経施業の願意が書かれている。両親の追善供養、病氣退散、寿命延長にはじまって、天下安全、国土栄昌、寺門繁昌、火坊、降雨祈願、守夜火盜、巡礼成就記念、水難事故者の供養と渡船岸場安全と幅広い。墓地での納経は有縁・無縁の諸霊への供養であろう。

ところで、この時期の庶民にとって天下安全、国土栄昌とは何であろうか。江戸時代における17世紀は新田開発・人口増加の成長期であったが、近世の三大飢饉といわれている享保・天明・天保の飢饉の頃には停滞や下降期へと移行した。「自然災害年表」(静岡県1996)によると、この時期は洪水、早魃、暴風雨などの天災や火災が多い時期である。四方浄の「病消滅寿命延長」もこの年、瘧瘧が流行したことによるかもしれない。文政13(1830)年銘の富士市光栄寺題目碑にある富士川の水難とは前年の大風雨による渡船流失と破損によるものと推定される。この時代、村中安全にはじまり広く天下安全、国土栄昌を願うことは、飢饉や天災・人災を避け、穏やかに過ごすことではないだろうか。

では、どのような人々が礫石経の施業を支えたのであろうか。どうやら藩主・旗本・代官などの名前は認められないようである。白隠は例外として、歴史に名をとどめる僧侶も関係していない。地方にあっては中核寺院の大洞院や石雲院、実相寺、富士山修験の中核村山浅間神社への施業もあるが、多くの寺院がその末寺の施業が多い。遠国の僧侶や聖が写経や願主になった例もあるが、多くの施主と写経者・礫採取者として結縁した人々は、村・町役人や近郷・近在の人々の念仏講や村中とされた人々であった。もっとも清水町宝池寺の例のように、結縁者には武家と思われる高崎家中の人々、陣屋役人、江戸の人物や若者中、近利諸位禪師とあり(清水町教委1992)、大がかりのものもあるが、これは例外である。

江戸時代の寺院と庶民の関係は幕藩体制の支配体制に密接に係わり、檀家制度と葬式仏教の二語に代表されるように固定化、形式化したとされる。ところが、森町の寺院を調べたところ、諸宗の本末制度と寺檀制度の整備とともに、17世紀代に寺院の建立が飛躍的に増加したこと、18世紀中葉から後葉以後、小寺院の存続が困難になっていったことを指摘した(足立2008)。先にふれたように、この時期、幕藩体制は停滞や下降期へと移行し、地域の小寺院を檀・信徒が支えきれなくなったことによると思われる。

では、この時期の礫石経施業はどのような意味をもつのであろうか。県下の曹洞宗寺院のうち太源派はもともと「曹洞土民」といわれるように、葬式の庶民化を通じ布教活動をすすめた実績ももっていた。追善や万霊供養、はては雨乞いなど礫石経施業の願意は多面的である。

他方、臨濟宗は18世紀に入り、白隠の仮名法語に象徴されるように、仏の教えを民衆に通じる卑近な子守唄などにして伝え、民衆主体の布教活動に変わっていった。駿東や西伊豆に臨濟宗寺院に火坊や守夜火盜などより庶民の願意を汲み上げた礫石経施業があり、六道輪廻の思想のもと、有縁、無縁の三界

日堂供養などの願意がみられる。また、日蓮宗身延派（総本山身延山）甲斐でも多くの石経施業を行っている。もともと法華題目主義であり、法華經の写経は重視されているからである。

県下の石経施業は、時代の停滞や災害の影響に対抗するため、また寺院経営をより安定させるという寺院側の思惑もあって、庶民の願意を深く汲み取りつつ実施された寺院と壇・信徒との共同作業と評価したい。

註

- 1 今回、本書で示した一覧表は国立歴史民俗博物館が実施した全国経塚データベース調査の際、静岡県担当調査委員足立とその協力者であった勝又直人・高野徳多果・栗木崇が作成したものに足立が加筆したので、原則各人が現地調査をしたデータに基づいている。その際、経塚ではないものや不明の例を取捨選択している。そのため従前の経塚地名表よりさらに現地に即している。

参考文献

- 足立順司 2008 「森町の寺院」「森町の中世石塔」
 熱海市史編纂委員会 1972 「熱海市史 資料編」
 池田 純 2003 「土平経塚」「本川根町史 通史編1」
 石川治夫 1993～98 「石仏・石神調査報告書1～4」
 引佐町教育委員会 1987 「引佐の石仏」
 尾形礼正他 1989 「妙隆寺遺跡発掘調査報告」
 勝又直人 2010 「第3章 衣原遺跡 第3節 4 5区」「衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯群」静岡県埋蔵文化財調査研究所
 佐藤正知 2003 「主要遺跡の概説」「金谷町史 考古・窯業史編」
 静岡県 1996 「静岡県史」別編2 付録 自然災害年表
 静岡県教育委員会 1998 「身延街道」
 静岡県仏教会 1993 「寺院名簿」
 清水町教育委員会 1992 「清水町の石造文化財」
 鈴木良孝 1988 「県内の石経塚」「馬場平経塚発掘調査報告」
 関 秀夫 1984 「経塚地名総覧」
 平野和男 1984 「大原墳墓群調査報告書」
 富士宮市教育委員会 2002 「村山浅間神社跡」
 松井一明・大谷宏治 2001 「長福寺出土の遺物について」「静岡県考古学研究 33」
 望月薫弘 1964 「静岡県の経塚」「静岡県の古代文化」
 森町 1998 「森町の棟札・金石文」
 八木美徳 1936 「郷里雜記」(活字版)
 山崎常盤 1932 「会場付近の遺跡概説」「遠江郷土研究会誌 第7号」
 山崎菊丸 1934 「経石」「遠江郷土研究会誌 第13号」
 山下茂吉 1977 「経文を記した石塚とそれまつわる火の伝説」「中遠の伝承故事」
 若林淳之他 1987 「駿州富士郡二股村経塚」

第7章 結 語

第1節 角庵Ⅰ遺跡のまとめ

最後に本書のまとめとして、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡の時期ごとの遺構・遺物についてまとめるとともに今後の課題について簡単に記載して、本書の結語としたい。

まずは角庵Ⅰ遺跡の調査成果と今後の課題をまとめておきたい。

縄文時代 角庵Ⅰ遺跡は原野谷川中流域では、草創期の尖頭器が確認された堂山遺跡に次いで萩ノ段遺跡と同じ縄文時代早期に人為が及んでいる遺跡である。竪穴建物等の遺跡の性格を示す遺構が確認されていないことからその性格は不明であるが、早期末の上ノ山式、入海式、前期末～中期前半の大歳山式、鷹島式など、中期後半の加曾利E式・曾利式が確認されていることから、早期、前期末～中期は断続的人為が及んでいる遺跡として注目できる。萩ノ段遺跡も早期と中期の遺物が確認されており、同時期に成立した遺跡が、同じような時期に人為が及んでいる点は興味深い。

古墳時代 後述する角庵Ⅱ遺跡同様、古墳時代終末期前半（7世紀前半）に突如出現する集落である。一部奈良時代の遺物が確認されるため、奈良時代まで継続した可能性も残るが、出土遺物の多くが7世紀前半に位置づけられ、7世紀後半の遺物は若干確認できるのみであることを考慮すると、基本的には7世紀前半～後半の短期間で廃絶した集落の可能性が高い。遺跡の性格は、竪穴建物内から出土した紡錘車の末製品などから紡錘車を生産するとともに紡績を行う集落であった可能性が想定できる。また、森町森山窯産と想定される須恵器が出土していることから、森町の須恵器生産集団とも関連があったと想定できるとともに森山窯の須恵器供給範囲について検討する上では重要な資料となろう。

なお、律令期（8世紀以降）には原野谷川中流域は「幡羅郷」であった可能性が高い、角庵Ⅰ遺跡の集落は奈良時代までは継続していなかった可能性が高いが、「幡羅郷」との関係について明らかにしていく必要があろう。また、この時期に突如集落が出現し、短期間のうちに廃絶する理由について経済的、政治的、環境的な位置づけから考えていく必要があろう。

平安時代 角庵Ⅰ遺跡では、最終段階の灰軸陶器が数点出土しており、平安時代末頃に人為が及んでいたことがわかる。平安海進による新田開発の影響や、「原田荘」成立に向けた活動などとの関連を今後の調査を俟って明らかにしていく必要があろう。

中世 中世末（戦国時代末）の土壇墓の可能性が高い遺構（SK11）と初山焼Ⅰ点が出土した。中世末には小規模な墓域として機能していた可能性が高い。中世末は孕石氏が知行していた地域であり、それとの関連で、墓域について考えていく必要があろう。

近世 江戸時代の明確な遺構は確認されていないが、陶磁器が若干出土した。何らかの活動が行われた可能性が高いが、この時期の遺跡の性格については不明である。

また、近世末頃に位置づけられる可能性が高い、「秋葉神社」の刻印のあるかわらけが出土しており、秋葉信仰により秋葉山を訪れた人が持ち帰った可能性が高い。

第2節 角庵Ⅱ遺跡のまとめ

縄文時代 原野谷川流域で遺跡数が増加する縄文時代中期前半に出現し、遺跡数が減少する縄文時代後・晩期にも人為が及んでいる。しかし、遺構が確認できないことから遺跡の性格については不明であるが、縄文土器や石器、石器剥片などが多く出土していることから、居住域であった可能性が高い。

近隣の上ノ段遺跡と時期的な様相が類似しており、同様の性格の遺跡である可能性が高い。

弥生時代後期～古墳時代前期 東遠江で遺跡数が増加する弥生時代後期前半に墓域として成立した可能性が高い。土壌墓の可能性のある4基の土坑は主軸を同一方向にとることから一定の規範に基づいた埋葬が行われた可能性が高い。その後、近接する上ノ平遺跡の集落構造の変化と関連するように古墳時代前期に集落へと変遷し、数軒の竪穴建物と、掘立柱建物で構成される小規模な集落となった可能性が高い。

古墳時代終末期 古墳時代終末期前半の気候変動や、続く律令期へ向けての新たな耕地開発などに伴って7世紀前半～中ごろの短期間に集落が営まれた。建物の配置からは竪穴建物と掘立柱建物の建設場所を区分していた可能性や、竪穴建物の切合関係から少なくとも1回程度の建て替えが行われた可能性が高いことが判明した。

平安時代 灰釉陶器（9～10世紀）のみの出土であり、遺構は明確ではない。平安時代中・後期に遺跡に人為が及んでいたことは明らかであるが遺跡の性格は不明である。平安時代中期～後期の平安海進の影響により耕作地を求めて新田開発がすすめられた時期でもあることから、原野谷川中流域の開発や「原田荘」成立、それを担った原氏と角庵Ⅱ遺跡の関係の解明が今後の課題であろう。

中世 15世紀中葉～後葉の古志戸呂製品が確認されているが、遺構については明確ではない。この時期に何らかの営為があったが、どのような性格の遺跡であったかは不明である。この時期は原野谷川中・下流域で城の造営が活発になっていく時期であり、この地域を支配したとされる原氏との関係の解明が今後の課題であろうか。

近世 18世紀中頃以降の掘立柱建物や性格不明遺構、土坑が確認される。性格不明遺構のうちのSX01は規模が大きく、倉庫の地下室などの可能性が考えられる。掘立柱建物や倉庫？が確認されたものの遺物量は少ないことから、小規模な集落であった可能性が高い。

礫石経塚 礫石経塚（SK07）は方形の土坑内に礫石経331点以上を埋納した経塚で、時期的には18世紀中頃～後半を前後する時期に造営された可能性が高い。写経された経典や文字の分析から、少なくとも写経には3人以上が関わり、法華三部経のほか、大悲心陀羅尼（観音信仰）や、十三仏信仰に伴う「阿闍如来」や虚空藏菩薩の真言（と想定されるもの）が写経されたことが判明した。写経された経典から礫石経塚造営の意味は法華三部経の写経による写経者の功德を高め、そして十三仏信仰や観音信仰による死者の追善供養のために行われた可能性が高いことが判明した。

なお、角庵Ⅰ・Ⅱ遺跡は断続的に縄文時代から近世まで続く遺跡であるが、各時期間に断絶が確認できるため、遺跡経営の主体者となった集団については当然のことながら時期ごとに異なっていたことは明らかである。

参 考 文 献

【報告書・県史・市町史等】(第6章以外)

- 掛川市教育委員会 1984 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』
掛川市教育委員会 2003 『わたしたちの掛川市【歴史編】』2003年版
菊川町教育委員会 2000 『横地城跡—総合調査報告書—』(静岡県小笠郡菊川町)
掛川市史編纂委員会 1997 『掛川市史』上巻 掛川市
掛川市史編纂委員会 1984 『掛川市史』中巻 掛川市
掛川市史編纂委員会 1997 『掛川市史』上巻 掛川市
掛川市史編纂委員会 2000 『掛川市史』資料編 古代・中世 掛川市
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004 『寺山古墳群』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005 『掛川市大和田・平島の遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『森町円田丘陵の遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『上ノ平遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『衣原古墳群 衣原古墳群 衣原遺跡』
宮城県教育委員会 1981 『東北地建バイパス関係遺跡調査報告書』(宮城県文化財調査報告書76)

【論文等】(第6章以外)

- 赤根一郎・中野良久 1994 「生産地における編年について」『中世滑焼をとおして資料集』日本福祉大学
泉 拓良 1996 『大歳山式土器』『日本土器事典』雄山閣
井村広巳 2002 『弥生時代集落の概観—西部地域—』『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
内山眞龍 1799 『遠江風土記傳』(加藤菅根・皆川剛六訳 1969 『遠江風土記傳』歴史図書社)
大庭 宏 2005 『中世の大和田』『掛川市大和田・平島の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
大川清・鈴木公雄・工業普通編 1996 『日本土器事典』雄山閣
大庭 宏 2005b 『原田荘と原氏および芋石氏について』『掛川市大和田・平島の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
河合 修 2009 『まとも』『上志戸呂古窯』静岡県埋蔵文化財調査研究所
小林久彦 1999 『もう一つの台付窯』『三河考古』12 三河考古学談話会
斎藤孝正 1989 『灰釉陶器の研究Ⅱ』『名古屋大学文学部研究論集』104 (史学34) 名古屋大学
佐藤由紀男・萩野谷正宏・藤原和大 2002 『遠江・駿河地域』『弥生土器の様式と編年—東海編—』木耳社
鈴木敏則 2001 『湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築』『須恵器生産の出現から消滅 補遺・論考』東海土器研究会
鈴木敏則 2004 『静岡県下の須恵器編年』『有玉古窯』浜松市教育委員会
鈴木良孝 1988 『県内の礫石経塚』『馬場平経塚発掘調査報告』
田村隆太郎 2001 『遠江長福寺1号墳の研究 考察』『静岡県考古学』33号 静岡県考古学会
田村隆太郎 2005 『調査成果にみる集落後 (1)集落の構造と変遷』『掛川市大和田・平島の遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査研究所
田村隆太郎 2008 『まとも』『上ノ平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
田村隆太郎・鈴木一有ほか 2001 『遠江長福寺1号墳の研究』『静岡県考古学』33号
東洋哲学研究所 1977 『法華経一字索引』
永井久美男編 1994 『中世の出土銭』兵庫県埋蔵文化財調査会
中嶋郁夫 1988 『いわゆる菊川式と飯田式の再検討』『転機』2号 転機刊行会
中嶋郁夫 1993 『東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」』『転機』4号 転機刊行会
兵庫県埋蔵文化財調査会 1996 『日本出土銭総覧』
藤澤良祐 1987 『本業焼の研究(1)』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1991 『瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐 1995a 『瀬戸古窯址群Ⅲ』『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』3 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1995b 『古瀬戸』『概説中世の土器・陶器』真陽社
藤澤良祐 2002 『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10 瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2005 『瀬戸美濃と志戸呂・初山』『陶磁器から見る静岡県の中世社会』2005菊川シンポジウム実行委員会
松井一明 1989 『宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察』『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会
松井一明 1993 『東海地域のかかわり編年について』『久野城IV』袋井市教育委員会
松井一明・大谷宏治 2001 『長福寺出土の遺物について』『静岡県考古学』33号
丸形俊一郎 2007 『井通遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
向坂嗣二 1992 『縄文土器の編年』『静岡県史』3 考古3 静岡県
山下峰司 1995 『灰釉陶器・山茶碗』『概説中世の土器・陶磁器』真陽社